竜の剣の物語

西山 那々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
竜の剣の物語

【Ｎコード】
Ｎ６３８５Ｃ

【作者名】
西山　那々

【あらすじ】
この時代、人族は全てエルフの奴隷だった。エルフの王が支配するカザートの町に辿り着いた青年ルカ。ルカは自分の生まれた町を滅ぼし、姉を連れ去ったエルフに仇討ちすることを誓っていた。

プロローグ

地上には人族の他に、妖精族（エルフ）と魔族が居た。妖精族はその人には無い力を利用し、人族と魔族の両方を支配していた。妖精族と魔族はその祖を同じくするが、容貌は全く異なる。

この町は十五年前から首都となっている。砂漠の中のオアシスに住む妖精族と、奴隷として働く人族とが共に暮らしていた。

奴隷としての仕事は決して楽なものではなかった。しかし、人族は自分の仕える妖精族に文句を言うことも刃向かうこともできなかった。それほど力の差は歴然としていたのだ。

十五年前、この町の領主だったイレイヤ公が、領土をこれまで広げてきた結果として、自分の土地と、そして征服していった土地を併せてイレイヤ公自身の国とした。イレイヤ公はヴォルテスと名を変えてこの国を治める。

この国の名はカザート。首都である町の名も同じである。この都に、ある一人の青年が迷い込む。疲れ果てた青年を見つけたのは、牧草地で羊の番をしていた人族の少女であった。

少女は大人たちを呼びに行く。そして、大人たちは青年を車に乗せ、離れの小屋まで運んだ。

1　新たな、町の住人

赤く燃え盛る炎の前に、耳の先の尖った少年が立っていた。その少年の手をきつく握っているのは少年の姉だった。

「母さん。父さん」

少年は目の前の炎に呼びかける。

燃えているのは、少年が住んでいた町だった。

姉は何も言わなかった。ただ、今にも炎の中に飛び込んで行きそうな弟の手をしっかりと握っていた。

姉に掴まれた少年の手に、水滴が落ちた。見上げると、それは姉の涙だった。

＊＊＊

先ほどまでとは違う、涼しい空気の流れを感じる。

助かったのか？

生きるか死ぬかという状況に陥ることは今までに何度もあった。別に殺し合いをしてきたわけではない。単に、喉が渇いて腹が減って、動けなくなる。それが青年にとっての、ここ数年の生きるか死ぬかだった。

ゆっくりと目を開けると、自分を覗き込んでいる少年と目が合った。

「気がついたんだね」

少年の顔が綻ぶ。短めに切った癖のある茶色い髪に、深い青色をした瞳。砂漠の中の町には似つかわしくない、象牙色の肌の少年だった。

横から挿す光が眩しくて、青年は左手で目の前に影を作った。日に焼けて茶褐色になった自分の腕が見える。

「ここは？」

腕の向こうに見える天井を見つめたまま、青年は少年に尋ねた。
「ここはカザート。ヴォルテス王が治める平和な国だよ」
そう言って、少年は青年が横たわっている寝台から離れて行った。
すぐに足音が戻ってきた。
「それからこれ、確かめさせてもらったよ。武器にはなりそうにもないし、返すね」
少年は言って、青年が寝ている横に、小さなナイフと麻布でできた巾着袋を置いた。
青年が起き上がって、ナイフを手に取る。ナイフの刃の部分はルカの掌よりも小さく、両手で掴むとナイフ自体が隠れてしまう大きさだった。金色の鞘に収められていて、その鞘には首に掛けられるように、鎖が繋いである。
「これは両親の形見なんだ」
青年はそう言って、ナイフを首に掛けた。
巾着袋を開けて中身を掌に出し、確認する。特に盗られた物はないようだ。
改めて、少年を見る。まずは助けてもらった礼を言わねばならない。
「ありがとう。おかげで命を失わずに済んだ。俺の名前はルカ。ここより西の地から来た」
寝台から降りて、少年に向かってお辞儀する。
立って見ると、少年は自分よりもかなり背が低かった。
「どういたしまして、と言いたい所だけど、あなたを助けたのは僕じゃないんだ。僕の名前はセイロン。あなたを見つけたのは、僕の妹だよ」
セイロンはそう言って笑った。
ルカにミルクが入ったカップを渡す。
「西から来たって言ったけど、紛争地域から来たの？」
ルカは首を横に振った。
「別に戦争はしていなかったな。俺も適当に歩き回ってるから、特

にどこがどうとか知らないんだ」
今はカザートに居るが、別にカザートを目指して歩いていたわけではなかった。ルカが探しているのは町では無いのだから。
「そうなんだ。じゃあ何の為にカザートに来たの？」
「姉を探しているんだ」
ルカが言う。
「俺が六歳の頃、住んでいた町が妖精族（エルフ）の軍隊に襲われて、両親を亡くした。その時、一緒に逃げていた姉とはぐれてしまったんだ。それからずっと、俺は姉を探して歩いている」
首に下げたナイフを握り締める。
ルカの町を襲った妖精族は、町に火を放った。姉とはぐれて、どこへ行けば良いのか分からなかったルカは、焼け野原になった町へ戻り、そこでこのナイフを見つけたのだ。
町で金物を作る仕事をしていた父親。その父が作った玩具のようなナイフ。
「俺は小さな町で両親と姉の四人で暮らしていたんだ。それを、あのエルフが……！」
握り締めた拳に力が入る。
思い出すと、今でも悔しい。
あの時の自分はまだ幼かった。助けを求める声に耳を塞いで、ただ姉に手を引かれて逃げることしかできなかった。その姉さえも、居なくなってしまった。
「それは良いから、ルカのお姉さんのことを教えて？　名前とか、年齢とか」
セイロンの声で、ルカは我に帰った。
「一緒に探してくれるのか？」
言って、そんなお人好しが居るわけないと思う。しかしセイロンはあっさりと頷いた。
「うん。僕はここで人の出入りを管理する仕事をしているんだ。もしかしたら、ルカのお姉さんもカザートに来ているかもしれないよ。

僕が知ってるのはここ数年の分だけだけど、それより昔の記録も調べられるし」

ルカは目の前に立つ少年を見た。見た目には随分若そうだが、しっかりしている。頼りになりそうだった。

「そうなのか。姉の名前はユディト。年齢は……あれ？」

思い出そうとして、年齢がさっぱり分からないということに気付く。名前だけははっきりと覚えているのだが、それ以外が曖昧だった。身長はルカよりかなり高かったが、何しろルカが六歳の時の話だから、それも当然のこと。顔は？　髪の色は？　肌の色は？　姉なのだから、ルカと似ているのかもしれない。しかし、父親似のルカと違い、ユディトは母親似だったかもしれない。

「どうしたの？」

セイロンが訝しげに、ルカを覗き込んでいる。

「あ、いや、うん。名前はユディトで間違い無い」

「そっか。小さい頃の話だもんね。もう忘れてても仕方ないよ。ユディトって異国風な名前だね。珍しい名前だからそんなに該当する人は居ないと思うし、問題ないよ」

セイロンが笑顔で言う。

珍しい名前と言われると、確かにそうなのかもしれない。

ルカは、自分が生まれた町の名前も場所も知らない。場所は大雑把な方角を覚えているくらいだ。世界には他にも沢山町があることや、町を含んだ『国』という物があることも、六歳だったルカは知らなかった。

ルカが生まれた国は、この砂漠の国であるカザートではないはずだ。この前に居た西の国とも違うはずだ。

夏は暑く、冬には雪が降る、そんな場所だった。

「暫くこの町に居ると良いよ。大きな町だから、沢山人族が居る。妖精族もね」

セイロンが言う。

「そうさせてもらうよ」

ルカは頷きながら答えた。
改めて、部屋を見回す。木の床と壁。窓の外には見渡す限りの畑が見えている。扉の向こうは台所のようで、同じ木の壁に開いた小さな窓から向こう側の流し台が見えていた。
「ルカ、もっと寝てなよ。お医者様がね、君は栄養失調だって言ってたよ」
西日がきつくなって来たからか、セイロンが窓にカーテンを引きながら言った。
「あとその目、光に当てない方が良いんだってね。新しい包帯くれたから、夜になったら替えておきなよ」
寝台の枕元にある棚に、包帯を置く。
ルカは、布切れを巻きつけた自分の右目に手をやった。
「この町には、医者が居るのか」
医者なら、この布の下を見たに違いない。そう思ったが、手で触れてみる限りでは、自分が巻いた時のままのように思えた。
「うん。本当は馬や牛を専門に診てるんだけどね。ソルバーユ様と言って、妖精族だけど人族も診てくださってるんだ。元々は別の国で人族と妖精族の治療をしてたって言ってたよ。ヴォルテス王がその国をカザートと併合したから、その時に王室に呼ばれたんだって。でもソルバーユ様はそれを断って、断っちゃったから、元々の仕事じゃなくて牛や馬の専門にされたみたい」
セイロンが説明する。
人族にとって妖精族は、自分達を支配する憎い相手だが、そうではない妖精族も居るということだ。
それにしても、医者が診たなら何でこの目をそのままにしてるんだ？
かなり長い期間、この包帯代わりに使っている布切れを替えた覚えがない。医者でなくても、勝手に交換しようとする者が居るのが常だ。医者なら尚更、怪我をしているのかもしれないと、包帯を取って見るものだ。

まあ、見られてないなら、それでいいか。
ルカを栄養失調だと診断したということだから、病気が専門で、怪我は基本的に診ない医者だったのかもしれない。
ルカは寝台に入って寝ることにした。
「こんにちは！」
家の外から声が聞こえて、その後、扉を開け閉めする音が二回聞こえて、声の主がルカとセイロンが居る部屋に入ってきた。
セイロンと同じ栗色の髪に青い瞳。一目で、セイロンの妹だとわかる。
「ルカ、さっき話した、僕の妹だよ」
セイロンがルカに耳打ちした。
寝台からもう一度出て、立ち上がる。
「ああっ、無理しちゃ駄目よ！」
少女が叫んで、ルカを寝台に押し付けるように座らせた。
「君が、助けてくれたんだってね。ありがとう」
少女に礼を言う。
「なんだ。わたしたちと同じ言葉で喋るのね」
いきなり残念そうな顔をして、少女が言う。
何を期待されていたというのか。ルカは困惑した。
「ごめんね、ルカ。妹のマギーだよ。マギーは、君が東の国から来たと思ってたみたいで、それで残念がってるんだ」
セイロンが言う東の国というのは、相当遠くにある東の国のことだろう。そこには、ルカと同じように黒髪黒眼の、まったく言語が異なる人種が住んでいるらしいから、そこから来たと思われたのだろう。
「じゃあ、一体どこから来たのよ」
マギーが口を尖らせる。
「西から来たんだ」
最初にセイロンに説明した時と同じように言う。生まれた町の名前を知らないから、直前に居た国や町の名前、もしくは方角で説明

するのが常だった。
　不機嫌そうな顔をしていたマギーが、今度は突然笑顔になった。
「西？　西って、海がある方でしょ？　海ってどんな所？　大きな水溜りだって聞いたわ！」
　実際に海沿いに住む人が聞いたら笑ってしまいそうな質問だが、人族は基本的に、生まれた国の外へ出ることは無い。カザートは砂漠の国で、首都であるこの町もやはり砂漠の中に無数にあるオアシスの一つだから、ここに住む人族は町の外へ出ることすら無いと思われた。
「水溜りは地面に囲まれてるけど、海は逆だな。海の中に陸地があるって感じだ」
「へぇ～」
　マギーが真剣な顔で頷く。
「あと、海の水はしょっぱいんだ」
「それ知ってる！　それに、海はいつも揺れてるの！」
　横で話を聞いていたセイロンがとうとう笑い出した。
　そのセイロンの方へ顔を向けて、マギーが言った。
「なによ。お兄ちゃんだって、海を見た事なんてないでしょ」
「そりゃ、本物を見た事はないけど。でも知ってるよ。だいたい、海が揺れてるわけじゃない。マギー、波があるから揺れてるって思ったんだろ」
「違うの？　大きな器に塩水が入ってて、それがいつもゆらゆら揺れてるんだと思ってたんだけど」
　眉をしかめて、マギーが言う。
　あながち間違いでも無いように思うが、物知りなセイロンと違って、ルカは上手く説明できる気がしないので黙っていた。
「さてと。じゃあ、わたしもう帰るね」
　セイロンと二人で海について話していたマギーが言った。
「おじさん、いつまでここに居るの？」
　ルカの方を向く。

ルカは自分を指差した。
「『おじさん』？」
まだ『おじさん』と呼ばれるほど歳は取っていないと、自分では思っている。
「僕らから見たら十分『おじさん』だよ」
セイロンが笑いながら言う。その言葉を遮るように、マギーが言った。
「だって！　『お兄さん』だと、お兄ちゃんとどっちか分からなくなるじゃない。別に、おじさんが本当におじさんだからおじさんって言ってるわけじゃなくて……あれ、えーっと。だから、おじさんは多分お兄さんなんだけど、でもお兄さんじゃないから……」
早口に言う。しかし本人も途中で何を言っているのか分からなくなったようだ。
「うん。分かったよ。もう『おじさん』でも良いから」
ルカは困った顔をできるだけ笑顔にして言った。
「じゃあ、またね」
マギーは二人に向かって手を振って、帰って行った。
「兄妹なのに、別々に暮らしてるのか」
セイロンに尋ねる。
「仕事場が男女別だからね。マギーは羊の世話をしてるんだ。仕事が終わったら家に帰る人もいるけど、せっかくここに寝台や暖炉も用意して貰ってるし、僕はここで暮らしてるんだ。家に帰っても仕方ないしね。マギーも、一緒に働いてる人の所で世話になってるみたい」
家に帰っても仕方ないと言った。マギーの他に家族が居ないということなのだろう。
それでも、話しているセイロンの表情に翳りはなかった。今に満足している証拠だ。
「そうだ。明日には役人が来て、君の居住権の審査をするから。そんなに厳しい審査はないから、ちゃんと質問に答えてれば居住権が

取れるよ」
セイロンが言った。

翌日の昼過ぎに、ルカの居住権の審査をする為に役人が来た。妖精族はある程度年齢を重ねるとそれ以上は老けなくなるから、年齢は分からない。それでも、なんとなく若そうに見えた。
「ネルヴァ様、お待ちしておりました」
セイロンが畏まって言う。
ネルヴァはセイロンに軽く頷いて、それからルカを見た。
「私はこの地域を担当しているネルヴァだ。病気だそうだね。座っていて良いよ」
見た目には、ルカと同じくらいの年齢に見える。
ネルヴァは本当に簡単な質問をルカに幾つかして、それで居住許可を出した。
「紛争地域出身じゃないから難民申請はできないんだ。動けるようなら、なるべく早めに仕事に就いて貰いたい。右目はどうだ？　包帯をしていれば大丈夫のようだが。君は正式な国民ではないから、多少きつい仕事になるかもしれないけれど、構わないか」
「構いません」
栄養失調だとか、右目を光に当ててはいけないなどど医者が言ったせいで、ネルヴァに気を使わせているようだ。妖精族に気を使われるというのは、逆に居心地悪く感じた。
ネルヴァが頷いて、石版に何かを書き始めた。書くと言っても、筆記具は必要ではなく、石版だけあれば、後は妖精族特有の力で彼らにしか読めない文字を刻むことができる。
セイロンがネルヴァに茶を出した。
「ありがとう」
少しだけセイロンを見て、また石版に視線を戻す。
片手で茶碗を持って少しだけ飲むと、また石版を眺めた。
「よし、できた」

ネルヴァが嬉しそうに言う。残っていた茶を一気に飲み干した。
石版に文字を刻む作業は集中力が必要だが、それほど大変なことではないはずだ。何を書いたのかと肩越しに覗き見たが、やはり文字らしきものは見えなかった。
「時間が掛かっていたが、何を書いたんだ?」
ルカが尋ねる。
妖精族に対する言葉遣いとしては、最低の部類だろう。だがネルヴァは意に介さない様子で、嬉々として答えた。
「私のサインだ。見せられなくて残念だよ。この円の部分を繋ぐのが難しくてな」
妖精族の力で、言葉以外に絵も伝えられる。目に見えるものではないので、読む相手が見ようとしなければ全く見えないのだが。
ネルヴァが石版を机の上に置いたので、ルカはそれを手に取って眺めた。
どうせ人族には読めないからか、ネルヴァは気に止めていないようだ。
「サインねぇ」
言いながら、どうでもいいことだと、ルカは石版をネルヴァの前に置いた。
外から複数の声が聞こえてきた。
何事かと、ルカは窓から顔を出して外を見る。窓の外には畑が連なっているが、その一角に人族が何人か輪を作るように集まっているのが見えた。
つられてか、セイロンとネルヴァも窓際に来た。
人々の輪は、畑を横切る畦道にできていた。輪の中に老人がひとり。畦道には従者を連れた妖精族の男。
「あのツェータも運が悪いな。今日はパロス総督自らがお出でなすった」
ネルヴァが言う。『ツェータ』は老人を敬って言う言葉だが、妖精族が人族に対して使うのは珍しい。そもそも妖精族には老人が存

在しないのだから、老人を敬うという慣習も無いのだ。
セイロンには、人影は見えてもそれが誰かまでは分からなかった。
「そうですね。パロス総督が相手では、あの人たちも何も言えないでしょう」
人族の何倍も目の良い妖精族が言うことだ。あそこに居るのはパロス総督で間違い無いのだろうと、セイロンは思う。
パロスは代々続く貴族の家系で、そのくせ人奴隷は食費が勿体無いからと自分の奴隷を持たず、見かねた親類が貸した奴隷を、食事を与えるのは自分の仕事では無いと言い切り、死ぬまで扱使ったそうだ。
その噂が一言一句真実かと言われると定かでは無いが、それでも、そう言われるに値するだけのことはしているのだろう。
今も、年老いて歩くことすらままならなくなった老人に、「休むな」と言って鞭を打っているのだ。
周りを囲んだ人族は、パロスの仕返しを恐れて、何も言えない。
鞭の音は、離れた所に居るルカにも聞こえてきた。
あんなに弱った老人に鞭を打つなんて、何を考えているんだ？
どうして誰も何も言わない。
ルカは、動き出した。
「ねえ、ルカ」
セイロンがルカに声を掛けた時、すでにルカはその場に居なかった。
「あのバカ」
ネルヴァが窓から下を見下ろして呟く。
セイロンもネルヴァの視線の先を追った。
ルカが走っている。窓から飛び降りたのだ。
人族が作った輪に、割って入る。
痩せた老人にさらに打ちつけようとした鞭を、ルカはパロスの手首を掴んで止めた。
「もうやめろ。このひとに必要なのは、罰じゃない。休憩だ」

ルカはパロスに向かって言った。
口髭を伸ばし、後ろに倒れそうなくらいに踏ん反り返ったパロスは、ルカが居る畑よりも一段高い畦道から、ルカを見下ろした。
「何を言っているのだ？　休みたいなら休めば良いが、その分、食事が減るだけだぞ」
パロスが言うと、老人はふらふらと立ち上がり、仕事に戻ろうとした。
人族の輪が解けて、それぞれの仕事場に戻り始める。
「そうじゃないだろう。働かせるなと言ってるわけじゃない。ちゃんと休憩を取らせるべきだと言ってるんだ」
ルカが言った。適度な休憩を入れた方が効率が良いことは、多々ある。
しかしパロスは、踏ん反り返った姿勢を崩すことなく言った。
「この男だけ年取っているからと休んで、ちゃんと働く他の人族と同じだけの報酬を貰ったとして、それで他の人族が納得するかね？」
「それは」
確かにそうかもしれない。けれど何か、根本的に間違っているような気がする。
ルカが生まれた町では、老人と若者は別の仕事をしていた。重労働は若者が引き受け、老人は知識と知恵で町民を導く。それで皆が納得していた。
「だから、働くにしてももっと別の、ほら、男女は別の仕事をしてるだろ、そんな感じでそれぞれの力量に合わせた仕事をした方が良いんじゃないか？」
ルカが言っている間に、パロスはもう踵を返し、自分の従者が担ぐ輿に乗り込んでいた。
「誰か、この煩い蠅を余所へ連れて行け」
ルカに向かって手を払いながら、パロスが言う。
残った二人の従者がルカの腕をそれぞれ掴んで、畑に突き倒した。
「ふん。人族は奴隷らしく、そうやって泥にまみれて暮らせば良い

のだ」
鼻で笑って、パロスが言った。
輿を担いだ従者の妖精族が、掛け声を上げて進み始める。
畑から起き上がったルカは、進み始めたパロスの袖を掴んだ。
進む方向と逆に引っ張られたパロスが輿から畦道に落ちた。パロスが大きく呻いて、畑仕事に戻っていた人族がルカ達の方を見た。
従者の妖精族達も驚いた顔で見ているが、パロスを助け起こそうとする者は居なかった。
パロスが従者を振り返るが、それでも助けは無い。
パロスは起き上がると、ルカを指差した。
「誰か、こいつを捕らえよ！」
パロスの従者が、ルカの両手首を後ろで縛る。
パロスは畦道をゆっくりと歩き始めた。さすがに、もう一度輿に乗る気にはならないようだ。
「わしは先に城へ行く」
別の従者にそう告げて、パロスは残りの従者と共に畦道を進んだ。
パロスの姿が見えなくなるまで、ルカはその場に立たされたままだった。
それからやっと、ルカを捕らえている妖精族の男が歩き出し、ルカも歩き出した。
畑からセイロンの仕事場になっている家の横を過ぎ、また別の作物を植えた畑の畦道を通って、やがて大きな道に出た。
左右には赤い土壁で出来た建物が並んでいる。カザートに来たばかりのルカには、それが妖精族の家なのか、人族の家なのかは分からない。しかし暫く歩くうちに、ルカの周りに妖精族が集まってきた。
おもしろい見世物でも見るかのように、代わる代わるルカを覗き込んでいく。
ルカの縄を引くエルフは、わざとゆっくりと歩いていた。ルカの前を歩くエルフも同じだ。

ルカを指差し、妖精族の子どもが笑う。
どんな罪状になってんだ？
まだ罪が確定したわけでもないのに、もう囚人になったような気分だ。
妖精族に怪我させたら、無実ってわけにはいかないよな。
他人事のように、ぼんやりと考える。さっきルカを笑った妖精族の子どもは、連行されているルカの姿がおもしろかったわけではないだろう。その後にどんな刑を受けるか想像して楽しんでいるのだ。
実際のところ、パロスは大した怪我はしていないだろう。怪我をしていたとしても、すぐに治る。妖精族は人族よりも頑丈だ。ルカも、パロスが大怪我にならないよう加減した。
とは言え、奴隷階級である人族は本来、主である妖精族に逆らうことは許されていない。怪我や被害の度合いとは関係なく、主に反論しただけで絞首刑にされたという話もよく聞く。
ま、俺はパロスの奴隷じゃないし、そこまでってことはないだろうけど。
ルカはこれまでにも妖精族に反発し、捕らえられたことがあった。それでも今まで生きてこられたのだから今回も何とかなる。そう思った。
城に着くと門番らしきエルフが、ルカを連行しているエルフに
「今、王はおりません。代わりに王女がいらっしゃいますので、中でお待ちください」
と言った。
軽い怪我をさせただけだと思うが、王が出てくるような事態に発展しているらしい。実際のところ王は留守で、王女が対応するらしいが。
ルカは二人のエルフに連れられて、城の中へ進んだ。
廊下の角を何度か曲がって、やがて部屋に通された。
そこが裁判所であることは、同じような場所を何度か見た事のあるルカにはすぐに分かった。

パロスは既に来ていて、原告の座る席に踏ん反り返っている。
ルカは縄をされたまま、被告の席に立たされた。
暫くして、ルカが入った入り口とは別の入り口から妖精族の女が姿を見せた。それが王女かと思ったが、その女は入り口の横で歩みを止めた。
「裁判長代理、イーメル殿下」
女が高らかに言う。
同じ入り口から、豪華な装飾具に身を包んだ妖精族の女が現れた。白に近い色の髪は、外からの光を受けて時折煌いている。カザートに来てから初めて見る髪色だ。身長はそれ程高くなく、少しばかり頭の比率が大きい為、人族の感覚では十四、五歳くらいに見える。
綺麗なひとだ。
ルカは思った。
着飾っているせいだけではないだろう。妖精族特有の大きな瞳も、先の尖った耳も、適度な大きさに収まっているし、人族の感覚では年老いて見えてしまう白髪も、妖精族であれば気にならなかった。
「この度は、裁判長である王が不在の為、わらわが裁判を執り行う」
透き通った声が部屋に響いた。
「被告は原告パロス殿に対し、暴力を振るい怪我を負わせた。これに異存はないか」
パロスに異存があるわけがない。
ルカも、イーメルが言ったこと自体はその通りであるから、異存はなかった。
「言いたいことがあるなら聞く。何か」
イーメルが言うと、パロスが立ち上がった。
「こやつめは、仕事に従事していた私を輿から落としました。他の奴隷どもが見ている目の前で、私を陥れようとしたのです。これからの仕事に支障が出るに違いありません」
パロスが席に座る。
イーメルが頷いた。それから、ルカに目を向ける。

「そなたは何か言いたいことはあるか？」
「俺は、別にこいつを陥れようとしたわけじゃないし、皆の仕事の邪魔をするつもりもなかった。ただ酷い目にあっていたツェータを助けたかっただけだ」
ルカが言い終わると、やはりイーメルは頷いた。
「判決を言い渡す。原告が被告に怪我を負わせた事は事実であるが、幸いその怪我も軽く済んだ。よって、原告は厳重注意を受けることを課す。以上で裁判を終わりとする」
イーメルの言葉にパロスは不満そうな顔を見せたが、部屋から出て行った。ルカを連れてきたパロスの従者も、パロスの後を追うように出て行く。
「厳重注意は別室で行なう。この者の案内に従え」
イーメルが言い、先に部屋から出て行った。
ルカの前に、入り口の横で待機していた女が来た。
「ついて来なさい」
青い長い髪を片側で前に垂らし、手には簡単な武器くらいにはなりそうな長い杖を持っている。簡素な服装からして位は高くなさそうだが、それでも髪飾りには金や宝石が使われているから、この城が豊かであることが分かる。
女の案内で別の部屋に移動すると、そこにはイーメルと数名の侍女、それに数名の兵士が居た。
「お前達は良い。下がれ」
イーメルが自分の傍に立っている兵士に言った。
「しかし、」
「構わぬ。たかが軽犯罪者じゃ。それに、人族ごときにわらわを傷つけることはできぬ」
言われて、兵士達は部屋から出て行った。
イーメルと向かい合ってルカは座った。
イーメルが先程の青い髪の侍女に何かささやくと、侍女はルカを縛っている縄を解き、またイーメルの後ろに戻った。

「いいのか？」
自由になった両手を動かしてみて、ルカは言った。
「そなたが厳重注意のみで済まされるのは、相手がパロスだったからじゃ」
ルカの問いには答えず、イーメルが話し始めた。
「他のエルフが相手であれば、懲役刑は免れなかったであろう」
「なんでだ？　パロスもあんたらと同じ妖精族じゃないか」
「王女に向かって、なんという口の利き方を」
青い髪の侍女が横から口を挟む。
イーメルは侍女の前に手を延べて、身を乗り出した侍女を留めた。
「パロスが起こす裁判の数があまりにも多くて、こちらも困っておるのじゃ。しかも小さなことばかり。しかし法律で定めたからには、裁判を起こすなと言うわけにもいかぬであろう」
あまり困ったような顔は見せずに、イーメルが言う。
「とは言え、怪我をさせたのは事実のようだし、次にまた問題を起こしたらその時は命の保障はないと思え」
青い瞳が、ルカを見下ろす。
イーメルとルカは向かい合っているが、イーメルの方が高い位置に居る。妖精族はいつもそうだ。決して人族より目線を低くすることは無い。
「怪我をさせたことは悪いと思っている。でも、あの時ツェータが受けた痛みに比べれば」
「言い訳はもう良い。良いか？　その老人が働かずして糧を得れば、必ず他の人族から文句を言われる。パロスのやったことは、度が過ぎていたかもしれないが、当然のことじゃ」
ルカが言いかけた言葉を遮って、イーメルが言った。
パロスも似たようなことを言っていたように思う。
「俺が生まれた町では、重労働は若者がやって、老人は蓄えた知識で町を守っていたし、ちゃんと敬われていた」
「老人を敬う？　百年にも満たぬ知識が一体何の役に立つ」

妖精族は人族と比べて長命だ。一般の妖精族でも百五十年ほど生きる。王族になると二百年を超えて生きることも多々あるのだ。
「なるほど。確かに、妖精族と比べれば人族は老人と言えどそれ程長く生きたわけじゃないかもしれない。お姫さんも若く見えるけど、本当は百歳超えてるんだろ？　それじゃあ、老人も子どもみたいなもんだよな」
ルカが言い終わるのとほぼ同時に、イーメルが立ち上がった。
おもむろに、右手の掌をルカに向ける。
風を切るような音がルカの耳に聞こえた。
次の瞬間、ルカは後ろの壁に背中を叩き付けていた。
突然の事に、無防備に背中を強打したルカは咳き込んだ。
「わらわら妖精族がこうやって力を使って魔族を倒さなんだら、一体誰があやつらを退治する？　人族は魔族に皆喰われて、それで終わりじゃ」
目に見えない、妖精族特有の力。力が強く巨大な魔族と対抗するには、妖精族のこの力が不可欠。
「人族と妖精族は決して対等ではない。わらわらの力で人族は生かされているのじゃ。人族が妖精族の為に尽力するのは当然のことであろう」
違う。
ルカはそろそろと立ち上がった。
人族は守られるだけの存在ではないはずだ。
「お姫さん達が人族を扱使い続けるなら、人族は魔族に喰われるよりも辛い生活を送らなければならない」
イーメルの目が、ルカの頭の先からつま先まで見た。
しかし、そのまま踵を返してしまう。
「ちょっと待てよ。お姫さん、あんたはこんなとこに居るから知らないだろうけど、地方じゃ人族の反乱が起こってるんだ」
出口へ向かっていたイーメルの歩みが止まった。
ルカを振り向く。

「そなたは、他人の話ばかりするのだな。そなた自身はどうしたいのじゃ」

イーメルは静かに言った。

「俺は……」

服の上から、首から提げた小さなナイフに触れる。

許さない。俺の町を滅ぼしたあのエルフを。

ルカの町を滅ぼした軍隊を率いていたエルフを見付け、町の人たちの仇を討ちたい。それが、ルカの願いだ。

しかしそれを今言ってはいけないことくらい、ルカには分かっている。

「俺は、姉を探しているんだ。そうだ、お姫さん、もし心当たりがあったら教えてくれ。名前はユディトと言って――」

「わらわにそなたの姉探しをしている暇はない。人族がどうの、妖精族がどうのと言っておきながら、そなたがやりたいことは姉探しか。つまらん」

イーメルは薄く笑って、そのまま部屋から出て行った。

侍女達もイーメルの後を追うように部屋から出る。代わりに、兵士が一人入ってきた。

「セイロンの家まで案内する。付いて来い」

今度は縄を引かれるわけではないが、常に高圧的な妖精族の態度には辟易する。まだ町に来たばかりのルカの為に、城から自宅まで送ってくれるというのは親切なのだが、城へ向かう時と同じように晒し者になっているような気がした。

2　魔族来襲

強大な軍隊が少年の町を襲った。目的は食料と衣料。奴隷は必要なかった。

特有の力で触れることなく攻撃できる妖精族（エルフ）は、圧倒的な強さで町を征服して行った。

人々は見付かるとその場で老若男女関係なく殺された。

逃げ惑う人々。

それまで戦争など知らなかったこの町の人民は、戸惑い、皆が狂ったように騒いでいた。その状況にさらに油を注ぐように、町の一角から火の手が上がった。

強い風と乾燥した空気が手伝って、火はどんどん燃え広がっていった。

必要な物を取り尽すと残った余分な物は全て燃やしてしまうのが、あの妖精（エルフ）のやり方だった。

一緒に逃げていた町の人々の人数が次第に減ってゆく。火から逃げ切れなかった者が多く居た。また、妖精族に殺された者も居た。

そんな中で、なぜか少年とその姉だけは、運よく火からも敵からも逃れる事ができた。

「母さん、いやだ。母さん、父さん！」

＊＊＊

翌日、ルカはセイロンに案内されて馬屋に行った。セイロンが言うには、昨日ルカが戻ってくる少し前に別の役人が来て、この馬屋が仕事場になると告げて行ったそうだ。

「この馬屋はネルヴァ様が担当していたんだ。でも今日から別のエルフが担当するみたい」

馬屋の手前で、セイロンが言った。

「ふーん」
「『ふーん』じゃないよ。ルカの居住許可出したのがネルヴァ様だったろ。そのルカが問題を起こしたから、ネルヴァ様はここの仕事を降ろされたんだよ？」
「あっ、そうか。そこまで気が回らなかったよ」
昨日はパロスを懲らしめることしか考えていなかった。ネルヴァにしてみればとんだとばっちりだったろう。
「次に会ったら謝らなきゃな。でも会ってくれるかな……」
謝る前に殺されるかもしれないが。
言いながら、どちらかと言えばその可能性の方が高いと思う。この馬屋の担当というのがどれ程価値のある仕事だったのかは分からないが、仕事を剥奪されることは恥に違いないのだ。
突然、隣を歩いていたセイロンが走り出した。
何事かと思ってセイロンが走る先を見ると、そこにネルヴァが立っていた。
「ネルヴァ様、昨日はルカが、申し訳ありませんでした」
ルカよりも前に、セイロンが謝る。
「おはよう、セイロン。それにルカも」
ネルヴァが笑顔でルカを見る。
「迷惑をかけてすまない」
ルカもネルヴァに向かって頭を下げた。
「いいよいいよ。昨日のあれを見てスカっとしたのは私だけじゃないだろうし。ここだけの話、パロスの態度にはうんざりしてたんだ。私がやると、私の家族まで処刑されかねないから、ルカがやってくれて良かったよ」
笑いながら、ネルヴァが言う。
言っていることは冗談かもしれないが、特に怒っていないということは分かった。
「今日は引き継ぎに来たんだ。だから私はもう帰るよ。ルカ、君の気持ちは分かる。けれどあれでも総督だし、これ以上の反抗は君の

命を縮めることになるだろう。お姉さんを探しているんだろ。死んだらもう会えなくなるぞ。妙なことはせず、この国で暫くは大人しく暮らすんだ。いいな」

「分かってる」

大人しく暮らせる人間なら、各地を転々としてはいないだろう。

そうは思うが、返事だけはしておく。

セイロンが言うように、ネルヴァは悪いエルフではない。

『暫くは』大人しくしていよう。

ルカは思った。

馬屋に着くと、その入り口近くの小屋の中までセイロンに案内され、それからセイロンは先に帰ってしまった。ここで仕事内容の説明を聞いてから、実際に働き始めるのだそうだ。

足音が二つ近付いて来た。

すぐに小屋の扉が開いて、人族と妖精族が一人ずつ入ってきた。

「なんだ、おまえか」

妖精族の男が言う。

こっちの台詞だ。

ネルヴァの代わりにこの馬屋の担当になったのは、パロスだった。

パロスはルカを見てその一言を発し、すぐに後ろに立っている人族の男を振り返った。

「わしは来たばかりで疲れておる。後はおまえがやれ」

人族の返事があったのかなかったのか、ルカからはわからなかったが、パロスはそのままルカを見ることなく、小屋から出て行った。

「俺はここでかれこれ三十年働いてる、サルムってんだ。あんたは俺と組んで馬の世話をするわけさ」

男はサルムと名乗り、ルカが自分の名を教えると、「ついてきな」と外を顎で指して言って、歩き出した。

「二、三人ずつで組んで、午前と午後交代で馬の世話と番をするのさ。馬の世話ってのは餌をやること。番ってのは、盗人や魔族に馬をやられないように見張ることさ。ここでは軍馬も預かってるから、

居なくなったらおおごとさ」
外を歩きながら、サルムが言う。
馬屋に居るのだから、馬の排泄物の臭いがするのは当たり前だとは思うのだが、前を歩くサルム自身からも酷い臭いがした。
周りの馬小屋からは馬の嘶(いなな)きが時折聞こえてきた。
「預かってた軍馬を引き渡す時は、キレーに洗わなきゃならねえ。妖精族ってのは鼻が利くからな」
サルムはそこまで言ってから、急に声を潜めた。
「俺が前に組んでた男はな、真面目で良い奴だったよ。でもその真面目さが命取りさ。前回の引き渡しの時に、奴は馬も自分も、キレーにして渡しに行ったのさ。しかし妖精族がな、馬が臭いって言って、奴の首を刎ねた。もう一度洗えと言われたから、俺が引き取りに行って、翌日何もせずに同じ妖精族に渡した。だが俺は死ななかった。なぜだか分かるか？」
神妙な面持ちで話しかける。
「俺が臭かったからさ」
言って、サルムは笑い声を上げた。
「馬が臭いって言われてもな、『臭いのは俺だ』って繰り返したんだよ」
それからまた、神妙な面持ちに戻って続けた。
「あんた真面目そうな顔してるが、前の相棒の二の舞にはなるなよ。この国で必要なのは心じゃない。ここさ」
自分の頭を指差す。
襤褸(ぼろ)を着てあまり褒められた外見ではないが、これも計算の内ということらしい。
「あんたのことは聞いてる。パロス総督に手を上げたそうじゃないか」
「ネルヴァが言ったのか？」
「妖精族を呼び捨てかい？　聞いたまんまだな、あんた」
馬小屋に入って、床を洗うブラシをルカに手渡しながら、サルム

が笑って言う。
「ネルヴァ様は良いひとさ。でも階級は妖精族の中でも下っ端で、上の者に何か言われても俺達を庇うことはできない。あんたもやり過ぎないことだ」
妖精族の中にも階級があるということは、朧げながら知っている。イーメルのような王族。パロスのような貴族。貴族はさらに細かく分かれているという話だが、自分のことではないからよく分からない。ネルヴァは平民で、階級が貴族より上になることはない。
「床掃除は適当でいいからな。どうせまたすぐ汚れるんだし」
床を流す為に三度目の水汲みから帰ってきたルカに、サルムが言った。
「それからその水、こっそり取っておけ。飲み水になるからな」
言われて、床に撒こうとしていたのを止める。
「水を自由に使えないのか？」
前に住んでいた国では、そんなことを言われたことがなかった。水は限度を超えなければ好きなだけ使えたし、普通に生活する上で限度を超えるようなことはまず無かったからだ。
「あんた外から来たんだろうが。見ての通りこの周りは全部砂漠さ。水が少ないのは当然だと思わないか？」
「なるほど」
町の中には熱帯の植物が繁っている場所も、田畑もあり、そのことはすっかり忘れていた。おそらく雨は滅多に降らないのだろう。
古い飼葉をどけて新しい飼葉をやり、馬にも水をやる。
他の馬小屋へ入ってそこでも同じように餌と水をやり、それで半日の仕事は終わりだった。
ルカが着いたのが昼前だった為、今日やったのは午後の仕事分だけということになる。明日は午前中に、今日と同じように餌やりをし、午後は今度は馬屋を巡回して見張りをするということだった。
ルカは帰路についた。
今日は馬には全く触っていないが、馬屋全体についている臭いが

ルカにもうつっている気がした。ルカ自身の鼻は莫迦になってしまって、自分では判断が付かないのだ。

馬屋からルカが暮らすことになったセイロンの仕事場までは一刻ほど掛かる。途中は緑が生い茂った畑と、まだ何も植えていない茶色い地面が見えた畑とが交互に並んでいた。

何も植えていない畑では、その広場を利用して人族の子ども達が遊んでいた。

それに混ざって、子ども達よりも頭三つ四つ分背の高い大人も一人居る。最初は子どもの母親の誰かかと思っていたが、道を歩いて近付く内に、妖精族の女性だと分かった。

妖精族が何でこんなとこで人族のガキと遊んでんだ？

疑問に思いつつもさらに進むと、やがて顔もはっきりと見えてきた。

お姫さんじゃねえか。

夕日の色を反射して赤く見える白い髪、金銀で作られた首飾りや腕輪などの装身具。質の良い長いスカートは裾が泥で汚れてしまっていた。

「お姉ちゃん、またねー」

子ども達が口々と言って、イーメルに手を振っている。

子どもの母親と思われる人族が、地面に顔を擦り付けているんじゃないかと思うほど深く、イーメルに向かって頭を下げていた。

それから、子どもの手を取り、イーメルに背中を向けるのが失礼だと思ったのか、後ずさりながら去って行った。他の子ども達はそれぞれ好きなように走って帰って行く。

子ども達の背中に向かって手を振っていたイーメルが、暫くして手を振るのをやめ、ルカが居る畦道に歩いてきた。

「お姫さん」

声を掛ける。

イーメルが顔を上げた。

「なんじゃ、ルカ。居たのか」

「いや、通りかかっただけで。てか、何してたんだ？」
「子ども達と遊んでいた」
見たままだ。
イーメルがルカから視線をそらし、軽く溜息を吐いた。子ども達と遊んでいる間は楽しそうに見えたのだが、どうしたのだろう。
いやそもそも、妖精族の姫が人族の子どもと遊んでいていいのだろうか。
「子どもの元気について行けなくなったのか？」
ルカが言うと、イーメルがルカを見て声高に言った。
「何を言うか。わらわはまだそれ程年を取っているわけではない。だいたいわらわは妖精族だぞ？　あれしきで疲れることがあるものか」
「じゃあさっきの溜息は何だ？」
ルカが言うと、イーメルの表情が曇った。
「母親が、酷く怖けておってな。まるで魔族でも見たかのような顔で近付いて来て、わらわが『イーメル』だと知ると、地面に額を擦り付けて謝るのじゃ」
イーメルが歩き出す。
ルカもそれの後を付いて歩いた。
「なぜ謝るのか、わらわは知っておる。王が人族を恐怖で支配しているから、人族は何があってもとりあえず最初に謝るのじゃ」
「恐怖で支配？」
裁判の後の厳重注意の時にイーメルは、妖精族が魔族を倒すことで人族を守っている、というようなことを言っていた。その話と、今のイーメルの話はかなり違う。
「そなたはまだこの国に入ったばかりだったな。例えばそなたは、自分が死ぬのと、自分の家族が死ぬのと、どちらが良い？」
問われて、ルカは小さな短剣を服の上から握り締めた。家族のことを言われると、嫌でも思い出す。
「王への反逆を企てた者が居たら、その者を一番最後に、家族から

一人ずつ処刑していく。一人殺して、その者が心を入れ替えたならよし、そのつもりがなければ次の一人を殺す。そうしたことは噂になり、人族の耳にも届く」

イーメルがルカを振り返った。

夕日を背にしていて、イーメルの表情は見えない。

「地方では人族の反乱が起きていると言ったな。このカザートではそのようなことはあり得ぬ。人族はわらわらを必要以上に恐れる」

「人族から嫌われるのが嫌なのか？」

イーメルからその答えはなかった。けれどそういうことなのだろう。人族を奴隷として扱っているくせに、イーメルはその奴隷から嫌われるのが不服らしい。

「でも、子ども達はお姫さんを嫌ってなんかなかっただろ？」

別にさっきの子ども達のことをルカが知っているわけではないが、遊んでいる様子を遠目に眺めていた限りでは、少なくともイーメルと遊ぶことを楽しんでいるようだった。

「わらわの記憶は欠けておるのじゃ」

今までの話とまるで関係のなさそうなことを、イーメルが言い始めた。

「必要の無い記憶だから思い出さないのだと、わらわの専属医は言うのだが、どうしても引っかかって。二十年近くもの間の記憶がごっそりと抜け落ちているのじゃ。しかも母が亡くなったのもその期間だというのに、それを必要の無い記憶だと言う医者の言うことも信じられぬ」

医者が言う通りだとすると、母親の死が、イーメルにとって思い出さない方が良い程衝撃的な物だった、と考えられる。

しかし、それでは二十年もの間の記憶が無い理由にはならないだろう。

「確かに、二十年っていうと長いよな」

「そうであろ？」

ルカの同意を得て、イーメルの瞳が輝く。

「人族の子ども達と遊んでいると、何か思い出せる気がするのじゃ。だから、そなたも協力せよ」
「へ？」
「わらわはあのように、へこへこされるのは好かぬ。だから、夕刻になったらそなたが子ども達をそれぞれの家まで送り届けるのだ。そうすれば、わらわは人族の親に会わずに済む」
これでもかと言うほどの笑顔で言われて、ルカは一瞬思考が停止した。
その後に、大量の思考が押し寄せる。
その笑顔はなんだ？　そんなに妙案だと思ったのか？　人族の親に会うのがそこまで嫌なもんか？　てかなんで俺がそんなことやらなきゃならないんだ？　つうか、こいつ妖精族の姫なんだよな？　遊んでていいのか？　いや姫だから遊んでていいのか。いやいや遊んでていいわけないよな？
「お姫さんは、仕事とかないの？」
「ある。王が不在の時は王の代わりもするし、普段から会計もしておる。だがそれがどうかしたか？」
「いや、別に……」
馬屋の仕事の後に余計な仕事を増やされることの怒りを表そうとしたが、その前に話の順序を間違えたらしい。ルカは許諾の意思を示すしかなくなった。

帰ってから、セイロンにルカは聞いた。
「なあ、ここの王様の奥さんって、いつ死んだんだ？」
「ヴォルテス王の？　だったら、カザートができる前の話でしょ。確か、二十五年前のことだよ」
セイロンが机に向かったまま答える。
「うん、確かに二十五年前だ」
手元にあった巻物状の物を広げて、セイロンが言った。
イーメルが失っている記憶は、二十五年前かその前後の物らしい。

俺すら生まれてないし。
ルカは思った。
イーメルは人族の子どもと遊んでいたら思い出せる気がすると言っていたが、当時子どもだった人族は、今は立派な大人になっていることだろう。
「それ、見てるのって年表？」
セイロンが机に置いた巻物を指して言う。
「うん。そうらしいよ」
『らしい』って……。
ルカはそれを手に取って広げた。それ程長いわけでもない。文字は読めないが、目立つように色を変えている部分が、恐らくカザートが建国された年なのだろうとは思う。それより下は数行しかなく、それより上に数十行あった。
「なあ、セイロン。俺でも文字読めるようになるかな」
これには色々なことが載っていそうだ。しかし知りたいことがある度に、セイロンに尋ねるのも気が引ける。
「うん」
言いながら、セイロンがルカに分厚い紙の束を渡した。
「これで勉強しなよ。僕、ルカは肉体労働派だと思ってたから、嬉しいよ」
笑顔で言われる。
確かに俺は肉体労働派だよ。
そこまで本格的に勉強したかったわけではないのだが、大量の教科書（？）を渡されたルカは、渋々とそれを自分の枕元に積み上げた。

ルカがカザートに来てから一週間が経った。カザートでは日曜日を起算とする七日間で一週間という括りになっている。日曜日は休みで、ルカの馬屋の仕事もない。日曜日の前日の晩に、二日分の餌をぶち込んでくるのだ。もちろん、それで放置しておくわけにもい

かないから、実際は誰かが代わりに見に行っているのだろう。
「こんにちは」
元気な声が聞こえて、マギーが家に入ってきた。
手には花束を持っている。
「もう花はいらないよ。どうせすぐ枯れるし」
セイロンが言うと、マギーは頬を膨らませた。
「せっかくわたしが育てた花なのに」
そう言えば、ルカがここに来た日も窓際の花瓶に花が飾られていた。あれもマギーが持ってきた物だったのだろう。セイロンが言った通り、二日ほどで干乾びていたが。
セイロンが横で色々言っているが耳を貸さずに、マギーは干乾びた花を捨てて新しく持ってきた花を生けた。
台所まで花瓶を持って行って、水を入れている。
「ここなら水がいつでも使えるんだから、お花の水が減ったらちゃんと足しておいてよね」
マギーが言う。
サルムが水は貴重だと言っていたがルカにピンと来なかったのも、この家の台所ではいつでも水が使えるせいだ。水道が町中を走っていて、栓を空ければ蛇口から水が出る。しかしここ以外の人族が住む地区では、井戸を掘って雨水を溜め、そこから汲み上げているのだそうだ。
「なあ、なんでここだけ水道がついてるんだ？」
ルカが聞く。
「多分、前はここで妖精族が働いてたからだと思うよ」
セイロンが答えた。
セイロンはここで町に出入りする人の記録をしているが、それには文字の読み書きができなければならない。カザートで、妖精族と人族が言葉以外で意思疎通するために開発された文字があるのだが、それを扱える人族はそう多く無いそうだ。だから、どうしても適任者がいない場合は妖精族が来るのだろう。

「ねえ、おじさん！」
マギーがルカの側に立った。
「見て見て」
言って、スカートの裾を摘まんでかわいらしく持ち上げる。
しかし、何を見て欲しいのかルカには分からなかった。おそらくはスカートの何かなのだろうが、靴かもしれないし、新しいお辞儀を覚えたということなのかもしれない。
お姫さんも難しいけど、マギーもよく分からないな。
先日、イーメルのスカートの裾が泥で汚れていることを指摘したら、汚れるのは別に構わないと言った。それなのに翌日、上着を取って渡そうとしたらルカの手が泥で汚れているから服に触るなと怒られたのを思い出す。
「どうしたの？」
セイロンが言って、ルカの横からマギーを見た。
「ああ、エプロン新しくしたんだ？　おばさんに作ってもらったの？」
さすが兄。一目見て分かったらしい。
マギーが頬を膨らませる。
「お兄ちゃんが言っちゃ駄目なの」
「なんだよ。見て欲しかったんだろ？」
「もうっ」
スカートを摘まんでいた手を離し、マギーはくるりと回ってルカの側から離れた。
厚い生地のスカートは、あまり風に揺れることもない。まだ白いエプロンは、明日には牧草地での作業で汚れてしまうだろう。
「お兄ちゃん、これ貰って行っていい？」
いつの間にか台所へ移動していたマギーが言っている。
セイロンも台所へ行き、マギーと何か話し始めた。
台所と寝室の間の壁に開いている小さな窓から、二人の様子が見える。マギーは保存用の肉を少し貰って行くようだ。セイロンはあ

まり肉を食べない。しかし、配給される保存肉はセイロンの仕事内容が重要なためか、ルカが貰う分よりも多かった。

貯蔵用の木箱には明らかに古くなっている肉もあり、ルカはどうしようかと思っていたのだ。マギーが持って行ってくれるなら丁度良い。

台所からマギーとセイロンが戻ってくる。

「ねえ、おじさん。おじさんのお姉さんが見つかったら、おじさんはどうするの？」

マギーが尋ねた。

「そうだな。姉ちゃんと一緒に自分が生まれた町に戻って暮らしたいとこだけど、もう町に住んでる人も居ないだろうし。どうしようかな」

ルカが答える。

町が滅んだだけで人が生きているならば、またあの町は以前のような穏やかな町になっているかもしれない。けれど、ルカが住んでいた町を滅ぼした妖精族の軍隊は、見つけた住民を老若男女関係なく殺していた。仲良くしていた近所の子ども達も、死体になって道端に倒れていた。

だから、今戻っても町は廃墟のままだろう。

「おじさん、居なくなっちゃうんだ……」

マギーが呟く。

ルカは否定しない。姉が見つからなければ姉を探すために、姉が見つかれば永住できる場所を探しに、どちらにしろ、いつかはこの町を出るつもりだった。

「でも、ここ一、二年の間にユディトって人はこの町には来ていないみたいだよ」

セイロンが言う。

セイロンは時折入出者のリストを見て、ユディトを探してくれていた。一週間もしない内に二年分のリストを見ているのだから、見落としもあるかもしれないが、ここはセイロンが言うことを信じる

しかない。
　ルカがこの町のそういう資料を見る訳にはいかないだろうし、第一、もしルカ自身でリストを見るとなると文字を覚えるところからやらなければならなくて大変だ。
「年齢が、ルカよりもすごく年上の人だったら居たけど。さすがに今四十五歳ってことはないよね」
「それはないな」
　ルカのおぼろげな記憶の中の姉は、十代の中ほどだったように思う。確か、ルカの倍以上は生きていると言っていた。当時のルカが六歳だったから、当時十二歳以上だったということは間違いなかった。そして、母親より若かったのも確かだから、二十歳も年が離れているということはないはずなのだ。
「わたし、もう帰るね」
　マギーが言って部屋の扉を開ける。
「おじさん、お姉さんが見つからなかったら、ずっとここに住む？」
　開けた扉の向こう側から、マギーが言った。
　見つからなかったら？
　この町を出て、次の町へ行って姉を探すだけだ。けれど、いつこの町を探し終わったと分かるというのだろう。今まで町から町へ、国から国へと転々としてきたのは、明確に姉が居ないと分かったからではなかった。ちょっとした問題を起こして、その場所に居られなくなったからなのだ。
　本当は、俺に姉ちゃんを探す気なんて無いのかもしれない。
　本気で探そうとしていたなら、問題を起こさないように気を付けながら暮らしていたに違いない。それを、事あるごとに妖精族と対立して騒ぎを起こしてしまうのは、姉探しよりも、妖精族の言いなりになることの問題の方が、ルカにとって重要だったからだ。
「マギー」
　声を出したのはセイロンだ。
「早く帰らないと、魔族が出る時間になるぞ」

「え、ああ、うん。じゃあ、またね」
ルカが答えをすぐに返さないのは、マギーが望まない答えを出したからなのだろう。
セイロンはそう思った。
マギーは、ルカにここに居て欲しいと願っている。最初からルカのことが気になっているようではあったが、今日のことではっきりした。
でも多分、ルカはここに長くは居ない。いや、居られない。
ここは、妖精族の住処に近過ぎる。はっきりと妖精族を敵視しているルカが、長い期間住めるとは思えなかった。
「ねえルカ、お姉さんと同じ名前のユディトって人が居たとして、どうやって本人って確認するの？　ルカはお姉さんの顔を忘れてて、生まれた場所の地名も分からないんでしょ。当時はルカの方が小さかったわけだし、お姉さんだってルカを見て分かるとは限らないよ？」
セイロンが尋ねる。
「ああ、それは」
ルカは首に下げたナイフを鞘から抜いてセイロンに見せた。鎖ごと首から外しても良いが、鞘から抜くだけの方が簡単だ。刃が出るので危ないかもしれないが、相手はセイロンだし、触って怪我をするということもないだろうと思ったのだ。
「ここに模様があるだろ」
ナイフの柄頭を指差す。
ナイフがかなり小さいので、セイロンからはどこを指しているのかよく分からなかったが、とりあえず頷いて見せた。
「親父が、これをそのまま押し付けて模様を取った指輪があるんだ。それはお袋から姉ちゃんに譲られた。俺はこのナイフを親父から貰ったんだけど。だから、この模様と左右逆の模様の指輪を持ってるのが、俺の姉ちゃんだ」
「見てもいい？」

セイロンが言って、ルカが持っているナイフを手に取った。
それほど細かい装飾がされているわけではない。鳥の形だろうか。鳥の模様が入った指輪となると数多いだろうが、多少歪な形だから、逆に限定されるかもしれない。
「ありがとう」
ルカに返す。
「ま、ここまでしなくても、お袋や親父の名前とかで分かるんじゃねえの？」
ルカが言った。
「顔覚えてないのに名前だけは覚えてるんだ」
セイロンが呆れ口調で言う。
「んなこと言われても。顔ってなんか皆似てんだろ？」
「似てないって。兄弟とかなら似てるかもしんないけど、双子でもない限り、見分けが付かない程似ることはないから」
「ふーん、そっか。言われてみればそうだよな。でも、見分けるのと覚えるのって、また別な話だろ」
「うん」
当たり前だ、という顔でセイロンが頷く。
セイロンはルカより年下だが、話していると、自分が年下のような錯覚を起こしそうになる。
カザートでは、人族であっても優秀な者は役職を得られるという制度を取っているのだそうだ。セイロンが言うには、文字を全て覚え自由に筆記、及び朗読ができることが最低条件で、その文字を使った筆記試験で良い成績を収めれば、晴れて国の役人になることができ、その上身分も奴隷から平民に変えられるらしい。
その為に、セイロンは必死に勉強をしている。それで蓄えた知識は、ルカが身を持って経験し、得た知識よりも多い。そのせいで、セイロンが年上に思えてしまうのだ。
しかし、筆記試験を作るのも採点するのも妖精族だ。結果なぞどうにでもできるだろう。セイロンは疑ってもいないようだが、その

制度は形骸的な物と考えてよさそうだった。
けれど、嬉しそうに知識を披露する時のセイロンを見ると、それを言う気にはなれない。形骸化しているというのは、ルカの思い過ごしである可能性もある。実際に人族を政治に取り入れるのであれば、それはルカが思い描く、人族と妖精族とが平等な社会の始まりになるかもしれないのだ。
そうなると良いのに。
そうはなりそうにない、と思う。
ルカはナイフを鞘に戻した。

いつものように馬屋の仕事を終えて、途中の何も植えていない畑に寄る。
「お姫さん」
声を掛けると、イーメルと一緒に遊んでいた人族の子ども達が、イーメルより先に走ってきた。
遊んでいる時は楽しそうなのだが、ルカが来るとルカに付いて大人しく帰る。とても良い子達だとは思うが、ひとりくらい、まだ遊びたいと言い出しても良さそうなものだ。
人族の子達はいつも同じ顔ぶれというわけではない。いつも見かける子も居れば、初めて見る子も居た。
「またね」
誰かがイーメルに向かって手を振ると、他の子達も手を振り始めた。
「じゃあ、行こうか。一番近いのは誰の家だ？」
ルカが尋ね、名乗り上げた子か、指差された子の家から順に送る。
遊びに来る子達が日に日に増えて、送るのに時間が掛かるようになった。それで、ルカはイーメルと言葉を交わす間もなく、子どもを送るのに歩き出すのだ。
「お前ら、もっと遊びたいとか思わないのか？」
足元を騒ぎながら歩く子ども達に向かってルカが聞く。

「遊びたい！　けど、早く帰らないとお母さんに叱られるし」
一番近くに居た女の子が答えた。
「妖精族は夜になると魔族になるんだよ」
別の女の子が、その女の子と顔を見合わせながら言う。周りの子どもも何人か頷いている。
なんだ、それは？
ルカは怪訝な顔をした。妖精族は妖精族で、時間帯で魔族になったりはしない。凶暴になるということもない。
魔族はほとんどの場合夜間に出没するから、昼は何をしてるんだ、ということになって、じゃあ昼は妖精族なんだ、という連想なのだろうか。
「んなわけないだろ。どうやったら、あんな綺麗な妖精族が魔族になるってんだ」
「綺麗？」
「綺麗？」
いくつかの声が重なる。
「でも暗くなると、眼が真っ黒になって、光るんだよ。怖いよ。あの眼は魔族と一緒だよ」
言われて、やっとルカは子ども達の発想に納得した。妖精族の眼は猫と同じで、暗くなると丸く大きくなる。確かに、魔族の眼も同じだ。光るわけではないが。
「ま、暗くなると本物の魔族が出るかもしれないからな。明るいうちに帰るのが一番だ」
近くに居る子どもの手を引き、ルカは道を進んだ。
全ての子どもを送って、ルカは自分の住む場所へと急いだ。
魔族と言っても、人族や妖精族とは異なり、ひとつの種族を指しているわけではなく、姿形も様々だ。
人族や妖精族が集落を作っている場所まで来ることは滅多にないが、それでも集落と集落を繋ぐ人通りの少ない道を歩く時は緊張する。

後ろから気配を感じる。
いや、まさかな。
子ども達と魔族の話をしたせいで、些細な事が気になる。
少し足早に、ルカは家へと急いだ。
後ろから足音が聞こえてくる。さすがに、気のせいとは言えなくなってきた。
同じ方向へ向かう人だろう。きっとそうだ。
後ろを振り返らずに歩く。
でもこの先は、俺らの家しかないけどな。まあ、妖精族って可能性もあるし。
――ルカ。
呼ばれた気がしたが、無視だ。ルカの名前を知っているのは、ここではセイロンかマギー、イーメル、ネルヴァ、パロス。せいぜいそのくらいだ。こんな声ではない。
そっと、胸の短剣を取り出しておく。
魔族は幽霊ではない。隙を突いて攻撃を掛ければ大抵は追い払える。
「ルカ！」
真後ろのちょっと低い位置から声がして、肩を掴まれる。
ルカは振り返りざまに、ナイフを上げた。
暗闇に、眼が二つ光って……。
「あれ？」
どうみても魔族ではなかった。暗くて良く見えないが、妖精族ではなく人族だろう。しかも、まだ十二、三歳の少女だ。
ルカは急いでナイフを手の中に隠した。一旦背を向けて、見えないように鞘に戻す。
それから、もう一度振り返った。
「誰？」
「サラ！　おじさん、怖がりね」
サラと名乗った少女は、白い歯を見せて笑った。

話を聞くと、サラはマギーの友達であるらしい。セイロンの所へ向かったマギーが暗くなっても戻ってこないので、迎えに来たのだそうだ。

ルカとは初対面だが、マギーから、片目を包帯で隠している男だと聞いていたから分かったらしい。

家に近付いて、その明かりでやっと、サラの顔が分かった。どうりで眼だけ光って見えたはずだ。サラは南の地方の人種で、肌の色は褐色を通り過ぎて黒と言っても良いくらいだった。

ルカが家の扉を開ける。

マギーは台所で鍋を洗っていたが、物音に気付いて扉を見た。

「あ、おじさん、おかえりなさい」

鍋を流しに置いて、エプロンで手を拭いてからルカを出迎える。

「マギー、居る？」

サラがルカの後ろから、家の中を覗き込んだ。

「サラ？」

マギーに呼ばれて、サラはルカを押しのけるように家の中に入った。

「もう。何してるのよ。おばさんも心配してたよ」

サラが言う。

セイロンが奥の部屋から出てきた。

「マギー、誰と話してるんだ？」

そう言ったセイロンの視界に、マギーの向こうに立つサラの姿が飛び込んできた。見た事のない人だ。

「あっ、あなたがマギーのお兄さんのセイロン？」

サラが言った。

少し肉厚の唇から紡ぎだされた声は、想像通りかわいらしい。

「わたし、サラ。マギーと一緒に羊の世話してるの」

「ああ、よろしく」

マギーからサラの名前くらいは聞いた事があったが、まさか、南大陸の移民だとは思っていなかった。

南大陸の移民がカザートに入っていることは知っていたが、力強い彼らは、ほとんどが重労働を請け負うと聞いている。だから勝手に、大人ばかり来たのだと思い込んでいた。

「やっぱりマギーのお兄さんだけあって、かっこいいわぁ」

サラがマギーに向かって言う。

「そんなことないよ」

マギーは否定しているが、兄を褒められて嬉しそうだ。ついでに言うと、サラの台詞は遠まわしにマギーも褒めていることになるから、それもあるかもしれない。

「って、そんなこと話してる場合じゃないわ。もう外は真っ暗よ」

サラが言う。

マギーとセイロンが窓の方を見た。ルカも釣られて外を見た。確かに真っ暗だ。

セイロンが奥の部屋に引っ込んだ。

暫くしてから出てくる。

「ランプ貸すよ」

台所の竈から火を取って、ランプをマギーに渡す。

「ありがとう、お兄ちゃん」

マギーは言って、サラと一緒に帰って行った。

その日は、朝からマギーが家に来ていた。サラも一緒だ。

時折、サラがマギーに何か耳打ちをしているが、女の子同士の会話だろうし、ルカはそれについて聞こうとは思わなかった。

「ごはん、わたしが作るね」

マギーが腕捲くりして言う。

「この前みたいに焦がさないでくれよ」

セイロンが困り顔で言った。

先日マギーが遅くまでここに居たのは、セイロンの夕食を作ると言って料理を始めたは良いが酷く焦がしてしまい、鍋にこびりついた焦げを取るのに四苦八苦していたからだった。

「生のまま食べるよりいいじゃない」
サラが隣で、しれっとした顔で言う。
サラは、焦げた料理に慣れているのかもしれない……。
「わたしも手伝うわ」
「ありがとう、サラちゃん」
セイロンが泣きそうな顔で感謝の言葉を述べている。
この前の料理とやらをルカは食べていないが、セイロンがサラの手伝いを泣いて喜ぶくらいだ。おそらく他人に食べさせられない程のできだったのだろう、と今になって思う。
あん時居なくて良かった。
ほっと胸を撫で下ろす。この後、やはり地獄が待っているわけだが、この時はまだ知らなかった。

地獄からの生還おめでとう。
と、セイロンが言ったかどうかは分からないが、少なくともこの時に飲んだ水はまさに奇跡の水。今までに飲んだどの酒よりも旨かった。
「あの世が見えた」
台所で後片付けに励む二人の後ろ姿を遠目に見ながら、ルカが言う。
「気のせいだよ」
セイロンが隣で空笑いしている。
何をどうしたらあの味になったのか、ルカには検討が付かない。
焦げているのが最大の原因だろうが、あれは炭の味ですらなかった。
まだ十代前半の子どもが作る料理だから、ある程度下手でも仕方ない。ある程度ならば。
「おい、お前ら」
ルカが立ち上がる。
「次作る時は、俺も混ぜろ。いいな？」
お前らが作る料理は、料理じゃねえ。料理は粘土こねるのとは違

うんだ。
と続けて言いたかったが、さすがにそこまで言うのはまずい。まだ子どもだが、女性である。こんな早いうちから自信をなくしてもらっては困る。
「あのさ、マギー、……次から僕達に出す前に、味見してみなよ」
セイロンが力なく言う。
「自分で作ってるんだから、味見なんかしなくても分かってるわよ」
何を分かっているのだろうか。まずいと分かっているというのだろうか。ありえない。
「次もし来たら俺が教えるから、心配すんな」
ルカはセイロンに言った。
セイロンはマギーの兄だから、マギーの料理から逃げ出す術がない。残念ながら、助けになるかに思えたサラにも料理の知識が無いようだ。
繰り返すうちに上手くなると言うが、放置していてはその前に殺されかねない。
「でもまあ、生のまま食うよりは死ぬ確率低そうだよな」
うっかり口に出してしまったが、少女二人には聞こえなかったようだ。
セイロンとルカの手には、水が入ったカップが握り締められている。これが命の水だ。水が無くて死にかけていた時に貰った水よりも、この水の方がおいしい。何か間違っている気もするが、それがルカが感じたことだった。
後片付けを終わらせた二人が戻ってくる。
サラがマギーを肘で突付いて、マギーがおずおずと、ルカの前に歩いて来た。
「あのね、おじさん。おじさんに、これあげる」
マギーが両手で持っているのは革でできた何かのようだった。
「ん？」
ルカはそれを手に取る。

広げてみて、それが眼帯だと分かった。
「ありがとう」
世辞ではなく、素直に礼を言う。
マギーが嬉しそうに微笑んだ。
ルカの右目は、怪我か何かで光に当ててはいけないということにしている。実際は怪我も病気もしていないわけだから、いちいち包帯を巻くのも面倒なものだった。これがあれば、かなり楽になるだろう。
料理は下手だけど、
「マギーは親切だな」
最初の言葉は言わないでおくことにした。
昼が過ぎて、マギーとサラは帰って行った。
いつもマギーがこちらへ来るが、ルカやセイロンがマギーが寝泊りしている集落に入ったことはない。
マギーが寝泊りしているのはマギーの仕事場である羊飼いの村の中の宿泊所だそうだ。マギー以外にも、親の居ない子が何人か暮らしているという。
その話をセイロンから聞いた時、やっぱりセイロン達には親が居ないのか、とルカは思った。
そこに住むほとんどの子どもは、親を魔族に殺されているとも言っていた。ということは、セイロンの親も魔族に殺されたのかもしれないが、本人に直接聞くのは躊躇われた。自分も、他人に両親が死んだ理由を聞かれるのが嫌いだ。だからルカの場合は、機会があれば聞かれる前に自分から言ってしまうが。

夕方になってからだった。
「セイロン、居るか！」
聞き慣れない声が、窓の下から聞こえてきた。切羽詰った声に、ルカは窓から下を見下ろす。
セイロンもすぐに来た。

「慌ててどうしたんだ、ジャン」
セイロンが、窓の下の赤毛の少年に向かって言った。
「大変なんだ！　魔族がっ」
自分が今来た道の方を指差す。
「魔族が、羊飼いの村に！」
「なんだって？」
セイロンが聞き返した。あれ程の大声だから、聞き取れなかった訳ではない。
「もう皆避難してる。セイロンもルカも、早く逃げるんだ！」
ジャンは言って、また走り出した。
「なあ、セイロン、羊飼いの村って」
マギーやサラが働いている場所だ。
「うん。でも、村まで魔族が来るなんて滅多に無いのに」
セイロンが呟くように言う。
「マギー達は大丈夫なのか？」
「どうやって確認するんだよ！」
窓枠に置いたセイロンの手が震えている。
「きっと、マギーもサラちゃんも、皆と一緒に避難してるよ」
言葉とは裏腹に、セイロンの顔色は悪い。
羊飼いの村は歩いてもそれほど時間は掛からない距離にある。走ればすぐだ。
人々が、ジャンと同じように息を切らしながら走ってくる。まだここでも危険だから、妖精族が住む城下町まで走るのだろう。
「こんなところに居たの？　大丈夫？」
「早く走れ！」
「わたしは大丈夫。でも、サラが友達とはぐれたって、」
「危ないから立ち止まるな！」
「お母さん、どこ？」
人々の喧騒の中から、知った名前が聞こえてきた。他の音と声で、その後の話はわからない。

「セイロン、お前は避難しろ」
ルカは言って、窓から下へ飛び降りた。
人々の流れに逆らって走る。羊飼いの村へ行った事は無いが、この人波と逆に行けば辿りつくだろう。
「ルカ！　危ないよ」
セイロンがルカに声を掛ける。しかしルカは振り返りもせずに走って行ってしまった。
セイロンは窓から人波を見下ろした。目を凝らして、その中に妹とその友達が居ないか探す。しかし背が高い大人ばかりが見えて、マギーくらいの身長の子どもは、居るのか居ないのか分からなかった。
セイロンは緊急時の為の荷物を抱えて、家から出た。
避難した方が良い。僕が行っても何もできない。
分かってはいても、足は人波に逆らって羊飼いの村を目指していた。

次第に人がまばらになる。
向こうからサラが走ってきた。
「おじさん！　わたしマギーと一緒に逃げてたんだけど、途中でマギーとはぐれて」
サラが叫ぶように言う。
さっきの女性達の話から結構な時間が経っているのにまだこんな所に居るということは、はぐれた後、マギーを探していたのだろう。
「魔族がすぐ近くまで来てて、だから絶対に一緒に逃げようって言ったのに」
サラがマギーを心配しているのは分かる。しかしここに居ては危険だ。
「ルカ」
後ろから声がして、ルカは振り返った。セイロンだ。
「セイロン！　ごめんなさい。マギーが、マギーが」

サラがセイロンの前まで行って、泣き出してしまった。
「良いとこに来てくれた。セイロン、サラを連れて避難するんだ。俺はマギーを探してみるから」
一人で放っておくと、サラはマギーを探すためにこの辺りに残ろうとするだろう。セイロンに任せれば、ちゃんと安全な場所まで連れて行ってくれるに違いない。
セイロンが頷く。
泣いているサラに向かって、セイロンは言った。
「マギーはおじさんが探してくれるから大丈夫だよ。それに、マギーは先に避難してるかもしれないし。だから僕らも早く避難しよう」
サラを抱きしめる。
サラは紛争地域から難民としてカザートに来た。セイロン達と違って両親共に健在だが、友達を失う悲しみはよく知っていて、だからマギーが居ないのが不安なのだろう。
「大丈夫だから」
走っていくルカの後ろ姿を見送る。本当なら、ルカも避難させなければならない。けれど、ルカの行動を止めるのが難しいことはもう分かっていた。
セイロンはサラと一緒に、他の人族の後を追った。
ルカは牧草地に入った。見覚えがなんとなくあるのは、ルカがこの町に来て最初に見た風景と同じだからだろう。
しかし、緑の牧草は至るところで地面ごと削られて、土が露出している。何か大きな物が動いた跡のように、それは蛇行していた。
その跡にそって、視線を右へ動かす。
「巨蠍」
ルカの視線の先には、甲殻に覆われた体と尾があった。
背の部分には人族女性に似た形の物が乗っているが、あれは人族を誘う為の罠だ。つまり、主食は人族。
巨蠍は普通、住処の近くで罠を張って、じっと餌となる人族が近付くのを待っている。しかし最近は人族が魔族の生息地息を把握し、

近寄らなくなった。こんな人里まで来るということは、相当長い間餌が取れなかったのだろう。

巨蠍の向こうに、人が何人か重なって倒れているのが見えた。他に逃げようとしている人もちらほらと見える。

「マギー、居るか？」

辺りへ向かって、大声を出す。

「マギー！」

反応はなかった。

ここには居ないのか？　それとも、もう……？

「おじさんっ」

声が聞こえて、ルカはそちらを見た。

巨蠍の足元から、マギーが走って来るのが見えた。

良かった。

心底ほっとする。

しかしルカの元に辿り着く前に、マギーが躓いて転んだ。

ドジだなあ、などと笑っていられる状況ではない。巨蠍はマギーに背を向けているが、いつ気付くとも知れないのだ。

ルカはマギーに駆け寄った。

転んだままのマギーを担ぎ上げる。そのルカの頭上を巨蠍の尾が掠めた。

気付かれた！

正面を向いたまま、後ろへ跳んで巨蠍から離れる。背を向けて逃げてしまったら、攻撃を避けることができない。しかし後ろ向きに走っても速度が出ない。ましてやマギーを抱えているのだ。逃げ切れるとは思えなかった。

首に下げたナイフを右手で鞘から抜く。

巨蠍が体をこちらへ向けた。その両腕の鋏を見て、自分が持つナイフがどれだけ頼りないかを頭に刻み込む。

このナイフは父が作った。手入れも欠かしていない。巨蠍の甲殻でも切ることができる。しかし刃は小さく、相手に致命的なダメー

ジを与えることはできない。
巨蠍が鋏を振り上げた。
下りてきた鋏を、ナイフで受ける。そのまま鋏で押し潰そうとしているのを、ルカは手首を返してナイフの刃を鋏に突き刺した。
押し潰そうとする力が少し弱まった。
ナイフを右へ振り切る。
巨蠍の鋏に横一線の傷が付いた。鋏の大きさにすれば小さな傷だが、痛みは感じたのか巨蠍が動きを止めた。
鋏の下から抜けたルカは、鋏の付根の細い部分を狙ってナイフを振り下ろそうとした。
だが、ナイフが巨蠍に触れるより先に巨蠍が鋏をルカに向かって振り上げた。
このままでは、マギーにも巨蠍の鋏が当たる。マギーを担いだ左肩ではなく、右肩で受けるように、ルカは左足を軸足にして回転した。
ルカが思った通りに、右肩に巨蠍の鋏が当たった。
倒れたらマギーが下になってしまう。だから、倒れるわけにはいかない。
その思いとは裏腹に、ルカの足は衝撃を支えきることができずにバランスを崩した。
しかし、ルカもマギーも、地面に触れることはなかった。
「よく頑張った」
ルカを支えて、声を掛けた者が居る。
「後はわたし達に任せて、君達は避難するんだ」
ネルヴァだった。
ルカが倒れそうになった一瞬の間に、十名程の妖精族が巨蠍を包囲していた。
もう、背を向けて逃げても大丈夫だ。
ルカはマギーを下ろし、手を引いてその場から離れた。
離れた所から、妖精族が魔族を退治する様子を眺める。眺めてい

られるのも、妖精族が魔族を退ける時の手際の良さを知っているからだ。

「マギー、大丈夫だったか？」

ルカと一緒に走ってここまで来たのだから酷い怪我はしていないのだろうが、一応聞いてみた。

マギーが声を出さずに頷く。

マギーの瞳は巨蠍に向かったままで、ルカに顔を向けようとしなかった。いつもの元気なマギーではない。

相当ショックだったんだろうな。

ルカは近くで見たわけではないが、巨蠍の向こうに見えた人の山、あれは恐らく、巨蠍が巣へ持ち帰る為に集めた人族の死体だろう。あんな物を間近で見たら、マギーくらいの年頃の子どもがショックを受けないわけがない。

巨蠍が仰向けに倒れて、土煙が舞う。妖精族が巨蠍の退治に成功したのだ。後の対処は国によってまちまちだが、どこかへ死骸を捨てに行くか、その場で解体して甲殻などの素材を採るために各々で持ち帰るかのどちらかだ。

「終わったみたいだ。マギー、もう大丈夫だよ」

セイロン達と合流しようと思い、ルカは立ってマギーの肩を叩いた。

座ったままで、マギーはルカを見上げた。涙がマギーの頬を伝う。

「ルーシーも、フィオーネも、ケビンも、みんな殺されたの。ミアはあいつに踏み潰されて。まだ小さいのに。わたしが守らなきゃいけなかったのに！」

知らない名前が並ぶ中に、知った名が混ざる。ミア。妖精族は夜になったら魔族になると言った子だ。まだ六歳だった。

マギーのように逃げ遅れるのは珍しいのだと思っていたのに、実際には多くの子どもが犠牲になっていた。

もっと早く妖精族が来てくれれば。

そう思ったが、ルカはそれを否定するように頭を振った。

違う。妖精族に頼ってばかりじゃ駄目なんだ。人族だけでも魔族を追い払えるようにならないと。

マギーの涙を拭くための布を、ルカは持ち合わせていなかった。

「怪我でもしたか？」

不意に、低い男の声が降ってきた。

見上げると、白い服を着た緑の髪の妖精族の男が、夕日を背にマギーを見下ろしていた。

男はマギーの前に座って、白い布をマギーに差し出した。

「涙を拭きなさい。それから痛い所があったら言いなさい。わたしは医者だ」

マギーが顔を上げて、男を見た。

「ありがとうございます、ソルバーユ様。でも、治療が必要なほど酷い怪我はないので大丈夫です」

しっかりした口調で答える。さっきまで泣いていたのは演技かと思う程の変わりようだが、セイロンと同じで妖精族に対する礼儀を何より大事だと思っているのだろう。

この男がソルバーユか。

ルカがこの町に来た時に、ルカを診察したという医者。

「他に生きてるやつは居なかったのか」

ルカはソルバーユに聞いた。

「……居ないようだ」

男は首を左右に振って、それからルカの方に顔を向けた。

逆光に目が慣れて、男の顔が次第に分かってきた。

「あんた……」

見覚えのある顔だった。

でも、あの時はソルバーユなんて名じゃ……。

困惑するルカを横目に、ソルバーユは立ち上がって言った。

「二人とも、巨蠍の毒が入ってないか検査するから、わたしの研究所へ来なさい」

ソルバーユに付いて妖精族が住む区画まで歩いた。途中、元居た

場所に戻ろうとする人族の波とすれ違ったが、セイロンやサラは見当たらなかった。
「まずはお嬢さんからだ」
ソルバーユが言う研究所に着いてから、先にマギーが検査を受けることになった。
腕から血を抜いて、それに特殊な薬剤を入れて反応を見ることで毒があるかないかが分かるのだそうだ。そういう説明を、マギーの検査をしている間に助手の女性から聞いた。
マギーが奥の部屋から出てくる。
「問題無いって。良かったぁ」
マギーが嬉しそうに言った。
マギーくらいの年齢に達すると巨蠍の毒で死ぬことはまずない。もちろんルカもだ。ただし体の一部が麻痺するなどの症状が後で出る事があるため、人族も妖精族も、巨蠍と係わった後は毒の検査を受けるよう勧めているのだそうだ。それも、助手の女性から聞いた。
マギーと交代で、ルカが奥の部屋に入った。
ソルバーユの前にある椅子にルカも座る。
「右手を出して」
言われた通りにする。
「なあ、あんたミケシュだよな？」
ソルバーユは作業を続けていたが、ややあって口を開いた。
「よく覚えていたな」
注射針を抜いて血液を別の容器に移す。その容器に別の液体を入れて蓋をした。
それからルカを見た。
「目の調子はどうだ。見た限りではよく馴染んでいるようだが」
手を伸ばし、ルカの左目の下瞼を親指で少し下げた。
「充血もないな。瞳孔も変化していない」
ソルバーユが言う。
彼がミケシュだというなら、最初に診察したときにセイロン達に、

ルカの右目について嘘を伝えたのも分かる。
「久しぶりだな、ルカ。改めて自己紹介させてもらうよ。わたしは医師のソルバーユ。君も知っての通り法に触れる行いをしていたからね、名前を偽っていたのは悪かったよ」
確かにミケシュだ。声など忘れてしまっていたが、聞けばそうだと分かる。
「懐かしいな。あんたに会ったのはずいぶん前だった」
「ああ、君の左目と両耳を手術したのは八年も前のことだ」
時折、ソルバーユは血液が入った小さな容器に目をやっている。ルカも見てみるが、特に変わった様子は無かった。そもそも巨蠍に刺されていないので、毒が入っているはずがない。
「後悔はしてないのか？」
「何を」
全てに対して後悔がないのであれば、聞き返す必要は無い。
「『外見を人族にしたことを』だよ。まあ、文句を言ってきたわけでもないし、後悔はしてないみたいだな。良いことだ。あの時は金が無いとかで左だけになったが、どうだ？　今金があるなら、右目も変えてやるぞ」
言われて、ルカは隠した右目を眼帯の上から触った。
「……いや、このままでいい」
少し考えてから言う。
金が無いのも理由のひとつだが、せっかく母親から受け継いだ瞳を両方とも失うのは嫌だった。
「まだ妖精族に拘っているのか。人族にもなれず、妖精族にもなれないなら、君は何も変わらないぞ。死ぬまで魔族の子『半妖精（ハーフエルフ）』のままだ」
ソルバーユが厳しい目でルカを見ている。
「分かってるよ。半妖精の居場所がないことくらい、身を持って知ってる。でも、だからって自分の存在を偽らなきゃ生きられない社会なんて、そっちの方がおかしいだろ」

声は殺している。マギーには聞かれたくないからだ。
自分を生んだ人族の父と妖精族の母のことは恨んでいない。種族の差を越えて愛し合い、自分を生み育ててくれたことをむしろ誇りに思っている。
けれど、自分が半妖精であることは、他の人には知られたくない。知られれば、人族は自分を奇異の目で見るだろう。マギーもセイロンもそうだ。今は同じ種族だと思っているから優しくしてくれるが、半妖精だと知れたら手のひらを返されるだろう。
「前々から思っていたけれど、やはり君は変わってるね。小声で話すのは外に居る人族の娘に聞かれたくないからか。正体を知られることを恐れるなら、整形手術を受けるべきだ。それなのに君はそのままにしたいと言う。それは君を認めなかった妖精族への恨みを忘れないようにするためか？」
ソルバーユが静かに言う。
半妖精は人族と妖精族の両方の血を引く者のこと。しかし妖精族は、人族と妖精族の血が交われば魔族が生まれると言い、生まれた半妖精に人権を与えず奴隷にすらなることを許されず、生きる資格さえ奪おうと、発見次第処刑する法まで作った。
半妖精を匿うとその一家も同様に処刑されるから、人族も妖精族も、半妖精を嫌う。本当に魔族の子だと信じる者も出てくるほどだ。
ルカが生まれた町には、ルカ以外にも半妖精がたくさん居た。それを気にしないひと達が集まって作った町だった。妖精族の軍隊が町を攻めて来た時、もしそこが半妖精が住む町でなければ、皆殺しにしようとはしなかったのではないかと時折考える。
「別に、妖精族全体を憎んでるわけじゃない。良い奴もいっぱい居るしな、あんたも含めて」
「そうか」
ソルバーユが笑ったように見えた。いつも眉間に皺を寄せているため顔全体で笑っているのは見た事がないが、表情が無いわけではない。

「では、君が憎んでいるのは君の存在を認めないこの社会そのものというわけか」
問われて、ルカは少し考えた。
社会という言葉は自分も使いはしたが、実の所はっきりとその内容を理解しているわけではない。しかし、何かに対して悔しいと思っているのは確かで、その対象は個人ではない。となると、社会以外にルカには適当な言葉が思い当たらなかった。
「まあ、そんな感じだろうな」
「そうか」
ソルバーユが頷いた。
部屋の扉を叩く音がして、助手の女性が入ってきた。
「先生、マギーさんが帰らなければならないようなので、送ってきます」
明るい室内に居たため気付かなかったが、日は完全に沈んでいた。
「わかった」
ソルバーユが答えると、女性は部屋から出て扉を閉じた。
助手の女性は、八年前とそう変わっていないように見える。人族のはずだが、女性だからそんなものだろうか。
「あの人、八年前も居たよな」
ルカは聞いてみた。
「ここもあの時の手術室と同じ感じだし、あんたも、あの人も変わってないな」
ソルバーユが手元にあった血液の容器を後ろの机に避けた。
「彼女は妖精族だからね」
「へ？」
「君にしたのと同じことさ。目を変えて、耳を削った。ああ、彼女の場合は歯も抜いたかな。もちろん彼女の同意は得ている。いやむしろ、彼女が希望したのかな」
奇怪な話だ。半妖精がどちらかの種族に外見を似せるのは、生きていく上で仕方なくやっている。逆ならまだ分かるが、純粋な妖精

族が人族に姿を似せて、何の得があるのだろう。
「おっと、これは他のひとには秘密だからな」
珍しく、ソルバーユがいたずらっぽい顔で言った。
それから、またいつものようにしかめ面に戻る。
「君は社会を憎んでいると言ったが、わたしも同じだ。この社会を憎んでいる」
「何で？」
生きることを許されない半妖精や、奴隷としてしか生きられない人族ならば、この社会を憎むのも分かる。なぜ恵まれた立場に居る妖精族が社会を憎むのだろう。
「わたしの研究を認めないからだよ」
研究？　そう言えば、この場所のことをソルバーユは研究所と言っていたが。
ルカは部屋を見回した。壁に設けられた棚には、いくつもの瓶が並んでいて、ソルバーユの向こう側に小さな窓が見えている。机の上には先ほどの血液が入った瓶と、それに混ぜた薬品、それに石版が何枚も立てて置いてあった。
「何の研究だ？」
聞いてもよいものなのか分からなかったが、言いたくなければソルバーユは言わないだろうから、とりあえず聞いてみた。別に、研究内容に興味があったわけではない。単なる世間話程度に会話を続けようと思ったのだ。
だがソルバーユの答えは、世間話とするには常軌を逸していた。
「人族を不老長寿にする研究だ。だが、実際に人族で試そうとした時に国から待ったが掛かった。体を提供したがる者は多く居た。居なかったとしても、わたしの奴隷を使えばそれで良かった。そこまで来ていたのに、わたしの研究資料と論文は全て没収されてしまった。運悪く国はカザートの侵攻を受け、国が保管していたはずのそれらの書類は行方知れずとなった」
一体ソルバーユが何を言っているのか、ルカは一瞬理解できなか

った。
人族を不老長寿にする？　妖精族のようにか？
それは成功すれば素晴らしいことだと思える。しかし国がそれを否定したのだという。
「何であんたが居た国は、研究を続けさせなかったんだ？」
ルカが問うと、ソルバーユが笑った。
「君は、実験が失敗したらどうなると思う？」
「え、どうって……どんなことするのか知らねえけど、最悪死ぬんじゃねえのか？」
ソルバーユは頷いた。
「その通りだ。実験に使った人族が死んでしまう、もちろんそれも問題だ。だがそれよりも国にとっては、実験が失敗し続ける限り使われる薬品の費用のことが問題だった。『人族はいくらでも増えるから長寿にする必要は無い。そんなことに使う予算はない』そんなことを言っていた」
ソルバーユが遠くを見るような目をして言う。
「国がカザートに併合された後、一度イレイヤ公に会った時に、押収した品にわたしの研究資料がなかったか聞いたのだが、調べておくと言われてそれっきり何も言ってこなかった」
聞き逃すところだった。
ルカはソルバーユの今さっきの台詞を頭の中で反芻した。
確かに彼は、『イレイヤ公に会った』と言った。
『イレイヤ』は、ルカの町を滅ぼしたエルフの名だ。幼かったルカに姉から知らされたのは町を襲った軍隊を率いていたエルフの名だけだった。それがどこから来て、何のために町を襲ったのかまではその時に言わなかったし、ルカも聞かなかった。
「ソルバーユ、あんたイレイヤ公と会ったのか？」
ルカが聞くと、ソルバーユは怪訝そうな顔を見せた。
「何か不思議か？　わたしがカザートに居るのは、彼に呼ばれたからだよ。自分の専属医になれと言われてね。もっとも、彼のせいで

わたしの研究成果は永遠に失われることになったのだから、彼の言いなりになるつもりはなかったがね」

何だ？　イレイヤ公っていうのは、今カザートに居るのか？　カザートのどこに？

ルカは服の上からナイフを握り締めた。

居場所はおそらくソルバーユが知っている。イレイヤ公の方はルカのことを知らないだろうから、こっそり近付いて復讐を果たすこともできるはずだ。

いきなり居場所を聞いたりしたら、ソルバーユに不審に思われるか？　いや、何か言ってきても昔やってたことを暴露すると言えば黙るはずだ。

「イレイヤ公は、今どこに……？」

声を絞り出す。

「ん、今は戦争に出てるんじゃないかな？　彼は戦争が好きらしい。難民を救う為だとか言っているが、そのせいで余計難民が増えていることは気にならないようだしね」

ソルバーユが答える。

イレイヤ公はカザートでは相当な階級にあるのだということが、ソルバーユの話ぶりから分かる。

ソルバーユが言葉を続けた。

「君がなぜイレイヤ公を探しているのかは知らないが、もしそれが復讐のためだと言うのなら諦めるべきだ」

ルカが考えていたことをそのまま当てられて、ルカはソルバーユを凝視したまま、何も言えなかった。

「イレイヤ公は十五年前、カザートを建国した。つまり、ヴォルテス王がイレイヤ公なのだ。君は王を殺せると思うか？」

ソルバーユが言う言葉は、ルカの耳にひとつ残らず入っていた。しかし、にわかには信じ難かった。いや、ソルバーユの言葉を疑う必要は無い。けれど、信じたくない。

ソルバーユが言う通り、王は厳重に警護されているだろうし、ル

カがこっそり近付くことは不可能だ。第一、王を倒すということは国を滅ぼす事と同義だ。

せめて、もっと普通の階級のエルフだったら。

脳裏に、ルカの町が焼かれている情景が浮かぶ。炎を背景に、戦車の黒い影が軋んだ音を響かせて走っていく。

そうだ。王でも関係ない。俺が生き残ったのは、町の皆の仇討ちをするためだ。俺しか居ないんだ。

「ありがとう、ソルバーユ」

ルカは立ち上がった。

「あんたがやってたことは、誰にも言わない」

そう言って、ルカは診療室から出て行った。

ソルバーユがルカの後姿を頼もしそうに見送る。

ルカが、ソルバーユの分まで復讐を果たしてくれるだろう。そう思えば、残りの生涯をカザートで暮らすのが楽しみになる。

「先生、今戻りました」

研究所の入り口から、助手の声が聞こえてきた。

「おかえり」

家に帰るとセイロンがごく普通に出迎えた。

「魔族と戦って無事に帰還したんだぞ。もっとこう、喜べよ」

「だいぶ前にマギーがトキメさんと一緒に来たから、ルカがソルバーユ様のとこに居るのは知ってたし、だったら別に心配する必要はないでしょ」

トキメはソルバーユの助手の女性だ。セイロンが『様』付けで呼んでいないから、セイロンは彼女を人族だと思っているらしい。

「マギーは？　先に帰って来たんだろ？」

ルカが問うと、セイロンが溜息をついた。

「今何時だと思う？　マギーはもうおばさんの家に帰ったよ。大体、僕は結構長い間サラちゃんと二人で待ってたけど、マギーもルカも

どこに行ったか分からないし、サラちゃんはマギーを心配してずっと泣いてるし、大変だったんだ」

「サラちゃんが飯作るとか言い出さなくて良かったじゃないか」

机の上に出ている干し肉をつまみながら、ルカは言った。

振り返ってセイロンを見ると、不機嫌そうな顔をしている。ルカは急いで話を変えることにした。

「そんなことよりセイロン、ヴォルテス王が元はイレイヤって名前だったっていうのは本当か？」

「ああ、本当だよ。ていうか、それくらいなら前ルカに渡した年表にも書いてあったでしょ」

溜息を軽く吐いて、セイロンが言った。

「そっか。ちょっと見てくるよ」

言って、ルカは寝室に入った。

ヴォルテスが元はイレイヤだったということは、機密でもなんでもなく常識らしい。

セイロンの言葉からそう思う。

巻物状になっている年表の紐を解き、それを広げた。多少は文字を読めるようになっているが、音を表す字はともかく、意味を表す字は多様で覚えきれるとは思えなかった。特に人の名前は意味を表す字を並べて音で読ますから、読み辛い。

それでもカザートが建国された年を全部読みきった。この年表をセイロンから渡された時は、建国より前のことに興味があったから、建国以降のことはあまり見ていなかったのだ。

別の資料も見てみる。こちらはヴォルテス王の活躍を宣伝する為の簡単な読み物のようだ。

カザートの貴族イレイヤ公爵家に生まれ、十代のうちから軍人になり戦場で活躍を見せたらしい。当時カザートは小国だったが、付近の同様の小国との連合を拒み、東側で隣接している大国チュンウと同盟を結んだ。チュンウの同志となり共に付近の小国を征服。しかしカザートの王は滅ぼした小国の残党に殺され、チュンウの指導

でイレイヤ公がカザートの暫定代表となった。その後チュンウは北にある別の大国との戦争になり、カザート付近の侵攻を進めることができなくなった。その際、チュンウから、征服した西地域の統治を命じられたのがイレイヤ公だった。

カザート代表として統治するのではなく新しい国家の王となるため、イレイヤ公は数百年前蛮族に滅ぼされたとされるヴォルテス家こそが自分の祖先であると言い、名前をヴォルテスと変えた。

それが十五年前のことだ。

ルカが生まれた町が滅ぼされたのは十六年前のこと。

あれ？　ってことは、俺が生まれた町は、今はカザートの一部になってるってことか……？

イレイヤ公が町を滅ぼしたのは領土拡大の為だろうから、その可能性が高い。

「セイロン」

寝室から台所へ戻って、セイロンに声を掛ける。

「何？」

「地図とかって持ってないか？」

セイロンは少し考えていたが、首を横に振った。

「ルカに見せて良いものにはないよ。というか、僕には見えないから、それがどんなものなのか分からないんだけどね」

ルカに見せてはいけない、セイロンは内容を確認できない。セイロンも見てはいけないという物ではない。見ても良いが、見ることができないということだ。

「妖精族の石版か」

呟いて、確認の為にセイロンを見たが、セイロンは何の反応も返してこなかった。どうせルカにも見ることができないのだからと気軽に見せてくれるかと思っていたが、そういうわけにもいかないようだ。

「なんだよ。地図くらいいいじゃないか」

「そんなに見たいんだったら、パロス総督に聞いてみればいい。総

督ならこの辺りの地図を持ってるよ。だって一応総督だからね」
「なるほどね」
納得したようにルカは言ったが、パロスがルカの頼みを聞いてくれるとは到底思えなかった。
そうなると、やはりセイロンが持っている石版の地図を盗み見るのが早そうだ。しかし、ルカにその石版を読めるとは思えない。とすると、ソルバーユか誰かに頼んで紙に書き写してもらわなければならない。
ソルバーユが盗んだ石版を写すということをやってくれるだろうか。
ソルバーユが地図を持っていれば何のことはないんだが……。
ルカは考える。
「あっ」
ルカが声を出したので、セイロンがルカを見た。
「何でもない」
セイロンに言う。
明日、仕事が終わったらお姫さんに会えるじゃないか。お姫さんなら地図持ってそうだ。
セイロンが預かっている石版に手を出す必要はなさそうだった。

3　道程

姉が居なくなってから、ひとりでどうやってここまで来たのだろう。

気付けば、少年は一人でどこかの町の中に居た。市場の店先に並んだ食べ物を掴んで、逃げる。

少年は子どもだったが、勝手に人の物を取ってはいけないことくらい知っていた。

それでも、盗らなければ、自分が死んでしまう。

思い切り逃げたつもりだったが、大人はすぐに追いついてきた。

大きな目の妖精族（エルフ）の男は、少年を見て一瞬怪訝な顔を見せ、それから大声で笑い出した。

市場に居たひとびとが集まってくる。

男は少年を指差して、言った。

「半妖精族（ハーフエルフ）」

その後、幾人かはその場から逃げ出した。

残ったのは下卑た笑いを浮かべる男ばかりで、いきなり顔を殴られた。物を盗ったことへの仕返しだと思って、少年は大人しくしていた。

だが、いつまで経っても、少年への暴行は終わらなかった。

＊＊＊

翌日、ルカはサルムに頼んで、少し早めに仕事を上がらせてもらった。

いつものように、畑の畦道（あぜみち）を歩いてイーメルと人族の子ども達が遊ぶ場所へ行った。普段より時刻が少し早いので、子ども達はルカを見て最初不思議そうな顔をした。

「まだ時間あるから遊んでろ。でもお姫さん借りるぞ」

ルカが言うと、子ども達は鬼ごっこの続きを始めた。
会話を聞いていたイーメルが、畑から畦道へ上ってきた。
「今日は早かったな。何か用か？」
「お姫さん、地図持ってねえかな。カザート全体地図」
「持ってはいるが、そなたには見えぬぞ」
どうしてそんな物を見たいのか、と言いたげな表情でイーメルが言う。
やっぱり石版か。でも、見えないってだけで、見てはいけないとは言わなかったよな。
「それ、借りられないかな。調べたいことがあるんだ」
「別に良いが、何を調べる？」
「俺の故郷、昔妖精族に滅ぼされた……って前にも言ったっけ？」
イーメルが首を横に振る。まだ言っていなかったらしい。
「その妖精族の軍隊を率いていたのが……」
イーメルが少し離れた場所から、自分を見ている。
言いかけて、ルカは気づいた。ルカの町を滅ぼしたイレイヤ公がカザートのヴォルテス王本人かどうかを、ルカは確認しようとしている。そして本人であれば、ルカはヴォルテス王を倒す。つまり、イーメルの父親を倒すということだ。
「あ、いや。俺の故郷が妖精族に滅ぼされたんだけど、俺自分の故郷の名前を思い出せなくて。もしかするとカザートの中の町だったかもしれないから、見たら何か思い出せるかなーと」
「ふむ」
イーメルが相槌を打った。
「その妖精族の軍隊を率いていたのが、我が父、つまりイレイヤ公だったのではないかと、そなたは考えておるのじゃな？」
「えっ、ああ、……」
誤魔化したつもりだったが、何の意味もなさなかったようだ。
「では明日、地図をそなたに貸そう。そなたでは見ることもできないであろうが、金を払えば図面にしてくれる者もおるだろう」

奴隷がそんな余分な金を持っているわけがない。どうせ見られないのだから、と思っているのだろうか。

「お姫さん、」

忠告はしておこう、と思う。イーメルは人族を甘く見ている。無用心だ。

「もし、それで俺の町を滅ぼしたイレイヤ公が、確かにこの国の王だと確認できたら、俺がどうするか分かるよな？　俺の故郷で生き残ったのは多分俺だけだ。女子ども関係なく殺された。町を火の海にされた。俺は戻る場所さえ失った」

イーメルは畑に戻りながら、ルカを振り返った。

「地図を貸すのは、いつも子ども達を送ってくれる見返りじゃ。別にそなたのために貸すわけではない。それに」

立ち止まって、唐突にイーメルがルカの方へ戻ってきた。

ルカの眼前に立って、イーメルが言い放つ。

「そなたの町を滅ぼした妖精族の名がイレイヤで間違いないと言うのならば、地図なぞ必要ない。ここ千数百年の間、イレイヤと名乗っていたのは父の家系のみ」

イーメルは、ルカが確認したいのは、ルカの故郷がカザートの一部となっていれば父がルカの故郷を滅ぼしたと分かるということだと思っていた。しかしルカは、滅ぼしたのがイレイヤという名前の妖精族だと知っていた。それならば、それ以上の確認は不要だ。

カザートは征服を重ねて大国となった。そこら辺の人族や妖精族はほとんどが征服した地の者達だ。以前の権利を失った者や、戦いで家族を失った者の中には、ヴォルテス王を恨む者が居て当たり前。

わらわらは憎まれて当然じゃ。

「それでも地図が見たいのであれば、約束通り、明日持って来よう」

笑い飛ばしたかった。

王を倒すなぞ莫迦げたことだ、そなたでは王に近づくことすらできぬ。

いつもならそう言っただろう。しかし今は、

わらわを利用する気だったのか。
その気持ちが強く出て、口を開けばそう言ってしまいそうだった。惨めな言葉だ。イーメルはルカに地図を貸すと言った。既に利用されているではないか。妖精族の王女が、なんということだ。
ルカがヴォルテス王がイレイヤ公だと知ったのがつい昨日のことだとは、イーメルは思いもしなかった。
「お姫さん」
ルカが言う。
「やっぱ地図貸してくれ。姉ちゃんが、あれはイレイヤ公の軍だって言った。だからきっとそれで間違いないんだと思う。けど、自分で確認したい」
イーメルはそれを聞き、頷いた。

イーメルに借りた地図は案の定というか、ルカには見ることができなかった。ルカが見ることができるのは、新しい物のみ。記録されてから一年も経つと見られなくなってしまう。古くなればなるほど、記録力が弱くなっていて見ることができない。それは純粋な妖精族でも同じだが、妖精族は保存状態の良い物ならば千年前の物でも見ることができると言う。
ルカは羊皮紙を数枚セイロンに用意してもらった。文字を書いて覚えたいと言ったらあっさりと貰えたのだ。
一枚に、ルカはサインを書いた。カザートに来て居住権を得る為の話をネルヴァとしていた時、ネルヴァが石版に記していたものを真似する。
ルカに読めない地図を誰に書き写してもらうか、ルカはネルヴァに頼むつもりだった。しかし、ネルヴァが住む寮は分かったものの、入り口で門前払いされてしまったのだ。それで、ルカは以前ネルヴァが使っていた署名を利用することにした。
前回と同じように、ルカは寮の門で呼び止められたが、素早く、

ネルヴァの署名を真似たものが書かれた羊皮紙を門番に見せた。
「ネルヴァ様から、この通り特別な命令を受けまして。これが相手からの書状なのですが、ネルヴァ様に直接確認してもらわないと」
地図の石版の頭を少しだけ門番に見せる。
これだけしか見えないと、石版に何が書かれているのかは分からない。
「そっちを見せろ」
ルカが持つ石版を指して、門番が言った。
「とんでもない。相手の方から、ネルヴァ様以外には見せてはならないと言われております。わたしも当然中は見ておりません」
「お前は阿呆か。人族が見ても見えるわけがないだろう」
「おっと、そうでした、そうでした。ここだけの話」
ルカは声を潜めた。
「わざわざ人族であるわたしに使いをさせたのには、貴方様が仰いますように、どうしても書状の内容を見られたくなかったからではないでしょうか。相手の方はそれはそれは美しい女性の方でして……」
「ふむぅ。仕方ないな。ネルヴァ殿のサインもあることだし、今回だけ特別だぞ。次からはちゃんと手続きを取るよう、ネルヴァ殿に伝えておいてくれ」
話の分かる門番だ。
ルカは門番にお辞儀をしながら、寮に入った。
ネルヴァの住む部屋は確認済みだから、まっすぐにそこを目指す。
部屋は番号順に並んでいて、ネルヴァの部屋は三号室。番号というのは左から小さい順に並べるのが普通らしいから、部屋番号が石版になっていてルカに読めなくても、大体想像がつく。
左から三番目の部屋の扉を叩く。
一瞬、部屋の外を確認する為の小窓が開いて、その後扉が開いた。
「早く入れ」
ネルヴァがルカを部屋に引き込む。

「ったく、なんでこんなとこに来た。それと、勝手に私の恋人を捏造するんじゃない」
部屋には窓があって、そこから先ほどの門番が見えている。それにしても結構な距離だ。
うわ。耳良過ぎだろ。
妖精族の聴力が優れているのは知っているが、まさかあの小声まで聞き取られるとは思わなかった。
「言っとくけどな、お前の嘘がバレなかったのは、偶然、私がついこの前、実際に同じことをしたからだ」
「恋人と逢び――」
「田舎のお袋が病気で！　今一応警備の待機中だろう。普段は親とだって一週間に一度か二度、手紙でしか連絡できないんだ。でも様態が良くないらしくて心配でな。まったく」
腕組みして、ネルヴァが言う。
「で？　何しにここまで来たんだ」
言われて、ルカは地図をネルヴァに見せた。
「この地図を、俺にも分かるようにこっちに写して欲しいんだ」
丸めて持ってきた羊皮紙も見せる。
「どれどれ」
拒否するわけでもなく、ネルヴァは石版を手に持って見た。
「これはまた……細かい地図だな。全部写すとなると相当時間が掛かるぞ」
「大雑把なところだけでいい。町の名前とか形とか、目立つ道とか分かれば」
ネルヴァにペンも渡す。
受け取ってくれたということは、地図を写す気があるということだ。
「ルカ、いつまでここに居られる」
「明日の仕事が始まるまで」
「朝帰りはよせ。私が変人扱いされるから」

「なるほど。じゃあ、日付が変わる前には終わるって事か」
「まあ、そういうことだ」
ネルヴァは石版を見ながら、まずはカザートから書き込み始めた。
ネルヴァの作業は手早かった。国境、それに町と町の境界線を引くのはすぐに終わった。それからいくつか点を打っていく。
それが終わると、ルカにペンを返した。
「地名はお前が書くんだ。私は人族の字を知らない。ここがカザートだ」
地図をルカの方へ向けて、指差す。
「こっちがチュンウ。ああ、上が北な」
国の名前を書き込んでいく。
「ここが『竜の洞窟（ダイゴラス・トーチス）』だ」
点を指してネルヴァが言った。
「竜の洞窟？　なんだそれ」
「ああ、カザートでは結構有名な観光地だよ。名所を入れると分かりやすいかと思ったんだけど、そっか。ルカはこっちの人じゃないんだよな」
「ふぅん」
「大きな鍾乳洞さ。中には『竜の剣（ディガー・ソード）』っていう伝説の剣があるそうだ。まだその辺がカザートじゃなかったころは、結構竜の剣を探す冒険者とか居たらしい」
「なんで伝説なんだ」
「見た人が居ないからだろ。噂ではそれは竜の牙で出来ていて、一撃で百の妖精族を倒すらしい」
ネルヴァが言う。それほど関心はないようで、ネルヴァの言葉はどこか淡々としていた。
確かに、一撃で百とか、竜の牙を使っているとか、何とも嘘臭い話だ。
「で、こっちがラグナダスって書いてある」
言われた通りに、記入していく。元々知らない国。地名を聞いて

も何もピンと来なかった。
　暫くそれを続けていたが、やっとネルヴァが
「これで大雑把なとこは全部だ」
　と言った。それから小声になった。
「それにしても、どこでこの地図を手に入れたんだ？　私も知らないような道が細かく書き込んである。多分王族用の抜け道だ」
「え？」
　この地図はイーメルから借りたものだ。だからネルヴァが言うような王族用の抜け道が描かれていてもおかしくはないが、地図の用途はイーメルに伝えたし、そこまで細かな地図が欲しかったわけではない。
「なんだ、知らずに持ってきたのか。まあいい。出所は詮索しないことにするよ」
「いや、これは」
　おそらくネルヴァは、機密扱いの石版をセイロンがルカに渡したと思っているだろう。ネルヴァの親切は分かるが、勘違いによる気遣いは困る。
「イーメルが……」
　何の為に？　これしか地図がなかった？　そんなはずはない。俺の目的をお姫さんは知っていた。俺の目的はなんだ？　俺の町を滅ぼしたのがヴォルテスかどうか確認し、間違いなければ。
「王……す為に……」
　急いで口を噤む。小声だった。今度は間違いなく。声にすらなってなかったはずだ。だからネルヴァにも聞き取られていないはずだ。
「悪い、ネルヴァ。これは見なかったことにしてくれ。多分持ち主は、どうせ俺にこの地図は見られないと思って、あまり気にせずに渡したんだ」
　ネルヴァが頷く。
「わかった。とにかく、あまり危ないことに首を突っ込むな」
　ネルヴァの言葉を聞きながら、ルカは石版を袋に入れ、羊皮紙は

丸めて手に持った。
「すまない、ネルヴァ。ありがとな」
ルカは礼を言って、ネルヴァが住む寮を後にした。

数日後、ネルヴァが入っている警備隊に、ラグナダス北へ駐屯する命令が下った。
先日ルカに見せてもらった地図のことを、ネルヴァは思い出す。確かラグナダスは結構広い地域だった。首都カザートから北西へかなり行った辺り。
実家へは少し近くなるが、駐屯命令中に家に帰れるのは休暇を貰えた日だけだ。
「それにしても何で今更ラグナダス地方なんだ」
廊下に荷物を出していると、同じように廊下に出ていた同僚達が立ち話をしていた。
ラグナダス地方はカザート建国の直前に平定され、今は完全にカザートの支配下にあると聞いている。ここ最近侵攻している地域とは方角も違う。
「これから寒くなるってのにな。おい、ネルヴァ、お前毛皮持ってるか？　無いなら貸すよ」
金色の髪をかなり短く刈上げた男が言った。
ネルヴァが答える前に、嵩張りそうな毛皮のマントがネルヴァの前に飛んできた。
「ありがとう」
毛皮を投げた男、ウルプスに礼を言い、ネルヴァはマントを丸めて荷物の上に一緒に縛り付けた。
カザートは砂漠の国と言われるが、その国土は広く、北側では雪も降る。毛皮のマントは警備隊への支給品だ。ネルヴァはこの警備隊に移動して間もないからまだ持っておらず、同僚の配慮がありがたかった。

ウルプスとはずいぶん昔からの知り合いだ。ネルヴァが成人して間も無く軍に入った時、同じようにウルプスも新人の軍人だった。軍を辞めて警備隊に入った理由は聞いていないが、おそらくもっとも一般的な理由――軍で思ったほど出世できなかったのであろう。

「まさか、さらに北へ攻め入ろうってわけじゃないよな。あれより北は年中氷が溶けない地域だって聞いてるぞ」

「西側を狙ってるのかもな。ラグナダスの西には葡萄酒の産地がある」

軍が北へ攻め入ろうとも、西へ攻め入ろうとも、今ネルヴァが参加している警備隊は直接戦争に参加するわけではない。名前の通り、警備が仕事なのだ。

「ネルヴァ、お前はどう思う」

ウルプスが言った。最近警備隊に移動したばかりのネルヴァを気遣ってか、よく話を振ってくれる。

「戦争にならないのが一番だがね。しかしヘルメイド准将が既に同じ方角に向かって出立したという話も聞く。装備品に葡萄酒は含まれなかったそうだ」

ヘルメイドは現在のカザート軍内で最も武勲を上げたとされる男だ。そのヘルメイドが北西へ向けて出立したことはネルヴァが言うまでもなく、ここに居る者なら誰でも知っていることだった。

「そこから、どう考える？」

「征服した地で酒を得るつもりだろうと、私は考える」

「なるほどな」

酒は妖精族にとって特別必要な物ではない。少量でも判断を鈍らせるし、多量に摂取すれば視界さえも悪くなると言う。しかし昔から勝利を酒で祝う風習があり、酒が美味なのも間違いないことだったから、軍の活動と酒は切り離せない関係にあった。

だからと言って、酒の為に西地域に侵攻するなど、あまりにも莫迦げた話だ。

ネルヴァは小さく溜息を吐いて、それから大きく息を吸った。

警備隊は、軍に入ったものの活躍できず名を売ることができなかった平民が、最後に行き着く場所だ。軍に比べて活躍の場は少ない。その上俸禄は軍馬を預かる馬屋の管理人よりも少ないが、平民であるネルヴァが生きていくにはそれくらいでちょうど良いと思うのだ。馬屋の番よりもやりがいはある。

まだルカくらいの年齢だったころは、貴族に憧れて、軍に入り名声を上げ爵位を授かろうなどと思ったこともあったが、貴族制度自体に疑問を持ってからはそう言った気負いもなくなった。

国の情勢が安定したら、そのうち警備隊を辞職して、妻を娶り実家で母親と暮らす。

ネルヴァはまだ辞職を考えるほど年を取っているわけではない。今年で八十六歳だ。急いで結婚を考える程でもない。しかし病気がちな母親を、戦争で死んだ兄達に代わって、自分が近くで支えたいのだ。

貴族でないネルヴァの家庭には奴隷が居ない。母親は田舎で一人暮らしをしている。自分が近くに居なければならないと気づくのに何年掛かったことか。

円満に退職する為には、妙なことには首を突っ込まない、文句を言わない。それが大事だ。

いちいち騒ぎを起こす人族の男を思い出す。

ルカだ。

どうにも、ルカが来てから、ネルヴァの予想と違った方向へ進んでいる気がする。しかし悪い方向へ進んでいるわけではないと思う。なぜなら、ルカがやることを正しいと思えるからだ。

ルカは王城の抜け道まで記された地図を持ちながら、その内容は追求しなかった。本当かどうかも聞かれなかったから、他へ売る気でもないらしい。信念を曲げることなく、純粋で、他人への思い遣りがあるように思う。

俺の勘が正しければ、だけどな。

ネルヴァは廊下にウルプスや他の同僚と並んで、点呼を待った。

ラグナダス地方へ旅立つ前に、ネルヴァは母親に宛てて手紙を書いた。手紙での連絡もこちらから出せるのは一週間に一度だけだ。

もちろん出す手紙は無作為に選ばれて検閲を受ける。だから、お互い当たり障りのないことしか書かない。それでは物足りないから、ネルヴァはこっそり母親からの書簡を受け取ったりしていたが、これから戦争を始めようとする地域では、手助けしてくれる者も居ないだろう。

兄が次々と戦争で死んだ後、残ったネルヴァは自分が偉くなることが母を喜ばせることだと思い、必死に軍で働いた。しかし平民であるネルヴァはどんなに頑張っても兵長止まりだ。それより階級を上げるには、死んで三階級特進を狙うほかない。

私は何をしていたのだ。

母が病で倒れた時に、死ぬことでしか得られない階級を追い求めていたことを激しく後悔した。兄弟が皆死んでしまうことこそ、母を悲しませる最大の事柄なのだと気づいたのだ。

『母上、私はこれからラグナダス地方の警備に向かいます。カザートよりもそちらに近いですから、折を見て会いに行きたいと思います。どうぞお元気でお過ごしください』

「お前ほんとにマザコンだな」

後ろから覗き込んだウルプスが言った。

「うるさいな。お前には関係ないだろう」

「すっごい美人の恋人が居るって噂はどうなったんだ？」

ああ、ルカが言ったことか……。

頭を抱えたくなったが、機転を利かせることにする。

「それは私の母のことだよ。私の母はほら私を見れば分かる通り、絶世の美女だから、きっと使者が勘違いを――」

ウルプスが最後まで聞かないうちに、首を竦めて首を左右に振った。話にならない、という仕種だ。

「そうかそうか。それじゃ、昔よく見かけた人族のガキがお前の恋

人だったかな？」

「からかうのはもうやめにしてくれ。私は人族と必要以上に関わるつもりはない」

別に人族は嫌いではない。寿命と老化の速度が違うだけの、ほとんど同じ種族だと思っている。だから人族と友になることはできる。だが結婚相手を選ぶなら妖精族でないといけない。

「お前の口癖だったな。『寿命と老化速度の違いが考え方の違いを生む』」

ウルプスが言った。

ネルヴァが頷く。

「でも緑髪の医者が言ってただろ。『考え方は寿命や老化速度が作り出すものじゃない。ひとそれぞれ違うのが当たり前だ』って」

そう言っていたのはソルバーユだ。確かに、その考えにも同意できる部分はある。妖精族同士でもいがみ合うことはあるし、人族同士でも同じだからだ。

それでも、自分にそう言ったソルバーユの姿を見ると悲しくなるのだ。彼が連れている助手の女性は、彼が遥か昔に恋した人族の女性に姿を似せているのだと聞いた。

同じ時を生きられないことほど悲しいことは無い。

私は彼女と早いうちに別れて幸いだった。

「ま、ラグナダスにも美人はいるさ」

ウルプスはネルヴァの肩を軽く叩いて、先に歩いて行った。

ネルヴァが所属する警備隊は、六日掛けてラグナダス最北の駐屯地へ到着した。

先に出発していたヘルメイド率いる軍隊は、一部はこの駐屯地に残り、一部が先行して偵察に赴いていると言う。

ラグナダス地方は、今は冬が近く寒気に覆われているが、基本的には温暖な気候の地域だ。だが戦争の爪痕とでも言うべきか、妖精族や人族が暮らす集落は少なく、荒地が広がるばかりだった。

「残念だが美人は居ないようだ」
到着を歓迎して開かれた小さな宴の時、ウルプスがネルヴァに言った。
「最初から期待してないよ」
ウルプスが持ってきた酒を少しだけ注いで貰って、一気に飲む。
軍にはそれ専門の女性が配属されるが、警備隊にはそんな特典は付いていない。
あまり思い出したくない。
かわいそうだと思っただけだ。別に、彼女を伴侶にしたいと思ったわけじゃない。
母に会わせた時、二人で楽しそうに喋っていた。二人とも、こんなに普通に笑うことができるのかと驚いた。
「おい、ネルヴァ。まだ酔ったわけじゃないだろ。ほら、まだ酒あるぞー？」
ウルプスがネルヴァの前で手を振って、おどけた口調で言う。
宴が始まってからそれ程時間は経っていないが、ウルプスは相当酔っているように見えた。
「お。あの子かわいいんじゃないか？　ほら」
ネルヴァの首を無理やりそちらへ向けて、歓迎の舞を見せている女を指差す。
「お前好みじゃないか？　ああいうの」
ウルプスを煩わしく感じて、ネルヴァはその手を払いのけた。
「どうせ抱くならああいうのがいいね～。大人しそうで、殴っても蹴っても何の反応もねえの。やりたい放題」
いくら酔っていると言っても、言葉が過ぎる。
「ウルプス、いい加減にしないか」
隣に座っていた同僚が、ウルプスの腕を引いて座らせようとしたが、ウルプスは立ったまま、酒瓶をネルヴァの前に置いて言った。
「エピデトにそっくりだ」
気づいたら、ウルプスを殴っていた。

殴った時の手の痛みで一瞬我に返ったが、どうせなら意識が飛んでいる方が後々弁解しなくて済む、そう思って再度怒りに身を任せる。

同僚達に取り押さえられて身動きが取れなくなってから、やっとネルヴァは完全に自我を取り戻した。

ウルプスも同僚に取り囲まれていたが、暫くして一人に支えられながら部屋から出て行った。

「お前も頭を冷やせ」

ネルヴァの頭上から声が降ってきた。見るからに位の高そうな凝った装飾の鎧を身に纏っている。

「ヘルメイド准将」

その鎧に入った紋章から、ネルヴァはそうと気づいて言った。

「お前達の任務は何だ？　来るそうそう酒に酔って暴れてここの規律を乱すのが目的か？」

ヘルメイドが大声で、その場に居る全員に聞こえるように言う。

「ここに居るのはお前達警備隊だけではない。これから戦いに向かう獅子達も居るのだ。士気を下げるような真似をするな！　お前達の任務は、駐屯所を置かせてもらっているこの町を敵兵から守ることだ！」

先ほどまでざわついていたのが、一気に静かになった。

ネルヴァは縄を掛けられた。自分では意識していなかったが、相当暴れたらしい。暫く牢に入れられるようだが、それも仕方がないことだった。

ウルプスに悪いことをしたな。

牢の中でネルヴァは少し後悔した。ウルプスは酒を飲むと口が悪くなる。それはいつものことで、平常に戻ってから必ず謝りに来るのだ。

でもなんでエピデトの名前を知ってたんだ。

ネルヴァが軍に居た頃ウルプスも同じ部隊に居て、エピデトを見かけたことくらいはあっただろうが、名前までは知らなかったはず

だ。あの頃、ウルプスに『名前くらい教えろ』と何度も言われた覚えがある。

牢に入ってからどれくらい経っただろうか。

食事が時々出てくるから、一日やそこらではないだろう。いくらなんでも喧嘩の罰にしては長すぎるが、食事を運んでくるのは軍人で、尋ねてもネルヴァの事情を知る者は居なかった。

「ネルヴァ、ウルプスがお前に謝りたいと言ってる。会うか？」

やっと同僚のひとりと会えた。その事にほっとする。

「ああ」

返事を返すと、その同僚と入れ替わりにウルプスが牢の前に立った。

「ネルヴァ、すまなかった。酒に酔っていたとは言え、お前に酷いことを言ってしまった」

「いや。私の方こそ、殴って悪かった」

ウルプスの顔にはネルヴァが殴った痕が残っている。何箇所か応急処置の跡が残っていた。

ウルプスが牢の柵を両手で握り締めた。

「今お前を牢から出してもらうよう、手続きを取ってきたんだ。お前は早く家に帰るんだ」

「は？　どういうことだ。解雇ってことか？」

「違う」

ウルプスは柵に顔を押し付けて、少しでもネルヴァの近くへ寄ろうとしているようだった。

「俺が殴られて怪我をしたと聞いて、俺の親が動いた。お前の家族が危ない。早く家に帰って、お袋さんを連れて避難してくれ」

ウルプスの親が動く。それがどういう意味か、ネルヴァはすぐには分からなかった。ただ嫌な予感だけする。

「出て良いって」

少し離れたところから別の男の声がして、牢の前で待っていた同

僚が牢の鍵を開けた。
「お前が一時隊を離脱する許可を隊長に取った」
ウルプスが言いながら足早に歩いていく。
ネルヴァはその後を追った。
「待て、どういう意味だ。お前の親が動いたら、なんで俺の家族が危なくなる」
ウルプスが立ち止まって、ネルヴァを振り返った。
「いいか。今度は怒らずに最後まで聞け。お前には気に食わない話かもしれないがな」
言われて、頷く。
「俺はお前と違ってこれでも貴族だ。貴族っつても下級もいいとこだけどな。でも俺の親は自尊心だけは上級気取りで、平民のお前に俺が怪我させられたって聞いてぶち切れたらしい。さっき通信員が俺の家の奴隷と一緒に来て、ネルヴァの家を潰しに行くから俺はネルヴァを片付けろってな連絡を寄越してきたんだ。もちろん俺はお前を殺したりしねえ。俺が悪かったんだしな」
「家を潰す？」
「ああ。文字通り、大勢で掛かって家に居る者皆殺しだ。こっちには仇討ちっていう大層な理由があるってな」
「莫迦な」
「ああ莫迦な話だ。でも止めようにも、こっちからの連絡が着く前に事は終わっちまってるだろう。だから、今からすぐにお前は家に戻るんだ。それなら間に合うかもしれない」
ウルプスがまた歩き出す。
駐屯地の外れに隊長が馬を連れて居た。
「ヘルメイド准将に言ったら、馬を貸してくれた」
ウルプスが言う。
「戻ったら礼を言うんだぞ」
隊長がネルヴァに言った。
ネルヴァは頷き、馬に跨った。

馬を走らせながら、ネルヴァはなぜ今自分が家に向かって急いでいるのか、もう一度考えた。

ウルプスがエピデトの名を出した。それで私がウルプスを殴った。おそらくその時点で宴は終わっただろう。それで私は牢に入れられた。そこまでは到着した当日のことだ。

ウルプスの家はカザートにあるから、同じ時刻に出発すればネルヴァが先に実家に着くことになる。多少あちらが早く出たとしても、身一つのネルヴァが先に着くはずだ。だが、あちらが出発したのが二、三日早かったとすると。

馬の足が遅くなった。体力がなくなってきたのだろうが、休ませる時間が惜しかった。しかしこんな早くに馬を潰すわけにはいかない。しかも准将から借りた軍の馬だ。

くそっ。

焦る気持ちを抑えて、ネルヴァは馬から下り短い休憩を取ることにした。

二晩越えた朝、ネルヴァは実家へ辿り着いた。ひとの気配はない。門は壊されていた。壊さなくても普通に開くのに。

馬を壊れた柱に繋ぎ、ネルヴァはひとりで家に入った。

家の扉には鍵が掛かっていなかった。取っ手を回すまでのこともなく、蝶番が外れた扉はギイギイと音を立て、風を受けて開いた。

広間の天井にあった大き目の室内灯が無くなっている。地面に落ちているわけでもない。左の応接室を見ると、綺麗に整ってはいるが、ネルヴァの記憶よりもかなり地味だった。来客用の椅子や机には、母が好きだった薔薇の花の刺繍が施された覆いが掛かっていたはずだ。

他の部屋は見ずに、とにかく母の部屋へ急ぐ。

「母上」

部屋の扉の取っ手はやはり取れていて、扉と付近の壁には斧で切り付けたような傷もついていた。

血の臭いだ。
扉を押して、中に入る。既に希望は無いに等しかったが、ネルヴァは部屋を進み、母が眠る寝台を覗き込んだ。
顔もドレスも真っ赤に染めた母の体が、そこに横たわっていた。
「母上」
「……ネルヴァ？」
驚いて、ネルヴァは母の顔を見た。
薄く目を開け、ネルヴァを見ている。スースーと、息が別のところから抜けていく音が聞こえた。
「おかえりなさい。貴方は悪くないって言ったのだけど、あの人たち分かってくれたかしら」
消えそうな声で言う。
「母上、喋らないでください。医者を呼びます」
母は頭をわずかに動かした。首を横に振ろうとしたのだろう。
「ネルヴァ、立派になりましたね。貴方はわたしの自慢の息子です」
そう言って微笑む。
そのまま目を閉じ、開かない。
「母上！」
大声で呼びかける。
スースーという音はまだ聞こえていたが、やがてその音も消え去った。
親は自分より早く死ぬものだ。だがそれでも、寿命であれ失うのは怖かった。母は病気で、それで失うのも怖かった。しかし誰が、ひとに殺されることを考えただろう。
何で母上が。
戦争に出て死んだ兄達は仕方がない。けれど母は病気で、誰に迷惑を掛けるでもなく静かに暮らしていただけなのに。
息子を殴った私が憎いのなら、私を殺しにくれば良かったのに。
ウルプスは貴族で、ネルヴァは平民だ。平民は貴族に手を上げることは許されないのだろうか？　確かに怪我をさせたのはこちらが

悪かったが、あれくらい同僚同士のただの喧嘩だ。親が出てきて相手の一家を惨殺するなど、あってはならないことのはずだ。

ネルヴァは鈍化していく感覚を何とか奮い起こして、母の葬儀の手配や、この事件の一部始終をまとめて報告するための準備に取り掛かった。

ネルヴァを落胆させたのは、母を殺した張本人を、ネルヴァが知ることができないということだった。いやそれ以前に、ウルプスの家がやったことは罪とはならなかった。

首都カザートでなら当たり前に開かれている裁判が、ネルヴァの田舎では貴族でないと訴えを起こせない。だから、罪を問うこともできなかった。

後日ウルプスが親を説得し、彼らから謝罪を受けることはできた。だが彼らの言い分は、実際に母を殺した奴隷を自分達で処分したから、もう水に流してくれということだった。納得できるわけがなかった。

しかし唐突に、ウルプスの家は没落した。

平民であるネルヴァは訴えを起こせないが、駐屯地に居たヘルメイドが代わりに訴えを起こしてくれたのだ。ネルヴァが以前馬屋で働いていた時ヘルメイドの馬の世話もしていたが、その礼だと言っていた。

せいせいしたが、逆にネルヴァはウルプスに謝る羽目になった。お互いの親のことと、自分達のことは切り離して考えたかったのだ。

「何、貴族じゃなくなってこっちも肩の荷が下りたよ」

結婚はせずに一生遊ぶんだと言って、ウルプスは笑っていた。

ルカはネルヴァに書き写してもらった地図を眺めていた。

あれから何度も何度も、自分が歩いた方角や距離を遡って辿っているが、記憶は過去に遡るほど曖昧になり、ここだと特定すること

ができなかった。
ネルヴァはあの後、ラグナダスの北へ移動したらしい。
地図を見て、ラグナダスの場所を確認する。首都カザートとはかなり離れている。カザートは一年を通して乾燥し暑いが、このくらい北へ行けば温暖な気候になるだろうか。
ルカが生まれた町は、夏は暑いが冬は雪が降るほど寒くなる場所だった。カザートより南ではないだろうから、北側に絞って探している。
東はチュンウ。だがここは喋る言葉さえ違う。
西はイリアンルゥル。ここはカザートと同じで、至る所で戦争を起こして領土の拡大を図っている。以前この国に住んだこともあった。イリアンルゥルは海を挟んで上下に別れている。おそらく昔は陸も続いていたのだろうが、その部分をカザートが取ってしまったということだろう。
イリアンルゥルの北は小さな国がいくつもひしめいていた。その東もカザートの土地で、その辺りがラグナダス地方と呼ばれている。町の名前は二箇所にしか入っておらず、年表を照らし合わせて見ると、その二箇所とも、アルバノという国の町だったということが分かる。
でもここじゃない。
布団に仰向けに転がって、ルカは地図を目の前に持ってきた。
アルバノはチュンウの軍隊が侵攻した。後になってチュンウからカザートに委譲されたものだ。
だだっ広いだけで町がない。そんな場所は大体山か砂漠だ。山だろうが砂漠だろうが交通の要所なら町ができるが、そうではないのだろう。
なんで町がないんだ？　征服したってことは、征服すべき何かがここら辺にあったからだろ。単に西への足がかりにしたかったのか？
「ルカー、今日はお米貰ったから炒めてみたよ」
台所からセイロンの声が聞こえてきた。

「ああ。今行く」
米か。懐かしいな。
思って、ルカは立ち止まった。カザートでは米は主食ではない。玉蜀黍を加工したものが主食だ。イリアンルゥルでは小麦を加工して使う。米もあったが、何とか料理と言ってそれでしか食べなかった。
何とか料理って、何だ？
胸騒ぎがした。おそらく、それがルカが生まれた町に関係している。ルカが生まれた町でも主食は小麦から作るパンだったが、半々くらいで米も食べていた。米作りが盛んだった。
台所の扉を開けると、セイロンが大きな鍋から木の器に炒めた米を入れていた。
「なあセイロン、米使った料理のことを何とか料理って言うよな」
「何とか料理？　えー？　急に言われてもなぁ」
鍋を流しに置いて、セイロンが席に着いた。
「確かに、どこかの地名が付いてたよ。どこだっけかなぁ。まあ食べようよ」
言われて、ルカは食事を始めた。
ルカは米の料理が好きだったが、ユディトは米が嫌いだった。食べる前に必ず一言文句を言ってから食べ始めるのだ。
「おいしい？」
セイロンに聞かれる。
「ん。まあな」
「すごい嬉しそうな顔してるよ」
思い出し笑いしていたらしい。ルカはわざとらしく咳払いをして、居住まいを正した。
「何とか料理……うーん。何だっけなぁ」
時々セイロンが呟く。
「あっそうだ。テリグラン料理だよ」
「ああそうそう、それだ。テリグラン。で、テリグランってのはど

このことだ？」
「えっ。あー。えっとね、一応カザートだよ。でもギリギリカザートだね。ほとんどシアラード」
シアラードはカザートやチュンウの北にある広大な国だ。面積だけならチュンウと同等かそれ以上だろう。
「じゃあ、ラグナダス地方ってことか？」
「うん、まあね。でもラグナダス地方は北側全体だからね。テリグランはその一部だよ。テリグランっていうのはシアラード語で西の山って意味だし、それ考えるとやっぱりシアラードにも掛かってるのかな、とは思う」
セイロンは外国語まで勉強してたのか。
未だに仮名文字さえ覚え切っていない自分と比べて、明らかに出来が違う。しかし今はそれに感心している場合ではない。
「じゃあ『テリ』が西で『グラン』が山ってことか？」
「うん。そうだね」
セイロンが頷いた。

道行く人が地図を指差しながら尋ねる。
『ここはどの辺りですか？』
『ここはテリグラン＝テリですよ』
母が答えると、『ありがとう』と言って旅人は歩いて行った。
妖精族も人族も同じに暮らす山間の町。言葉はカザート、名前はシアラード。

だから『ユディト』は異国風な名前だってセイロンが言ったんだ。
テリグラン＝テリ。西の山の西。
ルカは残っていた米をかき込んで、寝室に戻ると地図を広げた。
なぜ覚えていなかったのだろう。いや、テリグラン＝テリという

言葉を、ルカは自分が住む町の名前だとは思っていなかった。実際に、それは街の名前ではなく、単に『西の山の西』という表現に過ぎなかったはずだ。だが言語が違うカザートでは、それを地名と勘違いして、テリグラン料理などという妙な言い方をされているのだろう。

地図にはラグナダス地方と書き込んであるだけで、テリグランという名前はどこにも無い。ラグナダスという言葉は、西でも山でもないから、テリグランをカザートの言葉に訳したわけではない。

年表とヴォルテス王の活躍の記録を広げる。

ヴォルテス王、つまりイレイヤ公が征服に直接関わった町なら必ず載っているはずだ。

「あった」

声に出す。

『テリグラン＝テリの反乱を鎮圧』

カザート建国の一年前のことだ。この年には他にも数多の武勇伝があるが、一応年代も合っている。

でも反乱を鎮圧ってどういうことだ？

イレイヤ公の軍は突然現れて破壊して行った。それ以前に反乱など無かったはずだ。

くそっ。やっぱセイロンに聞くしかないか。

あまり頼ってばかりなのもどうかと思うが、ここまで判明したのだ。ここで引っ掛かりたくはなかった。

「テリグラン＝テリの反乱？」

セイロンが首を傾げながら言う。

「僕が生まれる前だよね。なんかいっぱいあったからなぁ。その年は。うーんと、これかな」

セイロンが巻物を一つ出してきた。

「テリグラン＝テリでイレイヤ公の娘が、侵攻に抵抗していた住民達に捕まったんだ」

「お姫さ……イーメルが？」

「イーメル姫とは書いてないけど、娘って言ったらそうだろうね」
お姫さん、テリグラン＝テリに居たことがあったのか。そしたら会ったこともあったのかもな。
「あれ？」
イーメルは母親が死んだ前後の記憶二十年分が無いと言っていた。イーメルの母が死んだのが二十五年前。テリグラン＝テリが滅んだのが十六年前。その差は九年だ。イーメルの失った記憶の中に、テリグラン＝テリでのことも含まれるのかもしれない。
「どうしたの？」
セイロンが声を掛ける。
ルカは手を振って、返事は返さなかった。
今考えを中断させたくない。引っ掛かるのだ。
町の人は皆殺しにされた。ルカと姉ユディトは生き残っていた。だが姉は居なくなった。
いやその前だ。
俺と姉ちゃんは生き残った。姉ちゃんは俺に、あれがイレイヤ公の軍だと教えてくれた。なんで姉ちゃんがそんなこと知ってたんだ？　教えてくれたのは本当に俺の姉ちゃんだったのか？
「何で……」
幼い自分の手を引く姉の顔が、イーメルに思えてきた。
記憶の中のその声までも、イーメルの声だ。
姉ちゃんだと思っていたひとがイーメルだった。あの時のショックで間違えた？　そんなわけない。そりゃ今は顔忘れちまってるけど、当時はちゃんと覚えてたんだ。じゃあ、最初からイーメルが俺の姉ちゃんだったってこと……なのか？
頭がぐらぐらした。
イーメルはルカと違い純粋な妖精族だ。だから、姉なわけがない。いや、そうじゃない。母さんの連れ子だったら、純エルフでも問題は無い。でも、だからと言って。
二十年近くの記憶がイーメルには無い。ルカが生まれる前からそ

こに居て、十六年前に連れ戻されるまでのテリグラン＝テリで過ごした全ての記憶が無いのだとしたら。

人族の子どもと遊べば何かを思い出せそうだと言っていた。

ああそうだ。姉ちゃんはよく俺や友達と一緒に遊んでくれた。でも遊びはいつも鬼ごっこだった。

「なあセイロン、イーメルが実はヴォルテス王の子じゃないって可能性はあるのか？」

「は？　いやそれは僕には分かんないよ。でもテリグラン＝テリの反乱の時にわざわざ連れ戻してるんだから、本当の娘なんだと思うよ。他人だったらほっとくだろ」

「ああ。そうだよな」

落ち着け、俺。まだイーメルが姉ちゃんだと決まったわけじゃない。イーメルがあの時テリグラン＝テリに居たと言っても、その前からずっと居たとはどこにも書いてないんだ。

「ルカ、大丈夫？」

セイロンが話しかけてきた。

「ねえ、テリグラン＝テリがどうかしたの？　もしかして、そこがルカの故郷？」

セイロンを見る。疑問系にはしているが、セイロンの笑顔は、ルカが故郷の名を思い出したことを確信して喜んでいると思われた。

「ああ」

「良かったね、ルカ。これでお姉さん探しも対象を絞れるよ」

満面の笑みで言われて、ルカは笑顔を返した。

もしかしたらイーメルがユディトなのかもしれない。それをセイロンに言っても信じてもらえるとは思えなかった。自分自身も半信半疑なのだ。

首に下げた小さなナイフを鞘ごと取り出して見つめる。

ユディトが記憶を失っていたとしても確認する方法はある。このナイフの柄頭の鳥模様。これと左右逆の模様が入った指輪を持っていれば、イーメルがユディトだということだ。

翌日、仕事を早く上がらせてくれとサルムに相談したが、つい先日も同じように頼んだばかりで、聞き入れて貰えなかった。
掃除と飼葉の交換が主な仕事で、それを終えさえすれば上がれるのかというとそうではない。それが終われば午前の組と一緒に馬屋の見張りをしなければならないのだ。先日は、サルムがひとりで残ったというわけだ。
「まあ、あと一回廻ったらルカだけ上がればいいさ」
サルムが言い、先日に比べれば遅い時間だったが、少しだけ早く帰ることができた。
急いで畑に向かう。いつもは歩いて行くのだが今日は走った。
「お姫さん」
休耕地で走り回っている影に向かって、ルカは声を掛けた。
いつもなら子どもの誰かがルカに気づくまで特に声は掛けないから、驚いた顔でイーメルがルカを見た。
「もう少し遊んでおれ。わらわはルカと話してくる」
イーメルが近くに居た子どもに言って、ルカの方へ歩いてきた。
先日から明らかに不機嫌なのだが、元々の態度が愛想良いわけでもなかったので、その差はルカには気づかれていなかった。
子ども達は気づいているようで、ルカがイーメルを呼んだ瞬間怯えた顔をしていた。それで硬くなりかけていた表情を和らげてみたものの、ルカに近づくにつれ、また表情は硬くなった。
「どうしたのじゃ」
目を合わせようともせずにイーメルが言う。
「お姫さん、これに見覚えないか？」
首に掛けずに手に持ってきた、曇った金色のナイフをイーメルに見せた。
イーメルが怪訝な顔で、それを覗き込む。
「なんじゃ、これは」
ルカはナイフをイーメルに渡した。

小さなナイフではあるが、自分が武器を持っていては、イーメルも良い気持ちはしないと思ったからだ。

ナイフを受け取った手を見ると、左手には複数の指輪がそれぞれの指にしてあった。大きくて彩の良い透明の石が入っていたり、金細工を施していたりする。だが右手には中指にひとつだけ、銀色の指輪が入っているだけだ。

利き手だからか？

なんとなく気になって、視線でその指輪を追う。

「お姫さん、ちょっと良いか？」

ルカはイーメルの右手を掴んで、軽く引き寄せようとした。

「何を……」

イーメルが右手を戻そうとする力を感じたが、ルカは気にせずに指輪をしている中指に触れた。

イーメルの左手に残っていたナイフが地面に落ちる。

ナイフは大切な親の形見だが、今はイーメルが姉かどうかを確認する方が大事だった。

指の内側は、ただの銀色の面だった。幅の広い指輪だ。

手のひらを内側に向けさせて、外側の面を見る。

「これだ」

鳥の模様。

ルカのナイフの柄頭とは左右逆を向いている。

イーメルは困惑した表情でルカを見ていた。地面に落ちた鞘に入ったままのナイフ。見たことがあるかと問われたが、見たことはなかった。だが、その柄頭の鳥の模様は、確かに自分の指輪と同じ模様だ。

でも、それが一体……。

ルカの手が熱い。ルカは一体何をしたいのだろう。

ルカの視線が、イーメルの指から顔へ移った。

「俺、姉ちゃん探してるって言ったよな」

確かに、ルカはそう言っていた。

イーメルが頷く。
ルカは地面に落ちていたナイフを拾い上げた。
「このナイフは親父の形見だ。ここんとこ、あんたの指輪と同じ柄だよな」
柄頭を指差して言う。
ルカの手が自分の手から離れて、イーメルは右手の指輪を見つめた。最初に見たときにも思ったが、ちゃんと見比べてもやはり同じ。左右は逆だが、あまり整っていない形や目の位置が少し上にあっておかしいと思っていたのも同じ。
イーメルはまた頷いた。
ルカが真剣な顔で短く息を吐き、それから息を吸い込んだ。
「お姫さんが、俺の姉ちゃんのユディトだ」
ルカの言葉が頭の中に響く。
この男は、なんて莫迦なことを、何でこんなに真剣に言ってるんだろう。
「無礼者！」
イーメルはルカの頬を平手で叩いた。
「えぇっ？」
「そなたは人族ではないか！　なぜ人族とわらわが姉弟であるなどと考え付くのじゃ。わらわはイーメル。カザートの王女であるぞ」
イーメルの大声に、遊んでいた子ども達も立ち止まって二人の方を注目した。
居心地が悪くなって、ルカは言った。
「悪かったよ。きっと何かの手違いだ」
自分が実はハーフエルフだと白状したところで、イーメルの剣幕が収まるとは思えない。もしイーメルが力を使ってルカを吹き飛ばしでもしたら、せっかくイーメルと仲良くしている子ども達が、イーメルを恐れるようになってしまうだろう。
先ほどまで、イーメルがユディトだと思い込んで行動していたルカも、イーメルの剣幕で少し落ち着いて考えられるようになってい

た。

指輪のことも、テリグラン一テリを襲ったイレイヤ公がユディトから奪ってイーメルに与えたのかもしれない。

そう考える方が自然だ。

だが、すごいお宝ならともかく、金物屋の父が趣味で作った指輪だ。細工は、息子であるルカが言うのもなんだが、正直言ってかわいくもなければ綺麗でもない。色は確かに銀色をしているがおそらくは合金であり、銀の含有量は少量と思われた。そんなものをわざわざ他人から奪って娘に与えるだろうか。

そしてそんなものを、今やカザートの王女となったイーメルが大切に身に着けたりするのだろうか。

「みんな、今日はこれで解散。ルカに家まで送ってもらえ」

イーメルがルカの側を離れて、子ども達に言っている。

「お姫さん」

呼ぼうとしたが、その前に子ども達が走ってきて囲まれてしまい、イーメルに近づくことができなかった。

子ども達が口々にイーメルに別れの挨拶をして、イーメルも子ども達に向かって手を振っていた。

「よし、じゃあ暗くなる前に帰ろう」

こうなってしまっては、今更イーメルを呼び止めることもできない。子ども達を放っておくわけにはいかないのだ。

いつものように、ルカは子ども達を引き連れて人族の集落を目指した。

家に帰ってから、ルカはずっと考えていた。

イーメル本人は、自分はユディトではないと言っていた。だが彼女には二十年近くの失われた記憶があり、その間ユディトとして生活していたがそれを忘れてしまっているという可能性は大いにある。

カザートの公式記録には、イーメルがいつ頃からテリグラン一テリに居たのかまでは書いていない。しかし、テリグラン一テリが反

乱を起こしてイーメルを攫ったのであれば、イーメルは反乱と同時期にテリグラン＝テリに来たと考えるのが妥当だろう。

あくまでも、カザートの公式記録を鵜呑みにして、テリグラン＝テリが反乱を起こしたのを事実と仮定すれば、の話だ。

だが、おそらく反乱は事実ではない。いくらルカが当時幼かったと言え、国の代表の娘を攫ってまで起こそうとした反乱が実際に起こっていたなら、少しくらいは印象に残っているはずだ。しかし、ルカにはそんな記憶は無い。記憶にあるのは、ごく普通に暮らしていた町が、何の前触れもなしにイレイヤ公の軍隊によって壊滅させられた、ということ。

反乱は事実ではないが、イーメルが居たのは事実だろう。

幼いルカに、町を襲ったのがイレイヤ公だと教えてくれたのは、イーメルだったのだろう。最初は曖昧だった記憶も、今ではっきりしてきた。あの時、自分の側に居たのはイーメルで間違いない。

そして、自分はずっと、それを教えてくれたひとを姉だと思っていたのも間違いないのだ。

記憶違いの可能性もまだ捨てきれないけど、今の所は、イーメルがユディトだったとして、それで辻褄が合うか考えてみよう。

ルカは思う。

ルカはハーフエルフだが、イーメルは純エルフである。ルカの母が妖精族だったのだから、イーメルの母親がイレイヤ公と別れて、ルカの父と結婚したと考えられる。

でも、そうなるとイーメルの母親が二十五年前に死んだってのと合わないんだよな。

公式の記録では、イレイヤの妻つまりイーメルの母は二十五年前に亡くなっている。ルカが二十五歳以上なら計算も合うが、残念ながら二十二歳だ。

いや、二十五年前に死んだってのがイーメルの実母じゃなければ辻褄は合うのか。

イーメルの母はイレイヤ公と別れて父と結婚した。イレイヤ公は

新たな妻を娶ったが、その妻は二十五年前に亡くなった。それならば何の問題もない。

イーメルがユディトではない可能性は、もちろんある。イーメルの態度を見る限りでは、むしろその可能性の方が高いかもしれない。だが、その可能性について考える気にはなれなかった。

イレイヤ公は娘を取り戻すことを口実にテリグラン＝テリに攻め入ったのだから、イーメルさえ居なければ町は滅ぼされずに済んだ、ということになる。逆に言えば、イーメルが居たせいで、町は滅んだということだ。

それでは困るのだ。仇討ちの相手として、ヴォルテス王の他にイーメルも加えなければならなくなる。仇討ちは崇高な物だ。自分の感情次第で、仇がころころ変わる物ではないはずだ。

だが姉ならば、大目に見ることもできる。血の繋がり。家族の絆。理由はどうでも、誰もが納得するようにつけられる。

あの指輪は姉ちゃんの物で間違いない。

銀色の指輪をはめたイーメルの手を思い出す。

あんなに細いのに、柔らかくてすべすべしてた。

指輪のことを考えようとしていたのに、指の方を思い出してしまった。

手を取った瞬間の、イーメルの表情もはっきりと思い出せる。あれは、弟と手を繋ぐ時の姉の表情ではないだろう。困惑で眉根をわずかに寄せ、その瞳はルカの顔を映していた。もちろん、イーメルはルカを弟などとは欠片も思っていない。

あれ？　だったら俺、イーメルに何て思われてるんだ？

人族なのに、妖精族を姉だと言う。

唯の奴隷の一人か、もしかして変人だと思われてる？

奴隷はともかく、変人だと思われるのだけは勘弁して欲しい。明日会ったらもう少し話そう、そう思いながらルカは眠りについた。

4　恐れ

最初に火の手が上がってから、もう三日も経っていた。だが依然として炎は燃え続けている。少年の持つ全てを焼き尽くそうとするかのように。

「姉ちゃん、あれは何？」

少年は、炎の向こうから来る影を指さした。

「あれはイレイヤ公の軍隊よ。ああやって、焼け跡に残った金属や陶器を探しているのよ」

姉は少年の手を取って言った。

「行きましょう。彼らに見つかると大変なことになるわ。ルカ、わたしからの最後のお願いよ。あなたはまだ幼いけれど、大きくなったら必ずわたしを――いいえ、それは別にいいわ。わたしたちの町の人々の敵を討ってね」

なぜ姉が最後のお願いだと言ったのか、少年にはわからなかった。それがわかったのは、翌日姉が居なくなってからだった。

＊＊＊

翌日、カザートの住民全員にひとつの知らせが届けられた。

ヴォルテス王の結婚式が今度の日曜日に開かれるという知らせだ。王はまだイレイヤ公だった二十五年前に妻を亡くしており、王妃の座はずっと空席だった。その王がやっと結婚するということで、妖精族（エルフ）だけでなく人族まで巻き込んで盛大な式を挙げることになったのだ。

「そんなに嬉しいもんか？　他人の結婚式だぞ」

先程ジャンが家に来て、セイロンと色々話していた。それから保存肉を少し持って行った。結婚を祝う宴を人族でも開き、それで使いたいのだそうだ。

その後で今度は役人が来て、少しばかりのお金を持っていかれた。これもまた、結婚を祝う為なのだそうだ。

「自分の国の王様の結婚式だからね。僕でもちょっとは嬉しいと思うもん。ルカは……町を滅ぼされたんだから、お祝いしたくないんだろうけど」

セイロンが言う。

「でも、そんなに王妃って必要か？　子どもが居ないんならまだ分かるけど、イーメルが居るじゃないか」

ルカの問いに、セイロンはさあ、と首を竦めて見せた。

「憶測に過ぎないけど、王は存命中にイーメル姫に王座を継がせるつもりは無いんじゃないかな。カザートでは昔から家を継ぐのは男子と決まってるし、新しいお妃様との間に子どもが生まれてそれが男子なら、その子が第一継承者ってことになる。その子が大きくなるまでは、王はずっと王でいられるからね」

「大きくなるまでって、二十年かそこらで大人になるだろ。俺達からすれば二十年って相当長いけど、妖精族にしてみれば一瞬じゃねえか？」

妖精族は不老長寿だが、その成長速度が人族に比べてゆっくりしているというわけではない。二十歳くらいまでは人族と同様に成長していき、以降妖精族は老化しないのだ。寿命は百五十年から百八十年と言われ、王族になると二百年を超える者も居るという。

「ヴォルテス王はもう百八十歳を過ぎてるよ。だから娘のイーメル姫は百四十歳を過ぎてる計算になる」

「え？　あれ？　お姫さんってそんなに歳行ってたんだ」

初めてイーメルに会った時、年齢の話をしたら力で吹き飛ばされたのを思い出す。

「それに王は随分若い内に結婚したんだな」

妖精族は二十歳を過ぎてから老化しないから、別にそれ以降何歳で結婚しても不思議ではないのだが、大体八十歳から百二十歳の間に結婚する。もちろん再婚となると上限はない。

百四十歳。イーメルが怒ったのも分かる。婚期を逃した女性は、その手の話題に近づきそうになると大概怒るものだ。それにしても怒りすぎだとは思うが、他にも色々言った気がするし、仕方ないだろう。

「王の武勇伝を信じれば、それはそれは美しい女性だったということだよ。お互いに一目会って結婚を決めたと書いてある」

セイロンが一冊の本をルカの前に出して言った。

セイロンがルカに貸していた本の一冊だ。ルカも当然読んだことがある。年表を見るよりもヴォルテス王についてはこちらを見た方が細かく書かれている。ただし物語的な要素が強く、これを鵜呑みにするのは危険だとは思う。

「その美人な奥さんとは離婚することなくずっと仲良くやってたのか？」

「読めば？」

セイロンが頁を開いてルカに見せた。

『……一目会って結婚を決めた。この結婚生活は彼女の死によって終わりを告げる。イレイヤ公が趣味の狩を行っていた折、彼女はいつものように公に付き添っていたが、森の中で毒蛇に咬まれて死亡した。』

「うわ、あっさりと死んでるな」

結婚したことを書いている同じ頁内で死んだことまで書いているとは思わなかった。

「この狩の話は後でちゃんと詳しく出てるけどね」

セイロンが温めたミルクを飲みながら言う。

ルカにもミルクが入ったカップを差し出した。

この話を信じれば、結婚してから二十五年前に死ぬまで、王と一緒に居たってことか。

カップを受け取り、ルカは考えた。

やはり、イレイヤ公の妻が自分の母親になったとは考え難い。

となると、後はイレイヤ公の妻がイーメルの母親ではないという

可能性。つまり、イーメルは本来の王女ではなく、騙されているとか、もしくは騙しているとか。

勿論、俺の姉じゃない可能性もあるけどな。

ミルクを飲む。

どの可能性もまだ否定はできない。

イーメル本人も記憶が無いと言うのだから、確認のしようがない。

まさかヴォルテス王に聞くわけにもいかない。

「なあセイロン、一度忘れた記憶って、戻したりできないのかな」

「何いきなり。そんな簡単に出したり入れたりできるなら、勉強する手間が省けていいよね」

「そっか」

簡単にはいかないが、不可能ではないらしい。セイロンの言葉をルカはそう受け取った。

誰がこういうことに詳しいだろう。

ルカは考えて、イーメルの言葉を思い出す。

『しかも母が亡くなったのもその期間だというのに、それを必要の無い記憶だと言う医者の言うことも信じられぬ』

そうだ。医者だ。記憶云々ってのは医者が詳しいに違いない。

「ちょっと出かけてくる」

「え、今日の仕事は？　どこ行くの？」

「ソルバーユのとこ。誰か来たら、俺具合が悪くて医者に掛かってるって言っといてくれ」

「は？　全然具合悪くないでしょ。そんな嘘誰が信じ」

セイロンが何か言っていたが、ルカは無視して家を出た。

「どうした」

診察所、ソルバーユ曰く研究所に入ると、ソルバーユがいつもと同じ顰め面で聞いてきた。

「なあ、人の記憶って好きなように出し入れできるのか？」

ルカの質問に、ソルバーユは呆れ顔で答えた。

「そんなわけないだろう」
あっさりと言われて、ルカは次の言葉が出てこなかった。
「ああ、でも」
思い出したようにソルバーユが言う。
「暗示を掛けて、忘れたように思い込ませることはできるらしい」
「暗示？　忘れたように思い込ませる？」
「私の専門外だがね。君だって子どもの頃の記憶は曖昧だろうが、何も分からないかというとそうでもないだろう。ほとんどの場合は記憶が無くなっているのではなく、その記憶に辿り着けない、つまり思い出せないだけなんだよ」
「なるほど。うん。うーん？」
今一理解できない。
「例えば君が昨日会った人を全員、どこでいつどの順番で会ったかすぐに言えるか？　つい昨日のことだぞ。忘れているというのは変だろう。つまりそれが、思い出せないということだ」
少しいらついた表情でソルバーユが言った。できの悪い生徒に言い聞かせる気分だろう。
「仮に、私がここで君の頭を殴ったとする。そうすれば、君の脳細胞が破壊されて本当に忘れるかもしれない」
「脳細胞？」
「細胞はひとを作っている小さな材料のようなものだと思えばいい。君は色々知りたいようだが、最初に言ったように私の専門外だ。脳についての研究はまだ発展途上だし、好きなように記憶を操作することは不可能だ」
莫迦にされているような気もするが、何しろ聞きなれない言葉ばかりでよく分からない。だが、好きなように記憶を操作することは不可能だ、ということは分かった。
「じゃあ、最初に言った暗示で忘れたように思い込ませるのは？」
「ああ、それは結構昔から使われる方法だな。人族は思考型が妖精族と違っているらしくて、少々効きにくいのだがね。どうした。何

か忘れたいようなことでもあるのか」
急にソルバーユの表情が活き活きしてきたような気がする。
俺で実験するつもりだ。専門外だと言っていたくせに。
本能でそれを察知して、ルカは急いで首を横に振った。
「いや、いい、いい。俺じゃない。いや逆だ逆。忘れたいんじゃなくて、思い出させたいんだ」
ソルバーユが残念そうな顔をしたように見えた。
椅子の背もたれに体重を掛けて、ギイという音を立てている。
「暗示かどうかもわからないものを、専門外の私にどうにかできるとは思えないな。記憶を失うような暗示というのは、強いショックをきっかけに自分で掛けてしまうこともある。それを解くことが本人の為になるとは限らないぞ」
「それは確かに……」
暗示などとは考えていなかったが、イーメルが記憶を失った期間に母親が亡くなっている。それがイーメルにとって記憶を消さなければならない程の衝撃だった可能性は大いにあるのだ。
「話は変わるけど、今度ヴォルテス王が再婚するんだってな」
ルカとしては話を変えるつもりはなく、ずっとイーメルの記憶喪失について話しているのだが、いきなり王の前妻の死について尋ねるのはおかしいだろうと思って、今話題の王の再婚の話を振ってみる。
「ああ、人族にまで触れ回ってるのか。新しい妃は七十歳だそうだよ。娘のイーメルよりも若い母親になるな」
それは大変そうだな。
と思うが、それについて話を進めてしまっては目的と逸れる。
「王の前の奥さんが何で死んだのか、あんたは知ってるか？」
「ああ。王から直接聞いたからな。秘密を共有すれば私を引き込めるとでも思ったらしい。私も加担させられた。ルカ、君は何か知っているのか？　あれは少数の者しか知らぬはずだ」
違う。ソルバーユは、ルカが知っている『王妃は狩で毒蛇に咬ま

れて死んだ』ことを言っているのではない。人に王の武勇伝を知らしめる為の本に書いてあるようなことが、少数しか知らぬことであるわけがないのだ。

「知っているなら白状してしまおう。イレイヤ公の妻は毒蛇に咬まれて死んだんじゃない。殺されたんだよ、夫であるイレイヤ公にね」

「え……。でも何で？」

お互いに一目見て結婚を決めたと書いてあった。さすがに一目見てというのは大げさな表現だとは思ったが、その後百年近く一緒に過ごしていたはずなのだ。仲が悪かったとは考え辛い。

「それより十年程前だったかな。私も話に聞いただけで本当かどうかは分からないがね。イレイヤ公の妻は戦争に明け暮れる夫に嫌気が差して家を出てしまったらしい。まあそれにしても、その後十年もほったらかしにしておきながら、急に妻を呼び出して殺すとはね。どうやら、チュンウとの外交の折、既婚でないと不利だと感じたらしい。チュンウでは未婚者は未熟者扱いされると言うからね。彼に必要だったのは彼女ではなく、妻が居るという事実だけだった。イレイヤ公は身勝手なエルフさ。自分を裏切った妻は殺したが、娘は既婚である証明になるからと、イーメルを連れ帰った」

聞いた話とは思えない程、ソルバーユは細かに話していた。ソルバーユの作り話でなければ、それでほぼ真実と相違ないと考えて良いだろう。

「だが、ひとは一度裏切られたと感じると、何に対しても疑心暗鬼になるものだ」

ソルバーユが机の上に置いてあった石版を手に取り、右手を翳した。

キラキラと光るのが見える。既に何かが記録されている石版を妖精族が読もうとする時、その石版が光るのがルカには見えるのだ。

「イレイヤは、イーメルが自分の本当の娘ではないのだと思い込み始めた」

懐かしそうに石版を見つめる。

「実はね、イレイヤ夫妻がまだ若かった頃にも付き合いがあったのだよ。あの頃は本当に幸せそうな夫婦だと思った。……だが、疑心暗鬼に陥ったイレイヤはイーメルの記憶を消し、カザートから追放した」

石版は、イレイヤ夫妻の子どもイーメルが誕生したことを伝えた物だった。

イレイヤがカザートの代表になり、ソルバーユは彼に呼ばれた。再会した時にこれを見せて話題にしようと引っ張り出してきたのだが、イレイヤの用事は妻の死体を掘り出し、毒蛇に咬まれて死亡したように見せかけろということだった。自分だけなら断って終わりだっただろうが、呼ばれた医者は自分だけではなかった。

分野における権威を持つものも居る。反対すれば彼らに見放されることになる。人族を不老長寿にする研究は、彼らの助力もあってのことだった。

「ソルバーユ、あんた今、イーメルの記憶を消したって……」

ルカが言う。

「ああ。私がやったのではないがね。だから私の専門外だと何度も……まさか、戻したい記憶というのはイーメルの記憶のことか」

厳しい顔でソルバーユが言った。

「そんなことをしてどうする。彼女は母親を父親に目の前で殺されたんだ。確かに、カザートから追放するというのは酷い話だったが、記憶を消すことには私も賛成した」

イーメルの記憶を戻すなと、ソルバーユは言うのだろうか。イーメルの記憶の中には、テリグラン‐テリでの一部始終も入っているというのに。それさえ分かれば、イーメルがルカの姉かどうかも分かるのに。

ルカの表情が、ソルバーユの説明に納得したものではないことを察して、ソルバーユはさらに続けた。

「記憶が無いことは、彼女にとって良いことなんだ。君が一体何を考えて彼女の記憶を戻そうとしているのかは知らない。だが、君が

故郷を滅ぼしたイレイヤ公を恨んでいたとしても、娘のイーメルには無関係なはずだ」

「でも、テリグラン‐テリが滅ぼされたのは、イーメルが居たからだって――」

「いいか、ルカ」

ソルバーユがルカに近づいて小声で言った。

「彼女は父親に、テリグランを滅ぼす口実として使われたんだ。テリグランにあったのは単なる田舎の町で、軍事基地が置かれているわけでもなかった。だがイレイヤは戦績を伸ばしチュンウに有能だと思われる必要があった。イレイヤにとって偶然娘がそこで暮らしていたのは、そこに攻め入るのに丁度良い材料になったんだよ」

それは、ルカがずっと知りたかったことだった。なぜ自分の故郷が滅ぼされなければならなかったのか。

イーメルを取り返す為ではない。最初からテリグラン‐テリを滅ぼすことが目的だったのだ。攻め入って勝利した、という事実が欲しい為だけに。

「……じゃあ結局イーメルが居なかったら、イレイヤ公はテリグラン‐テリには来なかったってことじゃねえか」

もしイーメルが別の町に居たら、イレイヤはそちらの町を攻めて、テリグラン‐テリは滅ぼされなかったのではないか。

「だから、どうしてそういう考えになる？　イーメルも被害者だ。君は王だけでなくイーメルも殺す気か！」

「え……？」

ソルバーユの言葉に驚く。

イーメルを殺したいとは思ってもいない。町にイーメルが居たからイレイヤ公が襲ってきたのは確かだが、まだイーメルが姉かもしれない可能性が残っているのだ。ユディトを殺す気はなかった。

でも、姉ちゃんじゃなかったら？

殺したくはない。だが仇であることは間違いない。

首に下げた形見のナイフを握り締める。皆死んで、自分だけ生き

残ったことをどれだけ責めただろう。この苦悩から逃れるには、仇討ちを遂げるしかないのだ。

まだ考えなくていい。姉ちゃんかどうか分かるまではこのままで。

「お姫さんを殺すかどうかなんて、俺は考えたことがない」

考えないようにしているから。

「そうか。なら良いんだが。おそらくイーメルはテリグラン‐テリに居た頃の記憶も操作されているだろうが、それを弄ることは、その前の母親が死んだことも同時に思い出す可能性が高いんだ。余計なことをしようとするんじゃない。私が知っていることなら君に教えるから」

ソルバーユが言った。

その日は、午後から仕事に行った。セイロンはルカが言った通りに伝えていたようで、誰も午前中に何をしていたのか聞いてこなかった。もっとも、医者の所へ行っていたのは事実なので聞かれても答えは同じだが。

仕事が終わってから、ルカはいつものようにイーメルが子ども達と遊んでいるはずの場所へ行った。

だがイーメルは居なかった。

「あっ、お兄ちゃんだ」

誰かが言って、子ども達がルカに駆け寄ってきた。

「お姫さんはどうしたんだ?」

最初に走ってきた小さな女の子を抱き上げると、ルカは聞いた。

「えーっとね、来たんだけど、用事があるからって、すぐに帰っちゃった」

女の子が答える。

確認のために他の子どもの顔を見たら、皆が頷いていた。

「そっか。じゃあ、今日はもう帰ろうか」

「うん」

王の結婚式を間近に控えて、イーメルも忙しいのだろうか。

それとも、俺と会いたくないんだろうか。
子ども達と手を繋いでぞろぞろと道を歩く。子ども達の手は暖かい。イーメルは記憶のために人族の子どもと遊ぶのだと言っていたが、実際に子どもが好きなのだろう。そうでないと、毎日続くわけがない。
イーメルが姉ちゃんなら良いのに。
そう思いながら、胸が痛むのはなぜだろう。ルカには分からなかった。

城の中のイーメルの部屋に、何枚もの反物が運び込まれていた。
侍女たちがそれを長椅子に並べて、あれやこれやと言い合っている。
「王女、どれがお好みです？」
父の結婚式に出席する為の衣装選びだった。
「別に」
好みなどない。ずっと与えられる物を使っていただけだ。
「では、こちらを使いますね」
青い髪の侍女が反物を持って部屋から出て行った。残った反物は別の侍女が片付けていく。
イーメルは百四十六歳。本当ならばイーメルこそ結婚しなければならないはずだ。それなのに、父は娘の結婚相手を探すのではなく、自分が妻を娶った。
わらわは、もう父上にとって必要ないのか。
本当は、そんなことは最初から分かっていた。ヴォルテスは野心家だ。死なない限りは自分の権力を誇示し、広げようとする。娘に譲るつもりなどないし、逆に娘であるイーメルが自分の座を狙っているのではないかと恐れている。
「王女、どの石を使いますか？」
箱に散りばめられた宝石を見せられる。
「何じゃ？」

「耳飾と指輪をお作りいたします」
横から、かなり前から側に居る侍女が顔を出した。
「まあ！　沢山ありますこと。王女、この際ですから、全部新しくしてはいかがでしょう？　心機一転、気分も変わりますわ」
言われて、自分の両手の指を見る。この左手の指輪も、父がしつらえた物。父の権力を示すために、イーメルが身に着けるように言われた物だ。こちらはどうでも良い。変えろというなら変える。
でもこっちは。
右手の中指の指輪は外したくなかった。これは、父がカザートの王になるより前から、イーメルが持っていた物だ。いつどういう経緯で入手した物かは思い出せないが、これを失ったら全てを無くしてしまいそうだった。
これを見て、ルカはわらわを姉ではないかと言った。これがあれば、わらわはルカと繋がっていられる。
ルカの勘違いだろうが、どちらにせよ、ルカはもう一度確かめに来るだろう。
いや、姉だと思われていた方が良いかもしれない。ルカはイレイヤ公を恨んでいる。その恨みが、娘であるイーメルに向くことは想像に難くない。
「王女？　私が代わりにお選びしてもよろしいですか？」
侍女の声に、イーメルは我に返った。
「勝手に決めてくれ」
わらわは妖精族の王女じゃ。人族はわらわと話せるだけでも泣いて喜ぶべきなのじゃ。
ともすれば沈みそうになる気持ちを、自分なりに鼓舞する。
妖精族の王女である自分に、逆らう人族はいない。ルカも他の奴隷と同じだ。他国から流れてきたから、カザート王女である自分に対して忠誠心が無いのだ。時が経てば、他の奴隷の中に埋没するであろう。
勿体無い。

そう思うのは、ルカを好きだからではない。客観的に判断しても、ルカの器は使い捨ての奴隷とするには惜しい。

しかし、王を倒そうとしているのであれば、そもそも罪人である。奴隷に埋もれるどころか、企みが明るみに出れば即刻死刑だろう。

「オーヴィアはおるか？」

長椅子に横たわったまま、誰にということもなく声を掛ける。

「ただいまお呼びいたします」

侍女の誰かが言って、部屋を出て行った。

間もなく、部屋の前で待機していたオーヴィアが来た。十五年前のカザート建国以来イーメルの警護を勤めている男で、伝統や礼節を重んじる本人曰く騎士だそうだが、カザートには騎士という称号も階級もないのだから、イーメルにはよく分からない。随分昔、それも他国で使われていた称号だと聞いている。理屈はどうあれ、イーメルの言うことを大人しく聞くので他人に頼めないことでもオーヴィアには頼める。

「先日、パロスに訴えられて城に来た人族のことを覚えておるか」

「はい。確か、ルカとか」

「その者を父に会わせたい。できるか？」

ルカに復讐を諦めさせるのだ。正式な場での謁見であれば、王の周りには有能な兵士が揃っている。王自身も強い。ルカが何かしようとしても、即取り押さえられるだろう。

それで手を出せないことを知り、諦めてくれればよいのだ。王に剣を向けただけであれば、大した罪には問われない。

「承知いたしました」

オーヴィアはイーメルに頭を下げて、部屋から出て行った。

日曜日が来た。

ヴォルテス王の結婚式である。妖精族のみならず人族までも、王の結婚を祝って至る所で宴が開かれていた。

昼過ぎには王と王妃を乗せた馬車が城の前から郊外へ続く大通り

を通るのだそうだ。結婚式自体は関係者しか参列できないが、このパレードは人族でも見られる。
王と接する良い機会だ。
昨日マギーが来て、セイロンにパレードを見に行こうと誘っていた。セイロンはそれ程行きたそうでもなかったが、サラも来るということで愚痴を言いながらも、出かける準備はしている。
セイロンはサラが好きなのだろう。
ルカも身なりを整えた。
「あれ。ルカは行かないんじゃなかったの？」
セイロンが聞く。
マギーにルカも誘われたが、それは断ったのだ。
「一緒には行かない。別の用があるからな」
古ぼけた奴隷服の上に、白い外套を羽織り、頭にターバンを巻く。これがカザートの正式な服装なのだそうだ。この外套とターバンは三日前に国から支給された。セイロンは未成年なので、ルカと違い白い服が一着支給された。普段奴隷が外出着にしているのは橙色の服で、白い外出着は平民以上の着物だ。今日という日以外でそれを着て出かけたらどうなるか分かったものじゃない。
「別の用って何」
「あー、まあ、セイロンには関係ないから、気にすんな」
もっと気の利いた言い訳を考えておけばよかった、とルカは思った。
「ふうん。時間合わせられるなら現地で合流も良いかと思ったんだけど、無理そうなら仕方ないね。じゃあこれ渡しておくね」
セイロンがルカに向かって銀貨を投げた。大金だ。
「うわ。何これ。何に使えってんだ」
「ご祝儀。ルカがどこ行くつもりか知らないけど、もしパレード見に行くならご祝儀も持っていかなきゃ。妖精族がどういう結婚式するのか分かんないけど、人族の結婚式なら気持ちばかりのお金を渡すもんだよ」

「気持ちって、これそんな額じゃないだろ」
「髪も切ってもらいなよ。マギーが作った眼帯があるんだし、もうその前髪伸ばしとく必要もないでしょ」
言われて、ルカは眼帯の前の右側の前髪に手を触れた。包帯を巻いていた頃、時間の掛かる包帯交換の間もできるだけ人に見られないようにする為に、前髪を伸ばしていたのだ。
「えぇ～。俺この髪型気に入ってるんだ」
「そうなの？　変だと思うけどね。まあいいや。じゃあ、何か食べ物でも買ってよ。多分屋台が出てるけど、どれも法外な値段だろうし」
変とは何だ。
と思ったが、話がすっかり変わってしまって文句を言う暇はなかった。
「わかった。釣りが出たら返すわ」
「当たり前でしょ」
セイロンは小さな巾着袋に、銅貨を何枚かずつ入れている。二つ用意しているから、マギーとサラの分なのだろう。子どもなのに律儀なことだ。
「お兄ちゃん」
マギーが来た。白い服を着て、花束を抱えている。
サラはまだのようだ。
「ねえ、おじさん、やっぱりパレード見に行かないの？」
マギーがルカの側に来て行った。
「悪いな。他に用事があって一緒には行けないんだ」
「他の用事って何？」
今さっきセイロンにも同じことを聞かれた。さすが兄妹。先程セイロンにろくに答えられなかった時に、気の利いた答えを考えておけばよかったのだ。
「あー、いや、これは俺の問題だから」
そろそろ出発したかった。パレードの時間はまだ先だが、前もっ

て通る道を調べて接触しやすい場所を探しておきたい。
「えー、何それ。その用事そんなに大事？　一緒に行った方が楽しいよ」
そりゃ大事な用事だ。でもマギー達には無関係だ。何も知らない方が良い。
何か教えてしまって、後でルカの共犯者だったことにされたら大変だ。
「俺が居なくても三人で行ったら楽しいだろ？」
ルカが言うと、マギーが頬を膨らませた。
「違うの。そうじゃないの。そうじゃなくて、わたしはおじさんが……」
言い淀んで俯く。
次の言葉が出てこないので、ルカは会話が終わったのだと思って立ち上がった。
「じゃあ、俺もう行くから」
「待って」
マギーが手に持っていた花束が床に落ちそうになって、ルカが落ちていくそれを拾い上げた。花束をマギーに返そうとしたが、マギーは両手でルカの袖を掴んで引っ張っていた。
「どうした？」
「わたし、おじさんと一緒に行きたいの」
「だから、今日は無理だって。セイロンやサラが居るから良いだろ？」
ルカにマギーの気持ちを考えている余裕はなかった。時間も迫ってきている。機会さえあれば、今日のうちに仇討ちできるかもしれないのだ。
「違うの。お兄ちゃんやサラじゃなくて、おじさんが良いの」
頬を上気させてマギーが訴えかける。
マギーの相手をしなければいけないと一瞬思ったが、それよりも目先の仇討ちの方が大事だった。

ルカは怒気を含んだ声で言った。
「いい加減にしてくれ。俺は用事があると言ってるだろ。もう行かなきゃならないとも言ったよな。言葉が通じないわけじゃないだろ」
袖を掴むマギーの手を振り払う。
マギーが怯えた表情をしたのが視界の隅に入った。
「待って、ルカ」
家を出ようとしたルカを呼び止めたのはセイロンだった。
「何だ？　俺は急いでるんだが」
マギーに言ったのと同じ口調でセイロンにも言う。
「マギー、せっかく来たとこ悪いけど、これおばさんに渡しに行ってくれる？」
セイロンはマギーに小さな巾着袋を渡した。
マギーが無言で頷いて家から出て行った。
セイロンがルカに向き直る。
「ルカ、今の態度は酷いよ」
「セイロンには関係ない」
歩き出す。
「関係あるだろ。僕はマギーの兄だぞ。ルカはマギーの気持ちを知っててあんなこと言ったの？」
早口に捲し立てられて、ルカは入り口近くで立ち止まった。
マギーの気持ち？
「一緒にパレードに行きたいってことか？　そんなに大事なことか？」
セイロンが大きく溜息を吐いた。
「今ちょっと、僕が莫迦だったと思ったよ。ルカがこんなにイライラしてるの初めて見た。僕でもびっくりしたもん。マギーは絶対泣くよ」
泣いてなかったじゃないか。
ルカは思ったが口には出さなかった。下手に返せば話が長引くと思ったのだ。

「何でそんなに急ぐの？　パレードに行くんだよね？　何の為に？　お祝いじゃないよね。だって、ヴォルテス王はルカの故郷を滅ぼしたんだから」

駄目だ。セイロンはおそらくソルバーユ以上に勘が働く。いや、優れた観察眼を持っている。会話は続けられない。

ルカは扉に手を掛けて押した。

「ルカ、行くなら、そのご両親の形見のナイフを置いていって」

なぜ？　などと聞いている余裕はなかった。この状態で話を長引かせても、セイロンを言い負かすことができるとは思えなかった。

扉を開ける。

「ルカ！」

後ろからセイロンの叫ぶような声が聞こえてきた。

ルカの歩みは家を出て一歩で止まった。

扉を開けたその先に、エルフの男がひとり立っていたからだ。

「ルカ殿、さるお方とお会いして頂きたい。一緒に来てもらおう」

家の中にはセイロンが居る。

前も後ろも行き止まりか。

ルカは溜息を吐いて、目の前のエルフに言った。

「そのお方ってのは誰だ？　あんたの話し振りからして、相当身分が高そうだけど」

妖精族は辺りを見回して、ルカに耳打ちした。

「ヴォルテス王だ」

元の姿勢に戻って続ける。

「だがこのことは他言無用。よいな」

「ああ、もちろんだ」

どういうことか分からないが、王が直接会ってくれるというなら願ったりかなったりだ。

ルカは家の中を振り返った。

「セイロン、俺このひとと用があるから。じゃあな」

セイロンが不安げな表情でルカを見ている。

ルカはセイロンに軽く手を振ると、エルフの男に付いて歩き始めた。

人目を避けるように裏通りを通って、ルカ達は城の近くの大きな建物に入った。煌びやかな装飾が目を引く。この奥には妖精族の女神を祭った神殿があるのだとエルフの男が言った。

ということは、ここは祭儀場。王の結婚式をする場所だ。多くの招待客達がうろうろしていて、彼らに食事を出すために人族の奴隷も多く居る。ルカが妖精族に付いて歩いていても、誰も不審には思わないだろう。

多くのひとが居る広間を抜けると、先程までの喧騒が嘘のように静かになった。

広間を出てすぐ近くの衛兵が居る扉を男が開ける。ルカを先に部屋に入れると、男は扉を閉じた。

「ここで待て」

部屋の中には椅子がいくつか乱雑に置かれている。部屋の隅にはたくさんの机と椅子が重ねて置いてあった。倉庫のような物だろうか。だが床には広間と同じ赤い絨毯が敷き詰められているし、天井には豪華な室内灯がぶら下がっていた。

男が部屋から出て衛兵に何か指示をしたようだった。男はすぐに戻ってきて、入ってすぐのところに立った。

暫くして、静かに床を擦る服の音が近づいてきた。王ならば他に兵士を幾人も連れ歩いているはずだが、それはひとりだった。

扉が開き、入ってきたのはイーメルだった。

銀色の髪を結い上げ、輝く宝石を散りばめた髪飾りをしている。服も、普段でも相当良い物を着ているのだが、今日の服はさらに豪華だった。肩にかけている厚手の布にも、普段とは違う装飾が施されている。

今日は一段と綺麗だ。

ルカを案内してきたエルフが居なければ、ルカはイーメルに言っ

ていたかもしれない。しかしひと前で言うのはさすがに気が引けた。これだけ美しいと冗談にもならない。

「ルカ、今日はそなたに、ヴォルテス王と会ってもらう。だが父には、わらわが手引きしたことは伝えるな」

言われて、頷く。イーメルがルカと王を会わせようとしている理由は分からないが、会わせることが良いことだとは、客観的に見て考えられないのだ。

「その前にわらわが来たのは、そなたに警告するためじゃ」

イーメルがルカに近づく。

入り口近くで待機していた男が少し動いた。王女に何かあったらすぐにでも飛び出そうというのだろう。

そう言えば、あの男は以前ルカが城に連行された時にもイーメルの側に居た。あの時も、イーメルが人払いをして随分心配していたようだ。今も、この部屋にはその男とイーメル、そしてルカの三人しか居ない。男からすればルカは怪しい人族そのものだ。

イーメルがルカの胸に手を触れた。

少しずつ上下に動かす。

何をしてるんだ?

声が出なかった。イーメルが考えていることが分からない。警告するために来たと言っていた。何のことだろう。

「ふむ」

イーメルが呟いて、それからルカの首に掛かっている金属の鎖を思い切り引っ張った。

鎖が千切れて、イーメルの手の中に鎖に繋がったナイフが入った。

「このようなもの、どうする気じゃ?」

これを探してたのか。

ルカが凶器を持ってきたかどうか。

にしても、思いっきり引っ張らなくてもいいじゃないか。

千切れてしまった鎖。安物とは言え、ルカが手に入れるのは大変だった。ついでに、首の後ろが鎖で擦れて痛い。

「それは、その、護身用に……」
イーメルがナイフを鞘から出して見ていたが、ルカに付き返した。
「このようなもの、わらわらには傷一つ付けることができぬ。と言ってもそなたは納得せぬであろうから、そなたにその気があるのなら試してみるが良い。わらわでも、そこにいるオーヴィアでも」
「遠慮しとく」
ルカの狙いは王だけだ。イーメルの自信がどこから来るのかは分からないが、余計なことをしてここで捕まるつもりはなかった。
「では、そなたの思うようにせよ」
言って、イーメルが踵を返した。
オーヴィアはイーメルが部屋から出るまで見送ると、自分も退席した。
なんだ？　まるでお姫さんは、俺に王を攻撃させたいみたいだ。
ひとり部屋に残ったルカはナイフを手の中に握って考えていた。
イーメルの真意が掴めない。こんな小さなナイフでは何もできないと高をくくっているのだろうか。そもそもなぜ、王と会わせようとするのだろうか。
沢山の足音が部屋に近づいてきた。
仰々しく扉が開かれ、妖精族の男が入ってきた。
イレイヤ公――！
幼い頃に遠目に見ただけの男だが、その風貌は忘れはしない。目の真下から縦に入った右頬の傷。あの時はそこから血を流していた。
人族にない力を使って戦うことが多い妖精族は筋力を必要とせず、ほとんどが華奢だが、イレイヤ公は違った。がっしりした体躯は、それだけで威圧感がある。
王は既に普通の妖精族であれば寿命を迎えている年齢だというのに、まだ若若しかった。
「そなたか。わしに会いたがっている人族とは」
王になったイレイヤ公が、ルカを見下ろして言った。
感動とは違う。だがそれに近い感情がルカの中を渦巻く。

早くこの男を殺したい。
それは感動ではないが、喜びには違いなかった。殺せばルカは開放されるに違いない。仇を討たねばならないという、自分自身に課した責務から。
ずっと自分を見下してきた妖精族より、上に行ける。
不意に浮かぶ、別の思考。
違う。そうじゃない。
仇討ち以外の思考を追い払おうとする。
「そなたを見ると、十六年前を思い出す」
ヴォルテス王は言った。
「わしが現在のラグナダスを攻める際に、そなたによく似たハーフエルフの少年がおった」
ラグナダス地方にはルカの故郷テリグラン‐テリも含まれる。王が言う少年とは、ルカ本人のことだった。
「よく、十六年も前のことを覚えておいでですね」
ヴォルテス王は笑った。
「そなたら人族にとっての十六年は長いであろうが、わしらにとってはそなたらの一、二カ月前と同じような感覚じゃ。ふん、もっとも、あの時見たハーフエルフはエルフの顔をしておったがな」
「王よ、なぜその時その少年を殺さなかったのですか？　王はその町の住人を全て殺したのでしょうに、なぜその少年だけ」
そう、あのとき俺も死んでれば良かった。そうすれば、仇討ちなんかに縛られずに済んだ。
ルカは左の袖の中に隠していたナイフの柄を右手で掴んだ。
「わしにも多少の慈悲心というものがある」
王が答えた。
慈悲心だと？　あんたは俺を追い込んだ。それのどこが慈悲だというんだ。
「慈悲ではなく、甘さだった。王よ、町の皆の仇！」
ルカはナイフで王に切りかかった。

従者たちが王を守ろうとしたが、王はそれを止めた。
「そなたらの剣では、わしを傷つけることはできぬ」
王が言った。
その言葉の通りに、ルカは王を傷つけることができなかった。
剣を王に近づけただけで、剣がどろどろと溶けてしまったのだ。
剣は元の形をとどめていなかった。
お姫さんの言う通りだ。
ルカは王の従者に押さえ込まれた。
「そなたのような者も、この国にはようおるわ。だがわしに手を上げたのはそなたが初めてじゃ。勇気ある愚か者よ」
王はそのまま去って行った。
くそっ。
口の中で呟いて、ルカは自分を押さえ込んでいるエルフを見た。
人族から見れば、妖精族は皆同じ顔をしていると言う。種族によって目や髪の色が違うが、同じ種族だと人の目ではほとんど見分けられないのだそうだ。
だが、ルカはきちんと見分けることができた。妖精独特の美意識も、ルカには理解できた。
しかし、それでも、ルカは妖精族ではないという。
妖精族はルカを奴隷として扱い、今も、家畜を引っ張るように、ルカの手に鋼の枷をつけて引っ張っていく。
「本来ならば、最低五年の服役は免れないのだが、今日は目出度き日、大目に見るということだ。命拾いしたな、小僧」
ルカの手枷を外してエルフの男が言った。
王を殺そうとした者の刑期が最低五年とは短い気がするが、それだけ、王は誰からも殺されないという自信があるということだろうか。
「王にお伝え願いたい。いつか必ず町の皆の仇を討つ、と」
「考えておこう」
エルフの男は、ばかにしたような目をルカに向け言った。

辺りではきらびやかに飾り立てられた物、建物や車やエルフ、が王の再婚を祝って楽しげな音を立てていた。

形が変わってしまった形見のナイフをよく見ると、刃だけでなく、柄まで変形してしまっていた。柄頭の、イーメルが持つ指輪と左右逆の鳥の模様も、もう何がそこにあったのか分からない状態だった。

俺は何をしてるんだ。

両親の大事な形見を壊して、仇討ちにも失敗した。もう祭儀場に入る機会は無いだろうし、王の警護もさらに厳重になることだろう。

つうか、こんな力があるんなら先に教えてくれよな、お姫さん。

確かにイーメルは警告してくれたが、もう少し具体的に教えてくれればよかったのに、と思う。

まあ、言われても信じなかっただろうけど。

イーメルも言った。どうせ納得しないだろうと。その通りだ。仮に剣を溶かす力があると言われても、にわかには信じられないことだ。結局同じことをしていただろう。

ナイフを外套の内側に縫い付けられている小物入れに入れようとして、ルカはそこに別の物が入っているのに気付いた。来る時にはここにナイフを入れていたのだから、ルカの知らない物だ。

取り出してみると、それは金色の飾り櫛だった。櫛を彩る小花模様には花びら一枚一枚に宝石が埋め込まれている。

さっきお姫さんが入れたのか。

その豪華さといい、妖精族の貴族でもそうそうは手に入るものではないと思われた。

広い道に出ると、セイロンが言った通り沢山の店が出ていた。

ここは祭儀場の広間以上に騒がしい。

「まさか王様が再婚なさるなんてね」

エルフ女性の声が聞こえてきた。

「ええ。私は先にイーメル王女が結婚なさるものとばかり思ってましたのに」

こんな騒がしい中でも、集中すれば聞き取れる。これは妖精族の

能力だ。他の生き物も持つ何でもない能力だが、人族よりは優れている。

そうだ。お姫さん……姉ちゃんかもしれないんだ。

仇討ちは失敗したが、それだけでも確認したかった。

しかし、今さっき祭儀場から追い出されたばかりだ。イーメルが居る祭儀場へ入れるとは思えなかった。

今はまだ無理だ。でも今夜には。

このひとの多さ。昼間はパレードと披露宴だろうから、肝心の式は夜になると考えられた。そうなれば、多くの兵士が王の警護に当たる。式までは娘であるイーメルも出席するだろうが、その後は王と王妃が誓いの間で一夜を過ごす。ルカの知識と相違なければ、の話だが。その間、イーメルの警護は比較的手薄になるはずだった。

問題は、イーメルがどこに寝泊りするかだ。式が行われる祭儀場は城の近くなのだから、城に戻る可能性もある。だが城は造り自体が堅固だから、潜入は難しいだろう。

誓いの間の近くまで同行するとすれば、また話は別だ。

もっとも、誓いの間がカザートのどこに設置されているのかは、ルカは知らない。結婚する二人で共に歩むのが重要とかで、式場から離れていることが多いのだが。

妖精族なら知ってるか？

辺りを見回す。元々人族に比べて数の少ない妖精族だ。人族の波に隠れてしまってよく分からない。

露店に目をやる。

大体こういう店は、正規の手続きを得て出店しているわけではない。もちろん、正規の店もあるのだろうが、それに混ざってあくどい店が幅を利かせるのが常だ。

店の裏側から来た男と会話する店主が見えた。会話の内容まではさすがに聞き取れない。二人の表情から、近場に店を出した店主同士の会話とは思えなかった。明らかに、裏家業の表情だ。昔別の国で関わったことがあるから知っている。

彼らは自分の仕事に一定の誇りを持っているが、最も尊いのは金だと言うのが彼らの言い分だった。組織を牛耳る妖精族にとっては金は大事だったろうが、奴隷である人族は金を大量に持っていても使い道がない。だがゼロでは生活できない。それに顔を変えるのには金が必要だった。

嫌なこと思い出した。

ルカは溜息を吐いて一度通りから外れ、ひとが来なさそうな路地へ入った。ターバンを外して肩に掛けると、ルカは眼帯を左側にずらした。薄暗い路地だったが、眩しさに目を細める。ターバンを深く巻きなおし、耳も隠れるようにした。

妖精族特有の、大きな吊り上った目。詳しく調べればルカがハーフエルフであることはすぐにバレるだろうが、ちょっと見たくらいでは区別が付かないはずだ。

ルカはごく普通に、先程の店主の所へ歩いて行った。

表から、出している商品を眺める。この目なら、手術で交換した人族の目よりもよく見える。地面に敷いた布の上に置いてある商品の、小さな値札に書いてある値段も見えた。これでも、純粋な妖精族に比べると視力は弱い方だ。

「お、旦那、なかなかの目利きだね」

店主がルカに気付いて言う。

「今旦那が見てるそれ、なんとイーメル姫が使ってる物と同じ腕輪だよ」

別にルカは商品を見ていたわけではないから、どの腕輪のことだか分からなかった。

店主が足元の箱から腕輪を取り出してルカに見せる。それが展示してあるものと同じものかは怪しいものだ。

「何が姫と同じだ。姫はこんなもの持ってない」

適当に言ってみる。実際に見たことはないが、持っているかどうかまでは知らない。

「おや、旦那お詳しいですね。さては姫の親衛隊ですな？　それも

隊長クラスと見た」
　褒めているつもりだろうか？　そんなものの隊長と言われても嬉しくない。
　ただ、この男はルカを妖精族だと思い込んでいる。それが分かれば十分だった。
「そっちへ行くぞ」
「えっ、いやあの、裏側は整頓されておりませんので」
　店主が慌てて言う。見られたくないものを隠しているのだろうが、それこそ好都合だ。
　店と言っても結局は露店。店の周りを壁で囲ってあるわけでもないから、隣の露店との間を通って裏へ回った。
「なあ店主、ヴォルテス王の姫君が、今夜どこに泊まるのか知らないか？」
　小声で単刀直入に聞く。他人に聞かれることを恐れて暈して言っていたら、相手にも伝わらない可能性がある。この雑踏の中、わざわざ露天の店主と客との会話に耳を澄ますものは居ないはずだ。
「姫君って、イーメル姫のことですかい？　わたしらみたいな一般市民にはちょいと……」
　イーメルがルカの懐に忍ばせた櫛を取り出して店主に見せる。
「おお、これは良いものだ。いやね、わたしも知らないわけじゃないんですが」
　店主の言うことが全然違うのは、ルカを金持ちだと思ったからだ。あわよくば、この金の櫛を情報料として頂こうと頭が働いたのだろう。ルカの思った通りだ。
「今夜王様方はサーマ・ニーチェで過ごす。姫はその近くの王の別荘に居るはずだ」
「場所は？」
「ここから南へずっと行けばいい。サーマ・ニーチェは名前の通り月見用の施設だからな、周りに何もない砂漠の手前だ」
　ルカは店主に、セイロンに持たされた銀貨を渡した。

「ありがとう」
店主が銀貨が本物かどうか確認している。
「またのお越しを」
店主が顔を上げて言った。
イーメルの居場所は触れ回るほどの物ではないが、隠すほどの物でもないはずだ。その情報料は銀貨一枚でも多すぎるくらいだが、口止め料も入っている。勿体無いが、仕方なかった。
ルカの後ろから、パレードの先頭と思われる楽隊の音が聞こえてきた。それに気付いたひとたちが、ルカと逆の方向へ向かって我先にと走り出している。
楽しげな音色と人々の歓喜の声は、ルカにとっては仇討ちに失敗したことへの嘲りにしか聞こえなかった。

月の穴〔サーマ・ニーチェ〕は、その名の通り月のクレーターまで見えるという、貴族達専用の月見の施設だった。ただ月見の季節は決まっていて、それ以外では天文学の為に使われており、入り口は開放されているという。
普段は気楽に出入りできそうなサーマ・ニーチェも、今日はすごい数の兵士が入り口付近を巡回していて、部外者が立ち入ることはできなさそうだった。
その他の壁際や砂漠方面も、兵士が並んで立っている。
さすがに、もう一度王に挑戦するのは無理だった。
イーメルが泊まるという別荘はすぐに分かった。明らかに他の建物と様式も規模も違う。念のため、王の結婚式に参加する地方貴族を装って、近くの住民に聞いてみた。
「あの綺麗な建物は、誰の物ですか？」
「あれは我らがヴォルテス王の別荘ですよ。あなたも自慢していいですよ。我らの王は素晴らしい」
「ほう。三日かけてここまで来たかいがありました。この町も美しい」

「そうでしょう、そうでしょう。そうだ、一緒に飲みませんか。王の結婚を祝って」

男の申し出を丁寧に断って、ルカはイーメルが泊まる王の別荘を目指した。

それにしても大きな建物だ。いざというときに要塞にもなる城と違い、ただただ豪奢な佇まいだった。

門には門番が居る。正面から普通に入れるとは思えなかった。周りは高い塀で囲まれており、塀を越えるのも簡単にはいかないようだった。塀の壁には凸凹がなく、手や足を掛けられそうな場所が無い。

塀の周りを回って、上がれそうなところがないか探していると、隣の建物の塀とかなり近くなっている場所があった。そちらの塀は作りが大雑把で、何とか登れそうだった。

辺りにひとが居ないことを確認すると、ルカはそちらの塀をよじのぼった。

周りに人影は無い。塀の上に立つと、王の別荘が建っている方の庭に向かって跳んだ。

「って……」

塀の上から隣の塀の上に飛び移るという器用なことができればよかったが、残念ながらそんな技術は身に付けていない。それでも、なんとか怪我をせずに済んだようだ。着地の時に痛かった足首を回して、その他にも異常が無いことを確かめる。

次はイーメルの部屋を探さなければならない。

それはすぐに分かった。一部屋だけ、窓が開け放たれ複数の召使と思しき妖精族女性達が掃除をしていたからだ。ただしその部屋は二階だった。

ルカはイーメルに会いたいのだから、イーメルの方がルカに気付いて出てきてくれればそれが一番楽だ。屋内に侵入する必要はない。

丁度、二階の窓まで枝を伸ばす大きな木があった。

まだ掃除中だから、イーメルは到着していないのだろう。

あの木に登って、イーメルが部屋に入るのを待とう。
あの距離なら、木の枝を揺らせばイーメルが気付くと考えたのだ。
ルカは木に登ると、部屋からの光が当たらないように裏側に隠れた。木の陰から部屋を覗き見る。真っ白な毛足の長い絨毯が敷かれていて、壁も白く塗られていた。そこには砂漠の国という雰囲気は無く、まるで別世界のようだった。

日が沈み始めた。高い所にある間は動いている気配もないのに、沈み始めると早いものだ。
辺りは薄暗くなり、建物の表側とイーメルの部屋にだけ明るく火が灯っていた。
この様子では、この建物に泊まるのはイーメルだけのようである。ルカが思っていた以上に、イーメルの警護にあたる者は少ないようだ。
不意に、部屋の中から男の声がした。侍従の中には男も女も居るだろうから最初は気に留めていなかったが、それにしては、声がするだけで姿が見えない。
ルカは耳を澄ました。
「何にもないじゃないか」
「まあ待て。今にこの部屋の主が来る。俺の情報によれば金持ちの女らしいから、その女から金目の物くらい手に入るだろうよ」
「男より女の方が着飾ってるもんな」
「ああ、なるほど。疑って悪かったよ。でも、こっそり盗むならともかく、女を脅して奪うってのは可哀想じゃないか？」
「莫迦。今更そんな心配してどうする。妖精族なんざ、俺たちから奪うだけ奪っといて何にもしてくれやしないんだ。ここでどうなろうと、相手の自業自得ってことよ」
二人、三人……か。
声で人数を割り出す。喋っていない仲間も居るかもしれないが、あまり大人数ではないだろう。

それにしても、王の別荘に泥棒に入ろうだなんて、突拍子もないこと考えるもんだ。

見付からずに部屋に侵入できただけでも運が良い。しかしこの部屋に泊まるのはただの金持ちではない。この国の王女だ。侍従も多く連れ歩いているだろうし、訓練された兵士も居るだろう。仮に、他の兵士が皆王の警護に当たっていたとしても、あのオーヴィアという兵士だけは一緒に居るはずだ。

俺と居るよりお似合いだよな。

溜息を吐く。オーヴィアが妖精族の中でもそこそこ顔立ちが良いというのはルカにも分かるし、あの異常なまでに強い忠誠心はルカには真似できない。

足音が近づいてきて、ルカはそのことを考えるのをやめた。窓が開け放たれているからほとんどの音が聞こえてくる。

部屋の中でごちゃごちゃ話していた声もやんだ。

窓の正面に、部屋の入り口の扉がある。足音がそこで止まり、扉が開いてイーメルが入ってきた。後ろに侍女をひとり連れている。青い髪のエルフ女性だ。以前会った時は長槍を持っていて、侍女というよりは兵士という印象もあったが、今は何も持っていない。服装も前より煌びやかで、イーメルと一緒に王の結婚式に出席していたのだろうと思われた。

「今香油をお持ちいたしますので、先に湯浴みをしていてくださいませ」

侍女はそう言うと、イーメルを残して部屋を出て行った。

部屋にはイーメルと、最初から入っている怪しげな男達だけが残った。

何考えてるんだ、あの侍女。てかオーヴィアはどこ行ったんだよ。部屋の外か？　それなら良いけど、ああもう。

さすがに焦ってくる。

あ、でもお姫さんも力使えるし、泥棒のひとりやふたり大丈夫か。以前ルカを吹き飛ばした、妖精族特有の力。あれがあれば、いか

に非力な女性であれ、人族の男に負けたりはしない。
イーメルは招かれざる客が居ることに気付いていない様子で、髪を結い上げていた留め金を次々と外すと、隣の部屋へ移動した。
てことは、あっちが風呂か。
ルカの居る位置からはそちらの部屋の中は見えないが、流水が水面を叩く音が聞こえてきた。
人族が暖かい風呂に入る時は、大きな桶に水を入れ、沸かした湯をまえていく。しかし普通は風呂に入らず、何日かに一回川で汚れを落とすくらいだ。薪の数さえ制限されているのだから、すぐに捨てる風呂水を沸かすのに使うのは勿体無いのだ。セイロンの家では水道があって水はいつでも使えるが、基本的に湯ではなく冷水で体を洗う。
隣の部屋の窓ガラスが曇る。
当然、冷水が流れているのではなく、湯が直接出ているのだろう。肉体労働をしているのはどちらかといえば人族だ。暖かい風呂があるのならば、人族にこそそれを使う権利があるのではないか。
そんなことを考えているうちに、イーメルが戻ってきた。
まだ乾ききらない髪の毛から落ちる雫に、部屋の明かりが反射して光る。服装も、部屋に入った時の豪華な物ではなく白い簡素な物だが、こういう素朴なイーメルも良いと思う。
が、その様子をゆっくり見物することはできなかった。
部屋に入って髪を拭こうとしているイーメルに、男達が飛び掛ったのだ。
イーメルの姿は窓の下に隠れて見えなくなった。時折、男達の頭が見える。
「大人しくしろ」
男の声がする。
暫くして、イーメルの頭が見えた。立ち上がったのだ。口には布で猿轡をされている。
イーメルは扉の側にあった警鐘用の銅鑼を鳴らそうと、撥を手に

取った。
しかし追いかけてきた男の一人が、その撥をイーメルの手から奪い取る。次の瞬間、その男がイーメルの頭を撥で殴りつけた。
イーメル！
イーメルの体が沈み込む。妖精族に金属のナイフは効かない。だが木の撥での殴打なら普通に入ってしまう。
「は、ははっ」
イーメルを殴った男が笑い声を上げた。
木の上からでは、見ることはできてもイーメルを助けに行くことはできない。
倒れこんだイーメルを後ろから抱えた別の男が、やはり笑い声を上げた。
「なあ、よく見ろ。いい女だ」
木から下りようとしていたルカの耳に、男達の声が聞こえてきた。
「本当だ」
「妖精族っても、人族の女と変わらねえよ。なんだ、お前興味ありか？　なら先にやれよ。俺は――」
途中で木から飛び降り、ルカは入れるところが無いか探した。
あの会話で、あの恥知らずな侵入者達がイーメルに何をしようとしているのか想像することは容易だ。
考えたくも無かった。
進入した人族の男は三人。よく喋る男がリーダー格で、あと少し若いのと、イーメルを殴った男が居る。
しかしどこの窓も鍵が閉まっていた。表は明るく、おそらく門番が居るのだろうが、ルカがそこから入ろうとしたら先にルカが捕まってしまう。
石を拾って、窓に投げつけた。
音がして窓ガラスが割れる。これだけ広い建物だ。門番が音に気付いたとしても、ここまで来るのには少し時間が掛かる。むしろこの音に気付いて、別の誰かがイーメルに異変を知らせに行ってくれ

れば良いのだが。
屋敷内に入ったルカは、イーメルの部屋を目指して走り出した。
やけに広い屋敷で、ルカは二階に上がる階段を探すのに手間取った。それなのに誰ともすれ違っていない。
どんだけ手薄なんだよ、この建物は。
怒鳴りたくなるが、がまんして進む。
明かりが扉の隙間から漏れている部屋を見つけたときは、かなり時間が経っていた。
ものすごい後悔と、焦り、それから僅かな希望。
扉の前に誰もいないということは、オーヴィアが気付いて助けに入った可能性があるということ。
とにかく扉を開ける。
なんだ、これは。
ルカが考えていたのとは全く違う風景が、そこに展開されていた。
真っ白だった絨毯はほとんどが赤く染まっている。壁にも飛び散った血の跡。まだ乾いておらず下へ向かって流れている。
部屋の中には、イーメルがひとり、白い背中をルカに向けて絨毯の上に座っていた。
男達の姿が見えず、ルカは部屋の中を凝視した。
いや、居た。血まみれで、頭だけがそこに転がっていた。よく見ると、手や足、胴体がバラバラにそこら辺に散らばっている。数を合わせようという気にはなれなかった。
「お姫さん」
声を掛けると、イーメルがゆっくりと顔をルカの方へ向けた。
汚れの無い背中と違い、その顔は血にまみれていた。
ルカは部屋に入って、イーメルの正面に回った。イーメルの視線も、ルカを追って正面に向き直る。
露になった素肌は赤い血で染め上げられ、その血は肘や顎といった場所から滴り落ちて絨毯の上に血溜りを作っていた。

人にできることじゃない。
それだけは分かる。
じゃあ、これをやったのは、イーメルか？
嫌な予想だ。動悸が激しくなる。
「お姫さん、大丈夫か？　俺が分かるか？」
イーメルの前に座って、イーメルに話しかけた。
大きな目がルカの顔を見た。
突然イーメルが立ち上がった。
「何じゃ！　そなたもわらわを辱めに来たのか！」
言って、もつれる足で銅鑼を鳴らす為の撥を取りに行った。
「待て待て。今呼ばれたら困る。俺が悪者になっちまう」
イーメルの腕を掴んで、撥を取り上げて遠くへ投げる。
イーメルがその場に座り込んだ。
もう一度ルカの顔を見て、ほっとしたように溜息を吐いた。
「そなた、妖精族か」
そう言えば、人族の目を隠し、妖精族の目を見せていたのだった。
「いや、お姫さん。俺は妖精族じゃなくて」
イーメルが目を見開いた。
「『お姫さん』？　その言い方は、まさか……ルカ？　でもそなた妖精族であろう？」
ルカは眼帯を外した。
隠してあった人族の目が見える。右目に残った妖精族の目。手術で変えた人族の左目。
「ああ、俺がルカだ」
イーメルにはいずれ教えるつもりだった。自分がハーフエルフであること。探している姉がイーメルかもしれないこと。イレイヤ公に殺された父や母、町の人のこと。全部話すつもりだった。
そのつもりでここに来たのに、なんで。
「俺はハーフエルフだ」
「そんなことどうでもいい！」

イーメルが叫ぶ。
『どうでもいい』
それを平時に言ってくれれば、どんなに嬉しかっただろう。
「それより、わらわは一体どうしたのじゃ？　この者達はなぜ血を流しておる。死んでおるのか？　なぜ？」
イーメルがルカに縋り付く。
ルカの白い外套が、イーメルに付いた血で赤く染まった。
俺のせいだ。最初に気付いた時に、止めに入ってればよかったんだ。
「見てみろ」
床に散らばった人族の頭に、イーメルの視線を向けさせる。
「誰がやったんだ？　お姫さんがやったのか？　それとも、ここに他に誰かいたのか？」
責めたくなかった。悪いのはこの男達で、止めようとしなかったルカだ。けれど、ルカも何が起こったのか全てを見たわけではない。知っているのはイーメルだけなのだ。
「おお、そうじゃ。わらわがやった。この者たちが、わらわに乱暴しようとするから」
言って、イーメルが咳き込む。
何かを吐こうとしたようだったが、何も吐く物はなかった。ただ、血が混ざった唾が絨毯に落ちる。
イーメルの手の爪に、肉片が入っている。男を引っ掻いたのだろう。いくら妖精族の爪が鋭いとは言っても、それだけで体を引き千切ったりはできない。
あの力だ。物を吹き飛ばすだけではない。動きを封じたり、器用にやれば操ったりもできる。力が強ければ、引き千切ることもできるのだ。
「この者たちが悪いのじゃ。わらわは、ただ……怖くて……」
「お姫さんの力なら、ここまでしなくても男たちを懲らしめることができただろ。何もこんな……酷いことをしなくても」

吹き飛ばすだけで良かったはずだ。それから応援を呼べばいい。
殴られて、気付いたら見知らぬ男に囲まれていた。
普通の女性ならそれは怖いことだろう。だがイーメルは妖精族で、相手は人族だ。
「酷いこと……？　でも、それはこやつらが」
「だからと言って、お姫さんがこいつらの命を取って良いってことにはならないだろ」
この男達がやろうとしていたことは罪だ。例え未遂であったとしても許せることではない。だが、裁きを下すのがイーメルである必要はないし、殺してしまったら裁きにかけることもできないではないか。
イーメルがルカを見上げた。
「わらわは……なんてことを」
両の目から涙が流れ出す。死んだ男達を哀れんでの物か、自分の境遇を嘆いているのか、それとも別の理由があるのか、ルカには分からない。
「わらわは怖かったのじゃ。ここまでするつもりは無かった。でも、何をされるか分からなくて、怖くて……」
涙を流すイーメルを、ルカは静かに抱きしめた。
「もう良い。反省したなら良いんだ。責めるようなことばっか言って悪かった」
まだ乾き切っていない髪の毛を撫でる。
子どものようにしゃくり上げるイーメルを、ルカは長い間抱き締めていた。

「さて、じゃあお姫さんはもう一回風呂に入ってきな」
イーメルが落ち着いて来たので、ルカは言った。
イーメルが頷いて、ルカの側から離れた。
どうしたもんかな。
イーメルが隣の部屋へ行った後で、ルカは部屋を見回した。白い

絨毯も壁も血で汚れている。掃除をして、何も無かったことにするのは無理だ。イーメルが人族を殺したとしても罪に問われる可能性は低い。相手は奴隷だからだ。だが、殺された人族にも家族は居るだろう。家族からはもちろん、その友人たちや、下手をすればカザートの人族全てがイーメルを恨むようになるかもしれない。

泥棒に入った人族の男達に強姦されそうになった、と真実を言えば人族を敵に回すことはないだろうが、イーメルがそれをどうどうと言うとは思えない。『されそうになった』は『された』と同義に捉えられてしまうものだ。

実際にどうだったのかは、イーメルの言葉を信じるしかない。だから、これをやったのがイーメルではないことにしなければならない。

仲間割れ？　いや無理だ。殺し合ったんじゃここまでバラバラにはならない。誰か逃げたことにして……。それも無理だ。奴隷は全員国に登録されてる。数が足りなければすぐ分かる。

ルカが考えているうちに、イーメルが風呂から出てきた。

風呂から上がったばかりだというのに、イーメルの顔は青ざめていた。

「ルカ、……わらわは、どうすれば良い？」

これ以上イーメルを責めたくなかった。

「お姫さんは、王族の象徴みたいなもんだ」

ルカは言う。

形見のナイフは変形していたが、無理に引っ掻けば傷を付けることくらいはできる。

ルカはナイフを自分の手のひらに当てて、傷を付けた。

その手で、壁のまだ白い部分に手形を付けて行く。

「だから、証拠にちょっとくらい違和感あっても、きっと俺が犯人ってことで落ち着く。いいか、お姫さん。これは人族同士の争いだったんだ。んで、俺がこいつらをここまで追い詰めて、殺して、それから俺は窓から逃げた。そういうことにするんだ」

「そんな。そなたがわらわの罪を被る必要はない」
イーメルが言う。
ルカは自分の手のひらを見て、それからイーメルに言った。
「でももう、手形付けちまったもん」
ルカが笑って見せると、イーメルも固い表情のまま笑おうとした。
「じゃあな、お姫さん。あ、そうだ。一応俺の弁護頼むわ。まだ死にたくはない」
窓枠に手を掛けて、飛び降りる。
三人殺したことになれば、下手すれば死刑だ。もうイーメルとも会えないかもしれない。
それでも構わなかった。
自分が居なくなった後で、イーメルが彼女の思う通りの世界を作り上げれば良い。妖精族の女性が、誰の目も気にせず人族の子どもと遊んでいられるような、そんな世界を。

白い外套が血で赤く染まっていることを思い出して、途中でルカはターバンと外套を取って手に持って帰った。
家に帰るとセイロンとマギーが台所に居たが、挨拶するより先に、手に持っていた外套とターバンを火にくべた。
「おかえり、ルカ」
自分の背中に向かって、セイロンが言った。
白い外套に移った火が次第に大きくなり、やがて元が何であったかも分からなく程に黒く焦げていった。
ルカは火掻き棒でそれを突付いて、塊が残らないように崩し、元からあった燃えカスや灰に混ぜた。
こっちはこれで大丈夫だ。
それから、手の中に握ってきたナイフを水で洗い、ついでに自分の顔や手も洗った。
「ルカ？」
セイロンが尋ねた。

「ああ、ただいま」
寝室に入り、ナイフを枕の下に隠す。セイロンには全て見られているわけだが、それで良かった。少しすれば妖精族がルカを捕らえに来るはずで、その時にルカが証拠を隠滅しようとしていたことをセイロンが証言してくれれば都合が良いのだ。
「ルカ、マギーが話したいことがあるって」
「え、ああ」
頷いて、ルカは台所に戻った。
思い出した。
出かける前、ルカはマギーに酷いことを言ったのではなかっただろうか。急いでいたし、何を話したのかはっきりとは思い出せないが、それでマギーが怒っているのだろう。
テーブルを挟んでマギーの向かい側に座ったルカは、マギーが顔を上げた瞬間に言った。
「すまなかった、マギー」
「ごめんなさい」
同時に、マギーがルカに謝る。
「わたし、なんだかよく分からないけどおじさんに迷惑掛けて。さっきセイロンにも、分からないからって何しても良いってことじゃないって……言われて。ごめんなさい」
両手を膝の上で握り締めて、マギーが必死な表情で言う。
ルカは後ろに居るセイロンに目を遣った。
なんでマギーが謝るんだ？
声に出していないのだから、セイロンからその答えが聞けるわけがない。セイロンは憮然とした顔でルカを見ただけだった。
セイロンに助けを求めるのは諦めて、ルカはマギーに向き直った。
「いや、悪いのはこっちだ。色々焦ってて、その、何の話してたかもあんま思い出せないだけど、マギーが悲しくなるようなこと言ったんだよな。ごめんな」
マギーが悲しそうな顔のまま、少し口を開きかけた。

だがその口を閉じ、一度唾を飲み込んでからもう一度口を開いた。
「ううん。やっぱり、悪いのはわたしだと思うし、次から気を付けるね」
そう言って、微笑んだ。
笑ってる顔が一番だ。
ルカは思う。
マギーを難しい顔にさせたのは自分だ。お陰でセイロンも難しい顔になっている。彼らを困らせることがルカの目的ではないのに。
「じゃあ、わたし帰る」
マギーが満足したように言った。
「ひとりで行くのは危ないから、ルカが送って行ってあげて」
セイロンが言った。
俺、妖精族が捕まえに来るの待たないといけないんだけどな……。
思うが、仕方が無い。確かにマギーをこの時刻にひとりで羊飼いの村まで帰らせるわけにはいかない。
「わかった。マギー、家の近くまで送るよ。行こう」
ランプを手に取り、家を出る。
いつも子どもを送り届ける時と同じように、ルカはマギーと手を繋ごうと手を伸ばしたが、マギーは恥ずかしいのかルカの手を取らなかった。
もう子どもじゃないか。
ルカの肩の高さより大分身長の低いマギーと並んで歩きながら、ルカは笑う。
「何がおかしいの？　わたしを見て急に笑うなんて、失礼よ」
マギーが大人びた台詞を言う。
「ごめんごめん。別にマギーの顔が面白かったとかじゃないから、気にしないで」
向こうに見える人族の集落がまだ明るい。王の結婚式だったから、まだお祭り状態なのかもしれない。
「今日は一緒に行けなくて悪かったな。また今度誘ってくれよ」

ルカが言うと、マギーが満面の笑みで頷いた。
今度があれば。
今はルカを追って来た妖精族がセイロンの家に着いた頃だろうか。
せめてマギーを家まで送るくらいの時間は残っていて欲しかった。

5　竜の洞窟

半妖精（ハーフエルフ）。

辺りから囁き声が聞こえてくる。妖精族（エルフ）は、純粋な妖精族と、他の血が混ざった半妖精族の見分け方を知っていた。

半妖精――

その囁き（ささや）が、少年には非難の声に聞こえた。彼の存在自体を非難する声。

囁かれている内はまだいい。やがて、町の中心の方から役人が来て、少年を縛り上げ、ひどい罰を与えるのだから。

少年の体は、そうやって受けた傷で、すでに傷だらけだった。

「坊や、こんな所に居ると殺されちまうぞ」

『怪しい』と顔に書いたような妖精族の中年男が、少年に声を掛けた。

「構わない」

少年は答えた。

中年男はポカンとした。

その男に向かって、少年は顔に似合わない大声で言った。

「殺されたって構わない、って言ってんだよ！　さっさと失せろ」

少年は、呆気（あっけ）に取られて自分を見ている男を振り切って駆け出した。

――殺されたって構わない。どうして僕は半妖精に生まれたのかな。早く、誰か僕を殺してくれればいいのに。

「姉ちゃん、どこに居るの？」

少年は、曇った金色をしたナイフを見つめた。焼け跡から見つかった、ただ一つの両親の形見だった。

それを見ていると、少年は死んではいけない、という気持ちになった。

仇討ちをすることを、それは少年に囁いていた。

生きなくちゃいけない。姉ちゃんにも、もう一度会いたい。

＊＊＊

「はあ」

セイロンが溜息を吐きながら、髪を櫛で梳かしている。

溜息は朝から何度も聞いた。

「なんで僕も行かなきゃならないのかなぁ」

「そりゃ妹の友達の婚約式だからだろ」

部屋ですっかりくつろいでいるルカはセイロンに言った。

あの後、ルカは一度捕まった。だがイーメルの弁護のおかげか、死刑にはならなかった。代わりに、自宅で見張りを付けて半年の軟禁。それが決まってから五ヶ月の月日が過ぎていた。

今日はサラの婚約式なのだが、ルカはまだ刑期が終わっていないので行くことができない。

サラは結婚するにはまだ少し早い年齢だが、ルカが捕まったことで、サラの両親が、ルカと一緒に暮らしているセイロンと付き合うのを警戒したらしい。元々、女性の場合早いと十三歳くらいでも相手の家に入って一緒に暮らし始めるのだから、サラが今婚約しても何の不思議もないのだ。

「大体ルカが他人の罪を被ったりするからでしょ」

「やだなー、セイロン」

家の外には妖精族の見張りが一人居る。

「俺がやったのかもしれないだろ?」

セイロンがルカを一瞥して、また鏡に向き直った。

さっきから何が気に入らないのか、前髪ばかり何度も梳かしている。

「ルカが悪人なら、この世の中の他の人間は、皆それ以上の悪者だね」

やっと櫛を置いた。

「はあ。なんでサラちゃん……。なあ、ルカ。相手の男って僕よりハンサムかな？」
「そんなの何か関係あるのか？」
「いや、別に……」
力なく言って、セイロンは家の扉を開けた。
「じゃ、行ってくるよ。後はよろしく」
最初の言葉はルカに、後の『よろしく』は外に居た妖精族に言う。留守を頼むのにルカよりも頼りになるということだろう。
「気をつけて行って来いよ」
セイロンの背中に向かってルカが言うが、セイロンから返事は無かった。
セイロンが歩いて行って少し経ってから、外に居たエルフ男性が言った。
「大変なんだな、人族も。家とか何とか」
名前は……何だったろう。自分を見張る男の名前なんか知る必要はない。とにかくこの男は、見張りが暇なのか、何かにつけてルカに話しかけてくる。
「ええ、そうですね。結婚ってのは妖精族でも人族でも、家ごとの行事ですから」
暖かな部屋の中と違い、外は寒そうだ。
だが見張りの男はそれが仕事なのだから仕方ないだろう。
「今日は雨が降りそうだ」
男が空を見て言う。
「はあ。そうですねー」
セイロンは雨具を持って行っただろうか。多分持っていかなかっただろう。好きな女の他人との婚約式に参列し、帰りには雨に濡れて帰ってくる。最悪な状況だ。
もう少しセイロンが年を重ねていれば、サラの両親の言うことは気にせずに、サラを妻として迎え入れることができたかもしれない。けれどまだ十五歳では、さすがに無理だ。普通なら両親の元で安穏

と暮らしている年齢なのだから。
「こんにちは。ルカは居るかね？」
外で声がした。
「勿論（もちろん）です。どうぞ中へ」
ここは俺とセイロンの家だ。お前に勝手に扉を開ける権利は無い。と思うが仕方が無い。長いこと居るから、彼はこの家の門番のようになってしまっていた。
扉が開いて、ソルバーユが入ってきた。
「あれ、今日は回診の日だっけ」
何がどういうことなのかは分からないのだが、一週間に一度、ソルバーユがルカの診察に来る。診察と言っても何もしないわけだが、一応手のひらの傷の手当てと、右目の具合を診るということで来ているのだそうだ。外には妖精族の見張りが居るのだ。滅多なことは聞けなかった。
「全く。働かなくなって曜日の感覚もおかしくなったか？」
ソルバーユが言う。
扉は門番と化している見張りのエルフが外から閉じた。
「まずは手を見せろ」
自分で傷つけた左手をソルバーユに出す。もう傷跡さえ残っていない。元々深い傷ではなかったのだ。
ソルバーユがルカの手のひらに指で文字を書く。
言葉は外に居る見張りに聞かれる。だから聞かれたくないことはこうやって伝える。
「そう言えば、ネルヴァがラグナダスから帰ってきたぞ」
ソルバーユが言った。
「へぇ。結構長い間居たな」
「冬を越さずにすんでよかった、と言っていた」
「なるほど。まあ確かに、この辺に住んでると、あの寒さはきついだろうな」
「彼はたった一人の肉親だった母親を失って、やりきれない気持ち

だったろう」
　ネルヴァの母親が死んだという話は、ルカが軟禁されてすぐの回診のときにソルバーユから聞いた。
　ネルヴァは母親想いだった。
　その母親が貴族に殺されたのだという話は、ソルバーユがルカの手に書いた文字で知った。
『ネルヴァは仲間を集めている。妖精族はなるべく入れないようにしたいと言っていたがルカの意見も聞きたいそうだ』
　ルカは王を倒したい。ソルバーユも王を恨んでいる。奴隷である多くの人族が、今の制度を変えたいと望んでいる。
　ソルバーユは人族の診療もできる。それを利用して、王を倒すことに賛同する人々を集めた。そこに、ネルヴァと会って話していないから、なぜ彼が王を倒そうとする人族側に付いたのかは分からない。ただ、母親が殺されたことと関係があるのだということは想像が付いた。
「調子はどうだ？」
　ソルバーユが尋ねた。
「俺は妖精族じゃないんで、そんなすぐには良くならないんだ。だからって、変な薬を混ぜないでくれよ」
「わかった。今までどおりにしよう」
　ルカがソルバーユの手に文字を書くわけには行かない。見張りに見られたら面倒だからだ。その為、ルカが返事をしやすいような質問をソルバーユがして、それにルカが答えることで会話を成立させているのだ。
「純度が高い方が効きやすい」
　ソルバーユが呟く。
　雨が降り出した。
「雨具は持ってきたのか？」
　ルカが聞く。
「ああ。大丈夫だ」

ソルバーユが答えた。
外に居る見張りはずぶ濡れだろうが、家に入って温まってくれ、とは言えない。
「次は目だ」
ソルバーユが言う。
実際には目は見せない。見張りに見られると面倒だから。
目の診察をするという言葉は、伝えることはこれで終わり、ということだ。
雨が降り出したために、辺りは昼間だというのに随分と暗くなった。雷も聞こえ始めた。
「この季節の雨はよくない。すぐに川が氾濫する」
冬の雨。
一気に降って、一気に流れて行ってしまう。
ごとん。
雷鳴ではっきりとは聞こえなかったが、扉の横でそんな音がした。
ソルバーユも気付いて扉を振り返る。
「開けてくれ」
ルカはソルバーユと顔を見合わせ、それから家の扉を開けに行った。
扉の前には黒い頭巾の付いた外套を身に付けた小柄なひとが立っていた。見張りの妖精族は、扉の横でのびている。
「何しに来たんだ、お姫さん」
ルカは突然の来客に向かって言った。
イーメルは頭巾を取ると軽く頭を降って雨を払った。
「逃げてきたのじゃ」
「は？　ああ、まあいいや。とにかく中に入れよ。今日は家の相方は居ないんだ。よかった。相方が居たら大騒ぎしてたとこだ」
イーメルが着てきた外套は雨に濡れ、裾は膝の高さまで水が染み込んでいる。頭巾も完全に色が変わっていたし、肩も酷く濡れていた。このまま外に立たせていては風邪をひいてしまうかもしれない。

「邪魔するぞ」
イーメルが言って家に入った。
ルカが振り返ると、ソルバーユとイーメルが顔を見合わせて、妙な空間ができていた。
ソルバーユはまさかイーメルが来るとは思っていなかっただろうし、イーメルもソルバーユが居るとは思っていなかったのだろう。
「これは驚いた。姫君がいらっしゃるとは」
「わらわがどこに居ようと、わらわの勝手じゃ」
「なあ、お姫さん、そのままじゃ寒いだろ。外套はこっちで乾かすことにして、暖炉の前に座りなよ」
なんとなく、イーメルとソルバーユの仲が悪いような気がして、ルカは口を挟んだ。
イーメルが黒い外套をルカに渡して、ルカが出した椅子に腰掛ける。
外套を入り口近くの出っ張りに引っ掛けて、ルカが元の席に戻った。
「私はこれで、と言いたい所だが、姫が仕事を増やしたようだからな。もう暫く居させて貰うよ」
ソルバーユが言いながら、持ってきた鞄を弄った。中から注射器と何かの薬品を取り出して注射器に入れる。
ソルバーユは外でのびていたエルフの男を中に引っ張り込んだ。
「このまま外に出して死なれたら困るだろう。ベッドを借りるぞ」
男をベッドに寝かせ、注射を打つ。
「何の注射だ?」
「睡眠剤だ。害はない。十二時間くらい眠ってもらおう」
「ルカ」
台所に居るイーメルがルカを呼んだ。
「行ってやれ。私はこの男の状態を少し確認してから戻る」
ソルバーユに言われて、ルカは台所に戻った。
「何だ?」

「寒い」
そりゃ寒かろう。外套があれだけ濡れていたのだ。その下の服まで濡れていた。
「何か暖かい飲み物をくれ」
「は？」
勝手に押し掛けてきたくせに、何でそんなに偉そうなんだ。
思ったが、イーメルが睨み付けるので、言わずにおいた。
山羊乳を温める。
温まったので、カップに注いだ。ついでに、自分の分とソルバーユの分も入れる。
振り返ると、イーメルが暖炉に向かって座っているのが見えた。
小さな背中だ。
簡単に抱きすくめられそうだ。
そう思って、一人で赤面する。
姉ちゃんかもしれないひとだぞ。
自分に言い聞かせて、それからイーメルに声を掛けた。
「ミルク温まったけど、飲む？」
カップをひとつ、イーメルに渡す。
「ありがとう」
イーメルが礼を言った。
なんかこういうのって嬉しいな。
豪奢な城や屋敷ではなく、ルカの家に居るイーメル。二人で話したり、食事をしたり。
カップがひとつ残っているのを思い出した。
隣の部屋のソルバーユにも渡す。
二人だけじゃなかったんだった。
「で、何しに来たんだ？」
ルカの妄想ではもっとほのぼのとした会話をしているはずだが、そうも行かない。イーメルはカザートの王女だ。こんな罪人の所に来るべきではない。

「うむ。逃げてきたのだ」
「何かあったのか？」
イーメルの様子からは、焦りや恐怖といった類の物は感じられない。逃げなければならないような緊急事態が発生しているとは思えなかった。それでも、多少心配になって聞いてみる。
「……皆、あの事件を起こしたのがわらわだと知っておる。それなのに、皆知らん顔して通り過ぎていく。わらわは忘れておらぬのに、皆過去のことにしようとしている」
イーメルが言った。
当たり前のことだ。表向きには、屋敷に侵入した人族三人を殺したのはルカということになっている。気付いていても、自分達の王女がやったと言う部下が居るわけがない。
「だからって、ここに逃げて来たんじゃ、俺の苦労が水の泡になっちまうだろ」
イーメルが何事もなかったかのように生活を続ける為に、ルカはその罪を被った。今までそれを後悔したことはない。
「すまぬ。それでもわらわはそなたに謝りたかったのじゃ。わらわのせいで、こんな不自由な生活を強いられて」
「いや、そんなことないよ。そもそも奴隷ってのは不自由なもんだ。仕事に行くか、仕事に行けないかだけの違い。そりゃ仕事できないからその分給与もないけどさ、お姫さんのおかげで配給は止められなかったし、こうしてちゃんと生きてる」
暖炉を見ていたイーメルが、体ごとルカの方へ向けた。
「すまなかった。本当に。何て言ったらいいのか分からない。わらわのせいじゃ」
「謝られても困る。俺は自分が思ったようにやっただけだから。な、もう気にすんな」
イーメルがルカから顔を背けた。また暖炉を見つめる。
「お姫さん、もう帰るんだ。黙って出てきたんだろ？　城では皆がお姫さんを探してる。ここに居ると知れたら、俺にとっても拙(まず)いこ

とになるのは分かるだろ」
ルカが言ってから暫くの間、イーメルは変わらず暖炉を見ていたが、やがて立ち上がった。
「わかっておる。邪魔したな」
言って、扉の横に掛けてあった外套を羽織った。
「そうだ。その見張りの男、明日には代わりの者を使わす」
そう言って、雨の中を走って行った。
見張りが気絶していたのでは話にならないだろうから、明日には交代ということになるのだろう。
ソルバーユが台所に戻ってきた。
「容態は安定している」
「病気じゃないだろ」
「後頭部に鋭い一撃を食らって気絶したんだ。まったく、大人しい姫君かと思っていたらとんだじゃじゃ馬だ」
ソルバーユが溜息混じりに言った。
それから、机に肘を付いてルカに言った。
「君のことが気になっていたようだね」
「そりゃお姫さんが現場の第一発見者だからな」
「全部聞こえていたよ」
すぐ隣の部屋に居たのだ。いくら外が雨だったと言っても聞こえて当然だった。
「元々セイロンやマギーに色々言われてね。君は絶対にそんなことはしないから、真犯人を見つけてくれと。それで診察と偽ってここに来たのだよ」
「余計なことはすんなよ。どうせあと一ヶ月で自由の身だ」
「わかっているよ。しかし、君が妖精族の姫と懇意の仲だったとはね。いささか期待外れだ」
ソルバーユは王に激しい恨みを持つ者として、ルカに目を付けた。
ルカを代表にして同じ思いを持つ人族を集め、反乱を起こす為だ。
「何の期待だ。大体、王が悪くても姫には関係ないと言ってたのは

あんただろ」
「まあね」
あっさりと頷く。ソルバーユの考えは、ルカには掴みかねるところがあった。
「だが、今人族を纏めようという時に、姫と関わっているのが知れたらまずい」
「まずくはない。俺たちはイーメルを利用できるんだ。その為に親しいふりをしていたと、もし疑われたら言えばいい」
自分でも酷いことを言っていると思う。だが実際に使うかどうかは別としても利用できそうなのは事実だし、嘘も方便だ。
ルカにとっては、
「俺はお姫さんとの関わりを切りたくない」
それだけのことだった。せめて、姉かどうか分かるまでは。
さっきは時間もなさそうだったから早く帰してしまったが、刑期が終わったらいつかちゃんと話したいと思っている。
「そんなに彼女のことが好きか」
ソルバーユが尋ねた。
「違っ、……そうじゃない」
ソルバーユにはそんな風に見えたのだろうか。ルカがイーメルを好きだと。
嫌いじゃない。でも姉ちゃんかもしれない。姉ちゃんかも知れないひとを、どう好きになればいいんだ。
「お姫さんは、俺の姉かもしれないんだ」
ソルバーユが驚いた顔をした。顎に付いていた手を離し、少ししてからまた顎に手を付いた。
「君にはきょうだいは居ないはずだが」
ソルバーユの言葉の調子はいつも通りだったが、ルカは驚いた。
「何で居ないって分かるんだ」
さも知っているかのような口ぶり。
そうだ。再会した時から、ソルバーユは俺のことを何でも見通し

ていた。王に仇討ちしようとしていることも。
「あんたは俺の何だ？　俺が仇討ちする為に手を貸してくれるのは有難い。でもやっぱおかしいよ。あんたは妖精族だ。人族が支配する世界になんて興味もないだろ」
「ふぅ。ではネルヴァが協力するのはなぜだと思う？　彼も別に人族が支配する世界を望むわけじゃない。今の世界が変わることを望んでるんだ。どうなるかはやってみなければ分からない。それでも、今のままではいけない。そう思うから変えようとするんだよ」
　言っていることには納得するしかなかった。こうしたい、という明確な未来予想があるのではなく、今を変えたいという気持ちで動いても、何も悪いことではないのだ。
「あんたも、それだけか？　今を変えたいだけか？」
　他にも何か隠している。
　ひとの心は複雑過ぎてなかなか分からない。特に、この男の場合は。
「君の母親の名前は、セレンじゃなかったか？　緑色の髪に青い眼の、背の低い女だ」
　急にソルバーユが言った。
　勿論、母親の名前をソルバーユに教えたことはない。それどころか、カザートに来てからは一度も口にしたことが無い名前だった。
「何であんたがそれを知ってる」
「それは、君の母親のセレンが私の娘だからだよ」
　初めて聞く話だ。そんなこと考えたこともなかった。ソルバーユが自分の祖父だなんて。
「でも俺は、手術の時まであんたのことなんか知らなかったんだぞ」
　既に百歳を超えている母の父親が生きているとは思っていなかったし、母から話を聞いた覚えもない。
「色々あって、娘と別々に暮らしていたのだよ」
　それを言うと、ソルバーユはそう答えた。
「私と妻はどうにも反りが合わなくてね、娘が生まれて暫くしてか

ら離婚したんだ。ふむ、秘密にしていてはどうも話がうまく進まないな」

ソルバーユが決まり悪そうに頭を掻いた。そんな普通の仕草をするのを珍しいと感じる。

「離婚の原因は、私が昔人族の女性と付き合っていたことだった。私の父は厳格で、私が人族と結婚することを許さなかった。今思えば当たり前のことだがね。私は父が勝手に決めた相手と結婚することになったのだ。その時は彼女が別れたいと言っていたと聞かされたよ。話が逸れたな。とにかく、私はその人族の女性と別れて、妻と結婚し、娘も授かった。だが後になって、彼女は別れたかったのではなく、父に説得されて仕方なく身を引いたと分かった。彼女は自殺していたよ。それから妻の色々なところが気に入らなくなって、別れることになった」

ルカと視線を合わせないようにしながらソルバーユが話す。いつもの彼らしくない、とルカは思った。

「娘の方は元気に成長していたんだが、十六の時だ。家出をしてしまって、行方知れずになった。娘は、自分が私と人族との間に生まれた子どもだと思ってしまったのだよ。昔のことを知っている誰かが、娘に要らぬことを教えてしまったのだろうが。君には分かるだろう。ハーフエルフが妖精族の間でどのように思われているか。私は数年かけてやっと娘の居場所を突き止めた。妖精族と人族が、半妖精族と一緒に平和に暮らしている町だったよ。別に娘を連れ戻そうとは思わなかった。その時には娘はもう成人していたし、連れ戻した所でいずれ私の手を離れるのだからね。その後娘はその町の人族と結婚し、君が生まれた」

ソルバーユが言った。

長い話だ。ソルバーユの作り話とは思えなかった。

「嘘だろ……？」

「嘘じゃない。そうでなければ、私が君のことをこんなに知っているわけがないだろう」

「じゃあ、何で今まで黙ってた」
「知らなくても良いことだったろう。大体、あのテリグラン＝テリの戦いで死んだものと思ってたし、最初に君に会った時は本人だとは思わなかった」
「いつ分かったんだ。俺が、あんたの孫だと」
「最初からなんとなく、もしかしたら、とは思っていた。それで部下に後を付けさせて、色々調べた。君は聞かれれば誰にでも答えていたじゃないか。自分の父母の名を」
あまりにも昔のことでいちいち思い出せないが、確かに誰にでも教えていた。既に死んだのだから、言ってどうなるものでもないと思ったからだ。それに、名前を出すことで、ルカのことが姉に伝わる可能性もあった。
「さて。これで私が君の祖父だということと、私が君に協力する理由が分かってもらえたかな？」
単純に人族が妖精族に勝っても、ソルバーユに得は無い。確かに彼の思いは晴れるかもしれないが。だがもし、ルカが代表になって妖精族を倒したのならば話は別だ。彼は思いを晴らすだけでなく、孫をカザートの代表に据えることさえできるのだ。
「んなこと、急に言われて信じられるわけないだろ。大体、姉ちゃんもまだ分からないのに」
「その『姉ちゃん』が問題だ。私は娘の近くに部下を送って、常に様子を見守っていたが、子どもは君ひとりだった」
ルカはソルバーユの顔を凝視した。色々調べて知っているはずのソルバーユが、ユディトのことを知らないとは思えない。
「そんなわけないだろ。家族四人で一緒に暮らしてたんだぜ？」
「いや。私の部下が直接セレンに聞いたから間違いないはずだ。子どもは男の子一人だけだと」
「親父の連れ子だったとか」
思い付いて言ってみる。母親の連れ子でないのなら、父親の連れ子だろうと思ったのだ。

「君は知らないようだからひとつ教えてやろう。妖精族の髪と瞳の色は、父親から受け継ぐのだよ。君の黒髪と黒眼は父親の物だろう？　だったら、イーメルの父親は君の父親ではない。第一、人族はそんなに長生きしない」

「あっ……」

当たり前だ。イーメルは百四十歳を超えている。人族である父がそれほど長く生きているわけがないのだ。そもそも、よく考えればイーメルは純エルフであって、半妖精族ではない。

「つまり、イーメルは君の姉ではない」

ソルバーユの言うとおりだ。イーメルは姉ではない。

だったら、ユディトは誰なんだ？　違う。俺に姉が居ないのなら、ユディトも姉じゃないんだ。多分、一緒に暮らしていただけのひとってことだろう。だったら、やっぱりユディトはイーメルなんじゃないか？

「……仮に、イーメルがテリグラン＝テリで君の姉として生活していたとしても、君と血の繋がりはないんだ。彼女に拘るのはやめた方がいい」

ソルバーユが言う。

だがルカはそれに頷くことはできなかった。

「血の繋がりよりも、俺がイーメルと会ったことの方が大事だ」

ユディトを姉として慕っていた。

イーメルを……。

ソルバーユが眉間に皺を寄せて、困った顔を作って言った。

「もし、彼女が王に味方すると言ったらどうするつもりだ」

「そんなこと、その時になったら考える」

今から決めることはできない。まだルカの気持ちも揺らいでいた。

「今から考えておくんだ。そうでなくても、現時点で王女と関わるのは歓迎できないのだから」

ソルバーユがルカに言った。

「そうだ。せっかく見張りも居ないのだから、今のうちに話してお

こう」
　ソルバーユが言った。
　先程までの話とは内容が変わるのだろう。
「君が王に剣を向けたことは、私たちの間では有名だ」
「あんたが言いふらしたんだろ」
　ルカが言うと、ソルバーユが首を竦めて見せた。
「だが、君がそれに失敗したお陰で、妖精族には刃物が効かないということも皆知っている」
「ああ。妖精族は普通に刃物を扱えるのに、それで妖精族を切ろうとしたら溶けちまう」
「正確には刃物ではなく、金属だ。私たちは金属を変形させる力を持っている。それが剣のように危険な物であれば、私たちの意志とは無関係に形を歪ませ、自分に無害な物にしてしまう」
　ルカは机に突っ伏した。
「それ先に教えてくれよ。知ってれば、形見のナイフあんなにならなかったのに」
　もう首には掛けていない。普段は家の隅のルカの荷物置き場に置いてある。
　歪んだナイフは草をむしる時くらいにしか役に立たなかった。
「まさか知らないとは思わなかったからね」
　人族なら知らないかもしれないが、ルカは半妖精族だ。ルカ自身にもその力があったとしても不思議ではないくらいだ。もっとも、ルカが受け継いだ妖精族らしい所と言えば、目と耳くらいのものだ。人族よりも細かな音が聞き分けられ、妖精族の文字をわずかに読むことができる。だが物を吹き飛ばすような特殊能力はないし、金属を溶かすこともできない。不老長寿なのかどうかは、まだ分からないが。
「でも棍棒で殴れば死ぬだろ。毒も効くだろうし」
「妖精族は人族よりも自然治癒力が高いからな、相当思い切り殴らなければ死なないぞ。毒も同じだ。大抵の物は死に至ることなく解

毒されてしまう」
　医者に言われては信じるしかない。
「でも、前の王妃は毒で死んだことにしたんじゃねえのか？」
「だから、大勢の医者が集められたのだよ。権威のある者がこぞって『毒で死んだ』と言えば、知らない者はそれを信じるしかないからね」
「それじゃ、打つ手無しじゃねえか」
　大勢で囲んで殴打すれば死ぬかもしれないが、それではただの弱い者いじめになってしまう。
「君はディガーを知っているか？」
「竜を？　物語でなら聞いたこともあるけど、見たこともないし、見たってひとにも会ったことがない」
「では、ディガー・ソードの伝説は知っているか？」
　聞き覚えがあった。ディガー・ソード。一振りで百の妖精族を倒せるという竜の剣だ。確かネルヴァが、竜の洞窟にあると言っていた。だがそれはソルバーユも言った通り『伝説』に過ぎない。それで王を倒せとでも言うのだろうか。
「あんたがそんな眉唾な話を持ちかけてくるとはな」
　ソルバーユが笑った。
「確かに嘘のような話だが、その刃が竜の牙でできているということなら、君も一振りで百を信じるか？」
　物語の竜は、妖精族の天敵だ。物語りで大抵は正義の妖精族に邪悪な竜が倒される。なぜ天敵なのかというと、竜の持つ血液に、妖精族を死に至らしめる毒があるからしい。
　ルカがどうにも納得できない顔をしていると、ソルバーユが言った。
「それは実際に数百年前、妖精族同士が争った時に使われた。あまりにも危険なので、それを作った賢者がそれを封印した。その場所が竜の洞窟というわけだ」
「あんたが実際にその場面を見たわけじゃないんだろ」

「封印されている場所までの地図を書いてやろう」
ルカの言葉を無視してソルバーユが言う。
いや、ルカへの返事でもあったのだろう。封印されている場所を知っているということは、その剣が作り話ではなく、実在するということだ。
「何で知ってるんだ」
羊皮紙に地図を描いているソルバーユにルカは尋ねた。
「私の祖父から直接聞いたのでね。うん、君の高祖父だ。私も実際に見に行ったから間違いはない。祖父は実際にディガー・ソードを作った賢者の供だったそうだ」
「そんな最近の話なのか？　その剣が出来たのは」
いくら妖精族が長命とは言え、子と親との年齢差は平均して百年といったところだろう。ソルバーユの祖父の時代はざっと二、三百年前ということになる。人族からすればそれでも十分昔ではあるが。
「五百年余り昔の話だな。そのくらいでないと、伝説にはならないだろう」
ルカが考えていた倍近くだ。
「あんた、一体何歳なんだ？」
「二百四十歳だ。驚いたかね？」
驚くに決まっている。妖精族が長命というのは知っている。それでも二百歳を越えるのは相当良い生活をしている王族くらいのもので、普通の妖精族は長くて百八十歳くらいまでがせいぜいだろう。
「代々長生きな家系のようだ。君も期待していて良いよ」
いや、そこまで長生きしなくても良いから。
声には出さずに、笑ってごまかす。
ソルバーユが人族を長命にしようとしていた理由が、一瞬分かったような気がした。
「これが竜の洞窟の中の地図だ」
言って、ソルバーユが羊皮紙を渡す。
「中では磁石も使えない。地図はどの道を進めば良いかだけ書いて

ある。一度でも違った道に入ったら戻れないと思え」
「いや、俺まだ取ってくるって言ってないんだけど」
「行くんだ。私は君以外に任せるつもりはない」
真剣な眼差し。
王を倒せる武器だ。手に入れておいて損はない。伝説に過ぎないと思っていたが、ソルバーユを信じるならば、それは本物だ。
「わかった」
ルカは答えた。

一ヶ月が過ぎ、ルカの半年に渡る刑期は無事に終わった。
何事も無かったかのように馬屋の仕事に戻って、「久しぶりだな」などとサルムと会話をした。
ルカが居ない間にすっかり昔のように汚れてしまった馬屋を見て、ルカが唸る。
後ろで見ていたサルムが笑った。
「戻ってきたときに何の仕事もないのも悪いかと思って」
「ありがとよ」
ルカはさっそく水を汲みに出かけた。
サルムも水桶を持って後を付いて来る。
「珍しいな。手伝ってくれるのか」
隣に来たサルムが言った。
「今日、ネルヴァ様がここに来る。表向きにはパロス総督に馬屋での仕事について助言をするってことになってるが、ルカに計画について話したいそうだ」
それだけ言うと、サルムは水桶をルカに渡して戻っていってしまった。
なるほど。サルムも仲間ってことか。
水桶を二つ持って、ルカは思った。
王を倒す計画はルカが代表になっているが、ほとんどをソルバーユが進めている。自由に出歩くことができなかったルカは、何人の

仲間が居て、話がどう進んでいるのかはまだ把握しきれていない状況だった。
午後になってネルヴァが来たという知らせがあった。
午後は馬屋の見回りが仕事だ。パロスの目を盗んで会うには都合が良かった。
「ルカ、久しぶりだな」
あらかじめ決めておいた見回り場所をうろうろしていると、驚くほどどうどうとネルヴァに声を掛けられた。
「お袋さんのことは残念だったな」
会ったら最初に言おうと思っていたことだった。
本当は、話題に出すのも心苦しいくらいだ。だが何も言わないわけにもいかない。
「ああ。そうだな……」
ネルヴァの表情があまりにも悲しげで、同じように親を殺されたにも関わらず、もう怒りしか残っていない自分が惨めに思えた。
「手短に話す。こちらの手勢は現在五百。城に居る妖精族よりも多いが、力の差を考えると人数的にはまだ少ない。だが今の時点で懐を広げすぎるとボロが出る。お前が竜の剣を手に入れた後、実行の時になったら住民を扇動して数を増やす。いや、混乱させるだけでいい。王都の貴族どもが敵の数にならなければ、それだけでも随分楽になるはずだ」
淡々と話すネルヴァを見ていると、自分も冷静になってくる。
「扇動はうまく行くのか？」
「不安材料はばら撒いている。いつでも芽を出させることができる。ただ」
「ただ？」
「反乱に参加しない女性や子ども達はどうする。人族の中には、反乱に参加しないのであれば敵とみなすとまで言う過激派も居る」
ルカは溜息を吐いた。
意見の衝突は覚悟していたが、まさかそんなことまで話さなけれ

ばならないとは。
「王側に付いて俺達を攻撃してこない限り敵ではない。無駄な殺生はするなと伝えておいてくれ。ただそれだけのことだ。機会があるなら、俺が直接言ってやる。……いや、なるべく早く機会を作ってくれ」
「わかった」
誰を敵とし、誰を味方とするか。それは基本的なことであり、重要なことだ。この反乱の目的は、王を倒してこの国を人族にとってよりよい国にすることだ。間違っても人族を傷つけてはいけない。人族を傷つけるようでは、目的に反することになる。
また、それ以前に、余計な人殺しは避けなければいけない。死者が多いことが大勝利というわけではないのだ。
そんな当たり前のこと。
また心が焦る。自分は今まで名ばかりの代表で、実際は何もできなかった。これからは人々を纏めなければならない。
政権を掴むのにどれだけのひとが死ぬのかは予想も付かないが、王を倒して政権も得られるなら互いの被害は最小限に済むのだ。
ルカは、王を倒せればそれで良かった。
王を倒す為に人々を利用する。代わりに、政権を掴む為に人々はルカを利用すれば良い。
「今度、お前に時間を作る。その時に竜の洞穴へ向かうんだ」
ネルヴァが言った。
「よろしく頼む」
ルカが言うと、ネルヴァはその場から離れた。

仕事が終わって畑に行ってみたが、イーメルも子ども達も居なかった。自分が出られない間、イーメルは子ども達を送る役を誰にも頼まなかったのだろうか。それで、遊ぶのをやめたのだろうか。
もうあの光景を見られないのかと思うと、少し残念に思った。

二週間程経って、ルカはパロスに呼ばれて数日間、別の馬屋で研修をすることになった。

最初はいきなり何だろうと思っていたが、どうやらこれが、ネルヴァが言っていた『時間を作る』為の工作だったらしい。パロスと会ったのはその辞令を受けた時だけで、以降は研修をする別の馬屋で働いているという人族の男がルカを案内した。

男は名前をジージルドと言い、実際にカザートの他の馬屋で働いているとのことだった。

「うちの馬屋に着く頃にはソルバーユ様もいらっしゃってるはずです」

ジージルドが自己紹介の後唐突に言った。

仲間だ。

初めて会ったが、ジージルドはルカをじろじろ見たりといったこともない。ルカは片目を隠しているから、初めて会うと興味深げに見られるのが常だったが、気に留めないとは珍しい。年齢はルカよりも若そうだ。

「こんなこと言っても意味ないかもしれないけど」

足早に歩きながらジージルドが言った。

「俺はあんたと同じで、故郷をカザート軍に滅ぼされたんだ。仲間の中には、単に今の仕事が嫌だからってだけで反乱軍に加わるのも居る。でも俺は違うってことだけ、覚えておいてくれ」

「本当に意味がないな」

ルカが言うと、ジージルドは少し拍子抜けした顔をした。ジージルドにとって話で聞いただけではあるが、ルカがリーダーだ。自分のことを売り込んで損は無いはずだった。

「これは王を倒して妖精族の支配を止めさせることが目的の戦いだ。俺やお前が偉くなる為じゃない」

「そっか。そうだよな」

本当に分かったのだろうか。人の心の中までは分からないから、言葉を信じるしかなかった。

半日ほど歩いて、ジージルドが普段働いている馬屋に着いた。
「こいつはメリロード。カラドス地方にある馬屋で働いてる」
ソルバーユに会う前に、別の人族の男を紹介された。
カラドス地方はカザートの南方の地域だ。黒髪に黒目で日に焼けた肌、体格もルカと似ていた。
「ルカさんの代わりにここで働くことになった、メリロードです。よろしく」
握手を交わす。
「この服を着て、外に出てください。右隣の建物でソルバーユ様がお待ちです」
メリロードに渡された服は白い服、つまり平民の外出着だった。雨の日に使う頭巾も付いている。
ジージルドとルカの物に似せた眼帯を着けたメリロードは、二人で出て行った。
ルカはメリロードに渡された服に着替えると、建物から出た。言われた通り右側の建物に入る。これで待っているのがソルバーユでなかったら大事だが、ちゃんとソルバーユが居た。
「ちゃんと頭巾を被れ。人族だと分かると面倒だ」
「ああ、わかったよ。妖精族に扮した方がいいか？」
「仲間に見られると面倒だ。それはやめておけ」
なるほど、と思って眼帯をずらすのはやめた。
仲間には、ルカは人族だと思わせておいた方が良い。ソルバーユは、ルカが人族か妖精族かを一言も言わずに仲間を集めていたらしい。もし聞かれたら真実を教えるしかないが、今の所聞かれたこともないそうだ。妖精族を倒したがるのは人族だと、誰もが思っているのだろう。
二人は馬に乗って出発した。
「ソルバーユ、あんたも一緒に来てくれるのか？」
「だったら君に地図を渡したりしないさ」
その通りだ、と思う。

「私が一緒に行けるのは都を出るまでだ。次の仕事が押してるてね。すぐに戻らなければならない」
「そうか。残念だ」
「こっちだ」
都の真ん中を、人通りの少ない道を選んで馬に乗ったまま駆ける。
「見付かったらどうすんだ？」
「私は急患が出て急いでいる。君は私の助手だからね」
「なるほど」
言った直後に、ルカ達は警備兵に呼び止められた。いや、警備兵ではない。イーメルの護衛官オーヴィアだ。
ってことは……。
その後ろからイーメルが侍女を数人連れて現れた。
ソルバーユに目をやると、さすがのソルバーユもオーヴィアと顔を合わせ、気まずそうな表情をしていた。
「往来の真ん中を馬で疾走とは、いかがされた」
「すまないな。急患が出て急いでいたのでね」
頭巾を取ってソルバーユが言う。
「これは、ソルバーユ殿でしたか。引き止めてすまなかった」
あっさり抜けられそうだ、と思った時、イーメルが口を挟んだ。
「その後ろの者は？　そなたの助手のトキメ殿ではないようだが」
イーメルが言った。
そりゃトキメさんと比べたら俺背高いしな。ていうか性別違うだろ。
「彼はあたらしい助手です。トキメにばかり苦労を掛けておりましたので」
「そなたはそんな優しい男ではなかろう」
イーメルがルカを見て、口の端を上げた。
ばれてるのか？
頭巾を被っているから、ルカだと分かったとは思えない。だが口元は見えているのだから、分かってしまう可能性もある。

「オーヴィア、そなたすまぬが先に城に戻って『予定より遅くなる』と伝えてはくれぬか」
「はっ」
オーヴィアは理由も聞かず、イーメルの指示にしたがって踵を返した。
イーメルが後ろについている侍女達を振り返る。
「そなた達はわらわの代わりに、頼んでいたものを買って、城に戻ってくれ。わらわはソルバーユ殿に尋ねたいことがあったのじゃ」
オーヴィアと違い、侍女たちはお互いに顔を見合わせていた。王女をひとりにしたくないのだろう。
「私がお供いたします」
青い髪の侍女が言う。
イーメルは首を横に振った。
「すまぬが、個人的なことじゃ。あまり聞かれたくない」
困った顔をしていたが、ついに侍女も頭を下げ、ルカ達から離れて先へ行った。
ばれてる。絶対ばれてるって。
何とかならないかとソルバーユを見るが、ソルバーユはいつも通り難しそうな顔をしているだけだった。
「どこへ行くのじゃ」
イーメルがルカの方を向いて言う。
「患者の所です」
ソルバーユが答える。
「そなたには聞いておらぬ」
言われて、ソルバーユは諦めたように溜息を吐いた。
「ここでは人目があります。誰がどこで聞いているかも分からない。患者の情報は他人には知られたくありません」
言って、イーメルの腕を引っ張って自分の後ろに乗せた。
「えっ？」
一応馬の背に跨ったイーメルだったが、急なことに驚いているよ

うだった。
「こっちだ」
ソルバーユがイーメルを乗せたまま、馬を走らせる。
ルカもそれに続いた。
少し走ると町の中ではなく、砂漠へ出た。
「中を行った方が早いんだがな。仕方ない」
馬の歩みをすこし緩めて、砂漠を進み始める。ルカも並んだ。
「なんだ。そっちがよかったか？」
ソルバーユが後ろをちらっと見て、それからルカに言う。
イーメルは手綱を持つわけにも行かないからソルバーユにしがみ付いていたが、ソルバーユの言葉に手を緩めた。
「いや、別に」
ルカが言う。
「うるさい」
イーメルが言った。それから、丸めていた背を伸ばして、隣を馬で歩くルカを見た。
「それで、どこへ行こうとしていたのじゃ。言わぬのであれば、そなたらを王女誘拐で訴えるぞ」
「ああもう。ソルバーユ、言っていいか？　面倒だ」
何も言わなければ、いつまで経ってもイーメルの追跡を逃れられない。嘘でもいいから適当な行き先を言えばそれで良いのだ。
ソルバーユが頷いたのを見て、ルカは言った。
「カラドスに行くんだ」
竜の洞窟とは全く関係のない地名だ。出発直前に聞いたので頭に残っていた。
「カラドス？　南か。こっちは北だが」
「追っ手をまく為です」
ソルバーユがしれっとした顔で言っている。
「追っ手？」
「あなたの部下達ですよ。ああしなければ、付いて来ていたでしょ

う」
「ああ、そうか」
納得してくれたようだ。
「……それを信じろと？」
全然納得していなかった。
「侍女達は徒歩じゃ。どっちへ行っても馬なのだから追いつきはしない。言う気がないのなら仕方ない」
イーメルが言う。
「わらわも一緒に行く」
ソルバーユはその場でイーメルを馬から下ろした。
「無茶を言わないでください。カラドスは相当遠くですよ。一日二日で戻ってこられる距離ではありません」
「それでも行く」
「いい加減にしてください。私たちの邪魔をして、あなたに何の得があるのです？」
「わらわを連れて行かねば、そなたらを王女誘拐の罪で訴える。わらわを連れて行かねば、そなたらが大いに損をすると思うが？」
何を言っても無駄だ。それだけは分かった。
ルカはソルバーユに言った。
「もう良いよ。連れて行こう」
ソルバーユが馬から下りた。
「ではこの馬をお使いください」
イーメルに手綱を渡す。
イーメルは馬に乗ると、ソルバーユに軽く頭を下げた。
「感謝する」
ソルバーユに見送られて、ルカとイーメルは砂漠を走り出した。
「なんで俺だと分かったんだ」
イーメルに聞く。
「すぐに分かった。体格とか……動作とか？」
最後が疑問系だ。

イーメルにもはっきりとした確証は無かったのかもしれない。
「なあお姫さん、一緒に来てもらうけど、これから起こることや見ること、誰にも言うなよ」
「わかった」
イーメルが短く答えた。
三日かかって、ルカ達は竜の洞窟がある山に辿り着いた。北へ随分来たから、砂漠地帯も抜けた。テリグラン＝テリに近いのかと言われるとそうでもない。テリグラン＝テリは山脈の中だから、まだかなり遠いのだ。
竜の洞窟は鍾乳洞だそうだ。今や観光名所となっている為、付近には小規模な集落が出来ていた。とは言え、この冬の寒い季節にわざわざ北方のこの辺りに来る観光客は居ないようで、誰ともすれ違っていない。
「ここは……ダイゴラス・トーチスか」
イーメルが言う。
「ああ」
ソルバーユと別れてから、イーメルは一度も『どこへ行くのか』とルカに聞いていない。
今更隠しても仕様がないので、ルカは素直に答えた。
「では、そなたはディガー・ソードを探しておるのだな」
「そうだ」
以前ソルバーユに言われたことが頭を過ぎる。イーメルが王に付くと言ったらどうするのだ、と。
まだわからなかった。考えたくなかった。
「ディガー・ソード、竜の剣か……。確か、竜の牙だか鱗だかで出来ているとかいう。普通の剣では歯が立たぬから、それを手に入れようというのだな」
「そうだ」
イーメルは反対するだろうか。もしはっきりと反対されたら、ルカはイーメルを敵とみなすしかなくなってしまう。

反対される前に、イーメルを追い返してしまおう。
思って、ルカはイーメルを振り返った。
「お姫さ――」
「わらわも行くぞ」
ルカの言葉は言い出しで遮られた。
イーメルが笑う。
「竜の剣、妖精族は触れるだけで死ぬという。危険な物であるが故に、それを造った賢者はこの鍾乳洞の奥にそれを隠し、その前に『真実を試す鏡』を置いて侵入者を阻むと聞く。面白いではないか。そなたがかの剣を手にすることができるかどうか」
『真実を試す鏡』？　そんな話は聞いていない。
ソルバーユが、道を間違えると戻れないと言っていたが、それと何か関係があるのだろうか。
「なんだ、その鏡って」
「なんじゃ、知らぬのか。それも含めて観光名所だというのに」
「いや、今そんな観光とかほのぼのした話してるわけじゃないから」
「見れば分かる」
イーメルが言って、ルカの腕を引き、洞窟に入った。
「見るがよい」
洞窟の中に入ったというのに、外に居るのと変わらず明るい。
ルカは辺りを見渡して、言葉を失った。
壁一面に、ルカ達の姿が映っている。それはお互いに反射し合って、幾重にも重なって見えた。
「鏡？」
明るいのは、外の光を反射している部分がどこかにあるからなのだろう。
「の、ような物じゃ。岩壁の表面を流れる水分に、こういう効果があるらしい。毒らしいからな。妖精族なら長いこと居ても良いが、人族なら半日も持たぬであろう」
イーメルの話を聞きながら、ルカは天井を見上げた。鏡は天井ま

でアーチ状に埋め尽くしていた。
地面を見ると、所々に反射する水が流れて糸のような水路を作ってはいるが、基本的には普通の土のようだった。
ルカはソルバーユに描いてもらった地図を広げた。自分の先に繋がる道と地図を見比べようとするが、自分達の姿を映す鏡が見えるだけで何も分からなかった。
そういう場合は片手を壁に付けて歩けば良いのだろうが、先程イーメルから毒だと言われたばかりだ。触ることはできない。
地面は分かるから、それを頼りに進むことにした。
「お姫さん、ついて来てくれ」
ルカは歩き出した。
地図を頼りに、足元を見ながら進む。壁を見ると惑わされそうだった。現に、何度かイーメルとはぐれ掛けたのだ。声を出せばなんとなく位置が分かって合流することができたが、狭い通路では反響も凄い。いつもうまくいくとは思えなかった。
何度目かの角を曲がった後だ。
「ルカ、どこじゃ？」
イーメルの声が聞こえてきた。
またはぐれたのか。
思って、後ろを振り返る。先程まで鏡に映っていたはずのイーメルの姿が、どこにも映っていなかった。
「お姫さん、こっちだ」
鏡の隅にイーメルが映る。
ホッとしたのも束の間、イーメルの姿は鏡から消えた。
「お姫さん？」
「ルカ」
イーメルの声が先程より遠くから聞こえる。
何やってんだ。
ルカは道を戻った。だがイーメルの姿は見当たらない。
別の道に行ったのか？

地図を見る。だがソルバーユの地図は、通るべき道しか示されておらず、他の道については分岐点が分かるだけでその先までは分からなかった。

「お姫さん、もしどうしても道が分からなくなったら、壁に手を付いてずっと歩くんだ。それで駄目なら逆の手で同じことをやれ。いいな！」

「わかっておる」

ルカが迷っても同じことはできない。

ルカは元の道へ戻って先に進むことにした。

「ルカ」

「なんだ」

随分遠い。

「今水を止める」

そう聞こえた気がした。

水を止めるというのが何のことか分からず、ルカは黙っていた。

暫くすると、鏡のようになっていた壁面が次第に普通の岩肌を見せ始めた。暗くなり始めて、ルカは急いで持ってきたランプに火を灯した。

「さっきの道まで戻ってくれぬか。わらわも一緒に行く」

「わかった。今行く」

イーメルが一緒に行くと言っているのだ。ここまで付いて来たくらいなのだから、この先も駄目だと行っても来るだろう。迷われたら大変だ。

地図を確認しながら、先程イーメルとはぐれた場所まで戻った。

「どうじゃ。わらわを連れてきて良かったであろ？」

イーメルがルカを見て言った。

とりあえず無事だったのでほっとする。

「無事でよかったよ。鏡って止められるんだ？」

すっかり普通の岩肌になった壁を見ながら、ルカがイーメルに言った。

「でなければ、危険すぎて観光名所にならぬであろ？　最初はそのような仕掛けは無かったのだが、竜の剣を探す輩が後を絶たぬのでな、五十年程前に取り付けたそうじゃ」

ああ知ってたのか。だったら先に言ってくれ。

自分の調べ方が足りなかったのだとは思うが、イーメルをかなり心配してしまった分、頭が痛くなった。

「行こう」

気持ちを切り替えて、ルカはまた歩き出した。

壁が鏡面でなければ、歩く速度にだけ気をつけていればはぐれる可能性は低い。

「つうか、なんであれが『真実を試す鏡』なんだ？　鏡には違いないけど」

「さあな。わらわも聞いただけで、実際に見るのは初めてだったし」

見るのが初めてということは、ここに来るのも初めてということだろうか。それで聞いたことを頼りに水を止めに行くとは、危険だと思わなかったのだろうか。

まあ俺も似たようなもんか。

竜の剣のことをほとんど知らずに、ソルバーユから聞いた話だけを頼りに取りに行こうとしているのだから。

「こっちだ」

地図が描かれている一番端に着いた。

が、その先には何もなかった。地面も。

「うわあぁぁああ」

「ルカ！」

イーメルが自分に向かって手を伸ばしているのが見えた。既に落ちているルカに手が届く訳が無い。

大きな音がして、イーメルは目を閉じた。

ルカが穴の底に落ちたのだ。時間としてはルカが落ちてから一瞬だったが、音は遠くから聞こえて来た。

「ルカ、大丈夫か？」

声を掛けるが、返事がない。
イーメルは穴の淵に手を掛けて、降り始めた。
だが、少し降りた所で手を掛けていた部分が欠け、イーメルも下へ落ちていった。

ルカは一瞬気を失っていたようであった。
気付いてすぐに辺りを見渡すが、暗闇が広がるばかりだった。手に持っていたランプは落ちた時に割れてしまったようだ。油の臭いがした。
「お姫さん」
上を見上げて声を掛ける。
返事は無かった。
それほど高いところから落ちたとは思えなかった。背中は痛いがそれだけで、怪我はしていない。
ソルバーユが描いた地図はここが終点だった。であれば、竜の剣はここのどこかにあるはずだった。
鏡の水を止めなければここも明るかったのかもしれないが、それをとやかく考えていても仕方ない。
地面にランプが割れたガラスの破片が散らばっているのが僅かに見えた。
ルカは両手で壁を確かめながら立ち上がり、壁に沿って歩き出した。
――よくここまで来たな、半妖精族の若者よ。
唐突に声が聞こえて来た。
何だ？　どこから聞こえてる？
周りを見ても闇が広がるばかりだ。それに、声はどこかから聞こえたというより、直接ルカの中に聞こえて来た、と表現した方がしっくりくるような声だった。
――我が名はクレイシステレス。若者よ、汝の名は？
危険か？　それとも助けか？

判断が付かなかった。姿は見えないし、声も直接心に響いているようで不気味だ。

名前くらいは言っても害もないだろう。相手は俺が半妖精族だってことも知ってるみたいだしな。

ルカは思って言った。

「俺はルカだ」

――ではルカ、汝に問おう。汝は竜の剣を求める者か。

どう答える？　ただの観光客だと言った方がいいのか？　でもこいつは、俺の正体を既に知っている。誤魔化しても意味がないか。

「そうだ」

――ルカよ、汝はこれから起こる試練に打ち勝たねばならぬ。

何を言ってるんだ？

ルカを試すというのだろうか。どうやって？

「は？　どういう意味だよ、おっさん」

――『おっさん』ではない。クレイシステレスじゃ。

怒った声で言われて、ルカは驚いた。

今までの厳格な雰囲気はなんだったんだ。『おっさん』呼ばわりされて怒るなんて、まるで普通のひとじゃねえか。

「試練って何だ」

――そなたが竜の剣を持つにふさわしいものか、試させてもらう。

「そういうのは試練じゃなくて試験って言うんだ」

――……。

クレイシステレスが黙ってしまった。

と、突然周りが明るく開けた。

「うわっ」

足元に何もなく、宙に浮いた状態になったルカは焦って足掻いた。だがその場でぐるぐる回っただけで、動くことはなかった。確かに宙に浮いているが、上にも下にも、右にも左にも行くことはできなかった。その場に留まっていて落ちることもない。

ルカは足元に広がる草原に目をやった。

カザートとも、テリグラン＝テリとも異なる、どこまでも続く緑の草原。

左右から軍隊が迫ってきて、ルカの真下で二つの軍隊はぶつかった。

人族も居るが、戦っているのは主に妖精族のようだった。

緑色の髪のエルフの男が、剣を持って前に出た。

剣を横に払うと、それに触れた相手方の妖精族が掻き消えた。

なんだ？　あれが、竜の剣？

一振りで百の妖精族を倒す。今見ているのが真実の歴史だとすれば、それも真実なのかもしれない。

相手の軍勢は次第に数を減らしていった。

足元には両方の軍勢の死体がどちらとも付かず転がっている。そんな中で、竜の剣を持ったエルフが果敢に相手に切りかかっていた。

相手は何もせぬうちに竜の剣に触れて消えていく。

何で、泣いてるんだ。

敵を討って意気揚々としているのであれば分かりやすい。だが男は涙を流していた。

ルカの目からも涙が流れる。

なんで、こんなに人が死んでるのに、まだ戦いを止めないんだ。

ルカの思いと、男の思いが同じかどうかは分からない。だが、二人とも涙を流していた。

『もうやめよう』

大方の敵が居なくなって、男が言った。

敵の中に居た一人のエルフが前に歩み出た。彼が敵の将であることはなんとなく分かる。

『私を切ってください』

竜の剣を持つ男と同じ、緑の髪。

兄弟？

別の軍に属しているのだから、兄弟ではないかもしれない。けれど、近い親族なのだろう。

竜の剣を持った男は、踵を返して戦闘を行っている丘から降りていった。

『クレイス！』

敵の将が叫ぶ。

呼び止められたのは、ルカだった。

自分の手の中に、先程まで男が持っていた竜の剣がある。

ルカは丘の下から、敵の将を見上げていた。

俺はクレイスじゃねえ。

言おうと思ったが、声が出なかった。

「くそっ」

ルカが思ったこととは無関係に、ルカの口から声が出て、足が勝手に丘の麓に広がる森へ向かって動きだす。

逃げるのか？　あの男を生かしていても、他の誰かに殺されちまう。

ルカは立ち止まった。自分の意思で立ち止まったのか、それともクレイスがここで実際に立ち止まったのか、分からない。

敵の将が馬に乗ったまま丘を駆け下りてきた。

竜の剣は使うな。あいつを殺したら駄目だ。

よく分からないが、敵の将とクレイスは親しい間柄なのだろう。

それで、クレイスは殺さずに逃げようとしていた。

敵の将が槍を持って迫ってくる。

突然、ルカは自分の意思で動けるようになった。

「やばい」

馬の突進を避ける。

「クレイス！　なぜ逃げるんです。あなたを戦場に呼んだのは私です。私を殺して、自由になりなさい」

意味はよくわからない。ただ、この男を殺したくなかった。

よく見ると、片目は潰れていた。それはかなり古い傷のようで、妖精族でそこまでの傷を負っているのは珍しいだろうと思えた。

「俺はお前を殺さない！」

ルカは言った。
男が自分に向かって突き出した槍を避け、その槍の柄を掴んで男を馬から落とす。
「その飾りだけくれよ」
馬から落ちて混乱している男の兜についた飾りだけを、持っていた別の短刀で切り取ると、ルカはそれを馬に乗せ、馬の尻を叩いて、馬を戦場の中心へむかって走らせた。
「殺せと言ったはずです」
「いや、殺さない。俺はあんたに生きてて欲しいんだ」
ルカは男の手を取った。
ソルバーユに似てる。目付きが悪いところなんてそっくりだ。
不意に、またルカの意思とは無関係に走り出す。
気付くと、最初のように空から見下ろしていた。ただ、男が持っていたはずの竜の剣だけ、ルカの手の中に残っていた。

急降下するような感覚があって、ルカは下の暗い洞窟の中に戻っていた。
手の中の竜の剣が、どこからか射してきた光を反射して輝く。
――よく試練に打ち勝った。出口へ案内しよう。
クレイシステレスと名乗った声が言う。
「なるほど。あんたが、竜の剣を作ったクレイスってことか」
おそらくは愛称か何かなのだろうと、ルカは思った。
――我はその者達に作られた鏡。
声が言った。
鏡。
映していたのは、竜の剣を作った者の真実だったのかもしれない。
光が射す方へ、ルカは歩いていった。

穴の中に落ちたイーメルは、暫くしてから気付いた。
薄暗いが、イーメルの眼には近くの様子なら見えていた。

「ルカ？」
呼んでみるが、返事がない。
近くに居る様子もない。
イーメルが気を失っている間に、どこかへ行ってしまったのだろうか。
――我が名はクレイシステレス。汝の名は。
声が直接聞こえて来て、イーメルは立ち止まった。
「わらわらはカザート王女イーメル」
クレイシステレスとは、竜の剣を作った賢者の名前と同じだ。
幻聴か？
思ったが、どうやらそうではないようだ。声がまた言った。
――それは汝の真実の名ではない。名を答えよ。
「何を言うか。わらわはイーメルじゃ。それ以外の名などない」
イーメルは声から逃げるように、駆け出した。
どこかにルカが居るはずだ。
こんな所でひとりにしないでくれ。
――汝の名は？
声はイーメルを追ってきた。
「しつこい！　全て破壊するぞ！」
手を壁に向かって伸ばして、力を伝える。
壁の一部が崩れた。
――……。
何度も名を問いかけてきた声が黙った。心なしか、溜息が聞こえたような気がする。
――汝の真実の名は、汝の失われた記憶にある。
記憶？　母上が亡くなった時からの記憶のことか。わらわが何も思い出せない。その間わらわはずっとカザートに居たのではないのか？
「ユディト……？　ルカが、言っていた」
姉を探していると。その姉の名がユディトだと。そしてイーメル

は自分の姉ではないかと。
――ではユディト。汝は竜の剣を求めるものか。
クレイシステレスの質問がようやく変わった。
「違う」
自分はユディトなのだろうか？
クレイシステレスは真実を知っているような気がする。イーメルが忘れてしまったことも。
――ならばよかろう。我が試練に打ち勝てば、出口へ案内しよう。
「余計なお世話じゃ」
言った途端、周りの風景が変わった。
粗末な木造の家の中だった。
「姉ちゃん、俺のおもちゃどこやった？」
黒い髪の小さな男の子が、イーメルに話しかけてきた。妖精族の姿をしているが、なんとなく妖精族でないと感じる。
そなたなぞ知らぬ。
言おうとしたが、声が出なかった。
「ルカが遊んでばかりだから、子犬さんも疲れたって。ルカが母さんのお手伝いして晩御飯が終わったら、またルカと遊びに出て来るわよ」
自分の意思とは無関係に言葉が出る。
子犬さん、と自分が言った物のことは分かる。この男の子の父親が作ったブリキのおもちゃだ。母親の手伝いをせずに遊んでばかりだから、男の子のお気に入りのおもちゃを自分が部屋の隅の物の陰に隠した。
なぜそんなことを知っておる。
何も覚えていない。でも分かる。ここがどこで、家の中の住人が誰なのか。
「ユディト、ルカ」
「ほら、母さんが呼んでる。今日はルカの好きなシチューなのよ。お手伝いしなかったら、ルカの分は人参だけになっちゃうかも」

「じゃあ、手伝う」
しぶしぶとルカが歩き出した。
イーメルもその後を追った。
台所では、母親が野菜を切っていた。ルカに玉葱を渡して、皮を剥くように言っている。イーメルもルカの側で皮剥きをした。玉葱を剥くのに刃物を使うわけでもないし、危険はないだろうが念のためだ。
皮が剥けた玉葱を母親に渡すと、母親はルカの頭を撫でて言った。
「ちゃんとお手伝いしてくれたわね。偉い偉い。またお手伝いしてね」
「うん」
笑顔で頷く、ルカ。
「ユディトはもうちょっと手伝ってね」
ルカの母親は緑色の髪に、青い瞳の、綺麗な妖精族女性だ。
父親は、今はまだ仕事場から帰って来ていないが、黒髪黒眼の人族男性だった。イーメルはこの二人にとても感謝していた。
何も覚えていない。なぜ感謝していたのかも分からない。
ある日イーメルは、母親から銀色の指輪を渡された。結婚前に夫に貰ったものだという。そんな大事なものを良いのかと聞いたら、
「あなたはわたしの娘だから」
と言って微笑んだ。
平和に時が過ぎていく。
駄目じゃ。このままでは、あの日に……。
今のイーメルは知っている。このままの速度で時が進めば、すぐにあの日が来る。
テリグラン一テリが父に滅ぼされた日が。
逃げろ。
しかしイーメルの口は開かない。単に記憶をなぞっているだけなのだろうか。イーメルには何もできないのだろうか。
辺り一面が炎に包まれて、やっとイーメルは自分の意思で動ける

ようになった。
「ルカ」
小さな弟の名を呼ぶ。
実際にイーメルはルカを連れてこの炎から逃れたのだ。今も同じことができるはずだった。
ルカの泣き声が聞こえて、そちらへ向かう。
ルカを抱きとめても泣き止まない。ルカの見ている炎の向こうに、母親が居た。
「母さん！」
あの日は気付かなかった。ルカを助けるので精一杯だった。
ルカを連れて一旦家から外に出る。
「ルカ、あっちへ向かって走るのじゃ」
あの日、燃える町を二人で見下ろした崖を指差す。
「姉ちゃんは」
「わらわは、母さんを助けるから」
「ねえ、なんでそんな偉い人みたいな喋り方なの？」
「わらわは、本当は……」
涙が出てきた。
わらわがこの町に居たせいで、この町は滅ぼされた。
ルカの背を押して走らせる。
自分は家に戻った。
なんで。なんで？　こんなことをして王になって、何の意味がある？
炎の中の母親の影へ向かって、イーメルは手を伸ばした。
「今、助けるから」
「駄目よ、あなたは逃げて」
「でも」
優しいひとだった。
母を殺した父に、イーメルは追放された。真実は、イーメルに死んで欲しかったのだろう。森の中に置き去りにされた。諦めかけて

いたところをこの夫婦に拾ってもらって、娘として世話をしてくれた。

「貴女が死んで、わらわが残っても仕方ないのじゃ」

この先に起こることを、イーメルは知っている。

あの日、結局イーメルは、ルカを残して父の元に戻ることを選んだ。これ以上の破壊をさせない為に。けれど、父はイーメルを取り戻したかったのではない。単なる口実に過ぎなかったのだから、何も変わらなかった。

小さなルカには母親が必要だ。

親を失うなんて、こんな酷い、悲しい思いをさせるのはもう嫌だ。

これが夢であるならば、せめて夢の中でだけでも。

「姉ちゃん」

後ろからルカの声がした。

「ルカ！　危ないから、来るな」

「ユディト、貴女はルカを守って。お願い」

炎の塊が、母親の上に落ちた。

なんで？　彼らは何も悪くないのに。悪いのは全てわらわの父なのに。

「姉ちゃん、危ないよ」

ルカに子どもとは思えない力で引っ張られて、イーメルは燃える建物から外に出た。

涙が止まらない。

「離せ！　まだ間に合うかもしれない」

ルカを振り切って前へ出たが、足がもつれてその場に転ぶ。

家族が暮らしていた家が、音を立てて崩れた。イーメルの大事な二人を飲み込んだまま。

炎は崩れ落ちる周りの建物から溢れるように広がっていた。

このままここに居たら危険だということは分かる。

「ルカ、逃げろ」

もう一度、ルカの背を押した。

「姉ちゃんも一緒に」
「嫌じゃ。わらわはここに残る」
助けられないのなら。
現実になど戻りたくない。戻っても、ルカに恨まれるだけじゃ。
このまま、ここで二人の後を追おう。
目を閉じ、死を覚悟する。
火の粉が飛び、イーメルの服に火が燃え移った。
「しっかりしろ、お姫さん」
ルカの声、だがそれは幼いルカではなく、今のルカだった。
イーメルは目を開けた。
「よかった」
ルカがほっとした表情でイーメルを見下ろしていた。
ルカに支えられて、イーメルは立ち上がった。
服の裾が焼け焦げている。
「幻覚ではなかったのか」
「よく分かんねえけど、急に燃え出して。まあ、無事ならいいや」
ルカが笑顔で言っている。
あの小さなルカが、立派になったものじゃ。
イーメルの助けがなければ生き残ることができない程小さかった男の子が、今はイーメルを助けられるくらいまで成長した。
戻ってきて良かったのだろうか、と思う。ルカもイーメルのせいで町が滅んだという真実を知れば、イーメルを嫌うだろう。今はまだ、姉かもしれないと思っているのだろうから。

洞窟の中には違いないが、四方の壁には鏡のようになる水が流れており、どこからか入ってくる光を反射して明るかった。
「お姫さん、俺、竜の剣を手に入れたよ。試練とかあったけど、なんか良く分からないうちに終わったみたいだし」
ルカはイーメルに一振りの剣を見せた。白い刃にイーメルの顔が映る。

「そうか。よかったな」
イーメルが笑顔を作って言った。
その後、イーメルが竜の剣を指差した。
「ルカ、その剣の力を試してみたいとは思わぬか？」
「ん？　まあな。でもだからって妖精族を切ってみるってわけにもいかないだろ」
イーメルが真っ直ぐにルカを見た。
なんだ？
イーメルの瞳は青く澄んでいて綺麗だ。だが嫌な感じがした。
イーメルが言った。
「わらわで試すが良い。そなたの町が滅ぶに至った原因は、わらわなのだから」
嫌だ、とすぐに返すことができなかった。
王に味方されると面倒だ。
イーメルがテリグラン＝テリに居たから、攻め込まれる機会を作った。
イーメルも王と同じ、復讐すべき相手なのかもしれない。
「町の皆の無念、よう分かっておる。わらわは死んでも構わぬ。そなたに切られるのであれば構わぬ」
そうだ。町のみんなは、イーメルの父親であるイレイヤ公に殺された。原因を作ったのは、勝手に町に入り込んでいたイーメルだ。
みんなわけも分からず殺されて、無念だったろう。
竜の剣を持つ手に、力を込める。
でも。
イーメルも何も知らなかったのだ。彼女を殺せば、町の人の無念は晴れるかもしれない。だがそれでは。
俺が納得できない。
イーメルがルカの姉でなくても、家族として暮らしていたユディトでさえなかったとしても。
分からない。

胸がむかむかした。殺せば、この嫌な息苦しさからも逃れられる。それ以降は迷う必要がなくなるから。

そうか。迷ってるのか、俺は。

ルカには、死んだ両親や町の人々の仇を討つという大義がある。だが大義は名分に過ぎない。それは大分前から分かっていた。いくら酷い目にあったと言っても、まだ六歳だったルカが仇討ちなどと大層なことを思いつくわけがない。

元々は、自分に酷い悲しみを負わせたイレイヤ公に、個人的に復讐したかっただけだ。町の人々の無念だとか思いだとか、そんなのは後でとって付けた屁理屈だ。

それなのにいつの間にか、後付けだった大義にルカ自身が振り回されている。

なんだ。分かってるじゃねえか。

そもそも町の人々に言われて仇討ちをしようとしていたのではない。ルカ自身の意思で、復讐しようとしていたのだ。今更、町の人々の為にイーメルを切る必要が、どこにあるというのだろう。

「わらわを切れ！　わらわは、全てを思い出してなおのうのうと生きられるほど、強くはない」

イーメルが言う。放って置くと泣き出しそうだった。

ルカは竜の剣を地面に抛った。

イーメルが地面に転がった竜の剣を見て、それからルカに視線を戻した。その表情は不安でいっぱいだった。

本当に死にたいわけじゃないよな、イーメル。

ルカは口を開いた。

「お姫さん自身や、死んだ町の人達がどう思ってるかは知らない。けど、俺はイーメルに近くに居て欲しいんだ」

ルカ自身としては、精一杯の告白。

それがイーメルに伝わったかどうかは分からなかったが、イーメルは困ったような顔で微笑んだ。

「ありがとう。嬉しい」

困ったような顔は一瞬で、次の瞬間本当の笑顔になった。
この笑顔を見る為になら、ルカは何でもする。
ルカの一番大事なことが、王に復讐することから、イーメルを守ることに変わった瞬間だった。
イーメルがしっかりした目でルカを見る。
「では、わらわはそなたと命を共にしよう。そなたが父を倒すというのであれば協力をしよう。そなたがわらわを殺すと言うのであれば、わらわはそれを受け入れよう」
告白の返事ではないが、イーメルが生きているのであれば、今はそれで十分だった。
「ああ。でも俺はお姫さんを殺したりしないから。絶対に」
地面に置いていた竜の剣を拾い上げる。
できることなら、王以外にこの剣は使いたくない。だが、今進行中の計画はルカだけでなく、多くの人々を巻き込む物だ。これを他の妖精族に対して使うこともあるだろう。しかしイーメルが協力してくれるのであれば、敵対する妖精族の数を元から減らすことができるかもしれない。
「帰ろうか」
ルカは言って、イーメルがついて来ているのを確認すると、光が射す方向へ歩き出した。

王都カザートに到着してから、イーメルは城へ、ルカはジージルドが働いている馬屋へ向かった。
イーメルの方は数日居なかった言い訳を考えるのに大変かもしれないが、ルカの方は何事もなかったかのように、いつもの日常へ戻ることができた。

6　それぞれの理由

燃え続ける炎。涙をどんなに流しても、炎が消えることはなかった。助けを求める人々の声を聞いても、自分の身一つで精一杯だった姉弟には、どうすることもできなかった。

やっと火から逃れた二人は、離れた場所から、燃える町を見た。

半妖精（ハーフエルフ）の少年は、姉を見上げた。

突然景色が変わる。火は既に消え、辺りは黒い瓦礫の山だった。

少年の姉が、鎧を着た兵士たちにつれ去られて行く。

『姉ちゃん！　姉ちゃん！』

――いつも、自分の声で目を覚ました。

整形手術をしたばかりで、まだ自分の顔に感覚がなかった。

生きる為に、多少お金がかかっても仕方ないことだった。右目のみが、元のまま残っていた。

金を稼ぐ為には、どんなことでもした。法に反することももした。スリや万引きは朝飯前だった。それでも、人殺しだけはしなかった。どんなに苦しくても、人が苦しむより、自分が苦しんだ方が良いと考えていた。そんな心を持っていても、彼は孤独だった。

＊＊＊

竜の剣は、セイロンが外出している間に家の床板を外してそこに隠した。

ルカが竜の剣を持ち帰ったことは、仲間の間にはソルバーユを通じて知れ渡っているはずだ。ただ、仲間にはルカが手に入れた物が『竜の剣』であるとは言わず、妖精族（エルフ）を倒すのに必要な物、としている。

竜の剣だと知れば、それを盗もうとする者が現れるかもしれないからだ。仲間と言ってもルカが選別したわけでもない。ソルバーユ

もネルヴァも知らない、口伝えに増えた仲間が居るかもしれない。考えたくはないが、裏切る者が居てもおかしくはないのだ。

ある日の夜、ソルバーユが検診に来た。実際は検診するわけではなく、他の仲間との連絡の為に来るのだ。

セイロンが外出していれば声を出して話せるが、セイロンが居るとやはり手のひらに文字を書いて貰うしかなく、不便だった。

だから、週に一度はルカがソルバーユの研究所に行く。これも名目は検診の為。研究所の中であれば、他に検診に来た人々と会って世間話をしていてもおかしくはないわけだ。

「今日は同居人は？」

ソルバーユがルカに尋ねる。

「あっちで書類整理してる。なんか人事異動があったらしくて、上司が変わって、今までの資料を見せろと言われてるそうだ」

寝室の方を指差す。

「そうか。まあ診察を始めよう」

言いながら、ソルバーユが手のひらに文字を書き始める。

「北側ではすごい雪が降っているそうだよ」

『一部の軍が帰れなくなっている』

「へぇ～。昔住んでたあたりも結構雪深かったけど」

『かなり大掛かりな装備を持って行ったらしく、春先になって雪が溶けるまで戻れないそうだ。来月、物資を届けに中隊が発つ』

「北に比べて、こっちは随分雪が少ないんだな」

「それには地形が関係している。詳しく調べれば色々おもしろいことも分かるだろう」

「じゃあ、もっと詳しいこととか教えてくれよ」

「次の検診の時までに調べておこう」

軍が一部隊、遠く離れた北の地から王都に帰ることができない。平常であれば、セイロンに聞かれても何の問題も無い世間話だ。だが下手に話題にされると困る。

「よし、もういいぞ」

ソルバーユが言った。
「ちょっと開けても大丈夫か？」
寝室の扉を指差してソルバーユがルカに尋ねる。
ルカは頷いた。
「入るよ」
中ではセイロンが積み重なった石版と、黴臭い巻物との間に埋もれていた。
「セイロン、調子はどうだね？」
ソルバーユの声に、セイロンが振り返る。
「あっ、ソルバーユ様。おかげさまで僕も妹も元気にやってます」
「それは良かった。もう私は帰るよ。邪魔したね」
椅子から立ち上がろうとしたセイロンを制して、ソルバーユは言った。
寝室の扉を閉じ、出口へ向かう。
ルカはソルバーユに外套を渡した。
「そうだ、ルカ。次に研究所に来るのはいつになる」
昼休みに行くか、日曜に行くかしかないのだから、普通は日曜だ。
「そうだなぁ……明後日だな」
「そうか。その次の日から私はまた東へ行かねばならなくなってね。何でも毛皮の材料にする鼬が変死しているそうだ。軍部でも名うての准将が、北へ行くなら毛皮がなければならないと主張しているらしくてね、生きたまま連れ帰ってこちらで増やしたいそうなのだ」
最後に世間話をして、ソルバーユは帰って行った。
「あれ、ほんとに帰っちゃったの？」
セイロンが寝室から出てきた。ソルバーユをもてなそうと出てきたのだろう。
「まあいいや。僕も喉渇いてたし」
独り言を言いながら、セイロンがコップに水を注いだ。
「ルカ、ひとつ聞いていい？」
少しだけ水が残ったコップをテーブルに置いて、セイロンが言っ

た。
「なんだ？」
「ソルバーユ様は、君の何を検診に来てるの？　もう手は治ってるでしょ。目を見てるようでもないし」
「ああ、……」
だからなんで俺は、前もって言い訳を考えておかなかったんだ。
確か、前にもこんなことがあった。
大人に対する言い訳なら用意するのだが、セイロンは子どもだ。見てくれの子どもらしさに騙されて、そんなに鋭い突っ込みが来るとは思わなかったのだ。毎度のことだが。
他人に聞かれれば目の検査と答えれば良いが、セイロンは時折検診風景を見ているからそう言うわけにもいかない。
沈黙が続いた。
先に口を開いたのはセイロンだった。
「もう良いよ。君から話してくれるのを待ってたけど、言う気がないなら僕が言う」
ほんの少しの水が入ったコップを指で傾けながら、セイロンは暫く黙り、それからコップから手を放してルカを見た。
「いっぱい聞きたいことはあるんだけど、とりあえず一つ。君の右目は何？」
言われて、ルカは自分の右目を覆う眼帯に手を触れた。
動悸が激しくなる。
いつか知られる時が来ることは想像していた。一緒に暮らしているのだ。仮にセイロンのような勘の鋭い人間でなかったとしても、いずれは気付いていただろう。
分かっていたことだったが。
「これは」
「エルフの目だよね？」
嘘を考える暇を与えず、セイロンが言う。
これ以上黙っていても仕方なかった。

「そうだ」
眼帯を取る。
セイロンが、ルカを凝視している。
ほら、いくらセイロンでも俺が人族じゃないと知ったら……。
「なんで、僕達を騙してたの？　妖精族なら妖精族と一緒に暮らせばいいじゃないか」
だから最近ルカがソルバーユとよく会っている、とセイロンは考えたのだろうか。
「俺は妖精族じゃない」
鋭い勘も、そこまでは働かなかったようだ。
「人族でもないが」
セイロンの目が大きく見開いた。
「まさか、半妖精族……？」
そんな変なもの見るみたいな目で見るなよ。
カザート全体ではどうか分からないが、少なくともこの王都には居ない。セイロンも見たことがないはずだ。
今はただ驚いているようだが、次は？
妖精族と人族との間に生まれるのは魔族だと言われている。ルカを恐れて逃げるか、ルカを追い出そうとするか。
「なんだ。びっくりした。妖精族が人族に化けてるのとは違うんだね。その目は元々？　ソルバーユ様が言わなかったのは、やっぱりルカを心配してくれてたんだね。最初にソルバーユ様に頼んで良かったよ」
「え、いや、左目は整形手術で変えたんだ。元はこっち」
「へぇ～。やっぱり元の目の方がよく見えるの？　あれ、もしかして、妖精族の文字も読めたりするの？」
言いながら、セイロンは一度寝室に戻り、それから石版をいくつか持ってきた。
何を考えてるんだ？
怖がることもなく、追い出そうともしない。

「これとか読める？」
「ん、ああ、見てみるけど」
見た目だけでは読めるかどうかは分からない。
手を翳して、書かれてあることを読みたいと強く念じる。浮かんできたのは月日と『今日は何事も無かった』の一文だけ。まだ何か書かれているので見てみると、その次の日の日付と、同じ文章が一文。わざわざ保管しなければならない物とは思えなかった。
「これ、日記じゃねえの？　前はここに妖精族が居たんだろ？」
「わぁ。すごいね。ほんとに読めるんだ。便利だね。なんで先に教えてくれなかったの？」
言って、ルカの顔を見る。
ルカの表情が浮かないのを見て、セイロンは気付いたようだった。
「あ、そっか。ごめん。そうだよね」
言えるわけがないのだ。半妖精族（ハーフエルフ）を処刑する法はカザートにもある。それに、話に聞く半妖精族は魔族そのもので、普通に言っても怖がられるだけだ。
セイロンも、良く知っているルカだから怖くもないが、見知らぬ人だったら怖かったかもしれない。
「じゃあ、次の質問。というか、こっちが本題かも」
石版をテーブルの隅にどけて、セイロンがルカと向き合った。
「結局、毎回何をソルバーユ様と話しているの？」
「それは教えられない」
知ってしまうことで、巻き込まれる可能性があるからだ。成功すれば別に問題はない。だが失敗したら。
「今日、知らない役人が五、六人来て、僕に言ったんだ。『近頃ソルバーユの行動が不審だ。関わる者を調べているから、ここも調べる』って」
セイロンが言う。
「それで？」
ルカは先を急かした。役人に自分達の計画が知られているのだろ

うか。

「それで、別に何もないからって帰って行ったけど。ソルバーユ様が何か悪いことをするとは思えないよ。でも、あそこまで強行な捜査に来たってことはやっぱり、何かはあると思うんだ」

ルカが半妖精族だと分かったとき、セイロンは活き活きした目をしていた。学習意欲が強いセイロンだ。何か新しいことが分かると思ったのかもしれない。

だが今は暗い顔をしている。

「僕、先に別のとこに隠しておいたんだよ。あの剣！　役人が調べた後に、そっちに場所を移して」

「え？」

何を言われても知らない、関係ないと答えるつもりだったのに、驚きがつい声に出てしまった。

「ここは僕の家だよ。床板が外れてたらすぐ気付くし、直そうとした。そしたら、知らない剣が出てきた」

「今、剣はどこに？」

「元に戻したよ。無いと君が心配するだろ」

言われて、ルカは安堵の息を吐いた。

「だから、今更巻き込みたくないから教えないとか、言わないでよ。もう巻き込まれたんだから」

「あ、ああ。そうだな」

もう剣のことを知られている。王を倒すとかそういう大仰なことを考えていなくても、武器を所持しているだけで罪だ。セイロンにその気があれば、いつでもルカを役人に突き出せる。

「あの剣は、妖精族の王を倒す為の剣だ」

「まだそんなこと考えてたの？」

半ば呆れたような口調でセイロンが言う。ルカの仇討ちは半年前に失敗して、それで終わったと思っていたのだろう。

「今度は俺だけの戦いじゃない」

「それって、どういう……」

セイロンが不安げな顔でルカを見た。
「人族の有志で、反乱を起こす」
「じゃあなんでソルバーユ様が」
「ソルバーユは俺達の連絡役だ。妖精族にも仲間は居る」
「反乱……って？　カザートを滅ぼすつもりなの？」
「そうじゃない。でも、そうとも言うかもな」
滅ぼす、という言い方はしていない。人族を奴隷という身分から開放し、独立させるのが目的だ。ただ、その為に不要な法や制度を持つ現在のカザートは滅ぼすということになるのだろう。
「駄目だよ」
セイロンが言う。
「僕達はここで生まれて、ここで育ったんだよ？　この国を滅ぼすなんて、そんな酷いことしないで。そりゃ、ルカにとっては王や妖精族は自分の国を滅ぼした悪い奴かもしれないよ。でも僕らにとって、妖精族は僕らを守ってくれるし、仕事も与えてくれる。良いひと達なんだ」
賛成はされないだろうと思っていたが、はっきりと反対の意思を示してくるとは思っていなかった。
確かに、集まった有志達も、ほとんどが自分の国を滅ぼされて今はカザートに住む人達だ。セイロンのように元々カザートに住んでいる人々にとって、この反乱は考えられないことなのかもしれない。
「俺だって、妖精族全てが悪いとは思っていない。でも、守られてるだけで良いのか？　いや、セイロンは守られてれば良いよ。お前はまだ子どもだからな。でも大人はそうはいかない。違う。それではいけないんだ。俺は妖精族に押し付けられる未来じゃなくて、自分で未来を選びたい」
妖精族が押し付ける未来にあるのは、半妖精族であるルカにとって死だけだ。
長命な妖精族であれば、ゆっくりと時間を掛けて周りの考え方を変えていくこともできるかもしれない。今セイロンがそうであるよ

うに、いつの間にか奴隷であることに疑問も持たなくなるのだから。
けれどルカはそれ程の時間を持っていないだろう。
今変えたいのだ。
生きているうちに。
「賛成しろとは言わない。考え方も感じ方もは千差万別だからな。でも邪魔はしないで欲しい。俺達がすることを役人に黙っていてくれればそれで良い。ただ、もしどうしても、セイロンの良心が咎めて役人に言いたくなったら、」
吸い込んだ息を吐き出す。
「俺一人が王に復讐する為に企んだことだと言って欲しい」
他の仲間に被害が及ばないように。
「君を止めるには、君を犠牲にするしかないってことなんだね」
セイロンが言う。
「分かったよ。僕は何も見ていないし、聞いてない」
コップに残っていた水を流しに捨てると、セイロンは寝室に戻って行った。
理解はして貰えそうにないな。
台所に残ったルカは先程の問答を思い出しながら考えた。
セイロンは、役人にルカを突き出すつもりはない。だが、それはルカのやり方に賛成したからではない。
じゃあ、なぜ?
ルカを死なせたくないからだ。友達……というと年齢差もあるし少し違うような気もするが、かなり親しくしていたから、死なせたくないのだろう。
それはルカも同じだ。セイロンが反対するのなら、セイロンを捕らえて口封じするという方法も取れるのだ。だがそれはしたくない。セイロンがまだ子どもだからというのもあるし、やはりルカにとってセイロンは友達のひとりなのだ。
半妖精族と知っても、俺を怖がらなかった。
ルカの正体まで知っていて、それでもルカを守ろうとしてくれる

人族と出会ったのは、生まれた町が滅びて以来、初めてのことだった。

訃報は突然届いた。

日曜日。普段なら仕事は休みのはずだが、セイロンを訪ねて青い髪の妖精族（エルフ）の男性が家に来ていた。

ん？　オーヴィアじゃねえか。

朝起きたばかりで眠い眼を擦りながら、ルカは客人を遠目に眺めた。

だがルカに用があるわけではないようで、セイロンとずっと話している。

「おはよ、セイロン。オーヴィアも。日曜だってのに、朝っぱらからどうしたんだ？」

「オーヴィア様は僕の新しい上司だよ」

セイロンが説明する。

そう言えば交代があったばかりで資料を見せろと言われたとか。

それがオーヴィアだったのか。お姫さんの衛兵の仕事はどうしたんだ？

聞こうとして、気付く。先日イーメルと一緒に数日王都を離れた。その時イーメルは付人に何も言わずに王都を抜け出した状況だった。だから、その責をおってそれまでの仕事を辞任したのだろう。

見た目に真面目そうな顔をしているから、すぐに想像が付く。

「ルカ、いやあれは君ではなかったんだったか。まあいい。色々あって、これが今の私の仕事というわけだ。あの後王女が……いや、この話はまた後で。それより今日は嫌な事件があって、それで来たのだ」

「それでセイロンに用事か？　セイロンは警備員じゃないぞ」

「死者が出たから、人民簿に記載を頼みに来た」

普通は、死者が出た場合はその家族がここに来る。ここに軟禁されている間にセイロンの仕事を見させてもらったが、新しく生まれ

た子どもの名前を綴ったり、亡くなった人の名前に死亡年月日を付け加えたりするのが主な仕事のようだった。
「どうぞ、上がってください」
セイロンがオーヴィアを台所のテーブルに案内する。その椅子に腰掛けて、オーヴィアが石版を取り出した。
「ああ、そうだ。その事件もあるが、もう一つ、最近人族の誘拐が多いらしい。おそらくは他国に奴隷として売る為だろうな。若い男女が狙われているらしいから、セイロンも気をつけた方がいいぞ」
セイロンは羊皮紙を出して広げている。
「わかりました」
「では死者の名前を言う。実は一家全員が殺されていて、身元の確認も大変だった。付近に住む人族は、関係者だと思われたくなかったらしい」
「そうですか。怨恨ですかね」
「まだ分からないらしい。これ以上被害がないようであれば、捜査も打ち切りだろうな。で、死者の名前だが、」
オーヴィアが名前を読み上げ始めた。
それを書き写していたセイロンの顔が、ひとり、ふたりと名前を聞くに従って次第に強張る。
「あの」
オーヴィアが次の名前を読み上げようとしていた時に、セイロンが声を掛けた。
「何だ？」
「その一家は、カザートに住んでいるのですよね。他の町ではなくて」
「そうだ。私も今朝この目で見て来た」
「そう……ですか。……続けてください」
セイロンの目に涙が滲む。
知り合いだったのか？
ルカはそう思っただけだった。最後の名前を聞くまでは。

「サラ。彼女は最近婚約したばかりだったそうだ」
「ええ、知ってます。妹の友達でした」
セイロンが羊皮紙に名前を書き記す。
セイロンは他の名前を聞いた時に気付いたのだろう。それが、サラが婚約した相手の一家だと。
「以上だ。大丈夫か？」
オーヴィアがセイロンに声を掛ける。
「大丈夫です」
そう答えるが、涙が止まらなかった。
オーヴィアが寝室の扉の前に立っていたルカを見た。
「ルカ、字は書けるか？　セイロンの代わりに書いてやってくれ。今までのを見ればどう書けばいいのか分かるだろうから」
言って、巻物状になっている羊皮紙をテーブルのルカの側に置く。
「あ、ああ」
答えて、セイロンの手からペンを預かろうとした。
「後は俺がやるから」
「大丈夫だから。僕の仕事だし」
セイロンはペンを放そうとしなかった。
ペン先から落ちたインクが、羊皮紙に歪な模様を残している。
「オーヴィア、記録するのは後でもいいか？」
「ああ。もちろんだ。あまり遅れると困るが、今日中にやってくれればいい」
「だそうだ。落ち着いてから仕事に戻れ」
巻物状の物をセイロンの前に置いて、ルカはオーヴィアの肩を叩いて二人で家から出た。
「そうか。サラという子が君達の友達だったのか」
事情を聞いたオーヴィアが言う。
「では死亡の状況は、セイロンには伝えない方が良さそうだな」
「死亡の状況？　そう言えば、殺されたって……」
オーヴィアが頷く。

「あの状況から考えて、おそらくやったのは妖精族だろう。怪しいのが誰かも目星は付くが、動機があるから犯人というわけにはいかない。それに、」

「これ以上の被害者が出なければ、捜査は打ち切り、か」

「それもある。だがそれよりも、その犯人と思しき妖精族は、殺された一家の主人なのだ。わざわざ自分の奴隷を殺すのはおかしいというのが普通の考え方だし、自分個人の奴隷を殺しても誰からも訴えられることがない」

オーヴィアが言った。

この社会の中ではそれが当然だった。人族は、物扱いだ。

「じゃあ、犯人と分かっていても、そいつは平気な顔で町を歩けるってことか？　どんな理屈だよ。人族も妖精族も同じ命を持ってるんだぞ？」

ルカが言うと、オーヴィアが顔を顰めた。

「それはそうだが。今の制度上どうしようもないな。現状、人族の数よりも妖精族の方が少ないから、人族の為に割く時間というのはなかなか取れないし」

「だから俺は」

この社会を変えようとしている。

でも言ってはいけない。オーヴィアは妖精族だ。それも、明らかに王側。

「そう言えばさっき、お姫さんがなんとかって言いかけなかったか？」

話を変えた。

オーヴィアが思い出したように言った。

「ああ、そうだった。全く、君が王女を連れ出すから、いやあれは君じゃないことになってるんだっけか……とにかく、無事帰ってきたは良いがどの式典にも会合にも出席なさらない。食事も質素な物に変えろなどと言い出す始末。私はサビアに泣き付かれるし、かと言って私も仕事を変わって、もう王女と話せる立場ではないし、ほ

とほと困り果てていたのだ」
「サビア？」
「私の妹だよ。君も会ったことがあるだろう。王女の侍女だ」
言われて、いつもイーメルの後ろをついて歩いていた女性陣を思い浮かべる。
ああ、あの青い髪の。サビアって名前だったのか。
髪と瞳の色が同じだけでなく、その真面目さも似ていると思う。
「ああ、私はもう戻らなければ。ルカ、もし王女にまた会うことがあったら、オーヴィアが心配していたと伝えておいてくれ」
そう言い残してオーヴィアは足早に去って行った。
真面目は真面目だが、ルカが思っていたのと少し雰囲気が違う。
仕事に対して冷静に取り組むエルフだと思っていたが、どちらかというと熱血漢だったようだ。
俺も戻らないと。
今日は日曜日。マギーが訪ねて来る日だった。
ルカが戻ると、家の扉が少し開いていた。
中からマギーとセイロンの声が聞こえて来たので、ルカは何も気にせずに家に入った。
が、マギーとセイロンが取っ組み合いの喧嘩をしていた為、ルカは状況把握に少々時間が掛かってしまった。
「おはよう、マギー」
どう対処すべきか暫く悩んだ末、とりあえず挨拶する。
「あ、おはよう、おじさん」
息を吐きながらマギーがルカを見た。
真っ赤な顔で、涙でぐちゃぐちゃになって。
サラのことを聞いたのだろう。
だが、なぜそれが喧嘩に発展したのか、ルカには検討が付かない。
「とにかく、離れろ」
セイロンとマギーを引き剥がす。
セイロンは泣き顔を見られたくないのか、すぐに寝室に引っ込ん

でしまった。机の上の巻物には、手を付けた様子がない。
「おじさん、聞いた？　サラが死んだって。殺されたって」
マギーが言って泣き出す。
「うん、聞いたよ。役人が来た時セイロンと一緒に居たから」
「ねえおじさん、お兄ちゃんは、サラを殺した犯人は見付からないって言うけど、嘘でしょ？　妖精族の警備兵さん達が見つけて捕まえてくれるのよね？」
それで、喧嘩になったのか？
それにしても、取っ組み合いの喧嘩というのは二人の年齢から考えても、普通は発生しない。それはもっと小さな子ども同士がやることだ。
「難しいかもしれない。さっき役人にも聞いたけど、やっぱり捕まえるのは大変なんだって」
「そっか」
マギーが俯く。
「それが喧嘩の原因か？」
ルカが聞くと、マギーは首を横に振った。
「それは、お兄ちゃんが、サラのことといつまでも諦めないから……」
語尾が小さくなる。
諦めないことは悪いこととは言えない。けれど、他人と婚約した時点で本当は一度諦めたはずだった。それが婚約相手諸共殺されてしまって、気持ちの行き場がなくなってしまったのかもしれない。
マギーはセイロンを心配してるんだ。
一歩間違えれば、後を追いそうな雰囲気さえ感じさせるセイロンを引き止めようと、必死になったのだろう。
それでうっかり取っ組み合いの喧嘩か。やっぱりまだ子どもだな。
マギーの頭を軽く撫でて、ルカは言った。
「セイロンは大丈夫だよ。マギーも、いっぱい泣くと良い。すっきりするから」
ルカに言われたからか、マギーは声を上げて泣き始めた。

二人がこんな状態じゃ、俺は泣いていられないな。
少し調べれば、犯人が誰だったのかは分かるだろう。だが、今のままではその犯人を裁くことはできない。だからと言って、自分のように、復讐を考えるのは間違っているのだ。
もし二人がどうしてもというなら、代わりに俺が。
思いついたが、考え直した。
二人がそんなことを言うわけがない。二人はルカとは違うのだから、大丈夫だ。
そう言えば、今日は日曜日だよな。
ふと思い出す。
ソルバーユに今日行くと伝えたから、行かなければならない。
「マギー、俺、ソルバーユのとこで診察受けなきゃならないから、もう行くよ？」
ルカが言うと、マギーが頷いた。
「大丈夫？」
二人だけで残して大丈夫だろうか。二人とも、支えがなければ折れてしまいそうだ。
マギーが涙を拭って、しゃくり上げていたのも止めて、ルカを見た。
「大丈夫よ。ソルバーユ様との約束ならちゃんと守らなきゃ。行ってらっしゃい」
かすかに笑顔を作って、マギーが言った。
「じゃあ、行ってくる」
笑顔を作って手を振るマギーを背に、ルカは妖精族の居住区へ向かって歩き出した。

ソルバーユの研究所に着いたルカは、付近の様子がいつもと少し違うことに気付いた。具体的に何が違うのかまでは分からないが、少しだけ違う。
妖精族（エルフ）が居る。

研究所の周りに。普段から誰も通らないという訳ではないが、わざわざ立ち止まるような場所ではないはずだ。

ルカは首を傾げながら、研究所に入った。

入ってすぐの受付にいたトキメが、ルカに気付いて頭を下げる。

それから、診察室になっている部屋の扉を少し開け、「ルカさんがいらっしゃいました」と告げた。

「どうぞ」

トキメが右手で扉を差したので、ルカは診察室に入った。

診察室には、いつものように顰め面の緑髪のエルフと、もうひとり、ここでは初めて会う顔があった。

肩に細長い胴体の小さな動物を乗せて、その輝く白い髪のエルフ女性は、ルカを見て微笑んだ。

「お姫さん」

一瞬、驚いて声が出なかった。

竜の剣を取りに行って以来だから、一月ぶりくらいだろうか。

「何でここに……」

「この子の調子が悪かったから、医者に見せに来たのだ。別にそなたに会う為にここに居たわけではない」

『この子』とイーメルが言ったのは、イーメルの肩を右へ左へと動き回っている小動物のことだった。ルカは初めて見たが、毛皮を取る為に飼おうとしていた鼬がそれだった。

ただ、この鼬はこちらの環境でも問題なく飼育できるかどうかの確認の為に持ち込まれた数匹のうちの一匹で、体も小さく弱そうだった為、イーメルが引き取ったのだった。決して、大きくなったら自分用の毛皮にしてもらおうと思って引き取ったわけでは……。

「ルカ、私には挨拶もなしか？」

椅子に座って机に肘を付いたソルバーユが言った。

「えっ、ああ、すまない。今日もよろしく」

ルカが言うと、ソルバーユは満足そうに頷いた。

「王女は待合室に居てください。今トキメが鼬にあげる薬を用意し

ていますので」
ソルバーユが言う。
イーメルは「分かった」と言って診察室から出て行った。
「今日は王女が来ていて、君も見ただろうが、外には警護の兵士がうろついている。今日は他の人たちも早々に引き上げてもらったよ。王女が何で居座るのかは、まあ理解はしているつもりだがね」
言いながら、ソルバーユがルカの手のひらに文字を書いた。
北の地で立ち往生している前線部隊に補給する為に中隊が出発する、正確な日取りだ。
丸二ヶ月もある。三日前の話では、来月中ということだったが。
「こうも妖精族が多くては、あまり込み入った話はできない。誰がどこで聞き耳を立てているか分からんのでね」
ルカが思い浮かべた疑問に答えるかのように、ソルバーユが言った。
「どうした？　目が赤いぞ。疲れているのならまずは十分な睡眠を取るべきだ」
急にソルバーユが言った。今までの会話と全く違う話。
また何か謎かけのような問答になっているのかと思ったが、そうではなさそうだ。
「いや、疲れているわけじゃない。ただ、今朝、友達の訃報を聞いたばかりで」
サラはマギーと同じくらいの年齢だった。まだ子どもだったのに。
「そうか。今朝と言うと、あの話だな。ラグイハクア子爵の奴隷の一家が殺されたという。あの家族に、君の友達が居たのか」
そんな名前なのか。
オーヴィアは一家の主人の名前を言おうとしなかった。ルカやセイロンは知る必要がない、ということだろう。
「正確には、まだ家族じゃなかった。婚約して、一緒に暮らし始めたばかりだったんだ」
これから、幸せになるはずだったのに。

あまりサラと交流がなかった自分でも、これ程辛いのだ。ずっと仲良くしていたマギーや、サラを好いていたセイロンの気持ちは、ルカにも計り知ることはできない。

「なあ、やっぱり誰も裁けないのか？　その家族を殺した奴を」

「難しいな。持ち主であるラグイハクア子爵が訴えを起こさぬ限り保安隊も動けないし、今の所、訴えを起こしたという話も聞かない」

妖精族の貴族は気位が高く、自分の持ち物を奪われたらすぐに訴えを起こす。それは奴隷に対しても同じだ。だが、自分で自分の持ち物を壊した場合は気にしないし、奪った相手の階級が自分より上なら、勝ち目がないからと訴えを起こさない場合もある。

「そうか」

仕方がないことだ。今の所は。

早くこの国を、もっと住み易い世界に変えたい。幼い頃にルカが失った、妖精族も人族も、半妖精族も、同じ立場で共に暮らせる世界に。

診察室の扉が少し開いて、トキメが顔を見せた。

「先生、ローシュ様の使いの方がいらっしゃってます」

「使い？　本人ではなく、か？　珍しいな」

ソルバーユが言って席を立った。

「待ってろ」

ルカに言うと、ソルバーユは診察室から出て行った。

暫くして戻ってきたソルバーユは、鞄に机の上にあったいくつかの道具を詰め込み、ルカを見た。

「出かけなければならなくなった。後はトキメに任せる。この奥の部屋は入院患者用の部屋だが、今は誰も使っていないから、時間があるならそこで待っていてくれ。なるべく早く戻る。無理そうなら帰っても良いが、明日から私も暫くカザートを離れるから」

早口に言って、一瞬診察室の扉を見、またルカを見た。

「王女が居ると色々面倒だ。どうせ君に話があるのだろう。さっきも言ったが奥の部屋を使っていいから、王女の用事を聞いてさっさ

と帰ってもらえ」
半分怒るような口調で捲し立て、ソルバーユは鞄を掴んで部屋から出て行った。
開いたままの扉の向こうから、「行ってらっしゃいませ」というトキメの声が聞こえてくる。
その扉から、イーメルが鼬と一緒に顔を出した。その後ろからトキメが来て、イーメルとルカを奥の部屋に案内した。
「ごめんなさいね。先生が回診なさっているお家の子牛の容態が急に悪化したらしくて、どうしても行かなければならないのです。今お茶をお持ちしますね」
そう言って部屋を出る。
入院患者用の部屋だと言っていたが、白いシーツが掛かった寝台が二つ並んでいて、小さなサイドテーブルが寝台の側にそれぞれ置いてある、殺風景な部屋だった。
そもそも、ソルバーユの主な診察対象は家畜であって人間ではない。入院患者用の部屋など必要ないはずで、使われていないのも当たり前だった。
部屋に置いてあった丸椅子にそれぞれ腰掛けて、ルカとイーメルはトキメがお茶を持ってくるのを静かに待った。
いや、何か話そうと思ったのだが、ルカは何も言い出せなかった。鼬がイーメルの肩や膝を自由自在に歩き回っている。時折地面に向かって降りようとするから、イーメルががっちりと掴んで肩に戻す。
それを見ているだけでも面白い。
「お待たせしました」
トキメが来て、サイドテーブルを二人の間に引っ張って、そこにお茶を乗せた。
「どうぞ、ごゆっくり」
普通に客が来た時のような調子で、トキメが言って部屋を出て行く。

「えっと、」
何から話そうか、ルカは思案した。いや、ルカはここにイーメルが居るとは思っていなかったわけで、話すことを用意していたわけではない。だから、すぐには出てこなかった。
「父は春になればまた戦地へ向かう」
イーメルが言った。
「戦地であれば、父が死したとしても珍しくもないであろう。だがその場合は、周りに多数の敵が存在することになってしまうが」
カザート軍と、敵軍。両方が自分を狙う可能性があるということ。しかし、ルカは暗殺は考えていなかった。自分の仇討ちだけが目的ならそれでも構わなかったが、今はそうではない。
「そんなことは考えていない」
素直に言う。
春になれば王都から離れるということは、逆に言えば、それまでに城に攻め入らなければならないということだ。
「でも、情報ありがとな」
「わらわは、そなたに協力すると言ったはずじゃ。何を今更」
プイと横を向いて、イーメルがぶつぶつ言った。
相変わらず、鼬は元気良く走り回っている。小さなイーメルの肩でも、鼬にとっては十分な広さなのだろう。
「あ、そうだ。オーヴィアが心配してたぞ。もうずっと、会合とか式典に出てないんだろ。後、食事も変えろとか言ってるって」
「オーヴィアが？　もうわらわの兵士ではないのに……」
十五年間、イーメルの警護を担当してくれた。随分わがままも言ったし、困らせた。侍女よりも責任の重い護衛官は、入れ替わりが激しかった。その中で、オーヴィアは最初から十五年もの間、イーメルに仕えてきたのだ。
「悪いことをしたな」
辞任したいと言われた時、引き止めれば良かったのだろうか。
だがそれは、なんとなくイーメルの性に合わない。イーメルが自

分のプライドを捨ててでも追いかけたいと思ったのは、この世でひとりだけだ。そのひとり以外の為に、みっともない真似をするつもりはなかった。

「食事を変えろと言ったのは、普段あまりにも豪勢過ぎるからじゃ。別に食べたくないとか言ったわけではない。あまり心配するなと、伝えておいてくれ。式典や会合も必要なら出るから」

「分かった。もし会ったら伝えておく。セイロンを通してでも良ければ、多分早めに伝えられるけど、どうする？　てか、サビアだっけ？　オーヴィアの妹が侍女なんだろ。そのひとに言えば良いと思うけど」

今日はたまたま日曜にオーヴィアが来たから会えたが、普段はお互い平日に仕事をしている為、会う機会はなさそうだった。

「サビアも辞任した。だから、セイロンに言っておいてくれ」

どことなく、寂しそうだ。

常に付き従っていた二人が居なくなったのだ。死んだわけではないから悲しくはないだろうが、寂しさは感じるのだろう。

「わらわは、そなたについて行ったことを、後悔はしておらぬ。お陰で記憶も取り戻せたし、やっと、父の非道を正面から見つめることができるようになった」

イーメルがルカを見て言った。

少し微笑む。

「わらわは、成長したルカに会えて良かった」

弟の成長を心から喜ぶ姉のように、くったくのない笑顔。

『会えて良かった』とイーメルは言ったが、ルカはそれを素直に受け取ることができなかった。弟として見られている。

もちろん、それでも十分過ぎるくらいに嬉しいことのはずだった。

イーメルはユディトで、血の繋がりはなくてもルカの姉として数年間過ごしていたのは事実で、その間はとても幸せだったのだ。その時に戻れるなら戻りたいと、何度思ったことだろう。

だから、嬉しいはずだった。

胸が痛む。
イーメルが、俺に弟で居て欲しいと望むなら。
ソルバーユも、ルカを孫だと言い、力になってくれた。イーメルも、弟の成長を見るのが楽しいのだろう。
「ああ、そうだ」
ルカは服に取り付けたポケットから、金色の飾り櫛を取り出した。王を倒すのに失敗した日、返しそびれていた物だった。ずっと持ち歩いていたのは、以前のように仕事の帰りに会えるかもしれないと思っていたからだ。
「これ、返すよ」
「……それはそなたにやったものじゃ。取っておけ」
櫛を少し見て、イーメルが言った。
「取っておけって言われても、俺使わないし、こんな高そうなもの持ってるだけでも怖いんだけど」
ルカが言うと、イーメルが困ったような顔をした。
「そなたの持っていた短剣、あれの代金だと思えば良い。売ってもいいし。気に入らないのであれば捨てても良い」
あっさり捨てても良いと言うあたり、やはり長年の間に培われた贅沢心はすぐには消せないものだ。
「じゃあ、これが俺のものなら、俺がこれをお姫さんにあげてもいいんだよな？」
「へ？　ああ。まあ、そういうことになるな」
イーメルが言ったので、ルカはイーメルの手のひらに飾り櫛を置いた。
イーメルは釈然としない顔をしていたが、やがて諦めたのか、飾り櫛を手に取り眺め始めた。
「わらわにつけてくれ」
そう言って、飾り櫛をルカに渡す。
「え？」
元々結ってある髪にずり落ちないように挿せばよいのだが、使っ

たことがないのでどうしたものか、ルカは迷った。
イーメルは鼬を両手で掴んで膝の上に乗せ、櫛を持って途方に暮れた様子のルカをおもしろそうに見た。
櫛とイーメルの髪を何度か見比べ、ルカは思い切ってイーメルの髪に手を触れた。細く、滑らかな髪。綺麗に結い上げているが、下手に触ったらそれすら崩れそうだ。色々な意味で緊張する。
ざくっといけばいいんだ。ざくっと。
と、思い切って髪に挿してみたら、本当にざくっと行ったようだ。
イーメルが顔を顰める。
「そなたは阿呆じゃ」
当たり前ではあるが、酷く機嫌を損ねて、イーメルはそっぽを向いた。
「禿げたらどうしてくれる」
「え、いや。ええ!?」
禿げるほど削っただろうか。
「と、トキメさん、ちょっと」
ルカは診察室と通じる扉を開けてトキメに助けを求めた。
「どうなさいました?」
「お姫さんが怪我したかもしんなくて」
状況を説明する。
ルカの後姿を見て、イーメルが笑った。

結局、ソルバーユは今日は遅くなるということで、待たずに帰ることになった。
研究所から出た途端、イーメルの付人達がどっと押し寄せてきたのに焦ったが、イーメルは気にする様子もなく、十人以上の付人を従えて立ち去っていった。
家に帰ると、台所にセイロンが居た。マギーは居る様子がない。
「ただいま。マギーは帰ったのか?」
「さあ。居ないんなら、帰ったんじゃない?」

ぶっきら棒に答える。
まだ喧嘩継続中か。
サラの存在は二人にとって大きかったのだ。泣いてお互いに暗くなっていくよりは、喧嘩して発散した方が良いだろう。
普段なら、まだ日は高いし、マギーが帰る時刻ではない。相当酷い喧嘩だったのか、セイロンの顔に青あざも見えた。
「セイロンは手を上げてないだろうな」
マギーに。小さい子ども同士なら大した怪我にはならないかもしれないが、十五歳にもなる男が同じことをやれば相手の女の子は大怪我だ。
「知らない」
本当は知らないわけではないだろうが、ルカともあまり話したくないのだろう。
「俺、ちょっと昼寝する。誰か来たら起こしてくれ。誰も来ないとは思うけど」
欠伸をして見せて、ルカは寝室に入った。
今のセイロンには、何を言っても駄目だろう。言わなければいけないことは全部言ったし、多分マギーも言ってくれているだろう。後は落ち着くのを待つしかない。
夜になって、腹が空いて目が覚めたルカは、台所の机に突っ伏して寝ているセイロンを見つけた。
巻物状だった羊皮紙が広げられている。内容を見ると、サラの名前に線が引かれ、今日の日付が書かれていた。
今の時刻はよく分からない。
セイロンが寝ているから、もう随分遅い時間なのだろう、と思いながら、乾燥肉を一切れ切り取る。
突然、家の扉がドンドンと叩かれた。
普通に家に来る客は、こんな扉が壊れそうな勢いで叩いたりしないはずだ。何か急ぎの用だろう。
ルカは扉を開けた。

外に立っていたのは中年の女性だった。
「マギー、来てない？」
誰だろう？
マギーの知り合いなのだ、ということだけは分かる。
「昼に来てたけど、もう帰ったよ」
「何時ごろ？　マギー、まだ帰ってこないの」
「え」
急いでセイロンを起こす。
泣いていたせいで半分くらいしか開かない目を擦っていたセイロンは、マギーがまだ帰っていないことを聞いて、急いで冷水で顔を洗って、女性を出迎えた。
「おばさん、マギーがまだ帰ってないって本当？　マギーがここを出たのは昼過ぎだよ」
「昼過ぎ……いいえ、午前中に出かけてから一度も帰って来ていないの。どうしたのかしら。最近人攫いも多いって聞くし、心配だわ」
この女性が、マギーが世話になっている『おばさん』なのだろう。実際に二人の叔母なのか、それとも近所のおばさんという意味なのかは分からないが。
「俺、探してくる」
ルカは言って、家を出た。
振り返って、女性とセイロンに向かって言う。
「二人はここで待っててくれ。こんな時間に外を出歩くのは危ない」
女性はよく一人でここまで来たものだ。マギーを本当に愛しているのかもしれない。
ここから羊飼いの村まで、道は複雑ではない。最短距離を行くなら選ぶ道は一本しかなく、他の道というと単に畑の畦道を通るかどうかくらいのものだ。
「マギー」
名前を呼びながら道を走る。
時刻も遅く、道を歩く人は誰も居ない。王の結婚式の日の夜、遅

くまで明かりが付いていた人族の集落も、今日は真っ暗でどこにあるのかもよく分からないくらいだった。
集落に差し掛かる。
もう皆寝ている時刻だろう。いくつかの家には明りが灯っていたが、外には人の気配もない。
「マギー」
少し声の音量を下げて呼ぶ。
集落は道よりも複雑だ。だが、あまり集落の中で留まっている可能性は考えられない。集落の中なら、既に誰かが見つけているはずだ。友達の家に泊まっているのかもしれない。
だがセイロンの家を出たのが昼過ぎなら、おばさんに連絡する時間はいつでもあったはずだ。
集落を抜けて、少し離れたところにある羊飼いの村を目指す。
マギーが住んでいる家の前まで行ったが、マギーは見付からなかった。
「マギー」
羊飼いの村に響く声で呼ぶ。
誰かは起きてしまったかもしれないが、マギーが見付からなかったらそれどころではない。
道を戻る。
やはり、見付からなかった。
少し別の道へ入ってみる。特に何もない。
駄目だ。これじゃあ、見付からない。
山が見えた。
ひとりで山に入るはずがない。また引き返す。
朝になっても、マギーは見付からなかった。一度家に戻ったが、やはりマギーは立ち寄っていない。
おばさんと一緒に、マギーが住む家にまた向かう。
「セイロンが、マギーが居なくなったのは自分のせいだって言うの。喧嘩したからだって」

おばさんが言った。
「家出だと？」
「セイロンはそう言うけれど……セイロンと一緒に暮らしているなら喧嘩して家出もあるかもしれないわ。でも、マギーはわたしたちと一緒に暮らしているのに」
その通りだ。
マギーが家出をする理由はない。
一睡もせずに疲れ果てた様子のおばさんを家に入れると、ルカはまたマギーを探しに歩き出した。
「お兄ちゃん」
聞きなれた声が聞こえて来た。マギーではなく、以前イーメルと一緒に遊んでいた子どもの一人だ。
「マギーを探してるの？」
「ああ。……知ってるのか？」
「アリルが見たって」
指差す。
アリルは初めて見る顔だった。まだひとりで歩くのも危ないくらいの小さな男の子だった。
「マギーを見たのか？」
ルカが聞くと、アリルが頷いた。
言葉はもう喋れるのか？
疑問が浮かぶ。この年齢なら喋れるはずだが、成長速度はみなが横並びなわけではない。まだ自分が言いたいことをきちんと纏められない子どもも多いだろう。
「おっきな　くるまにね」
アリルがたどたどしい口調で言った。
「いっぱいのってた。おねえちゃんも、おにいちゃんも」
「知らない人も乗ってた？」
先にルカに声を掛けた、アリルよりは年上の女の子が言う。
アリルは少し考えてから言った。

「うん。しらないおじさんもいっぱいいた。しらないひとには　ついていっちゃだめって、ぼく言ったんだけど、おねえちゃん　くびをよこにふって、だめだめしてた」
「その車は、どっちへ行った」
「んとね、あっち」
指差す。
そちらへ行っても山しかない。
山を越えれば、隣国イリアンルゥルだ。
人攫いだ。若い男女を攫って、他国で奴隷として売る。
「教えてくれてありがとな」
ルカはアリルに言ってから、城へ向かって走った。
途中、家に寄ってセイロンに一部始終を話す。
「俺は城に行って、保安隊に動いてもらうよう頼んでくる。まだ国境を越えていなければ対処もできるだろうし」
セイロンの返事を聞く前に、もうルカは走り出していた。
しかしルカは城に入ることができなかった。元々、城で働く者でもなければ城へそう簡単に出入りはできない。
仕方がないので、門番に訴える。
「俺の友達の妹が、奴隷商人に攫われたみたいなんだ。目撃者も居る。だから、保安隊を出して探してくれ」
門番は互いに顔を見合わせて、それからルカに視線を戻した。
「奴隷が何を言うか。主人と一緒に出直して来い」
「主人って……俺らの主人はカザートだろ？　個人の奴隷じゃない」
「だったら、自分達の問題は自分達で解決するんだな。別に奴隷のひとりやふたり、居なくなっても困らないからな。お前もそんな汚い格好でここをうろつくな。神聖な城が汚れる」
よくもそこまで言えたものだ。
門番を殴りたくなった気持ちを抑えて、ルカはもう一度頼んだ。
「奴隷の売り買いをしてるのは他国の人間だぞ。奴隷が連れて行かれるってことは、この国の財産を持っていかれてるのと同じことだ。

それを放置するような国ではいけないんじゃないか？」
ルカの言葉に、また門番は顔を見合わせた。
そして、ルカを見て笑う。
「わはは。お前がそんな心配してどうするんだよ」
「じゃあ、オーヴィアは？　オーヴィアを呼んでくれ」
オーヴィアは今、セイロンの上司だ。主人ではないが、それに近い。
「オーヴィア？　誰だそれ」
「つい最近まで王女の護衛をしていた妖精族の男だ。知らないわけないだろ」
「……ああ、何かあって辞任したとかいう」
やっとオーヴィアと繋いでくれるかと思ったら、門番達は二人で雑談を始めた。
「あいつの妹のサビアが美人なんだよな」
「そうそう。でもオーヴィアと兄弟になるのはちょっとなぁ」
「先にサビアに声掛けてから考えろよ」
いい加減、苛々する。ある意味、絶対に通さないという姿勢は門番としては優秀なのかもしれないが。
「ルカ」
呼ばれて振り返ると、セイロンだった。
セイロンは雑談をしている二人の門番の前に立った。
「失礼します。人族の出入りの管理をしております、セイロンと申します。妹が人買いに攫われたらしく、昨日の昼から消息が不明です。捜索の為、十数名の人手を借して頂きたい」
「は？」
門番が最初に言ったのは、セイロンを馬鹿にするかのような一言だった。
セイロンが緊張した面持ちのまま、次の言葉を待つ。
「なんだ、お前の妹か。そんなガキ居なくなってもいいじゃねえか。大体、さっきそっちの人にも言ったけどな、こっちは奴隷のひとり

やふたり居なくなったって困りはしないんだ」
「話では、他にも被害が出ているようです。まだ遠くへは行っていないでしょう。早めに捜索を！」
必死なのだろう。
サラが居なくなったばかりだ。マギーまで居なくなったら、セイロンは本当に壊れてしまう。
セイロンが取り合おうとしない門番の服に縋り付く。
さすがに相手をするのが面倒になったのか、門番はセイロンを蹴り飛ばした。
「汚いガキが、俺様の服によだれ付けるんじゃねえよ」
ルカに対して話しているときよりも、輪をかけて態度が悪い。相手が子どもで、自分達に手を出せないと思っているからだ。
「おい、どいてろセイロン」
言って、ルカはセイロンと門番との間に入った。
「こっちは頼んでる側だからな、相当頭低くしたつもりだ。でもこれ以上、黙って見てるわけにはいかない」
セイロンを蹴り飛ばした門番を睨み付ける。
これだけで逃げてくれれば楽なものだが、妖精族はこっちが人族だからと態度を改めようとしないのが常だ。
「はっはっは。そんな顔しても無駄だよ。俺はこの城の門を預かる大変な任を受けているわけだ。奴隷を通すわけにはいかな――」
言いかけていた男の兜を取った。
倒れこんだ男の腹を殴る。
「阿呆面がよく見える」
兜を堀に投げ捨て、ルカは男の顔を殴った。
腹を殴られた時点で男の表情は、ルカを莫迦にするものから怯えるものに変わっていたが、構わずに何発か殴った。
もうひとりの門番が、放置できないと思ったのか、城内に駆け込むのが見える。
その後姿に視線を移した一瞬、門番の男が力を使った。

ルカの体が少し浮き、地面に叩き付けられる。
「なんて乱暴な男だ」
自分がセイロンを蹴ったことは棚に上げ、門番は居住まいを正すとルカに手のひらを向けた。
「妙な真似をしたら、今度は手加減しない」
それは余裕がある時に言う台詞だ。殴られて腫れた顔で言われても迫力もなにもない。
ルカは素早く立ち上がると、低い位置から門番の両脚を抱え、自分の側に引っ張った。勢いで、門番は城の壁に後頭部を打ち付け、気絶した。
「大丈夫か、セイロン」
振り返ってセイロンに駆け寄る。
蹴られてからそこそこ時間が経っているのに、まだ倒れこんだままだったということは、あまり良い状況とは言えない。
顔が青褪めて、息が細い。声を掛けても返事も無かった。
服を捲りあげて蹴られた腹を見ると、門番の靴の形に青黒くなっていた。
蹴られたくらいで死ぬことはないと思う。思いたい。
城に入った門番が、別の妖精族を連れて出てきた。
オーヴィアだ。
「オーヴィア。セイロンが」
だがオーヴィアが駆け寄ったのは、ルカが殴って今は気絶している門番の方だった。
「そいつは気を失ってるだけだ。それよりもセイロンを」
ルカは言ったが、オーヴィアは暫くその門番から離れず、本当に気絶しているだけとわかってからやっと、セイロンの元に来た。
「どうしたんだ」
「門番に蹴られて、暫く経つのにまだ意識が戻らない」
腹の痣を見せる。
「おい、この少年も医務室へ運べ」

オーヴィアが声を掛けると、城の中に待機していたのか、二人の妖精族が出て来てセイロンを運び入れた。
「門番に蹴られたと言ったな。あそこで気絶していた役立たずか」
オーヴィアがルカに言ったので、ルカは頷いた。
「ああ」
「では、あの門番を伸したのはお前か？」
ルカを睨み付ける。
言い訳したいことは山ほどあったが、それを言っても無駄のようだった。
「ああ、そうだ」
この話がどう転んでも構わない。それよりも、セイロンの回復と、マギーの捜索が重要だから。
「セイロンの妹の捜索の為、人手を借りたいという話だと聞いたが？　何がどうなって、お前が門番を倒す羽目になったんだ」
「あいつが、セイロンを蹴り飛ばしたんだ。だから俺が間に入った」
「莫迦なことを。お前がやったことは話をややこしくしただけだ。お前達は国の奴隷だ。主人は国で、別の言い方をすれば、この国の妖精族全てがお前達の主人とも言える。主人の言うことを聞かず制裁を受けたとしても、それは甘んじて受けるべきではないか？」
「は？　じゃあ、セイロンはあのまま殺されてても仕方ないって言うのか？」
「そうだ」
オーヴィアの言葉が突き刺さる。
こんなことを言う男だとは思わなかった。
だが、セイロンを医務室へ運ぶよう指示してくれたのも事実だ。
「セイロンは何も悪いことはしていない。言うこと聞かなかったのも、実際に殴ったのも俺だし。セイロンをちゃんと介抱してやってくれ」
考え方や感じ方が違うのは仕方が無い。同じ人族であっても違うのだ。

「それから、マギー……セイロンの妹の捜索はしてくれるのか？」
「その予定はない」
オーヴィアはそう言うと、城の中に戻っていった。
なんで……。
サラが死んで、マギーも居ない。セイロンも、処置が悪ければ死ぬかもしれない。
人族の問題は人族で解決しろって言うなら、解決してやる。
ルカは顔が分かっている仲間の元へ向かった。
仕事は既に始まっている時間で、馬屋に入るとサルムが「遅刻とは珍しいな」と声を掛けてきた。
のんびりと挨拶している場合ではなかった。
事情を説明し、今から捜索に出られる仲間が居ないかサルムに尋ねる。
サルムにルカが王を倒そうとしていることを教えたのは、人族の老人だったそうだ。その老人の名前と住む場所を聞き、ルカはそちらに向かった。
「俺も掃除と餌やりが終わったら向かうから！」
サルムがルカに向かって大声で言う。
「わかった。ありがとう」
ルカは教えてもらった老人の家に向かった。
老人はおそらく、カザートの人族の中で最高齢なのではないだろうか。耳もあまり聞こえないようで、ルカが何度も呼んでやっと出てきた。
「わしも行こう。この通り年を取ってしまって、目も悪いし、耳も遠くて仕事はできなくなったが、まだまだ動ける」
老人は顔が広く、多くの仲間と会うことができた。
マギーの捜索に出られるのは、仲間以外の事情を聞いて集まった人族も合わせて三十名程となった。中には、自分の子が居なくなってしまった、という親も居る。
十名ずつ分けて、アリルが指差した山を捜索した。

程なく真新しい轍（わだち）が刻まれているのが見つかって、分かれて探していた全員が集まった。
単にイリアンルゥルへ行けるというだけの、この山中の道は険しく、普通は使わない。これが人買いが使っている荷馬車の轍と考えて間違いないだろう。
轍に沿ってルカたちは足早に進んだ。
相手は幾人か攫ったようだし、大人数になっているはずだ。この山道では、馬車と言えどそう速度は出せないだろうし、大人が単独で動いている自分達の方が早いはずだ。
夜になって、ルカ達は山中で焚き火をしていた人買いを見つけた。こちらの方が断然人数が多く、人買いはこちらの姿を見て逃げてしまったが、攫われた子ども達を助け出すことができた。
捜索を手伝ってくれた人族の中には、自分の子どもが居なくなった親も居る。そういった人たちは、子どもを抱きしめて涙を流していた。
ルカは馬車の中で眠っているマギーを見つけた。
泣いている子どもが多い中で、よく眠れたものだ。
「マギー」
呼びかける。
「ん……？」
目を覚ましたマギーは、目の前にルカが居るのに驚いたのか、はじけるように飛び起きて、馬車の天井に頭をぶつけていた。
「大丈夫か？」
「ったい……」
頭を抱えて、マギーが呟く。やがて痛みが引いたのか、頭に置いていた手をルカに向かって伸ばした。
「おじさんだ……」
確かめるように、ルカの顔に触れる。
「夢じゃないよね」
「痛かったんだろ？」

「うん」
勢い良く頷いてから、マギーが泣き出した。
「帰ろう、マギー」
「うん」
正面から抱きかかえて、馬車から降りる。
さすがに、子どもを抱く母親のようには行かないから、一度マギーに馬車の中で降りてもらった。
「ほら」
自分だけ馬車から降りて、おぶさるように言う。
マギーは周りをみて、自分より小さな子ども達が親に抱っこされたりおんぶして貰っているので、恥ずかしくなったようだ。
「子どもじゃないもん」
ルカの背に頼らず、馬車から降りた。
「じゃあ、歩くか。でも結構遠いぞ」
「がんばる」
言いながら、マギーがおずおずと、ルカの手を握った。
逸れられては困るから、ルカとしてもその方が都合が良い。
「行こう。疲れたら言えよ」
マギーの手を強く握り返して、ルカは言った。

山を下りた頃には、太陽が山の向こうへ沈もうとしていた。
見知らぬ子どもを背負って山を下りた若者も居る。
途中で疲れてしまった老人を助けるために、一緒に山を下りている人も居る。
休むことなく進んだから相当疲れているはずなのに、それを微塵も見せずに、町に着くなり知り合いの子どもを家まで送り届けると言って、意気揚々と出かけた者も居る。
仕事が心配だからと、親が礼を言っている途中でそのままどこかへ行ってしまった人も居た。
ルカは、マギーを背負ってマギーの家に行った。

おばさんがマギーを見て涙を流す。
「良かった。本当に良かった」
マギーのきょうだいとも言える、同じ建物に暮らすほかの子どもも、マギーを見てはしゃいでいた。ただ、マギーは寝ていたから、お互いに向かい合って、唇の前に人差し指を立てて、「しーっ」と言っている。
「後は頼みます」
おばさんにマギーを託すと、ルカは家に向かった。
セイロンはどうなっただろう。
家に帰ると、扉に書置きがあった。セイロンはソルバーユの研究所に居るそうだ。セイロンの字ではないが、誰が書いたのだろう。
ルカはソルバーユの研究所に行った。
ルカを出迎えたのはトキメだった。ソルバーユは東へ出ており、王都カザートには居ない。
奥の部屋で、セイロンに会った。
包帯を大げさに見えるほど胴に巻きつけて、セイロンは巻物と睨めっこをしていた。
「セイロン、生きてたか」
声に気付いて、セイロンがルカを見た。
「ルカ！　ありがとう。マギー戻ったんでしょう？　さっきここに来た人が教えてくれたんだ」
「俺だけじゃないよ。多分その教えてくれたって人も、一緒に探してくれた人だと思うし」
ひとりでは、あの山の中を探し切ることは出来なかったかもしれない。仮に探せたとしても、人買いと戦闘になるし、子どもを全員連れて山を下りることもできないし、うまくいかない可能性が高すぎる。
「そっか。皆で探してくれたんだ」
ルカが状況を説明すると、セイロンがそう言った。
「言っとくけど、捜索に参加しなかった人たちが悪い人たちって意

味じゃないからな。俺らが抜ける分、その人たちが倍仕事してくれたんだし」

「そんなこと、ルカに言われなくても分かってるよ」

セイロンが笑い出す。ルカも笑った。

セイロンは腹が痛いようで、笑った後顔を顰めた。

「ねえルカ、やっぱり僕も仲間に入れてよ。今のままじゃ駄目だって、僕も分かったから」

驚いて、ルカは言葉が出なかった。

つい数日前は、反対されたのだ。それが、ルカが説得したわけでもなく、仲間になってくれるとは。

「もちろんだ。でも、危ないことは俺らに任せるんだぞ」

実際に反乱に参加しなくても構わない。同じ志があれば、仲間なのだ。

ルカが馬屋の仕事に戻ってから、やっとまた綺麗になってきた。

ある日、見知らぬ女性が厩舎の門の前に立っているのを午後の仕事に入ろうとしていたルカは見かけた。

門から中を覗き込み、誰かを探しているようだった。

「何か用ですか？」

女性に近付き、ルカは尋ねた。

ごく普通の人族の女性だ。年齢は三十代前半と言ったところだろうか。

女性はルカを見ると、早口に言い出した。

「うちの人がどこに居るか知りませんか？　お昼に入れた野菜が腐っていたみたいで。うちの人ったら、いつも自分が臭いもんだから、きっと気付かずに食べてしまうわ」

誰なのかはまだ言っていないが、サルムのことだろうと予測を付ける。

丁度、サルムが休憩から帰ってきた。

「ああ、あなた」

女性がサルムに駆け寄って、弁当のことを告げている。
サルムは頷きながら、女性の後ろを気にしているようだった。
「サチは来てないのか？」
女性の話が一区切り付くと、サルムが尋ねた。
女性が首を横に振る。すまなそうな顔をした。
「お父さんに会いに行くわよ、って言ったんだけど、やっぱりまだ納得できないみたい」
「そうか。まあ、仕方ないさ。いつか来てくれるだろう」
「そうね」
女性が軽く手を振って、ルカに会釈をしてから去って行った。
サルムと一緒に馬屋へ向かう。
「あんたは独身なんだと思ってた。綺麗な奥さんが居るんじゃないか」
サルム以外の馬屋で働く男達は、家族の話をしたがった。サルムはルカと同じで家族の話をしないから、家族は居ないのだと思っていたのだ。
「まあな。あのひとは、前の相棒の嫁さんだったんだ。でも相棒は死んじまって、娘もまだ小さいだろ。あのひとも仕方なく俺と再婚したってわけさ」
「仕方なくなのか？　そういうふうには見えなかったけど」
先程二人が会話している様子はごく普通の夫婦であって、仲が悪そうには見えなかった。
「前の相棒が死んだ時には『あんたが死ねば良かったのに』とか散々言われたよ。サチは未だに、俺のことを『おじちゃん』としか呼ばないし。まあ仕方ないさ。あのひとが俺と結婚すると言い出した時には、相棒には悪いが、棚からぼた餅だと思ったもんさ。……本当に、俺が死んでれば良かったんだ」
サルムが眉間に皺を寄せて言う。
普段話す時は大抵おどけた調子だから、どれ程サルムが前の相棒が死んだことを悔やんでいるかが分かる。

「暗い話はこれで終わりだ。さっきパロス総督が慌てて事務所に入って行ったから、もしかしたらお偉いさんが馬を引き取りに来たのかもしれねえ。早めに掃除を終わらせちまおう」

そう言って、「気にするな」とルカの肩を叩いた。

確かに、ルカがサルムの家庭についてあれこれ考えても何の助けにもならないだろう。ルカは家庭を持ったことがないし、何か言われても相談に乗れるわけでもないのだ。

午後の仕事が始まってすぐに、この馬屋で働く五人全員が入り口近くに集められた。

パロスが咳払いをして五人の前に立った。そのパロスの後ろに、鎧を身に纏った妖精族（エルフ）の男が立っている。そのさらに後ろに数人の簡易鎧を来た妖精族が居て、ルカ達の後ろにも同じような服装の妖精族が何人か居た。

「えー、この度ヘルメイド殿がデルシール諸島へ派遣されることとなった。そこで、人数分の軍馬が必要とのことで、ここまで足を運んで頂いた」

パロスが大きな声で言う。

あの偉そうなパロスがやけに丁寧に説明しているのを妙に感じた。

パロスが後ろに立つ男を振り返り、顎を少し上げて自分の横に立つように指示する。眉間に皺が寄っているが、唇の端が上がっていて、怒っているのか笑っているのか中途半端な顔のまま、パロスはまたルカ達の方を向いた。

「ヘルメイド殿は男爵家の出ながら優れた戦績を上げ、今やヴォルテス王の勅命を受けるまでになった。お前達、彼がわたしのように伯爵姓ではないからと、適当な仕事をするんじゃないぞ」

なるほど、それでパロスの言葉と顔つきが一致していないのか、とルカは納得した。以前セイロンに貸してもらった巻物の中に、民の階級についての記載もあった。確か、伯爵は男爵よりも上の階級に位置するはずだ。しかし軍の中での階級は当然パロスよりもヘルメイドが上である。だから、相手を嘲笑する顔と、相手を畏れる顔、

両面が出ているのだ。
パロスが言い終わって暫くしてから、ヘルメイドが口を開いた。
「デルシール諸島はここから遠く離れた地にある。持久力のある馬を十五頭用意して欲しい。それから、わたしの馬がここに居るはずだ。それも加えて十六頭。明日の朝までに用意しろ」
「かしこまりました」
サルムよりも幾分年上のビルが答える。
ルカもそれに習って早口に返事した。
パロスはすぐにどこかへ歩いて行ったが、ヘルメイドはその場に残った。
「ふん。そうやって偉そうにしていられるのも今のうちだ」
パロスの後姿に向かってヘルメイドが呟く。
それからルカ達が並んでいる方を振り返り、近くに居た男に声を掛けた。
「わたしの馬が元気でいるか、見せてもらいたいのだがいいだろうか？」
「はい。ご案内いたします。どうぞ」
声を掛けられた男がそのままヘルメイドを案内して、一番遠くの馬小屋へ入って言った。
ルカはヘルメイドというエルフには初めて会ったし、どの馬が彼の馬なのか全く知らない。馬小屋は四つあり、一番奥の馬小屋に個人から預かった馬がいるということだけは聞いていた。
「十六頭だ。朝までぶっ通しでやらないと間に合わないかもしれないな」
サルムが言うと、他の男達も急いで馬小屋へ向かった。
昔よりも馬小屋自体が清潔になっていた為か、サルム達が考えていたよりも早く、馬を洗う作業は終わった。
それぞれの家族が、帰りが遅くなったのを心配して訪ねて来た。
サルムの妻も来ていたが、娘サチは来ていなかった。
ルカのところにはセイロンが夕食を持って来た。

「デルシール諸島？　すごく遠くだね。もうそんなとこまで侵攻してるのか」

セイロンが言う。

ルカはその地名を聞いてもピンと来ないが、諸島という名前からして海にあるのだろうし、内陸のカザートからは相当遠いということは想像が付いた。

暗くなる前に帰らなければならないということで、家族は皆、少しだけ話して帰って行った。

馬も洗ったし、自分達も帰れるのかと思ったらそうではないようだ。

今度は馬を装飾するらしい。装飾用の飾りはヘルメイド達が置いて行ったものを使う。それぞれの小隊ごとに、違う色の飾りをつけるのだそうだ。

鞍だけ乗せればいいじゃないかとルカが言ったら、それでは遠くから見た時に敵か味方かわからないから駄目なのだと言われた。

ルカひとり、慣れない作業で手間取っていたが、それでも朝までは掛からなかった。

すぐに朝が来るので、一人だけ馬の見回りをし、順番に仮眠を取ることにした。

しかし、仮眠すらする暇もなく、最初の見回りに行ったサルムが四人を叩き起こした。

「大変だ！　ヘルメイド様の馬がおかしい！」

馬がおかしい？

眠るつもりになっていたルカは欠伸をしながら、サルムの後について馬小屋に向かった。

しかし、実際に馬の様子を見ると眠気はふき飛んだ。

サルムが騒いだのも分かる。ついさっきまでごく普通に立っていた馬が、床に腹をつけ、立ち上がろうとしては倒れるを繰り返していた。

「何だ？　どうしたんだ？」

誰かが言う。
馬の世話をしている期間が一番短いルカが、他の男の質問に答えられるわけもない。
「とにかく、大人しくさせるんだ」
サルムが言うが、どうすればおとなしくなるのか検討が付かなかった。
押さえつけることもできない。
殴って足でも折ってしまえば大人しくなるかもしれないが、それでは本末転倒だ。
そのうち、馬は立ち上がる力もなくなったのか、地べたに座り込んで荒い息をするだけになった。
その息もやがて静かになる。
落ち着いたのかと思ったが、そうではなかった。
「おい、やばいぞ。この馬もう駄目かもしれない」
サルムが言う。
「誰か、パロス様を呼んで来い！　ヘルメイド様の馬が死にそうだと言えば飛び出してくる」
ルカが行きたかったが、生憎パロスの家を知らなかった。
「俺が行ってくる」
他の男が言って小屋から出ると、パロスを呼びに走って行った。
しばらくして男がパロスと一緒に戻ってきた。眠そうな顔をしたパロスが、馬を覗き込む。
「なんだ、寝ているだけではないか」
そう、辛うじて息はしているものの、もう馬は動く気配もなかった。
「寝てるんじゃなくて、死にそうなんでさ」
サルムがパロスを見て言う。
確かに、先程までの騒ぎを見ていなければ、パロスでなくても寝ているだけと思うだろう。
ただ、時折重そうな瞼を開けて、自分を覗き込むひとを見つめ返

している。
馬は朝日が昇るまでももたなかった。
「くそっ」
サルムが言って、馬から装飾具を取り外し始めた。
ルカや他の男もそれを手伝う。ヘルメイドの馬はもう死んだ。けれど朝までに十六頭用意しなければならないのだ。
「急ごう」
ルカが言う。
誰ともなく頷いて、手が空いた者が別の馬小屋から一頭連れて来た。
なんで馬が死にそうになった時点で別の馬を用意しなかったのかと、パロスが横で責め立てているが、相手をしている暇もなかった。
しかし、馬を洗っている最中にヘルメイドが来てしまった。
出迎えたパロスがそそくさと戻ってきて、死んだ馬を隠すようにルカ達に指示した。
「そんなことして、何の意味が？」
「いいから早くするのだ。その馬をヘルメイドの馬だと言って渡せば良い」
「全然違う馬ですから、すぐにバレますよ？」
別の男がパロスに言う。
パロスは眉を吊り上げて声を荒げた。
「鎧を着せれば模様も分からん。わしがヘルメイドの相手をしている間にさっさと仕上げろ。わしの言うことが聞けぬのであれば、そこの馬にお前達を紐で結んで岩場を走らせるからな」
パロスはすぐに踵を返して出て行った。
さっき誰かが言ったように、別の馬だということはすぐに分かるはずだ。久しぶりに見たのであればまだ分からない可能性もあるが、ヘルメイドは昨日自分の馬を見たばかりだ。
「言われた通りにするしかねえ」
サルムが言う。

すぐにバレるとしても、パロスの言いつけを守らなければそれはそれで何をされるか分からない。
サルムとルカで馬の装飾をし、他の三人が残りの十五頭をヘルメイドに引き渡しに向かった。
馬の引渡しには相当時間が掛かるようで、新しい馬の飾りつけを終えてかなり待ってから、やっと三人が来て、ルカ達も一緒にヘルメイドの所へ向かった。
「お待たせしました。ヘルメイド殿の馬です」
パロスが笑顔で言う。
ヘルメイドはルカ達が引く馬に目をやった。
「どれがわたしの馬だとおっしゃるのですか、パロス殿」
すぐに視線をパロスに戻して言う。
パロスが馬に歩み寄って、首を叩いた。
「こやつですよ。ヘルメイド殿はまだ寝惚けていらっしゃるのかな？」
ヘルメイドがパロスを睨み付けた。
「パロス殿、わたしの馬はどこかと聞いているのです。これはわたしの馬ではない。どういうことですか？　まさか、わたしの馬に何かあったのですか？　昨日会いましたが、その時にはとても元気でしたよ？」
質問を重ねてぶつけられて、パロスは一歩後ずさった。
「いや、あの馬は……」
「もう良い。あなたに聞いても答えてはもらえないようですから、自分で見てきます」
ヘルメイドが奥の馬小屋を目指して歩き始めた。
「まあ、待て待て、ヘルメイド。そんなに急がなくても」
言いながらパロスがヘルメイドを追いかける。ちらっとルカ達の方を見たが、何を指示したかったのかルカには分からなかった。
馬の死体をなんとかしろと言うのだろうか。それは無理だ。馬小屋はすぐ近くで、先に歩き出したヘルメイドを多少足止めしたくら

いでは、馬の死体を隠す時間には足りない。第一、馬を小屋から出した時点で見えてしまう。

馬小屋に入ったヘルメイドは、自分の馬の死体を見た。

「何と言うことだ！　これはパロス殿、あなたの管理不行届きですぞ？」

後ろを付いてきたパロスを振り返り、叫ぶ。

「わしではない。奴隷どもが……」

言って、パロスは自分の後ろを見た。少ししてからルカ達五人が走ってきたのが見えた。

「あいつらだ！　あいつらが仕事を怠ったからだ」

ルカ達を指差してパロスが言った。

ヘルメイドがルカ達の方を見た。しかしすぐに視線をパロスに戻すと、ヘルメイドが言った。

「奴隷が仕事を怠ったのだとすれば、やはりそれは彼らの監督を任されていたあなたの責任です。あなたに責任がないということであれば、そもそも奴隷を管理する職務自体が不要だったということになる。わたしはこの事を王に伝え、あなたの責任を追及して貰います」

馬小屋からヘルメイドが出てきた。

入り口付近に固まっていたルカ達の間を、肩をぶつけながら歩いて行く。

ヘルメイドに付いてきた部下達は、ヘルメイドと一緒に馬屋から出て行った。

パロスは俯いていたが、顔を上げるとルカ達の方を指差した。

「お前達のせいで、わしの経歴に傷が付くことになった。お前達のせいだ。わしのせいではない。お前達は馬が死んだ責任を取らねばならない」

パロスが自分の護衛官を呼んだ。

「奴隷五人を捕らえよ。処刑する」

「待てよ。馬が急に死んだのは変だ。俺達はきちんと仕事をしてい

たし、それで馬があんな死に方をするわけがない」
ルカは言った。
ルカ達の仕事は、馬屋の床に水を撒いて掃除をし、飼葉と水を交換するだけのことだ。もし飼葉や水が汚染されていて馬が死んだのだとすれば、他にも死ぬ馬が居るだろうし、病気だったとしたらもっと前から症状が出ていたはずだ。
「そうだ。昨日まで元気だった馬が急に死ぬなんて、長年馬の世話してる俺にも予想が付かなかった」
サルムが言う。
「だから、何だと言うのだ？　馬が死んだのは事実だ。どうせ病だったんだろう。気付けなかったのならそれは直接世話をしているお前達の責任だ。違うか？」
パロスがサルムを指差しながら言った。
「言いたい事があるなら処刑の前に聞く。捕らえよ」
パロスの護衛官がルカ達の腕を後ろで縛る。
ルカは抵抗するかどうか迷ったが、他の皆も同じ考えでなければ、逃げ切れない人が迷惑を被ることになる。それを考えると抵抗することはできなかった。
「パロス、俺達を処刑しても、あんたの責任能力が問われることに変わりはない。ソルバーユを呼んで死んだ馬を調べさせるんだ！」
護衛官に腕を引っ張られながら、ルカは後ろにいるパロスに向かって言った。
ルカ達五人は処刑の準備が整うまでの間、事務所に閉じ込められた。
「どうする」
サルムが言った。
外には妖精族の護衛官が見張りをしている。
「このままじゃ俺達は皆殺される」
「パロスにそこまでする権限があるのか？」
「妖精族がどんな決まりを作ってるのかなんて知らねえ。でも妖精

族は人族を殺すことを何とも思っちゃいねえし、他の妖精族もいちいち人族を助けに来やしねえ。これだけは確かさ」

サルムが言う。

他の三人は話す気力もないようで、壁際に集まってうな垂れていた。

「パロス総督」

「中の奴隷どもは大人しくしておるか？」

「ええ。今の所、逃げる素振りはありません」

「そうか」

事務所の扉が開く。

「残念だな、ルカ。ソルバーユは今留守だそうだ。帰ってくるのは早くて二日後だそうだ」

パロスが笑いながら言う。

何がおかしいんだ。

「このままじゃあんたも同罪だぞ？　ここの責任者はあんたなんだからな」

「同罪？　違うな。お前達は死刑だが、わしはここを辞めて元の仕事に戻るだけだ」

パロスは仕事に誇りを持っていないのだ。話にならない。

「お前達の最期を見届ける者を選べ。一人三人までだ。処刑場に呼んでやる」

パロスの言葉に、先ほどまで壁際で俯いていただけだった三人が、口々に名前を発し始めた。一度に言われて聞き取れなかったのか、パロスは外に居た護衛官を呼び、それぞれの希望を書き留めさせた。

「お前は」

サルムを見てパロスが言う。

「妻と、娘を」

パロスの後ろで護衛官が石版に書く。

サルムの目は、最期を見てもらうことだけに希望を乗せて家族の名前を叫ぶ三人とは違った。

「お前は」
今度はルカに向かって言った。
「誰でもいいのか？」
「ソルバーユは無理だぞ。処刑は今日中にやるからな」
また笑う。
ルカの味方が居ないと思って笑っているのだろう。
「じゃあ、イーメルを」
「何？」
パロスが明らかに驚いた表情で言った。
「それは王女の名前ではないか。同じ名の奴隷が居るのか？」
「王女で間違いない。呼べないのか？　あんた偉いんだろ？」
「もちろん呼べる。呼べるが、王女が来ないと言ったらどうするつもりだ。それよりも、お前が一緒に暮らしている人族とかの方が良いんじゃないか？」
「彼はまだ子どもだ。人が殺される所なんて見せたくない」
ルカの言葉に、家族の名を言った男達はまた俯いた。
「まあ、王女は忙しいだろうし、一番最初に呼びに行ってくれよ。王女が来ると言ってるのに呼びに行くのが遅れたせいで処刑に間に合わなかった、ってんじゃ、さすがにあんたも責任を取らなきゃならなくなるだろうしな」
「うぬぬ。よし分かった。そこのお前、王女に使いを。一人はここで見張りだ。残りは手分けをして人を集めて来い」
パロスが付近に居る護衛官に向かって指示を出した。
事務所に居たパロスと護衛官が外へ出る。
「王女がお前に会いに来るってのか？」
壁際に居た男が言った。
「ああ、来るさ。なんたって、お姫さんは俺に借りがある」
ルカが答えると、聞いた男も含めサルムまで変な顔をした。
日が山に隠れてまだ薄明るい時間に、ルカ達は事務所から出された。縄で縛ったままだから、処刑の準備が滞り無く終わったという

ことなのだろう。
馬屋から出て少し行った小さな牧草地に、今までは無かった木で作った柵が巡らされていて、真ん中に台が置かれていた。そこにルカ達五人が上らされて、後ろにそれぞれ別の妖精族が立った。
真後ろだから見えないが、おそらく彼らが死刑執行人だろう。
少ししてから、正面から十人前後の人族が小走りに駆けてきた。処刑される男達が呼んだ家族だ。
処刑台の手前で、妖精族が槍を使って家族を遮った。
ルカも会った事がある顔も混ざっている。サルムの妻と娘も来ていた。通行を妨げている槍の隙間から手を伸ばし、夫に声をかける女も居れば、祈っている女も居る。泣きそうな子どもも居れば、まだ何が起こるのか理解できないと思われる小さな子どもも居た。
処刑台の前に、パロスが歩み出た。
「おい」
ルカが言う。
パロスが振り返った。
「お姫さんは、イーメルはどうした。来ていないようだが」
「さあな。使いは出したが、どうなったかまではわしは知らぬ。あまりに失礼な要求だったから、使いの者が王女に捕まったのかも知れんな」
唇の端を上げて、パロスが言った。
どうなったのか知らないというのは本当だろう。実際に、使いに出された妖精族がまだ帰ってきていない。
パロスは観客となる、五人の家族の方に向き直った。
「さて、ここにいる五人は、軍より預かった大切な馬を死なせた罪人である。わしは寛大であるから、集まってくれた家族まで同罪とすることはない。安心して欲しい。ただ、犯した罪はその死を持って償ってもらわねばならぬ」
大声で言った後、隣で待機している妖精族の男に耳打ちした。
「一人ずつやれ。左から順にな」

ルカは右から二番目だ。右端はサルム。
他の三人が死んで二人だけになれば、逃げられるかもしれない。
そう思ったが、夫に手を伸ばしている三人の妻達を見ると、それではいけないと思い直した。
五人ともが助かる方法を考えなければ。でもソルバーユも居ない。お姫さんもまだ来ない。どうすればいいんだ。
「きゃあああっ」
叫び声が聞こえた。
一番左の男が殺されたのだ。声は彼の妻だった。
頭が処刑台から転がり落ちる。
考えてる場合じゃない。
ルカが思った時、サルムがルカに囁いた。
静かな場所であれば、囁き声程度でも妖精族に聞かれるだろうが、一人目が死んだことで観客が騒ぎ始めていた。
「ヘルメイド様の馬が死んだのは前から居た俺達が気付けなかったのが原因さ。あんたは何も悪くない。だから、あんたの番が来たら俺が暴れてやる。その隙にあんたは逃げるんだ」
「無茶だ。それじゃああんたは絶対に捕まる」
「もう捕まってるさ。今は俺も、あんたもな。あんたがやろうとしていることは分かる。だがあんたが今暴れても、俺達があんたの足枷になっちまう。前の三人には悪いが、俺達二人になるまで待て」
一瞬、それが良いのではないかとルカは思った。
いや駄目だ。俺一人が助かっても意味がない。
ソルバーユやイーメルを呼ぼうとしたのは、皆で助かる為だ。
「サルム、あんたの話術で少しでも処刑を先延ばしにできないか。お姫さんが来るまで」
「王女が来るわけがない。でもそれで諦めが付くならやってやろう」
サルムが言って、何食わぬ顔で正面を向いた。
少し経ってから、サルムがパロスに声を掛けた。
「なあ総督、処刑を急ぎすぎじゃないか？　普通は死ぬ前に家族と

会話させてくれるもんだろう」
パロスは処刑の前に自分が寛大だと言ったばかりだから、これを飲まないわけにはいかないはずだ。
「ふむ。なるほどそうであったな。会話を許可する。ただしわしが良いというまでだ」
遮っていた槍をどけると、それぞれの家族が駆け寄ってきた。
残っているのは、最初に殺された男の家族なのだろう。
「サルム！」
サルムの妻が来た。サルムの娘のサチは、母親の服の裾を掴んでサルムから顔を隠している。
「何があったの？　また濡れ衣なんでしょう？　あの人の時と同じ……」
言われて、サルムが首を左右に振った。
「俺が世話してた馬が死んじまった。今回は何も責任がないわけじゃないさ」
「そんな。馬だって不死じゃないんだから、いつか死ぬものよ。なんでそんなことであなたが死ななきゃならないの」
しかし、サルムは首を横に振っただけだった。
ルカの前には誰も居ない。男達の家族のすすり泣く声と、彼らの最期の会話だけが、ルカの周りを包む。
「よし、そこまで」
パロスが言った。
家族は妖精族の護衛官に肩を掴まれて、また元の位置まで下がらされた。
「これ以上は無理だ」
サルムがルカに耳打ちする。
パロスは処刑をさっさと済ませようとしている。確かに、これ以上引き延ばすのは無理だろう。
左から二番目の男の首が落ちた。
血飛沫がルカにまで掛かる。

「くそっ」
舌打ちして、立ち上がろうとした。
「まだ駄目だ」
こちらは見ていないと思っていたのだが、サルムが正面を向いたまま、ルカに言った。
「言っただろう。ここで必要なのは他人を思いやる心じゃない。切り抜けるための知能だ」
「やめてくれ。やめてくれ」
左隣の男が呟いているのがルカの耳に聞こえてきた。
「助け――！」
叫んだ瞬間に、左隣の男は息絶えていた。
次はルカの番だ。
「王女は来なかったな」
パロスがルカに言う。なんとも嬉しそうな表情だ。
自分の姿がパロスを喜ばせていることに憤りを感じる。
「今だ」
サルムが囁く。
すぐにサルムが動いた。
後ろに居たエルフの顎に頭突きをし、ルカの後ろのエルフに体当たりをして倒す。
ルカも立ち上がった。皆の視線はサルムに向かっている。ルカが立ち上がったことも、サルムの行動に驚いてのことだと思われているはずだ。
「右だ！」
サルムが叫ぶ。
すぐに別の妖精族がサルムを押さえつけた。
右を見ると、柵の作りが甘く、大きく木と木の間が開いた場所があった。
あそこから逃げろってことか。
今なら逃げられるだろう。しかし、ルカは動けなかった。自分ひ

とりが助かっても意味がない。ルカにはとりあえず家族も居ない。もし一人だけ生き残れるならルカよりもサルムの方が良いはずだ。

サルムを押さえつけているエルフの一人に、ルカは体当たりした。もう一度、別のエルフに体当たりしようとしていた時に、足首を掴まれてルカはその場に倒れた。

強い力で無理やり立ち上がらされて、サルムを囲む妖精族から引き剥がされる。

「構わない。その男から先に処刑しろ！」

パロスの声が遠くで聞こえた気がした。

サルムを囲っていた妖精族が、処刑台から飛び降りていく。サルムの近くには最初から居た処刑人が残るだけになった。サルムは膝を付いているが、顔は血だらけになっていて、殴られたのだろう、目も開いていなかった。

斧がサルムの首に振り下ろされる。

やめろ！

体を振って、自分の縄を持っているエルフを振り切ろうとしたが、エルフの足がわずかに動いただけで、振り切ることはできなかった。

目の前で、サルムの体が崩れ落ちる。

血飛沫が上がって、ルカは頭から血を被った。

「あとはお前だけだな」

遠くに居ると思っていたパロスは、ルカのすぐ近くでそう言った。

「その処刑、待った」

女の声が聞こえてきた。

他のすすり泣きや叫び声にも掻き消されることのない、あまりにも通る声に、ルカを囲む妖精族は全員がその声の方を見た。

ルカも声の方へ顔を向ける。

「お姫さん……」

イーメルが処刑台に向かって走ってきた。後ろには何人かの兵士も居る。

皆の視線がイーメルに向かった瞬間、既に処刑された男の妻の一

人が、自分と夫を遮る槍を押して前に出た。
それに気付いた他の家族達も我先にと処刑台へと駆け寄った。
処刑自体に待ったが掛かった為か、家族を抑えていた護衛官達は特に動こうとはしなかった。
「あなた」
サルムの妻がサルムに縋り付いている。
先に処刑された三人と違い、サルムはまだ首が繋がっている。だが息はない。
「パパ」
サルムの娘が泣いている。
サルム、あんたの娘はちゃんとあんたのことパパって呼んでるじゃないか。
言葉にならなかった。言葉にしても聞かせるべき相手が居ない。
「パロス殿、この者達は無実じゃ。今すぐ処刑をやめよ」
イーメルが言った。
「呼んだ者達を先に帰らせろ」
すぐさま、パロスが指示する。
本当に無実だとすると、この処刑自体の是非が問われる。しかしどうせ、処刑された者の家族以外で、いちいち口出しする者は居ないのだ。
パロスの指示で、家族は処刑台から離され、やがてルカの視界から消えた。
「王女、何事ですか？　無実とは？」
近くに処刑した者達の家族が居なくなってからパロスが言った。
「死んだ馬を調べさせた。馬の死体から、人族では入手できない薬物が検出された」
「だとしても、他のエルフに入手させたのでは？」
イーメルが一瞬パロスから目を逸らしたが、すぐにパロスの目を見て話し始めた。
「薬物のことを調べさせた。薬物は城の保管庫に置いてあるが、城

の薬師の許可がないと持ち出せない。持ち出した者の名は記録してある」

「では、その薬を持ち出した者が今回の件の犯人というわけですかな？」

パロスがルカの方に顔を向け、ルカの縄を持っているエルフに目配せした。

エルフはルカの縄を解いた。

「それで、その者の名は何と？」

「オズワルト＝ヘルメイド」

パロスの顔色が怒りの色に変わっていく。

「おのれ、わしを嵌めたな。ヘルメイドは今どこですか」

「すでに城の牢に捕らえておる。しかしパロス殿、そなたはヘルメイド殿に会わない方が良い。彼はそなた個人に恨みがあって今回の犯行を計画した。話を聞いたが、確かにそなたが悪い。どう考えてもな。そなた自身の立場を危うくしたくなければ、ヘルメイド殿とは会わぬことだ」

イーメルに言われて、パロスは怒りを露にしたまま、踵を返して馬屋に入って行った。

イーメルが処刑台の上のルカの側まで来た。

「無事か？」

心配そうにイーメルが言う。

「何でもっと早く来てくれなかったんだ」

イーメルに言う。

仲間達の血に塗れた服は、自分の目に見える限り元の色がほとんど分からなくなっている。触ると手の平が赤く染まった。

「あんたがもっと早く来てれば、皆死なずに済んだんだ。それなのに、何で」

イーメルの肩を掴んで揺らす。

「すまない、ルカ。すまない」

血に濡れたルカの頬に、イーメルの手が触れた。

イーメルの白い指が赤く染まって、代わりにルカの顔が多少綺麗になっていく。

「ヘルメイドがやったという証拠を掴むのに時間が掛かった。すまない。言い訳にしかならないな」

イーメルの表情が、悲しげに歪んでいる。

イーメルには、ルカの気持ちは理解できていないのかもしれない。理解しているのなら、ルカの顔を綺麗にするよりも、死んだ男達を家族の元へ送るなりするだろうから。

サルム達は死んでしまったが、罪人でないことはイーメルによって証明された。生きることが最重要ではあったが。

罪人として葬られたのでないだけマシだ。

そう思うしかなかった。

でも、何でだ。何でサルムが死ななきゃならなかったんだ。悪いのは妖精族の方なのに。いつもそうだ。妖精族の争いに人族が巻き込まれる。妖精族が俺達を殺す。

納得できないことは、今までにも多くあった。

それでも、社会を変えようとまで思ったことはなかった。けれど、ここは、今の社会は、酷すぎる。

社会を変える手段は、ルカが持っているのだ。

竜の剣という力を。

7　竜の剣（前編）

「姉ちゃん」
少年は言って、姉を見上げた。
「どうしたの、ルカ？」
姉は少年と目の高さを合わすように、屈んだ。
姉も妖精（エルフ）だった。左手の中指には、銀の指輪をしていた。
「姉ちゃん、僕たちのお父さんとお母さんは、どうしちゃったの？　町の人たちは？　叫び声が聞こえるよ。僕に、復讐しろって言ってるよ」
姉は、弟を抱き締めた。
「そうね。わたしにも聞こえるわ、町の人たちの声が。でも、ルカとは違う……。みんなはわたしを責めているわ」
「どうして？　姉ちゃんのせいじゃないよ」
少年の言葉に、姉は首を振った。
「半分は、わたしのせいね」
姉は悲しげに言った。

＊＊＊

セイロンがいくつかの石版をソルバーユに渡したのは、セイロンが仲間になってすぐのことだった。
前働いていた妖精（エルフ）族が残した物で、中には重要な文書も混ざっていた。
今まで仕事に無関係で開かなかった巻物も全部見た。セイロンが生まれるよりも昔、カザートがまだその名前でなかった頃の情報もある。
人族の暮らしを豊かにする為の、農具の開発。
元より妖精族よりも人口の多かった人族は、五百年程前を境にさ

らに人口を増やし、現在カザートの総人口の九割を占めている。魔族討伐は妖精族の仕事だが、足りない部分を補う為に、開発された武器もある。

「これ、そっちで作れる？」

セイロンの仕事場である家も、人の出入りを管理するという性質上、人族が多く出入りしていても違和感のない場所だ。

農具を作る仕事をする男に、セイロンは武器も作れないかと尋ねてみた。

「やってみないとな。こういうのは型から作らなきゃならねえから。まあうちのとこは妖精族も滅多に来ないし、大丈夫だと思うよ」

「頼むよ」

木と骨で作る武器だ。現在の農具は固い土を掘る為に金属を使っていることが多いが、逆に古い時代の物が今は役立つ。

妖精族は金属を溶かしてしまうから。

「ちょっと寄って来た。セイロン、がんばってるな」

ネルヴァが馬屋に来て、ルカに言った。

先日のパロス総督の起こした不祥事で、暫くの間、以前ここで働いていたネルヴァが監督役に来ることになったのだ。

「だろ。ちょっと頑張りすぎな気もするけどな」

寝室の屋根裏に保管してあった沢山の巻物の内容を、全て見直したのだ。時間の掛かることだし、ルカが家に帰った時はいつもその作業をしていたのを思い出す。

「ルカ、武器のことは……」

武器があった方が良いと言ったのはネルヴァ自身だ。だが、その製造の指揮をセイロンが執ることになるとは思っていなかった。

まだセイロンは子どもだ。

自分が戦えないから、他のことで協力したいという気持ちは分かるが、武器はかなり直接的だ。

「分からない。俺はセイロンに言ってない。もしかしたら、自発的

に気付いたのかもしれない。誰だって分かる。俺達が妖精族を倒すのに、素手じゃマズイってことくらいな」

「他の大人にやらせることはできないのか？」

ネルヴァの問いに、ルカは首を横に振った。

「セイロンから仕事を取り上げるのは拙い。今あいつは、何かに必死になってないと駄目なんだろう」

サラが死んだ時から、まだ消えない痛み。

ネルヴァが溜息を吐いた。

「セイロンみたいな子が、普通に笑える世界にしたいものだ」

「ああ」

妖精族が皆ネルヴァのようなひとだったら、この社会をルカが今変える必要はなかったのだろうと思う。

「仕事に戻らないと」

ルカが言うと、ネルヴァが頷いた。

馬屋で働いていた皆が殺され、残ったのはルカだけになった。足りない人数は他の仕事場から来た手伝いでまかなわれている。皆慣れない仕事で、ルカやネルヴァが居ないと仕事にならないのだ。

「ルカは王を倒した後に、どんな世界にするつもりだ」

ネルヴァがルカの後姿に向かって言った。

振り返ってネルヴァを見る。

「いや、いい。今より良くなれば、私はそれで構わない」

ネルヴァが手を振って言う。

王を倒した後のこと、それは漠然としたイメージしかない。もしかしたら、ネルヴァにはもっと明確な未来像があるのかもしれない。

俺は、王を倒せれば満足だから。

ソルバーユに、反乱軍……軍と言えるような物ではないが……のリーダーにされてしまったが、反乱が成功した後までリーダーに留まっているつもりはない。王に復讐したいだけの自分が、国まで纏められるとは到底思えないのだ。

でももし、そこにネルヴァやセイロン、イーメルが居てくれたら。

何とかなりそうな気もする。
あ、でもそれなら、俺居なくても成り立つよな。
ルカは苦笑した。

マギーの捜索以来、ルカもソルバーユを通すことなく多くの仲間と会えるようになったが、少人数ずつで話すのが精一杯で、全員の意思疎通ができているのかどうかはわからない状態だった。
ソルバーユがやっと王都カザートに戻ってきて、計画の実行日を決定する為に、ルカはソルバーユの研究所に通っていた。診察していることを匂わすため、いつも怪しげな薬を渡されるのだが、飲んだことはない。
「補給の為に中隊が出発するのは来週の木曜だ。帰ってくるのは一週間後くらいになるはずだ」
ソルバーユが言う。
「日取りは土曜が良いだろう」
「なんでだ？」
「週の最後で、城で働く妖精族も一番疲れている時だからだ」
なるほど、と思う。
「だがあまり急がない方が良いかもしれない。まだこちらの足並みが揃っているとは言えない状況だからな」
それも、その通りだ。武器を作ってもそう簡単に人数分回るわけではない。連絡網もろくに無いし、かと言ってあまり早く連絡を進めては、いつどこから情報が漏れるか分からない。現在は妖精族の方が力を持っていることは明白で、人族であっても、わざと妖精族の味方をして甘い汁を吸おうと考える輩が居てもおかしくないのだ。
「土曜は目安だと思っていてくれ」
「わかった。とりあえずはそれで進めよう」
ルカは研究所を出て、午後の仕事に向かった。
だが、その日の仕事が終わる少し前に、急な知らせが入った。
「ソルバーユが密告？」

ジージルドが告げに来たのは、とんでもない事実だった。
ジージルドはもう少し町の中心部に近い馬屋で働いていて、ルカともソルバーユとも面識がある。
ジージルドは、ソルバーユが役人と、反乱について話しているところを見たというのだ。
「単に、役人に疑われて聞かれただけじゃねえのか？」
「いや、俺も最初そう思ったけど、ソルバーユのやつ、役人から金を貰ってたんだ。役人の名前は分かってる。その場面見たの俺ひとりじゃねえし。早く役人をとっ捕まえないと、拙いことになる」
ルカは一緒に話を聞いていたネルヴァを見た。
ソルバーユはルカの祖父だと本人は言っていた。それを信じるなら、密告などありえないだろう。
「疑いを晴らすには、結局ソルバーユ殿に来てもらうしかないな。その役人の名前も教えてくれ。そっちは私が調べておく」
ルカが頷くと、ネルヴァはジージルドに役人の名前を聞き、馬屋から出て行った。
「ソルバーユは俺が呼んでくる。もうそっちの仕事は終わったのか？　だったらここで待っていてくれ」
本業が獣医であるソルバーユを馬屋に呼んでも、何も不自然ではない。パロスは滅多にここに来ないし、まず大丈夫だ。
昼に行ったばかりの研究所へ、ルカはまた戻った。
いつものようにトキメがルカを出迎える。
「ソルバーユ、あまりおもしろくない話かもしれないが、問題が起こった。馬屋に来てくれ」
「『来られるか？』ではなくて、『来てくれ』か。仕方がないな」
ソルバーユが立ち上がり、鞄も持たずに出てきた。
問題が起こって、馬屋に来てほしいと言っただけだ。普通は、それならば馬に問題が起こったと思うものだろうに、診察の時に持ち歩く鞄を持たないとは。
とにかく、急いでソルバーユを連れて馬屋に戻る。

ジージルドと、他にも数人が集まっていた。
「あなたに聞きたいことがあります」
ジージルドが言う。
「今日の午後、あなたが会ったひとは誰ですか？」
「沢山会ったが……ゼルスイスに会ったな」
町を歩けば、知り合いに会うこともあるだろう。沢山会ったと言ったのに、なぜよりにもよって、その名前を出すのだろう。
それは、ジージルド達が見たという役人の名前だ。
「何の話をしたのですか？」
「おいおい、尋問かね？　私は君達に全面的に協力してきたつもりだが」
「協力するふりをして、反乱の意思を持つ人族を一網打尽にするつもりなんじゃないのか？」
他に来ていた男が、口調を強くして言った。
ソルバーユがこちらに手を貸してきたのは事実だし、実質纏めていたのも彼だ。それがなぜ今更、疑うようなことができるのだろう。
ルカは不思議に思った。
「前から怪しかったんだ。妖精族のくせに俺達に味方するなんて。金が流れてるってのもずっと噂だったしな」
男が言う。
聞いたことがない。ルカがリーダーなのだから、もしそんな話があれば当然ルカの耳に入っているはずだ。
王都の中心部で流れている噂？
ふと思いつく。
ルカは知らないが、ジージルドのようにもっと妖精の居住区に近いところで働いている者はよく聞く噂なのだろう。
「ルカ、まだ居るか」
ネルヴァの声だ。
「ゼルスイス殿を捕らえた。いや、殿と敬称を付けるのもおかしいな。ソルバーユに縄を。ゼルスイスは確かにソルバーユに情報と引

き換えに金を渡したと言っていた」
何だと？
ソルバーユを陥れるための罠ではないか、と言いかけて、ネルヴァがそんな罠に引っかかるような男ではないことを思い出す。
ネルヴァがその罠をかけた張本人でなければ、だが。
いや、ネルヴァはそんなことはしない。
ネルヴァが自分達に味方する理由は聞いた。妖精族とは言え、どちらかというと生活の苦しい平民だし、裏切る必要がない。
ジージルド達がソルバーユを縄で縛って、近くの柱に括り付けた。
「捕まえてどうするんだ」
「決行の日までここに閉じ込めて置けばいい。馬が感染症でソルバーユも付きっ切りだとでも言えばトキメ殿も納得するだろう。ゼルスイスも連れてくる」
ネルヴァは言って、馬屋から出て行った。
ソルバーユは縄を掛けられ、汚れた馬屋の地面にそのまま座らされている。ジージルドや他の人族は、ソルバーユを見ると眉間に皺を寄せ、怒りの表情をあらわにした。だが同時に、ジージルド達の顔には、裏切り者を自分達で発見し捕らえたという喜びのような物も見える。
本当にソルバーユが裏切ったのであれば、それなりの対応を考えなくてはならない。だが、今はまだ信じられない。ジージルド達は、ソルバーユが裏切ったと信じているようだが、おそらくネルヴァも信じてはいないだろう。だから『閉じ込めておけばいい』とだけ言ったのだ。
ルカはソルバーユの前に立った。
「ジージルドは、あんたがゼルスイスに俺達の情報を売ってるって言ってたけど、どうなんだ？」
否定するだろうと思った。だが、ソルバーユは言った。
「ゼルスイスもネルヴァに捕まったのでは、私が今更申し開きをしても仕方ないようだ」

「それは、情報を売っていたことを肯定するということか？」
否定して欲しかった。今、話しを聞いているのはルカだけではない。ここでソルバーユが裏切ったと認めることは、逃げ道をなくすことになる。ソルバーユの逃げ道も、ルカがソルバーユを裁かなくてもよい逃げ道も。
「肯定する」
ソルバーユが答えた。
ルカはジージルド達の方を振り返った。
「この馬屋を一時的に牢として利用する。元から俺達しか出入りはしていないが、妖精族が万が一にも助けに来る可能性も考えて、見張りを強化する。こっちの仲間を呼んでくる。ジージルド、その間二人で見張りをしてろ」
「了解」
ジージルドともうひとりの男が、ルカに答えた。

辺りはすっかり暗くなっていた。
ソルバーユが閉じ込められている馬屋の周りをうろつく足音が、時折聞こえている。ソルバーユが繋がれている正面に、ゼルスイスが居た。
ゼルスイスの方は、捕らえられる時に反抗して自分でつけたのか、それともジージルド達にやられたのか、額と頬から血を流していた。
「ゼルスイス」
足音が聞こえなくなったのを確認してから、話しかける。
ゼルスイスが顔を上げて、ソルバーユを見た。
「なんだ？　ここから脱出する方法でも思いついたか？　全く、反乱を考えるだけのことはあって、乱暴者揃いだな。妖精族に対する礼儀がなってない」
「なるほど、その怪我は人族にやられたか」
ソルバーユが言うと、ゼルスイスは顔を顰めた。
「他人事みたいに言うな。あんたにうまい話があるって言われたか

ら、私は乗ったんだ」
馬屋の入り口の方で足音が聞こえて、ゼルスイスは体を強張らせ、そちらに顔を向けた。
見た目には顔に傷を負っているだけだが、それ以外にも傷があるようだ。格下だと思っていた人族から殴られて、精神的にも弱っているのかもしれない。
「ここから出る方法を教えてやろう」
ソルバーユは言った。
入り口を見つめていたゼルスイスが、ソルバーユに向き直る。
外を歩いていた足音は、今はまた聞こえなくなっていた。
「これを使え」
白い錠剤を、ゼルスイスの足元に投げた。
「それは体を一時的に仮死状態にする物だ。回復薬を打つか、一日も経てば意識を取り戻す。貴方が気を失ったら、私が大声を上げて誰かを呼ぶ。私が人族にも感染する病だと言うから、人族は貴方を運び出すだろう。そうすれば貴方は外へ出られる」
「あ、あんた、縄解いたのか？」
「いや」
ソルバーユが唇の端を上げる。
「だから、悪いが、口で直接拾って飲んでくれ」
暗いから見えないが、実際には馬屋の床だし、相当汚れていることだろう。ゼルスイスはあからさまに嫌そうに顔を歪めた。
「仮死状態になって外へ出られたとして、そのまま埋葬されるなんてのはごめんだぞ」
「人族が、恨みのある妖精族を丁寧に埋葬してくれると思うか？どうせそこら辺に放置されるだけだ」
「そうか。急いでここから出て、王に報告したいからな。仕方ない」
ゼルスイスが足元に転がる白い錠剤を口に含み、飲み込んだ。
すぐに白目を剥き、息が止まったようだった。口の端から唾液が泡状になって零れだす。

完全な死体だ。
二度と生き返ることはない。
これで、私は完全な犯罪者だ。
後は、ルカがソルバーユを裏切り者として処罰してくれれば、それでソルバーユの仕事は終わる。裏切り者として処罰されなければ、妖精族を殺した犯罪者として死ぬことになるが、それはソルバーユの望む所ではなかった。

朝になって、様子を見に来た見張りの男が、ゼルスイスの遺体を発見した。
「何で死んでるんだ」
ソルバーユを見て聞く。
まだソルバーユを医者だと思っているから。一緒に居たのは彼だから。
「自殺したよ」
何の感情も込めずに言う。
男が他の仲間を呼び、辺りは騒然となった。
ネルヴァが報告を受けて馬屋に駆けつけたのは、普通ならば朝食を始める頃のことだった。
ゼルスイスが自殺したと聞き、ネルヴァは腕組みした。
もう逃れられないと思っての自殺か？
確かに、昨日ネルヴァが連れてきた時、怒ったジージルド達に手酷くやられていたようだったが、だからと言って、自殺を考える程の事でもないと思う。こちらに情報を漏らさない為の自殺ならまだ分かるが、ゼルスイスは昨日の時点で既に、ソルバーユと金銭のやり取りがあったことを告白している。
「ルカ」
ソルバーユ達を捕らえていた馬屋の方からルカが来たのを見つけ、ネルヴァは声を掛けた。
「ああ、おはよう、ネルヴァ」

ルカが言う。
「ゼルスイスが自殺したそうだな。私は今着いたところで、まだ見ていないのだが」
「ああ。俺は見てきた。外傷もないし、おそらく毒物を使った自殺だろうな」
「毒？　まさか……」
毒も薬も同じ物だ。どうしても医者であるソルバーユを思い浮かべてしまう。
ルカは首を横に振った。
「ソルバーユは薬や毒物は持っていなかったし、第一、二人とも縄を掛けられたままだった」
「そうか」
「それよりも。……昨夜二人の会話を聞いた。ソルバーユが裏切っていたのは間違いない」
ルカが言う。
「ジージルド達は、ソルバーユを処刑した方が良いと言っている。見せしめだと。あんたはどう考えている」
「処刑というのは、具体的には？」
敵に伝わる前に発見したのだ。裏切りには罰を与えなければならないとは思うが、あまり重い罰を与えても仕方がない、とネルヴァは考えていた。
ルカが溜息を吐いてネルヴァを見た。
「死刑だ」
「なんだと……？　ソルバーユには聞いたのか？　ゼルスイスが言ったことが真実とは限らない――」
「昨日聞いた。今日も聞いた。でも、ソルバーユは否定しない。俺達の情報を敵に流していたと、ソルバーユ自身が言っている」
ルカの表情は暗い。ソルバーユを信じていたのだから当然だ。いや、今も信じているのだろう。ソルバーユは裏切っていない、と。
ネルヴァも同じ意見だ。

だが、本人が罪を認めているというのは一体？
もし自分が裏切ったとしたら、人族に敵の妖精族と会うところを目撃されるような間違いは犯さない。仮に見付かったとして、敵の方が吐いたとしても、自分は知らないとしらを切り通す。もしくは、人族に捕まる前に逃げる。
賢明なソルバーユが、裏切るなど考えられない。そして、もし裏切るのなら、もっとうまくやるはずだ。
「私も現場へ行ってみる」
ネルヴァが言うと、ルカが頷いた。
ルカは残るようで、ネルヴァひとりで、ソルバーユを捕らえている馬屋に向かった。
ゼルスイスの遺体を運び出しているところだったので、ネルヴァも遺体を確認したが、外傷は全くなかった。
ゼルスイスをネルヴァが捕らえた時、ここへ連れてくるにあたって、持ち物を全て調べた。服もネルヴァが用意した物に着替えさせた。ゼルスイスが毒物を持っていたとは思えない。
馬屋に入る。
中にはソルバーユがひとり、柱に縄で繋がれ、馬を入れる柵の中に居た。
「話はルカから大体聞いたつもりだ。ゼルスイスは毒を使って自殺した、ということで間違いないか？」
「調べたわけではないから、毒かどうかは分からないがね。だが、両手を後ろに縛られている状況では、他に死ぬ方法などないだろう」
「じゃあ、どうやって毒を飲んだんだ。両手が塞がっているのに」
「歯に仕込んでおくのだ。ゼルスイスのように他国に密偵として派遣される者には、よくあることだ」
確かに、連れてくる時に口の中までは調べなかった。それが悔やまれる。
「君は、ゼルスイスの死因を知る為に私に会いに来たのか？」
ソルバーユが言った。

「ソルバーユ殿の無実を証明できるのは、ゼルスイスだけだったろう」

ネルヴァが言うと、ソルバーユが笑った。

「まだ私を信じてくれているとは、ありがたいことだ。だが残念ながら、私が裏切ったのは事実だ」

「なぜ？　私はあなたに誘われた。他の仲間もほとんどがあなたを信じて集まったのだ。反乱を止めたいのであれば、元から人を集めなければ良かったではないか」

「まったく。君はルカと同じだね。私が善人でないと困るらしい。だが君はルカよりも賢明だろうから、本当のことを話そう」

ソルバーユの言葉に、ネルヴァは驚いた。

やはり、裏切りは事実ではなかったのか？　だが、ルカには教えず、私に教えるというのは一体。

「私の懺悔だと思って聞いてくれればいいよ。ルカを反乱のリーダーに仕立てたは良いが、今の皆はまだ不安を抱えている。ルカも、他の人族も、君もね。誰かが裏切るかもしれない。妖精族が強くて反乱が失敗するかもしれない、と」

ソルバーユが目を閉じる。

「だが、こちらには竜の剣がある」

ネルヴァを見た。

ソルバーユが言いふらしていた、妖精族を倒す為にルカが手に入れた物というのは竜の剣のことだったのか。

「しかし、あれは伝説の話だ。真実ではない」

「そう言うと思ったよ。そうだ。あの剣が手元にあるというだけでは、まだ不安が残る。ルカが持ち帰った剣は偽物かもしれない。そもそも伝説は作り話かもしれない」

そこまで聞いて、ネルヴァは得心した。

ソルバーユは二つの不安を、自分が裏切ることで解消しようとしているのだ。裏切りに対する見せしめとして、ソルバーユを死刑にする。そうすれば、裏切りは暫くの間は発生しにくい状況になる。

発覚すれば殺されるからだ。
その上、妖精族を殺すのに使うのはルカが持っている竜の剣。その剣が、金属で出来た普通の剣と異なり、妖精族を死に至らしめることができるのであれば、人族はルカが持つ力を知り、より活気付く。
「そういうことなら、私がやったのに。あなたは医者だ。皆から必要とされている」
柵の向こうのソルバーユは、ネルヴァの言葉を聞いて薄く笑った。
「私が居なくても大丈夫だ。トキメに全て教えてある。それに君には無理だ。君は優しいから、作戦の内だと分かっていても仲間を裏切れない」
裏切ったふりをするのでは足りない。実際に裏切らなくては、死刑にされる可能性が低くなる、ということだろう。
「それに」
ソルバーユが続けた。
「私はもう一つ罪を犯した。ゼルスイスを殺した」
言うソルバーユの低い声と、睨み付けるような目に、ネルヴァは寒気を感じた。
それは、ソルバーユがゼルスイスを巻き込んだせいで自殺に追いやった、という意味ではない、ということを暗示している。
「逃げられて、敵に報告されるとやっかいだからね。私は、ルカの為になら、自分が死ぬことも、自分の手を汚すことはなんとも思わない」
「なぜ、そこまで」
「ルカは私の孫だからね。まあ、だからこそ、ゼルスイスは自殺したことにしておかないといけない。ルカは傷つきやすいから」
「だったら、あなたが裏切ったということも、ルカを傷つけると分かっているでしょう？　私に先に言ってくれれば、その役は私がやったのに」
ルカがソルバーユの孫であるなら、ルカは人族ではなく、半妖精

族ということ。だが、それについて話すつもりは、今はなかった。
「だから、君には無理だと言っただろう。お膳立てはしておいた。後は君に任せるよ。私を斬首台に送ってくれ」
ソルバーユが言う。
ソルバーユの気持ちは揺らぐことはないだろう。一度決めたことは変えない。そんな男だから、多くの仲間が集まったのだ。
「分かった。あなたの意思は私が継ごう」
ネルヴァは決意し、馬屋を後にした。
ソルバーユの処刑は、馬屋の前の丘を使うことになった。以前、ルカが処刑されそうになった場所だ。
今回は、罪人が妖精族で、執行人がルカだが。
死刑にするかどうかは、色んな人に相談した。ルカひとりでは、考えきれないことだったから。ジージルド達は口を揃えて、見せしめだ、死刑にすべきだと言う。
セイロンも、それなら仕方がない、と言っていた。何が仕方ないというのだろう。セイロンも、自分と同じ考えなのかもしれない。
ソルバーユが罪を否定しないのは、ソルバーユ自身が死刑になることを望んでいるのではないか、と。
ソルバーユと話してきたネルヴァがルカに死刑を勧めたことが、ルカに決断させた。
ネルヴァが、パロスには別の用事をさせて、馬屋に近付かないように仕組んだ。また、仲間のうちで仕事を空けても何とかなる者数十名が、丘に集まった。本当は仕事を空けると大変なのだろうが、この世界を変えるという時に、妖精族の奴隷としての仕事をやろうという人は居ないかもしれない。ただ、全員が来ては妖精族にこちらの動きを悟られる。だから近場で働いている中から一人か二人ずつ出てきている状況だった。
丘の上に即席で作られた斬首台。
縄で縛ったソルバーユを上らせ、ルカも竜の剣を持って上る。
辺りは静まり返っていた。

ルカはおもむろに、右目を覆い隠す眼帯を外した。光が入ってくる瞬間は、いつも眩しい。
「俺は、ここに居るソルバーユの孫だ！」
大声で言う。
斬首台から少し離れた所に集まった人族の群。かなり視力の良い者でなければ、ルカの右目が人族と違うことは分からないかもしれない。だが、ソルバーユを連れてきたジージルドやネルヴァ達数人の、ルカの近くに居る者には分かるだろう。
「だが、ソルバーユは俺達を裏切った！　裏切りは、祖父だろうが許さない」
ソルバーユの後ろに立ち、竜の剣を振り上げる。
周りから歓声とも怒声とも分からぬ声が上がった。
「ソルバーユ、言い残すことはあるか」
「無い」
竜の剣を振り下ろす。
ルカにだけ聞こえるような小さな声で、ソルバーユが言った。
「ルカ、王になれ」
剣の刃がソルバーユの首から背中へ、ルカの手に肉を切る嫌な感触を与えながら滑っていく。
下まで振り下ろす前に、ソルバーユの体は灰になって消えた。
剣についていた赤い血も、灰になって風に飛ばされていく。
ルカは竜の剣を高く掲げた。
歓声が起こる。
今度は間違いなく、歓声。喜びの、叫び。
「ルカ様！」
「あんたが半妖精族でも関係ない。あんたが俺達のリーダーだ！」
暫く掲げていた剣を、ルカは下ろして斬首台から下りた。
歓声を上げる人族の中ではなく、踵を返して馬屋の囲いの中に戻る。
「よくやった」

後ろからネルヴァが近付き、声を掛けた。
「ああ」
返事を返して、そのまま歩く。
後方からは、まだ止まない歓喜の声、ルカを称える声。
何でそんなに喜べるんだ。ひとを殺したのに。
鞘の無い竜の剣を、事務所の机の上に投げ置く。
ソルバーユの考えは分かっているつもりだ。何度聞いても教えてくれなかったが、おそらくは。
ルカが半妖精族だと告白するとは、ソルバーユも考えなかったかもしれない。
けれどそれも成功だろう。
これ程の歓迎を受けるとは。今は大事な時で、だからこそ親戚でも裏切れば殺す、その心意気が好感を呼んだのかもしれない。
ソルバーユの企みも、自分が付加した告白も、大成功だ。
なのになんで、涙が止まらないんだよ。
ひとりになってから溢れてきた涙が、なかなか止まらなかった。

ソルバーユの助手だったトキメがはっきりと仲間に加わったのは、この後からだった。
ルカはトキメに謝ったが、トキメは謝られても困る、と苦笑した。
「先生は、あなたに感謝していると思います。あなたは、先生を最後まで信じてくれた。そして、先生が望んだようにしてくれた」
そう言って微笑む。
「トキメ殿、邪魔してすまないが、研究所の方に患者が来てるぞ」
ネルヴァが顔を出して言った。
少し驚いた顔をして、トキメはルカに頭を下げた。
「じゃあ、わたし行かなきゃ」
そう言って、ルカに手を振る。
「トキメさん、本当に、何度謝っても足りない。俺は」
「いいのよ。あのひとは――、先生は、死に場所をずっと探してい

たみたいだったから」

ソルバーユは二百年を超える時を生きてきた。最初の恋人に死なれ、ずっとその影を追って、若い妖精族の女性の顔を、その恋人に似せた。けれど、トキメはソルバーユの恋人にはなれなかった。

最初は、人族を不老長寿にする言っていた。

次に、整形手術の技術を磨き、トキメを人族そっくりに変えた。

人族を不老長寿にする研究が頓挫して、ソルバーユは生きた屍のようになっていた。

けれど、ルカと出会ってからは世界を変えようとした。

自分の生き方を見つけたソルバーユは、誰よりも輝いていた。それが、トキメが愛したソルバーユだった。

突飛なことを言うのがソルバーユの特徴だったが、最後には、最初の恋人の元へ行くことを望んだ。

普通の、ひとのように。

「ネルヴァ様、あなたが今度はわたしの助手になってくださるの？」

わざわざトキメを呼びに来てくれたネルヴァに、トキメは笑いながら言った。

「ええ？　いや、私は医学は全く」

「あなた、まだ若いでしょ？　まだ時間はたっぷりありますから、もし良かったら勉強してみてくださいね」

「私よりも、セイロンに教えてみないか？　世界が変わったら、人族は自分の身を自分で守れるようにならなくてはいけない」

「あら、そうね。今度セイロンに聞いてみますわ」

トキメが言う。

勝手に話題に出されていることなど、セイロンは知らないだろう。

まだ、反乱が成功するとは限らない。だが、ネルヴァとトキメには、その後の世界が見える気がした。

7　竜の剣（前編）

決行の日は、日曜になった。
最初に伝えていた土曜は、敵に知られているかもしれない。その可能性を考えてのことだ。
人族の集落からは、一斉に人が居なくなる。
多くの男達が、中には女も子どもも混ざるかもしれないが、カザート王ヴォルテスを倒す為に、妖精族（エルフ）が暮らす町の中心部へと歩を進めるのだ。
人族は全てが人族の集落に居るわけではない。
妖精貴族（エルフ）の個人の奴隷として、町の中心部で働いている者も居るし、もちろん城の内部にも居る。味方となるか、敵となるかは、今の時点では分からなかった。
なるべく被害が少なくて済むよう、仲間の人族には騒ぐことを頼んでいる。そう、ただ騒ぐだけだ。実際に敵を討つつもりで向かう必要はない。妖精族は人族の力を甘く見ている。最初は騒ぐだけにして、とにかく町の中を混乱させる。敵を殺す役は、ルカがひとりで受け持つつもりだった。
王を見つけて倒せば、後はこっちのものだ。
妖精族は夜目が利く。ルカ達は黒く染めた外套に身を包み、明かりを付けずに進んだ。
妖精族の町を囲む外壁の外で待機する。
外壁の中から爆音が聞こえて来た。
開始の合図だ。
有力貴族の住居を爆破するよう、指示してあった。煙が壁を越えて漂ってくる。
中に妖精族が居れば、犠牲になったかもしれない。いや、住居なのだから、間違いなく居ただろう。
今は考えない方がいい。

ルカは首を横に振り、それから多くの仲間と共に外壁の中へ突入した。

「反乱じゃ！　奴隷どもが城に向かって来おる」
大臣がそう言いながら、部屋に飛び込んできた。
イーメルは窓から外を見た。
人々が黒い塊となって、城へ向かって来るのが分かった。
「第一の門を壊された」
「入って来るぞ。早く、王と王妃をお守りするのだ！」
外で口々に騒ぎ立てる声がする。
始まったか。
イーメルは隣で喚く大臣を無視して、窓から下を眺めていた。
ルカはどこに居るのだろう。いくら視力が良くても、これ程人数が多い中からひとりを探すのは難しい。
新しい侍女達は、皆がおろおろしているばかりで、イーメルを守ろうとするような気丈な者は居ないようだった。
「王女！」
部屋に、また新たな客人が飛び込んできた。オーヴィアだった。
大臣よりは頼りになりそうだ。だが、今は逆に、その忠誠心が邪魔だ。
「王女、ここは危険です。脱出用の通路がありますから、どうぞそちらの方へ」
「そなたらだけで逃げよ。人族の狙いは、わらわら王族であろう。わらわが一緒では、逃げ切れぬぞ」
「しかし」
「行けといっておる。ほら、大臣も」
大臣の服を掴んで、オーヴィアの方へ向け、背中を押す。
「人族には手を出すな。人族は竜の剣を持っておる。あれを使われたら、皆死ぬぞ」
侍女が小さく悲鳴を上げる。

オーヴィアが顔を顰めた。
「では、大臣、この者達を頼みます。私は王女をお守りしなければ」
オーヴィアが言うと、大臣は侍女達を連れて部屋から出て行った。
「そなたも行け」
「姫をお守りするのが、騎士の務めです」
まだ敵が近くに居るわけもないのに、オーヴィアはそう言うと、大きな槍を構えた。
ありがたいことだが、オーヴィア程の使い手になると、人族の方が危険すぎる。イーメルは人族の味方をしたいのだ。
「オーヴィア、そなたの忠義感謝する。だが、今は不要じゃ」
手のひらをオーヴィアの背中に向かって突き出す。
イーメルの言葉に振り返ろうとしたオーヴィアは、首を途中まで回したところで吹き飛ばされた。
「何をなさる」
槍を支えにして、オーヴィアが立ち上がった。
「言うことを聞かぬからじゃ。わらわを置いて逃げよと言うておる」
「王女ひとりで残すわけには参りません」
部屋に、また誰かが入ってきた。妖精族ではない。
人族の子どもだ。おそらく、城で給仕をしている少年。この騒ぎで逃げ惑ううちにここに辿り着いたのだろう。
だが、それが誰かを確認する暇もなく、オーヴィアがその槍で少年を突き刺した。
「何をする！」
少年の腹から、血が噴出す。もう死んでいるだろう。
「人族は敵です」
「まだ子どもではないか！」
「ただの奴隷です。王女が気になさる必要はありません」
オーヴィアは少年の腹から槍を抜き、少年を蹴飛ばした。
イーメルが手に力を集中させ、オーヴィアに向かって放つ。先ほどよりも強い力を込めたから、オーヴィアがぶつかった壁に亀裂が

走った。
オーヴィアが咳き込みながら、また立ち上がる。
「私は王女の味方です。わたしは敵である人族を殺しただけだ。なぜ味方である私を攻撃なさるのですか」
立てないはずだ。あれ程の力をぶつけたのだ。いくら妖精族と言えど、普通は。
「人族は敵ではない！」
「妖精族の王女ともあろうお方が、何をおっしゃいます。この世界は妖精族が支配してこそ平穏に保たれるのです。命の短い人族には、その権利はない。それを覆そうとするのであれば、我々の敵です」
今更、イーメルを諭そうとしているのだろうか。
オーヴィアは十五年の間イーメルに仕えてくれた。だが、それだけのことだ。非が自分達にあることは、揺ぎ無い事実。オーヴィアに言われても、イーメルの気持ちは変わらない。
イーメルは首を横に振った。
人族は敵ではない。
「なぜそこまで人族に肩入れするのですか」
オーヴィアの瞳に、イーメルの眉根を寄せた顔が映っている。
「あの男ですか？　ルカとかいう。王女は、あの男に会ってから変わられた」
イーメルの表情が少し動いたのを、オーヴィアは見逃さなかった。
「そうなのですね。あの男が、王女の気持ちを変えたのですね。私には、できなかった」
オーヴィアは言って、槍を一旦下ろした。
利き手に持ち変える。
「ですが、あの男にできないことで、私にできることがあります。あなたは裏切り者だ」
槍をイーメルに向かって突き出した。ルカにイーメルは殺せない。
イーメルを殺せるのは、自分だけだ。
だが、当たらない。

イーメルの腹の横に、槍の先はあった。
イーメルがカザートの裏切り者であることは、間違いないことだった。しかし、オーヴィアがそう判断するには、まだ早すぎる。
裏切りというのは、カザートに対してではなく。
頭を過ぎる考え。
構わず、イーメルはオーヴィアにもう一度手のひらを向け、力を使った。
「おおイーメル、まだこんな所に居たのか？」
すでに壊れた扉から、ヴォルテスが顔を出した。
それに気を取られ、イーメルの力はオーヴィアに命中しなかった。だがオーヴィアは力の影響を受けて、ヴォルテスの足元で気を失っているようだった。
オーヴィアに槍を向けられたときよりも恐ろしい、背筋が凍るような思いが、イーメルを駆け巡った。
先ほどの台詞は、別にイーメルを傷つけようとする物ではなかったというのに。
「他の者はおらぬのか」
横目でオーヴィアが倒れているのを見てから、イーメルに視線を戻す。
「それは丁度よかった」
ヴォルテスが唇の端を上げた。
「やっとお前を殺せる。今なら、お前が死んでも人族がやったと思われるからな」
逃げなければ。
人族に殺されるのならば構わない。ルカが決めたことだ。
だが、王に殺されるのは嫌だ。
戦うという選択肢は、イーメルにはなかった。父の強さと残酷さは、よく知っている。イーメルが勝てるわけがない。
王が手を、イーメルの方へ向かって掲げた。
力の波動が、イーメルの真横を通ったのを感じた。

「王女、お逃げください！」
オーヴィアが、ヴォルテスの体にしがみ付いていた。
震える足を自分で殴りつけて、イーメルは別の出口を通って部屋を出た。
オーヴィアが暫くの間なら時間を稼いでくれるだろう。
走れ。
走れ。
自分の足音。息を吐く音。一杯に。もっとうるさく。
嫌だ。
オーヴィアが。
妖精族の聴力が優れていることを、この時ほど呪ったことはない。
オーヴィアの悲鳴が聞こえてくる。何度も、何度も。何をしているのだろう。一息に殺せばいいのに。なぜ、わざと苦しめるようなことをするのだろう。
イーメルがオーヴィアを心配して戻るとでも思っているのだろうか。
イーメルは脱出用の通路に走りこんだ。

ルカが竜の剣を振るうと、その刃に触れた妖精族は一瞬で灰になった。
最初はルカを狙って飛び込んできていた妖精族の兵士も、次第に近寄らなくなった。それで暫くは進みやすくなったが、次は人族の兵士が出てきた。
分かっていたことだ。
人族同士で争わせるのが一番、妖精族にとっては被害が少なく、楽に済むのだから。
今度はルカではなく、仲間の人族が前に出て、手に持った武器で敵の人族に襲いかかる。
殺さないように、とは最初に言ったが、この状況ではどうなっても仕方がない。

城の城門を壊しているのは陽動部隊だ。
ルカ自身は途中から別の道へ入った。昔イーメルから渡された地図。王族専用の脱出通路が描かれていた。あれを、ネルヴァが完璧に覚えていた。
出口にはそれぞれ人族を配置している。王以外の妖精族や人族は無視し、王が出てきたら狼煙を上げて連絡するように伝えてある。
ルカは近場の通路から、数人の仲間と共に城の内部に入った。
既に避難したのか、城の中は静かな物だ。
王を探してうろうろしていると、城の中が騒がしくなった。陽動で城門を壊していた仲間が、本当に城門を壊して中に入ってきたのだ。
えらく簡単に入れたのは、おそらくイーメルが前もって、城の警備が少なくなるように根回ししていたのだろう。
城の窓から外の様子が時折見えた。
ところどころで炎と煙が上がっている。
火事は嫌いだ。けれど、目を背けてはいけない。やれと言ったのは、自分なのだから。
正確に、それぞれ離れた場所で火事が起きている。消火に人手を割かせる為だ。消火に当たるのひとの中には、ルカの仲間も入っている。消火を本気でしてもらわなければ、この乾燥したカザートだ。どんどん燃え移って余計な被害が出る恐れがある。消火に当たる人々を鼓舞し、先導してもらう為に送り込んだのだ。
ヴォルテスは、イレイヤはどこだ。
広い城内を闇雲に探した。もちろん、探しているのはルカだけではない。他の仲間もそれぞれに探している。
途中で見かけた妖精族は、仲間が捕らえて縄を掛けた。捕虜に乱暴はするなと言っておいたが、いつの間にか見知らぬ人族も仲間に混ざっていて、伝達がうまく行っているとは思えない状況だった。
ヴォルテスを倒せば、それで終わるのに。
二階へ上がる。

ひと影が見えて、それを追いかける。追いつけるかと思ったが、その前にそのひと影は部屋に入った。
閉じた扉の前にそっと近寄り、中の様子を伺おうとする。
「もう、無理です。降参しましょう、ヴォルテス王！」
当たりだ。
中には、さっき駆け込んだ男の他に、ヴォルテスが居る。
「奴隷共に屈せよと言うのか」
ヴォルテスの声だ。
「しかしヴォルテス王、この状況では皆殺しにされてしまいます」
「泣き言をいうでない！」
「ぐわぁっ！」
男の悲鳴が聞こえた。
剣を構えて、部屋の扉を開ける。
扉の横に、さっきルカが後をつけた男の死体が転がっていた。
王の護衛の兵士たちが、ルカ目がけて攻撃してきた。ある者は剣を振り上げ、またある者は力を使う為に手のひらをルカに向けて。
「邪魔だ」
ルカはそれを、竜の剣を使って一気に灰にした。
胸が痛まなかったわけではない。だが、復讐の相手を目の前にした時、他の妖精族の命は些細な物に思えた。
残るのは、ルカとイレイヤ公のみになった。
「伝説の聖剣、ディガー・ソードの封印を解きおったか」
「ああ。試練とかあったけど、あんたを倒すために全部クリアしてきた」
「あの時殺しておくべきだったか」
ヴォルテスが笑う。人族に城を攻め滅ぼされようとしている、この状況になっても。ひとりでも何とかなると思っているのだろうか。
「今度は、俺があんたを殺す。あんたが、俺の両親や、故郷を奪ったように、俺があんたの命を奪う」
ルカは剣を持ってヴォルテスに走り寄った。

ヴォルテスは、ルカに手のひらを向けた。それから、目を閉じる。
ヴォルテスの掌から、波動がルカに向かって来た。
ルカの体が宙に浮く。一瞬だ。その後、そのまま入り口の方へ向かってルカは吹き飛んだ。
妖精の使う力は、やっかいだった。剣で切れるものではないし、盾で防御できるものでもないのだから。だから、
我慢するか、避けるか、だ。
ルカは思った。
立ち上がろうとすると、体がバキバキ音を立てた。関節がどうかしたらしい。それでも、なんとか動く。
避ける。どっちへ向いて避ければいい？
ルカは自分に聞いた。
妖精の使う力には、色や形があるわけではない。避けようにも、どこまでその波動が来るのかわからないのだ。人族ならば。
ルカは半妖精だ。妖精の力には、確かに色も形もないが、ルカには空気の歪みが見える。空気が歪むのは、力が及んでいる範囲だけだ。
「見切ったぜ」
ルカは言った。
「もう一度、力を使ってみろよ」
挑発だ。ヴォルテスが挑発に乗ってくれるか、それはわからない。しかし、ルカが攻撃を仕掛けてから力を使われたら、ルカに勝ち目はなかった。
ヴォルテスが、ルカに向かって歩いて来る。
ある程度まで近くに来ると、不意に王は掌を向けずに、力を使った。
やばい！
忘れていた。
別に手のひらを向けなくても、体から波動を出せば、力を使えるのだ。一点から力を放出するのに比べ、威力は弱くなるが。

また、ルカは吹き飛んだ。今度はすぐ後ろに壁があったから、壁にぶつかった。

手のひらを向ける、という予告があれば避ける準備もできるが、予告がなければ、いつ攻撃に移ればいいのかわからない。

ヴォルテスがルカの近くに来なくては、竜の剣も使えない。

ルカは竜の剣を石の床に叩き付けた。

キーン

剣の刃が床に当たって、音が廊下に響いた。

何年もの間ダイゴラス・トーチスに眠っていた剣は、刃がもろくなっていたのだろう。床に当たった部分が欠けた。

「剣に頼るのはやめたのか？」

ヴォルテスは余裕のある声で言った。

ルカは立っているのがやっとの状態だ。

ヴォルテスは、壁に入り口の近くの壁に掛けてあった、宝剣を手にとった。宝剣は魔よけのために入り口に飾るもので、あまり剣としての役割を果たすことはない。しかし、竜の剣をルカから遠い所に持って行くのには役立った。

ヴォルテスとて、剣に触ることは避けたい。だから、宝剣を鞘に入ったまま廊下の竜の剣に向けて滑らせ、剣同士で弾いて遠くへやったのだ。

「どどめをさしてやろう。ルカ、とか言ったか。おまえが居なくなれば、こちらの被害も少ないうちに反乱は収まるだろう」

ヴォルテスはルカの首を締めた。

「う……」

敵を褒めている場合ではないが、それにしても、すごい力だ。息を止めさせて殺すのではなく、女であれば首をへし折ることさえできそうだ。

ルカはバランスを崩して、床へ倒れ込んだ。

一瞬、ヴォルテスの、ルカの首を締めている手が緩んだ。

しかし、すぐに元のように強い力を込めた。

「お……わり…だ」
ルカが途切れ途切れに言う。
「まだ喋れるのか。ふん、生意気な。だが、確かに、おまえももう終わりだな」
ヴォルテスのその言葉に、ルカは唇の端を上げた。
「何がおかしい」
そう言ったヴォルテスの腕に、赤い筋が浮き上がっていた。
「何!?」
赤い筋は、切り傷だった。小さく、浅い傷だが、確かに剣の傷。
血が灰に変わる。
傷口から徐々に、灰が流れてきた。
王の片腕が全て灰になると、それから先は早かった。一瞬で、全てが灰になった。
ルカは立ち上がって、体に付いた灰をはらった。
ルカの手の中には、竜の剣の刃のかけらがあった。

ルカは王の遺品を集めると、後から来た仲間に渡した。竜の剣で切られると、何も残さずに体は灰になってしまう。王が身に着けていた衣服や装飾品が、王を倒した証だった。
ルカは城から出たところで、別の仲間に呼び止められた。
先に王の死を知らせに回った人が居たらしく、辺りは歓喜に包まれている。
「ルカ様、捕らえた妖精族の処刑をします。ぜひおこしください」
ハンスだ。確か、ジージルドとよく一緒に居る。
「処刑?」
聞き返す。妖精族を仕切っていた王が居なくなれば、人数で勝る人族が妖精族を恐れる必要はないはずだ。こちらに抵抗する場合はできるだけ殺さずに捕らえろと言っておいたが、それは後で処刑する為ではない。
「王家の者達を捕らえたので、今から処刑するのですよ。もう皆勝

手に始めてしまってますが、ルカ様がおいでにならないで、どうするんですか」

ハンスが笑顔で言う。

王家の者……。王は倒した。残っているのは王妃と、イーメルくらいのものだ。ハンスの言葉は『者達』と複数形になっていた。

「誰を処刑するんだ！」

ハンスの胸倉を掴んで聞く。

辺りがうるさくて、これくらいしなければ聞こえない。

「へ？　そりゃ、王妃と王女を――」

「場所はどこだ」

「前に裏切り者を処罰した丘ですが」

ルカはハンスを離すと、城の門を抜け外に出た。

人族とも妖精族ともつかない死体が転がっている。それも気になったが、それどころではなかった。

イーメルが、殺されてしまう。

ルカが守りたかった物が、ルカのせいでなくなってしまう。

「ルカ！」

ネルヴァが馬に乗って来た。

「大変だ。人族が王女を処刑すると騒いでいる」

「ああ、聞いた。その馬借りるぞ」

ネルヴァと交代で馬に乗り、ルカは馬屋の前の丘を目指して馬を走らせた。

イーメルは丸太に縛り付けられて、丘の上に転がされていた。

人族が大勢で、丘に穴を掘っている。丸太を立てるためだ。何かに取り付かれたかのように掘り進め、瞬く間にその場に丸太が立てられた。

丸太の根元に、飼葉が積まれる。

横を見ると、王妃になって間もなかった女性が、イーメルと同じように丸太に縛り付けられていた。

イーメルは抜け道を通って外へ出た瞬間に、待ち伏せていた人族に捕らえられた。味方だと主張するつもりはなかった。

その場で殺すのかと思ったら縄を掛けられ、ここまで連れて来られた。

逃げる機会は何度かあったが、逃げるつもりもなかった。今、イーメルが抵抗すれば、先に逃げた侍女達にも人族からの制裁が加えられるかもしれない。

人族は、捕まえた妖精族を酷い目に合わせようとしているわけではない。

ただイーメルと王妃だけが、彼らにとって特別なのだ。彼らを押さえつけていた王の、直接の関係者だから。

自分を見上げる人族の目は、狂気に満ちていた。最初は、こんな目はしていなかったと思う。

穴を掘っている辺りからおかしかった。

イーメル達を殺す為にいつの間にか団結したことで、次第に狂ってしまったようだった。

だがイーメルと王妃が死ねば、彼らは元の善良な人間に戻るだろう。

石が飛んできた。

人族の子どもが投げた物のようだった。

他の人達も、それに釣られて石を投げ始める。殆どは当たらなかったが、幾つかはイーメルに当たった。

頬に当たって、血が流れたのが分かる。

力を体全体から放出すれば、この縄も切れる。下に居る人族の何人かを吹き飛ばせば、狂気に満ちている頭も冷えることだろう。

それでも、わらわは、彼らの裁きを受けることを選ぶ。

父が犯した罪。

それによって傷つけられた人々の心が、イーメルを殺して晴れるのならば。

それでも、ルカが王になるところを見たい、と思うのは贅沢だろ

うか。敵である妖精族の王女のくせに。
ルカは血の繋がりはなくても、イーメルの弟だ。
弟でなくても、イーメルがこの世でただ一人、全てを投げ打ってでもついて行きたいと思ったひとだ。
「火をつけろ！」
誰かが言った。
次々と飛んできていた石の雨がやみ、一瞬静かになった後で、人々が『火をつけろ』と叫び始めた。
「やめろ！」
火をつけろという声に混ざって、それを否定する声が一つ聞こえた。
その声に、イーメルは目を開け、声の主を探した。
足元に集まっている人族の輪の一番外側に、馬に乗ったルカが居た。
だが、ルカの声は人族の喧騒に紛れて、誰にも聞こえていないようだった。
「やめろと言ってるんだ。聞こえないのか！」
ルカは叫んだ。
ルカの目の前に居た人族が、ルカを振り返った。
「もう遅い。火はつけられた」
その男を凝視し、ルカはイーメルの方へ視線を戻した。
赤く炎が燃えているのが僅かに見える。
「くそっ。やめろ！」
ルカは馬から下りた。
人族の輪の間に押し入る。この状況では、誰もルカに気付かないだろう。
人族は、憎い妖精族が死ぬところをなるべく近くで見ようと、前へ前へと押し寄せる。
火がついていてそれ程は近づけないので、逆に外へ押し出されていく人も居る。中央に近付くにつれ、火による熱さが強くなってい

った。
「邪魔だ、どけ！」
ルカがなんとか最前列に出たとき、火は相当大きく燃えていた。
足元を見たが、火を消す為の水は用意されていなかった。
それでも、ルカは飛び出そうとした。
後ろから誰かに体をつかまれる。
「何してるんだ。あんたも死ぬぞ」
顔を見たが、見知らぬ男だった。
振りほどこうともがくと、近くに居たほかの人までルカを止めに入った。
「離してくれ。イーメルは、俺の大事なひとなんだ！」
炎の向こうのイーメルに向かって、手を伸ばす。
炎を見ると、嫌でも昔のことを思い出す。炎にまかれて死んでいく町の人々。守りたくても、幼いルカにはどうすることもできなかった。
今やっと、誰かを守れるくらい強くなったはずなのに。
悔しくて、涙が出た。
「イーメル！」

雨が降り始めたのは、突然のことだった。
カザートの各地で起こした火事や、今この処刑で発生した煙が、天に昇って雨雲を呼んだのかもしれないが、理屈はどうでもよかった。
何日分もの雨水を溜め込んでいたかのようなどしゃぶりの雨が降って、イーメルの足元に燃えていた炎は消えた。
ルカを押さえ込んでいた人々が、呆気にとられた顔で空を見上げている。ルカを押さえる力が弱まったので、ルカはそこから抜け出した。
「お姫さん」
まだ燻っている飼葉の上を歩き、焦げた丸太を上る。

縄を解いていると、煙で気絶していたイーメルが気付いて、ルカを見た。
「そなた……来てくれたのか？」
煤で汚れた顔を涙が伝い、頬に模様を作る。
「すまない、ルカ。わらわは死ぬべきだったのに」
「何言ってるんだ。俺は、あんたが居ない世界なんて考えられない」
縄を切って、二人で下に降りる。
一部始終を見守っていた人族が、イーメルを再度捕らえようと向かってくるかと思ったが、ルカ達を出迎えたのは歓声だった。
「ルカ様、ばんざーい！」
「イーメル様、ばんざーい！」
何事かと思ったら、どうやらネルヴァとセイロンが煽って言わせているらしい。
降り続く雨が、二人の涙と、人々の荒れる心を洗い落とした。
暫くしてやっと雨がやみ、我に返った人々は、ルカとイーメルの周りに集まった。怒っているのではなく、皆笑顔だ。隣で一緒に処刑されようとしていた王妃も、今は下に降ろされ、介抱されている。
ルカは事情説明に追われて気付かなかったが、空には大きな虹がかかっていた。

エピローグ

竜の剣は再び元の洞窟に封印された。途中の通路を塞ぎ、簡単には出入りできないようにした。後の世でルカは、自分だけがその力を利用し他者には力を行使させなかったとして、誹り(そし)を受けることになるかもしれない。そうだとしても、今は平和を大切にしたかった。

ルカは人々に請われて、カザートの王となった。イーメルはその補佐として城に残っていたが、二人の関係は遅々として進まなかった。

改革の日から一年経つ。

「ルカ、そなた二日前にセイロンから渡された書状を見たのか？」

「は？　何だそれ。そんなのあったっけ」

「ふざけるな。重要な書類だと書いてあっただろう。わたしが直接セイロンから預かったのだぞ。それでそなたが見ておらぬ、では話にならないではないか」

イーメルに言われ、ルカは自室に戻って書状を探した。

文字を全ての国民を対象に教えるようになってから、ルカの机の上は感謝の礼状や、地方で未だに終わらぬ小競り合いについての情報など、色々な書状がごった返す状態になっていた。

その中から、セイロンの書状を探し出して広げる。

「ああ、結婚式か。いや婚約式？　ま、どっちでも似たようなもんだな」

それはマギーの婚約式の案内だった。

ただでさえ忙しいセイロンは、この準備でさらに忙しくなったそうだ。

「マギーはまだ子どもだろ？　もう婚約するのか」

話を聞いたネルヴァが言った。

ルカにはセイロンから直接、早めに知らせが来たが、他のひとに

はまだのようだ。
「うーん。国によっても違うけどな。この辺だと、女は早いうちに結婚相手を決めた方が幸せだって考えがあるみたいだ。妖精族（エルフ）なら違うんだろうけど」
「いくら妖精族でも、あまり遅すぎると困るぞ。長い長いと言っても二百年も生きるのは稀なんだから。あまり待たせると、先にぽっくりと」
言い終わったわけではなかったのだろうが、ネルヴァは口を閉じることにしたようだ。
ルカの後ろにイーメルが来るのが見えたからだ。
「じゃあな」
爽やかに言って、去っていく。
ルカが振り返ると、丁度イーメルが来た。
「あ、イーメル」
イーメルがルカを見る。
「何歳くらいまで生きる予定だ？」
「ふざけるな」
ひとことで返されたが、それは予想の範囲内だ。
「俺が一番近くで看取ってやるよ」
ルカが言うと、イーメルが眉根を寄せた。嫌味な奴だと思ったのだろう。
だが暫くして気付いたようで、ぽかんとした表情になった。
「なんだ、それは。それが求婚の台詞か？　そんな言い方、初めて聞いたぞ」
それから、イーメルはまた眉根を寄せた。今度は、何か考えているようだ。
「なあ、返事は？」
ルカが促す。
断られる可能性は考えていない。考えたくもない。
「何を言うか」

一瞬、断られたのかと思った。
「わたしがルカを看取るんだ。だから、それまでわたしがそなたの一番近くに居させてもらう」
「よっし、じゃあ、さっさと結婚の段取りを済ませちまおう」
イーメルの腕を取って、引っ張る。
「え、今からか？」
ルカはイーメルに向かって頷いた。
「だって、あんたとなるべく長い間夫婦でいたいから」
「仕方ないな」
満面の笑みを浮かべるルカを見て、イーメルが諦めたように呟く。困ったような顔で、けれど本当に嬉しそうに。
「ルカ、見てみろ」
イーメルが指差す方へ、ルカは目をやった。
虹だ。
窓の外に、大きな虹が掛かっているのが見える。
「綺麗だな」
「あの日も、こんなふうに虹が掛かっていた」
イーメルが虹に向かって手を伸ばした。
「カザートを、もっともっと良い国にしよう。奴隷制の完全廃止だろ。あと貴族階級ももっと減らさないと。学校もまだ足りないな。病院も……」
まだまだ続きそうだったので、急いでルカは言った。
「分かった分かった。実現させよう、な」
「当然だ」
イーメルが笑う。
ルカが守りたかった笑顔だ。
見ているだけで、幸せになれる。笑顔を持続させるには、イーメルが望むように、カザートをもっと良い国にしなければならない。
大仕事だが、絶対にやり遂げる。
ひとりでは無理でも、セイロンやネルヴァや、一緒に改革を起こ

した仲間が居る。何よりも、イーメルが居るのだ。
明るい未来が、虹の向こうに見えた気がした。

エピローグ（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。
実際の本では、最初にあとがきを読む方も居るようですが、Ｗｅｂではどうなのでしょう？

元々は自分が高校の頃に書いた小説で、大人になってから読んでみたら色々おかしかったので、原文を引っ張らずに、また一から再構築しました。
わたしは、自分が読むために小説を書いています。
何年も経って、すっかり自分でも忘れた頃にまた読んで、その時に、おもしろいなと思えると良いなと、思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6385c/

竜の剣の物語

2010年10月8日13時22分発行